序

葛城修験は大阪、奈良、和歌山の三府県にまたがる和泉山脈・金剛山地に成立した修験道の行所で、役行者が法華経八巻二十八品の経典を埋納したと伝わる経塚が山中に点在する霊地として知られています。

葛城修験日本遺産活用推進協議会は、令和２年の日本遺産「葛城修験―里人とともに守り伝える修験道はじまりの地」の認定後に、関係自治体を中心に設立され、整備や誘客促進等に取り組んでまいりました。

加太の海から始まり、犬鳴山や金剛山を経て、大和川の亀の瀬に至る112㎞に及ぶ葛城修験には数々の構成文化財があることから、当協議会ではその取り組みの１つとして、構成文化財についての調査を行い、歴史的な価値を確認することと致しました。

今回、各市町村による調査成果を取りまとめて報告書を刊行することとなりましたので、観光振興や文化財保護のため活用するとともに、今後、より一層の調査研究を進めるための基礎資料となれば幸いです。

最後に本調査報告に際し、多大な御指導・御協力を賜りました関係機関・関係者の皆様に、厚くお礼申し上げます。

葛城修験日本遺産活用推進協議会

会長　寺本　雅哉

例　言

1. 本書は、令和３年度から４年度にかけて調査をおこなった、日本遺産「葛城修験―里人とともに守り伝える修験道はじまりの地」の構成文化財についての調査報告書である。

2. 調査は、葛城修験の構成文化財のうち未指定の文化財、特に経塚の把握と石造物の調査を中心とし、各行所についても各自治体の把握する情報の提供につとめた。

3. 本書は葛城修験日本遺産活用推進協議会（事務局:和歌山県商工観光労働部観光局観光振興課内）が構成団体の協力のもと作成した。編集作業は和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課が行った。

4. 葛城修験日本遺産活用推進協議会の構成団体は下記のとおりである。各市町村の調査資料を文化財担当部局がまとめ、各管内の構成文化財についての報告を作成した。

   和歌山県商工観光労働部・和歌山県教育庁生涯学習局・公益社団法人和歌山県観光連盟
   和歌山市・一般社団法人和歌山市観光協会
   橋本市・橋本市教育委員会・橋本市観光協会
   紀の川市・紀の川市教育委員会・紀の川市観光協会
   岩出市・岩出市教育委員会・岩出市観光協会
   かつらぎ町・かつらぎ町教育委員会・かつらぎ町観光協会
   岸和田市魅力創造部
   泉佐野市・泉佐野市教育委員会・泉佐野市観光協会
   河内長野市・河内長野市教育委員会・河内長野市観光協会
   和泉市環境産業部・和泉市教育委員会生涯学習部
   柏原市・柏原市教育委員会
   阪南市・阪南市教育委員会・一般社団法人阪南市観光協会
   岬町・岬町教育委員会・一般社団法人岬町観光協会
   太子町・太子町教育委員会
   河南町・河南町教育委員会
   千早赤阪村・千早赤阪村教育委員会・千早赤阪村観光協会
   五條市・五條市教育委員会・五條市観光協会
   御所市・御所市教育委員会・御所市観光協会
   香芝市・香芝市教育委員会
   葛城市・葛城市教育委員会・葛城市観光協会
   王寺町・王寺町教育委員会

目　　次

第１章　調査の経緯と経過

第１節　日本遺産の認定…… 1

１　日本遺産認定の経緯と経過 …… 1

２　日本遺産「葛城修験―里人とともに守り伝える修験道はじまりの地」のストーリー … 1

第２節　構成文化財調査の経緯、目的及び方法…… 2

１　調査に至る経緯 …… 2

２　調査の目的と報告書掲載内容 …… 2

３　調査の方法 …… 3

第２章　葛城修験の概要

第１節　葛城の地について …… 15

第２節　葛城修験の祖、役行者 …… 15

第３節　葛城地域における修験道の様相 …… 16

第３章　地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境…… 17

１　和泉山脈…… 17

２　金剛山地…… 17

第２節　歴史的環境…… 17

１　周辺の遺跡と歴史の概要…… 17

第４章　調査成果

第１節　葛城修験の構成文化財について…… 19

第２節　葛城二十八宿の経塚（構成文化財１～ 28）…… 20

１　第一経塚　友ヶ島　序品（和歌山市）…… 21

２　第二経塚　神福寺跡　方便品（岬町）…… 25

３－１　第三経塚　大福山　譬喩品（和歌山市）…… 28

３－２　第三経塚　雲山峰　譬喩品（和歌山市）…… 32

４　第四経塚　さくら地蔵　信解品（阪南市）…… 36

５　第五経塚　倉谷山　薬草喩品（紀の川市）…… 42

６　第六経塚　志野峠　授記品（紀の川市）…… 47

７　第七経塚　中津川　化城喩品（紀の川市）…… 51

８　第八経塚　犬鳴山七宝瀧寺鈴杵ヶ嶽　五百弟子受記品（泉佐野市）…… 55

９　第九経塚　嶺の龍王　授学無学人記品（紀の川市）…… 59

10　第十経塚　大威徳寺　法師品（岸和田市）…… 64

11　第十一経塚　七越峠経塚山　見宝塔品（和泉市）…… 66
12　第十二経塚　護摩のたわ朴留　提婆達多品（かつらぎ町）…… 70
13　第十三経塚　向い多和　勧持品（かつらぎ町）…… 73
14－1　第十四経塚　南葛城山鏡宿　安楽行品（橋本市）…… 77
14－2　第十四経塚　光滝寺仏徳多和　安楽行品（河内長野市）…… 80
15　第十五経塚　岩湧山　従地湧出品（河内長野市）…… 82
16　第十六経塚　流谷金剛童子　如来寿量品（河内長野市）…… 87
17　第十七経塚　天見不動　分別功徳品（河内長野市）…… 91
18　第十八経塚　岩瀬経塚山　随喜功徳品（河内長野市）…… 94
19　第十九経塚　神福山　法師功徳品（五條市）…… 98
20　第二十経塚　石寺跡　常不軽菩薩品（御所市）…… 100
21　第二十一経塚　金剛山　如来神力品（御所市）…… 103
22　第二十二経塚　水越多和　嘱累品（御所市）…… 106
23　第二十三経塚　俱尸羅　薬王菩薩本事品（御所市）…… 110
24　第二十四経塚　平石峠　妙音菩薩品（河南町）…… 114
25　第二十五経塚　高貴寺香華畑　観世音菩薩普門品（河南町）…… 117
26　第二十六経塚　二上山　陀羅尼品（葛城市）…… 120
27　第二十七経塚　逢坂　妙荘厳王本事品（香芝市）…… 122
28－1　第二十八経塚　亀の尾宿　普賢菩薩勧発品（柏原市）…… 125
28－2　第二十八経塚　明神山　普賢菩薩勧発品（王寺町）…… 130

第３節　行所等の参考資料（国指定関係）

29　加太春日神社（和歌山市）…… 133
30　根來寺（岩出市）…… 135
31　粉河寺（紀の川市）…… 137
32　日根荘大木の農村景観（泉佐野市）…… 139
33　火走神社（泉佐野市）…… 140
34　奥家住宅（泉佐野市）…… 142
35　松尾寺（和泉市）…… 144
36　槙尾山施福寺（和泉市）…… 146
37　丹生都比売神社境内（かつらぎ町）…… 148
38　神野阿弥陀堂（かつらぎ町）…… 150
39　岩湧寺（河内長野市）…… 153
40　草谷寺（五條市）…… 155
41　金剛山（御所市）…… 157
42　當麻寺（葛城市）…… 159
43　當麻寺中之坊（葛城市）…… 161

第４節　行所等（国指定外）

44　観念窟（和歌山市）…… 163

45　深蛇池（和歌山市）…… 166
46　閼伽井跡（和歌山市）…… 168
47　神島剣池（和歌山市）…… 170
48　加太春日神社　えび祭り（和歌山市）…… 172
49　紀州加太浦「採燈大護摩供」（和歌山市）…… 174
50　阿字ヶ峰行者堂（和歌山市）…… 176
51　加太淡島神社（和歌山市）…… 178
52　常行寺（和歌山市）…… 180
53　西念寺（和歌山市）…… 182
54　鳴滝山圓明寺（鳴滝不動尊）（和歌山市）…… 185
55　大福山本惠寺（直川観音）（和歌山市）…… 187
56　墓の谷行者堂（和歌山市）…… 190
57　中山王子跡（和歌山市）…… 193
58　慈眼院（岬町）…… 195
59　高仙寺（岬町）…… 197
60　根來寺伽藍古絵図（岩出市）…… 199
61　中津川行者堂（紀の川市）…… 200
62　熊野神社（紀の川市）…… 202
63　犬鳴山（七宝瀧寺）（泉佐野市）…… 204
64　葛嶺雑記（泉佐野市）…… 206
65　政基公旅引付（泉佐野市）…… 207
66　行者の滝を含む７つの滝（泉佐野市）…… 208
67　葛城踊り（和泉市）…… 210
68　意賀美神社　雨降りの滝（岸和田市）…… 211
69　笹踊り（和泉市）…… 212
70　堀越癪観音（かつらぎ町）…… 213
71　葛城蔵王権現社（かつらぎ町）…… 217
72　天女山正楽寺（かつらぎ町）…… 219
73　小峯寺（橋本市）…… 221
74　不動山の巨石（橋本市）…… 223
75　東覚寺　八大龍王・葛城明神春祭り（橋本市）…… 225
76　宮ノ講と葛城神社年越し行事（橋本市）…… 227
77　行者まいり（橋本市）…… 229
78　光滝寺（河内長野市）…… 231
79　光滝寺炭焼不動尊（河内長野市）…… 232
80　大澤寺（五條市）…… 233
81　地福寺（五條市）…… 235
82　多聞寺跡（千早赤阪村）…… 237

83　転法輪寺（御所市）…… 240
84　吉祥草寺（御所市）…… 242
85　葛城一言主神社（御所市）…… 244
86　當麻寺竹之坊（葛城市）…… 246
87　高雄寺（葛城市）…… 248
88　どんづる峯（香芝市）…… 250
89　穴虫峠の馬頭観音（香芝市）…… 252
90　観音寺、三輪神社（香芝市）…… 254
91　関屋地蔵尊（香芝市）…… 256

第５節　行所等（令和３年追加）

R3-1　岩屋（太子町）…… 258
R3-2　四郷千両踊り（かつらぎ町）…… 260

第５章　総括…… 262

参考文献一覧 …… 263

第1章 調査の経緯と経過

第１節　日本遺産の認定

１．日本遺産認定の経緯と経過

日本遺産の制度は、地域の歴史的魅力や特色を通じて、伝統・文化を語る「ストーリー」を文化庁が認定する制度である。そのストーリーのもととなる有形・無形の文化財を積極的に活用して、地域振興につなげることを目的に、平成 27 年（2015）に創設され、当初 100 件を目標として認定が進められてきた。

葛城修験では、葛城二十八宿・地域連携協議会が一部の自治体及び修験道関係者・研究者・その他関係者の参加で開催されており、平成 29 年（2017）から平成 30 年（2018）にかけて、和歌山市加太、河内長野市滝畑、紀の川市中津川、泉佐野市犬鳴山で４回の会議を開催し、現地見学と情報交換が行われている。

このような地元や関係者の活動による機運の醸成も経て、平成 31 年に和歌山県を申請代表者とする和歌山県内・奈良県内・大阪府内を含む自治体が、「海から始まる修行の道「葛城修験」」として日本遺産に申請するが、準備期間が短く認定されなかった。

令和元年には葛城修験の道は「歴史の道百選」に選定され、修行の場を繋ぐ道の重要性を再確認した。

その後も準備を続け、令和２年に「葛城修験―里人とともに守り伝える修験道はじまりの地―」とタイトルを変更して申請し、日本遺産審査委員会の審査の結果、文部科学大臣より令和２年（2020）６月 19 日に日本遺産に認定された。当初の認定申請市町村数は 14 市４町１村、構成文化財数は 91 であった。

日本遺産認定後、事業実施に係る第１回担当者会議を行い、８月７日には所在地域への誘客促進及び地域活性化を目的として「葛城修験日本遺産活用推進協議会」設立総会を開催し、協議会が発足した。

なお、令和３年（2021）３月 19 日には、「R3-1・岩屋（太子町）」と「R3-2・四郷千両踊り（かつらぎ町）」の２か所の構成文化財の追加認定を中心とする認定内容の変更申請を提出し、令和３年７月７日付け３文参観第２号で文化庁参事官（文化観光担当）からの通知を経て、７月 16 日付で認定内容の変更が認められている。これにより、追加構成文化財の所在する太子町が、協議会に参加している。

協議会の現在の構成団体は、本書の凡例に示したとおりである。

２．日本遺産「葛城修験―里人とともに守り伝える修験道はじまりの地」のストーリー

日本遺産「葛城修験」の正式名称は、「葛城修験―里人とともに守り伝える修験道はじまりの地」といい、認定に際して、次のようなストーリーが設定されている。

＜ストーリーの概要（抜粋）＞

「和歌山～大阪～奈良の境に聳える葛城の峰々。修験道の開祖と言われる役行者がはじめて修行を積んだこの地は、世界遺産の吉野・大峯と並ぶ修験の二大聖地と称されています。この地には役行者が法華経を１品ずつ埋納したという 28 の経塚があり、今も修験者たちは、その経塚や縁の寺社、滝や巨石を巡ります。そしてその修行にはいつの時代も、この地に暮らす人々との深いつながりがありました。修験者や地域の人々が大切にしてきた聖地「葛城修験」－修験者の歴史は、ここから始まりました。」

＜申請者＞　和歌山県（代表申請者）、和歌山市、橋本市、紀の川市、岩出市、かつらぎ町、岸和田市、泉佐野市、河内長野市、和泉市、柏原市、阪南市、岬町、河南町、千早赤坂村、五條市、御所市、香芝市、葛城市、王寺町（令和３年に太子町が参加）

第２節　構成文化財調査の経緯、目的及び方法

１．調査に至る経過

葛城修験日本遺産活用推進協議会は、令和２年（2020）８月７日の総会で設立されたが、その際に日本遺産「葛城修験」を活用した誘客促進基本計画を立て、事業目的と各種事業の取組の概要を決めている。その中で協議会の活動の１つとして、未指定の構成文化財について調査を行い、歴史的な価値を確認することとした。

令和３年度には、未指定の構成文化財調査報告書作成のため、構成文化財をもつ各市町村に調査方法や原稿作成についてアンケートを取り、報告書の内容や構成、ページ数等の原案を作成した。
令和４年度には、前年度に作成した原案に基づき調査及び原稿作成についての方針・方法を決め、原稿を作成し、報告書として取りまとめた。

２．調査の目的と報告書掲載内容

日本遺産の構成文化財は、ストーリーを語る側面からこれまで文化財として扱われていなかったものを新たに選定したものが多く、日本遺産「葛城修験」の場合も、そのほとんどが未指定の文化財である。未指定の文化財は、指定文化財のように指定に際しての調査が行われているわけではなく、基本的に文化財としての価値について調査が今後必要な状態にある。

本稿で対象としている文化財は、日本遺産「葛城修験」の構成文化財として取り上げるにあたって、地元自治体を中心に、どのようなものがどこにあるのかといった基本的な情報の整理・確認を行い、まずはその情報が周知されるように、経塚・行所等の現地情報を掲載することとした。

１番から 28 番まである経塚は基本的に未指定の文化財であり、歴史的にみて複数の候補地があるものも多い。葛城修験の未指定文化財調査では、この経塚の所在する市町村で把握している情報をまとめるとともに、現況調査として現地の平面略図作成や記録写真撮影、所在する石造物等の調査を併せて実施した。調査精度は各自治体ごとに異なるが、調査成果の地域還元や普及啓発が進むことが期待される。

経塚本体が指定文化財とされたものとして、第 27 経塚の層塔が香芝市指定有形文化財（建造物）にあたる事例があるが、この層塔の場合は平成 11 年の調査時に地下埋納物が無いことが確認され、原位置をとどめていないものと考えられている。また､河内長野市内の岩湧山及び泉佐野市内の犬鳴山が大阪府指定名勝、光滝寺境内が河内長野市指定名勝に指定されているが、これらの場合も経塚が名勝の中心的な要素というわけではなく、経塚自体の調査・記録が必要な状況にあるものと考えられた。

経塚以外では、構成文化財の 29 番～ 43 番と R3-1 番が国指定文化財に関わるものとしてリストアップされているが、指定された寺院境内や重要文化財とされた堂塔本体ではなく、その範囲内に所在する行者堂や役行者像が葛城修験の要素であるといった場合が多い。日本遺産の構成文化財と国指定文化財が一致する場合、これらについては新たに調査は実施していないが、それぞれの構成文化財の所在する市町村でこれまでに把握している内容や、指定時の調査成果から抜粋して、他の構成文化財と同じ様式で、参考資料としての情報を記載した。

国指定文化財以外の行所等は構成文化財の 44 番から 91 番までであり、市町村や府県の指定文化財に関わるものも含んでいるが、基本的に未指定の文化財が多い。対象となる文化財の種別が多様であり、本文・図・写真の内容についても各地元自治体が作成したものを掲載している。

このような考え方のもとに報告書を作成しているので、新たに調査した内容だけでなく、すべての構成文

化財について何らかの情報を掲載した報告書という形になっている。

なお、日本遺産認定後、指定あるいは登録文化財となったものは以下のとおりである。

・向井家文書　2,251 点（構成文化財以外の関連資料）

令和４年１月 25 日答申、２月 16 日指定。和歌山県指定文化財有形文化財（古文書）

伽陀寺別当を務めた向井家に伝来した、中近世における葛城修験の様相を示す文書を含む文書群

・堀越癪観音　庫裏

和歌山県伊都郡かつらぎ町大字東谷字向井 1360

令和４年７月 25 日答申、10 月 31 日登録。国登録有形文化財

木造平屋建、茅葺、建築面積 180 ㎡、１棟

和泉と高野山を往来する七越峠近くに所在する葛城修験行所のひとつ。本堂西隣に位置する庫裏で、屋根は入母屋造、西に土間、東に座敷を配する。江戸末期に建てられた建物で、修験の歴史的景観を伝える。

３．調査の方法

日本遺産「葛城修験」の構成文化財が所在する各市町村において、経塚とその他の構成文化財について調査を行い、報告書を作成した。

経塚については、その由来や場所、内容について調査を行い、経塚ごとにまとめた。また、各経塚の全体像の分かる略測図を作成するとともに、石造物が所在する場合はその略測図及び写真を掲載した。また、各市町村で撮影した経塚及びその周辺についての写真を掲載した。

その他の構成文化財については、滝や岩場や寺社、石造物等の行場や祭礼、文献、絵図など、様々な文物が存在している。各構成文化財についての説明を 0.5 頁以上で作成し、その構成文化財の全体像が分かる図や写真、その他補足的な写真を掲載した。

また、各構成文化財の所在地について、地図を掲載した。

各市町村内所在の構成文化財の調査及び資料作成については、葛城修験日本遺産活用推進協議会の構成団体である各市町村で行った調査成果を、以下の文化財担当部局の担当者が中心となり図化・執筆を行った。報告書の共通部分の執筆及び編集作業は和歌山県教育庁文化遺産課で行った。

＜各構成文化財の調査報告担当部局（担当者）＞

和歌山市文化振興課（清水梨代、冨永里菜）　橋本市教育委員会生涯学習課（佐々木綾乃）

紀の川市教育委員会生涯学習課（森原聖）　岩出市教育委員会生涯学習課（本多元成）

かつらぎ町教育委員会生涯学習課（和田大作）　岸和田市教育委員会郷土文化課（山岡邦章）

泉佐野市教育委員会文化財保護課（中川真菜）　河内長野市教育委員会文化財保護課（花井徹）

和泉市教育委員会文化遺産活用課（森下徹）　柏原市立歴史資料館（安村俊史）

阪南市教育委員会生涯学習推進室（山千代明日香）岬町教育委員会生涯学習課（小川正純、松本武志）

太子町教育委員会生涯学習課（木谷智史）　河南町教育委員会生涯まなぶ課（炭谷有理子）

千早赤坂村教育委員会教育課（井ノ本純一）　五條市教育委員会文化財課（山本望実）

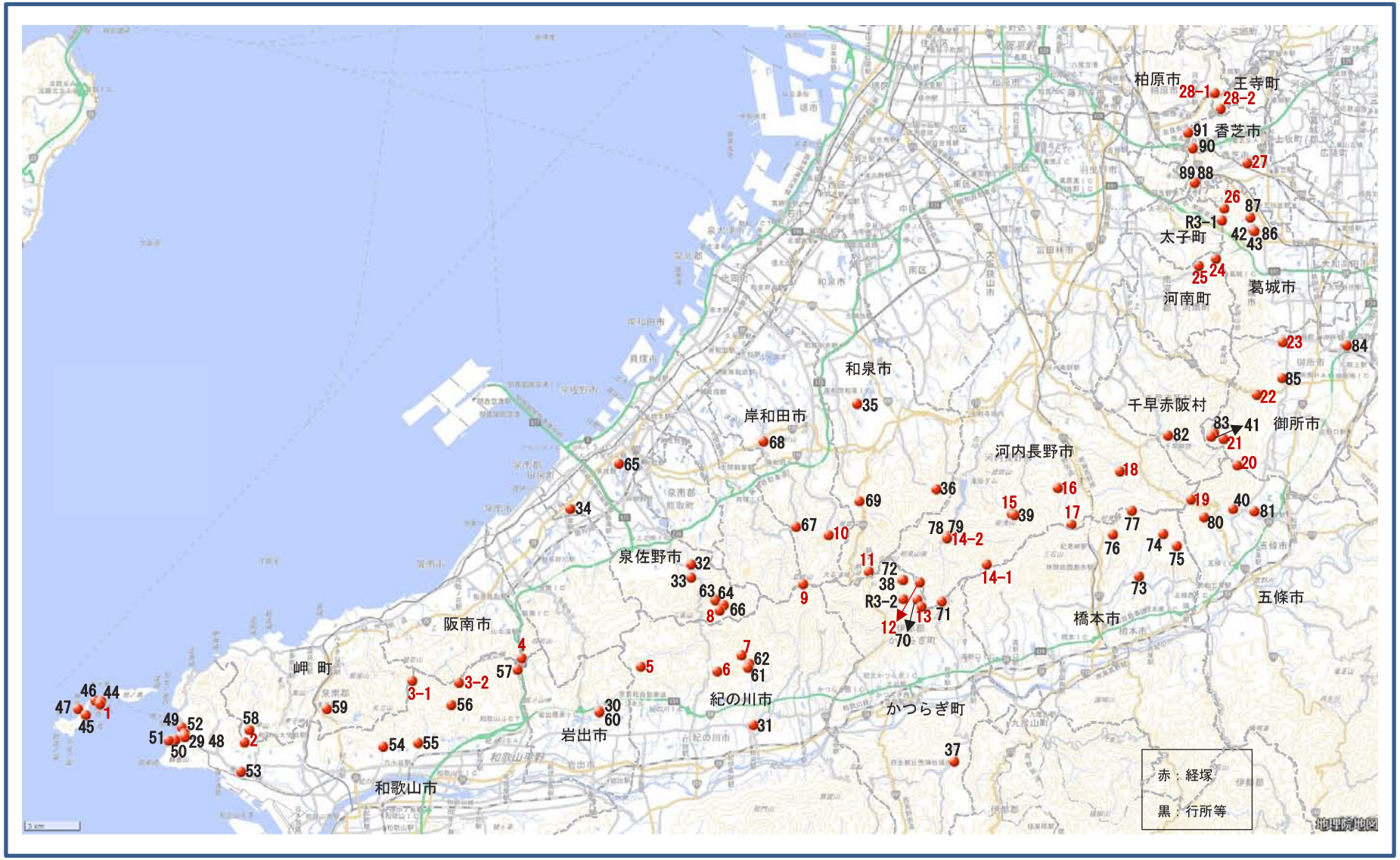
御所市教育委員会文化財課（金田将徳）　葛城市商工観光プロモーション課（増田直史）

香芝市教育委員会文化財課（奥田昇、西垣遼、乾将太朗、上田喜江）王寺町地域交流課（岡島永昌）

和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課（仲原知之（令和３年度調査）、丹野拓（令和４年度調査・編集））

＜発行＞

葛城修験日本遺産活用推進協議会事務局（和歌山県商工観光労働部観光局観光振興課内）


柏原市
王寺町
香芝市
太子町
河南町
葛城市
和泉市
岸和田市
千早赤阪村
御所市
河内長野市
泉佐野市
阪南市
岬 町
岩出市
紀の川市
かつらぎ町
橋本市
五條市
和歌山市
赤：経塚
黒：行所等
地理院地図

構成文化財名一覧

経塚

番号	文化財の名称	文化財の所在地
1	友ケ島　序品	和歌山市
2	神福寺跡　方便品	岬町
3-1	大福山　譬喩品	和歌山市
3-2	雲山峰　譬喩品	和歌山市
4	さくら地蔵　信解品	阪南市
5	倉谷山　薬草喩品	紀の川市
6	志野峠　授記品	紀の川市
7	中津川　化城喩品	紀の川市
8	犬鳴山七宝瀧寺鈴杵ケ嶽 五百弟子受記品	泉佐野市
9	嶺の龍王　授学無学人記品	紀の川市
10	大威徳寺　法師品	岸和田市
11	七越峠経塚山　見宝塔品	和泉市
12	護摩のたわ朴留　提婆達多品	かつらぎ町
13	向い多和　勧持品	かつらぎ町
14-1	南葛城山鏡宿　安楽行品	橋本市
14-2	光滝寺仏徳多和　安楽行品	河内長野市
15	岩湧山　従地湧出品	河内長野市
16	流谷金剛童子　如来寿量品	河内長野市
17	天見不動　分別功徳品	河内長野市
18	岩瀬経塚山　随喜功徳品	河内長野市
19	神福山　法師功徳品	五條市
20	石寺跡　常不軽菩薩品	御所市
21	金剛山　如来神力品	御所市
22	水越多和　嘱累品	御所市
23	倶尸羅　薬王菩薩本事品	御所市
24	平石峠　妙音菩薩品	河南町
25	高貴寺香華畑 観世音菩薩普門品	河南町
26	二上山　陀羅尼品	葛城市
27	逢坂　妙荘厳王本事品	香芝市
28-1	亀の尾宿　普賢菩薩勧発品	柏原市
28-2	明神山　普賢菩薩勧発品	王寺町

行所等（国指定等）

番号	文化財の名称	文化財の所在地
29	加太春日神社	和歌山市
30	根來寺	岩出市
31	粉河寺	紀の川市
32	日根荘　大木の農村景観	泉佐野市
33	火走神社	泉佐野市
34	奥家住宅	泉佐野市
35	松尾寺	和泉市
36	槙尾山施福寺	和泉市
37	丹生都比売神社境内	かつらぎ町
38	神野阿弥陀堂	かつらぎ町
39	岩湧寺	河内長野市
40	草谷寺	五條市
41	金剛山	御所市
42	當麻寺	葛城市
43	當麻寺中之坊	葛城市

行所等

番号	文化財の名称	文化財の所在地
44	観念窟	和歌山市
45	深蛇池	和歌山市
46	閼伽井跡	和歌山市
47	神島剣池	和歌山市
48	加太春日神社　えび祭り	和歌山市
49	紀州加太浦「採燈大護摩供」	和歌山市
50	阿字ケ峰行者堂	和歌山市
51	加太淡嶋神社	和歌山市
52	常行寺	和歌山市
53	西念寺	和歌山市
54	鳴滝山圓明寺（鳴滝不動尊）	和歌山市
55	大福山本惠寺（直川観音）	和歌山市
56	墓の谷行者堂	和歌山市
57	中山王子跡	和歌山市
58	慈眼院	岬町
59	高仙寺	岬町
60	根來寺伽藍古絵図	岩出市
61	中津川行者堂	紀の川市
62	熊野神社	紀の川市
63	犬鳴山（七宝瀧寺）	泉佐野市
64	葛嶺雑記	泉佐野市
65	政基公旅引付	泉佐野市
66	行者の滝を含む７つの滝	泉佐野市
67	葛城踊り	岸和田市
68	意賀美神社　雨降りの滝	岸和田市
69	笹踊り	和泉市
70	堀越癪観音	かつらぎ町
71	葛城蔵王権現社	かつらぎ町
72	天女山正楽寺	かつらぎ町
73	小峯寺	橋本市
74	不動山の巨石	橋本市
75	東覚寺八大龍王・葛城明神春祭り	橋本市
76	宮ノ講と葛城神社年越し行事	橋本市
77	行者まいり	橋本市
78	光滝寺	河内長野市
79	光滝寺炭焼不動尊	河内長野市
80	大澤寺	五條市
81	地福寺	五條市
82	多聞寺跡	千早赤阪村
83	転法輪寺	御所市
84	吉祥草寺	御所市
85	葛城一言主神社	御所市
86	當麻寺竹之坊	葛城市
87	高雄寺	葛城市
88	どんづる峯	香芝市
89	穴虫峠の馬頭観音	香芝市
90	観音寺、三輪神社	香芝市
91	関屋地蔵尊	香芝市

行所等（令和２年度追加）

番号	文化財の名称	文化財の所在地
R3-1	岩屋	太子町
R3-2	四郷千両踊り	かつらぎ町

ストーリーの構成文化財一覧表

番号	ふりがな 文化財の名称	指定等の状況	ストーリーの中の位置づけ	文化財の所在地
経　塚				
1	ともがしま 友ヶ島 じょほん 序品	未指定 （史跡）	葛城修験１番経塚。友ヶ島には５つの行所があり、序品の経塚とされる序品窟は４つの島からなる友ヶ島東端の虎島にある。海に面した巨大な岩盤の割れ目にできた洞窟であり、江戸時代に建てられた石碑が今も残る。	和歌山市
2	じんふくじあと 神福寺跡 ほうべんぼん 方便品	未指定 （史跡）	葛城修験２番経塚。神福寺は、江戸時代の記録で当時の隆盛と寺域がわかる。現在は、寺跡に小さい石祠が立つ。	大阪府泉南郡 岬町
3	たいふくさん 大福山 ひゆほん 譬喩品	未指定 （史跡）	葛城修験３番経塚。役行者の母を祀る墓の谷から、さらに雲山峰の山頂に位置する。この３番経塚の所在地については、大福山の山頂の松を「印の松」のように扱って、大福山を３番経塚とする説もある。	和歌山市
	うんざんぽう 雲山峰 ひゆほん 譬喩品	未指定 （史跡）		
4	じぞう さくら地蔵 しんげほん 信解品	未指定 （史跡）	葛城修験４番経塚。『葛嶺雑記』には「さくら地蔵を三十歩ゆきて梵字石あり」と記されている。その梵字石とされる石碑は現在、境谷入口に立つ。和泉砂岩製の自然石で、文安５(1448）年銘がある。また、現 JR 山中渓駅南側に所在する、永禄 12（1569）年銘の六十六部供養塔石碑を当経塚とする説もある。	大阪府 阪南市
5	くらたにやま 倉谷山 やくそうゆほん 薬草喩品	未指定 （史跡）	葛城修験５番経塚。高さ 65 ㎝の石祠で南向きにあり、内部には梵字が彫っている。	和歌山県 紀の川市
6	しのとうげ 志野峠 じゅきほん 授記品	未指定 （史跡）	葛城修験６番経塚。志野峠は修験の道にとって重要な位置になり、峠部の平坦地中央に地蔵石仏と自然石の経塚が立つ。	和歌山県 紀の川市
7	なかつがわ 中津川 けじょうゆほん 化城喩品	未指定 （史跡）	葛城修験７番経塚。葛城の伝法灌頂という特殊な儀礼が行われる行所であり、行者堂は歴史の重みを感じる。	和歌山県 紀の川市
8	いぬなきさんしっぽうりゅうじれいしょがだけ 犬鳴山七宝瀧寺鈴杵ヶ嶽 ごひゃくでしじゅきほん 五百弟子受記品	未指定 （史跡）	葛城修験８番経塚。葛城修験の中でも信仰を集める経塚の一つ。長禄３（1459）年の板碑が残っている。	大阪府 泉佐野市
9	みねりゅうおう 嶺の龍王 じゅがくむがくにんきほん 授学無学人記品	未指定 （史跡）	葛城修験９番経塚。石祠の中には天正年間の金剛童子碑が安置される。隣接する龍王は牛瀧、津田、近木の三川の源流に位置し、昔は、和泉の平野を潤す神として崇められた。	和歌山県 紀の川市
10	だいいとくじ 大威徳寺 ほっしほん 法師品	未指定 （史跡）	葛城修験１０番経塚。牛瀧山大威徳寺はかつて壮大な天台修験の大伽藍、僧堂を誇った。現在、多宝塔は重要文化財。	大阪府 岸和田市
11	ななこしとうげきょうづかやま 七越峠経塚山 けんほうとうほん 見宝塔品	未指定 （史跡）	葛城修験１１番経塚。この経塚は経塚山山頂にあり、和泉砂岩や礫岩を積み重ね塚としている。近くにある行所七大竜王社は、地域の人々に「雨乞いの神」として尊崇されている。	大阪府 和泉市
12	ごま　ほおどめ 護摩のたわ朴留 だいばだったほん 提婆達多品	未指定 （史跡）	葛城修験１２番経塚。この品では、善悪、性別、年齢に係わらず仏の教えの前、修行の中では皆平等だという精神が説かれている。	和歌山県伊都郡 かつらぎ町

番号	ふりがな 文化財の名称	指定等の状況	ストーリーの中の位置づけ	文化財の 所在地
13	むかたわ 向い多和 かんじほん 勧持品	未指定 （史跡）	葛城修験１３番経塚。幕末の『葛嶺雑記』に、「鎌の多輪」「向のたわ」とも記されている。現在は、山頂の松の根元に大日如来と刻された和泉砂岩の経塚がある。	和歌山県伊都郡 かつらぎ町
14	みなみかつらぎさんかがみのしゅく 南葛城山鏡 宿 あんらくぎょうほん 安楽行品	未指定 （史跡）	葛城修験１４番経塚。『紀伊続風土記』に２説ありとの記載がある。昔、鏡を御神体とし、楠木正成公が遠見して鏡を埋めたという言い伝えと光滝寺本堂の横にあった多宝塔が経塚であるという言い伝えがある。	和歌山県 橋本市
	こうたきじぶっとくのたわ 光滝寺仏徳多和 あんらくぎょうほん 安楽行品	市名勝		大阪府 河内長野市
15	いわわきさん 岩湧山 じゅうじゆじゅつほん 従地湧出品	府名勝	葛城修験１５番経塚。地の中から多くの菩薩達が現れてくることに由来し、品の名がこのようになったといわれている。	大阪府 河内長野市
16	ながれたにこんごうどうじ 流谷金剛童子 にょらいじゅうりょうぼん 如来寿量品	未指定 （史跡）	葛城修験１６番経塚。石祠の中に地蔵菩薩と金剛童子が祀られている。代官屋敷跡といわれる石垣も残る。	大阪府 河内長野市
17	あまみふどう 天見不動 ぶんべつくどくほん 分別功徳品	未指定 （史跡）	葛城修験１７番経塚。現在は、祠の中に50㎝ほどの石の不動尊と石仏が祀られているが、以前は鉄剣も奉納され、８月には餅まきも行われていた。	大阪府 河内長野市
18	いわせきょうづかやま 岩瀬経塚山 ずいきくどくほん 随喜功徳品	未指定 （史跡）	葛城修験１８番経塚。経塚山の山頂に和泉砂岩の石碑がたち、西面して亡霊供養塚が祀られている。	大阪府 河内長野市
19	じんぷくさん 神福山 ほっしくどくほん 法師功徳品	未指定 （史跡）	葛城修験１９番経塚。神福山は葛城七童子の一つ、常行童子の霊地であり、この童子は修行する者を護持するといわれる。	奈良県 五條市
20	いしでらあと 石寺跡 じょうふきょうぼさつほん 常不軽菩薩品	未指定 （史跡）	葛城修験２０番経塚。葛城修験には珍しく大岩をそのまま経塚としている。	奈良県 御所市
21	こんごうざん 金剛山 にょらいじんりきほん 如来神力品	未指定 （史跡）	葛城修験２１番経塚。木柵で囲まれ、1.5ｍの石積みの上に石壇があり、９０㎝の花崗岩の石碑がたつ。近くには転法輪寺があり、神仏一体として山頂に祀られていた修験の山とみることができる。	奈良県 御所市
22	みずこしたわ 水越多和 ぞくるいほん 嘱累品	未指定 （史跡）	葛城修験２２番経塚。７本の巨大な杉の根元にあり、花崗岩石段上の木造銅板葺きの祠に地蔵尊が祀られている。近くには、役行者生誕の地、吉祥草寺がある。	奈良県 御所市
23	くしら 倶尸羅 やくおうぼさつほんじほん 薬王菩薩本事品	未指定 （史跡）	葛城修験２３番経塚。高さ１ｍほどの五輪塔があり、周囲には、石碑や地蔵石仏などが祀られている。	奈良県 御所市
24	ひらいしとうげ 平石峠 みょうおんぼさつほん 妙音菩薩品	未指定 （史跡）	葛城修験２４番経塚。役行者と不動明王の石仏２体が祀られている。周辺には、役行者の伝説が語られる久米の岩橋、鍋釜石や胎内くぐり岩などの奇岩が多く見られる。	大阪府南河内郡 河南町
25	こうきじこうげばた 高貴寺香華畑 かんぜおんぼさつふもんほん 観世音菩薩普門品	未指定 （史跡）	葛城修験２５番経塚。60㎝ほどの石祠の中に不動明王が祀られている。経塚のある高貴寺は役行者開基との伝承。	大阪府南河内郡 河南町

番号	ふりがな 文化財の名称	指定等の状況	ストーリーの中の位置づけ	文化財の 所在地
26	二上山 陀羅尼品	未指定 （史跡）	葛城修験２６番経塚。二上山雄岳の山頂に位置する。榊に囲まれた中に、１５個ほどの自然石の土盛があり、その最上段に平坦な石が南面して置かれ、安山岩の立石がたつ。	奈良県 葛城市
27	逢坂 妙荘厳王本事品	市有形建造物	葛城修験２７番経塚。個人邸内にある凝灰岩製層塔（総高 179.0cm）で、鎌倉時代初期の建立である。	奈良県 香芝市
28	亀の尾宿 普賢菩薩勧発品	未指定 （史跡）	葛城修験２８番経塚。かつて水運の要所で港・貨物集積所であった場所にある。	大阪府 柏原市
	明神山 普賢菩薩勧発品	未指定 （史跡）	葛城修験２８番経塚とされる新説。山頂の正面の水神社が経塚とされている。	奈良県北葛城郡 王寺町
行所等（国指定）				
29	加太春日神社	国重文 （建造物）	役行者が友ヶ島を行所として開いたとき、守護神としたことから、葛城修験の行者が必ず立ち寄り、正式参拝を行う。現在の本殿は戦国時代末に建てられ、海浜の神社らしく伊勢海老などの彫刻がみられる。	和歌山市
30	根來寺	国宝（大塔） 国重文（大師堂他多数） 国史跡（境内）	中世の終わりには、その当時、最も強大な修験集団があったといわれている。根來寺にある行者堂の本尊は役行者。修験者の拠点であった名残がある。現在も、葛城修験の修行を行う行者たちが訪れ、お札を納め参拝を行っている。	和歌山県 岩出市
31	粉河寺	国重文 （建造物）	粉河寺衆徒は中世には、当山派の三十六先達として活躍。粉河寺境内には行者堂があり春の入峰には修験者により勤行が行われる。粉河寺鎮守粉河産土神社の祭礼で紀州三大祭りの一つでもある粉河祭（毎年７月最終土・日に開催）には役行者に使役した前鬼の子孫である中津川の禰宜１６人が参加。禰宜が八目草鞋をはいて産土神社の拝殿にあがり祝詞をあげることで祭りは始まる。	和歌山県 紀の川市
32	日根荘 大木の農村景観	国史跡 国重要文化的景観	日根荘は有力貴族の九条家の荘園であり、16 か所が国の史跡指定。犬鳴山七宝瀧寺を含む大木地区は重要文化的景観「日根荘大木の農村景観」に選定されている。葛城修験の影響を受けた地域。	大阪府 泉佐野市
33	火走神社	国史跡	1501 年に日根荘入山田村長福寺に滞在した九条政基が残した日記『政基公旅引付』には、瀧宮（火走神社）に七宝瀧寺の寺僧（山伏）がきて雨乞いを行ったと記されている。	大阪府 泉佐野市
34	奥家住宅	国重文 （建造物）	江戸時代前期に建てられた豪農の館。聖護院の修行休息所。関連資料が残る。	大阪府 泉佐野市
35	松尾寺	国重文（美術工芸品） 府指定（史跡、建造物、美術工芸品、天然記念物） 市指定（美術工芸品）	松尾寺の由緒では、役行者がはじめに本尊を作ったとされる。松尾寺所蔵の役行者像（鎌倉時代）は市指定文化財。	大阪府 和泉市

番号	ふりがな 文化財の名称	指定等の状況	ストーリーの中の位置づけ	文化財の 所在地
36	まきおさんせふくじ 槙尾山施福寺	国重文（美術工芸品） 府指定（美術工芸品） 市指定（美術工芸品）	葛城修験道のルート近くに所在する、西国三十三所４番札所。空海の捨身説話が伝わっており、修験者の行所でもあった。	大阪府 和泉市
37	にうつひめじんじゃけいだい 丹生都比売神社境内	国史跡	高野山系修験の葛城入峰は、天野－吉野－熊野－葛城を巡る広大なものであったが、天野では、丹生明神を笈に移す「吹き送り」があり、この笈を背負って山中修行に入った。	和歌山県伊都郡 かつらぎ町
38	こうのあみだどう 神野阿弥陀堂	国登録 （建造物）	上述した聖護院宮を迎え入れた際、阿弥陀堂の前で茶をわかし、大勢なので汲み飲みにした。堂内には護摩札が、また建物自体にも葛城修験関係と目される墨書が残されている。	和歌山県伊都郡 かつらぎ町
39	いわわきじ 岩湧寺	国重文（建造物） 市有形（建造物）	役行者が開基した寺。山伏の修験道場として栄え、境内には本堂と多宝塔がある。	大阪府 河内長野市
40	そうこくじ 草谷寺	国指定（美術工芸品） 市指定（美術工芸品）	縁起に役行者の創建と伝わる。平安時代作の薬師如来立像など重要文化財３躰、五條市指定文化財２躰の仏像が、収蔵庫に安置されている。その昔、村を苦しめた龍が一人の修験者に退治されて頭・胴・尾の３つが山中に落ち、それぞれに寺が建立されたという伝説があり、本寺は龍尾寺（『葛城峯中記』の辰尾寺）に当たるとみられる。	奈良県 五條市
41	こんごうさん 金剛山	国史跡	役行者が修行した山。頂上付近には役行者開基と伝わる転法輪寺が所在する。	奈良県 御所市
42	たいまでら 當麻寺	国宝 （當麻曼荼羅他） 国重文多数	當麻の真人国見が 685 年役行者から練行地であった現在地を譲ってもらい建立。以前は女人禁制であった。四天王は役行者が呼び寄せたとの説もある。そのため本堂には役行者像が祀られている。	奈良県 葛城市
43	たいまでらなかのぼう 當麻寺中之坊	国史跡・名勝	役行者開山の中之坊には行者の秘薬である「陀羅尼助」が伝わり昭和初期まで精製していた。役行者が同坊に残る井戸を加持し、その水と薬草を併せたものが「陀羅尼助」の始まりといわれている。	奈良県 葛城市
R3-1	いわや 岩屋	国史跡	岩屋には、中世の石窟寺院が存在し、鎌倉時代の「諸山縁起」に記された、葛城二十八宿の第２６番経塚（陀羅尼経）がそれに該当し、葛城修験の中世的様相を今に伝えている。	大阪府南河内郡 太子町
行所等（国指定外）				
44	かんねんくつ 観念窟	未指定 （史跡）	友ヶ島の第２の行所であり、海に面した断崖を登ると、荒波により穿たれた洞窟があり、江戸時代の石碑が残る。断崖には、江戸時代に紀州藩の初代藩主・徳川頼宣の命により、友ヶ島の５ヶ所の行所を記した「五所の額」が刻まれている。	和歌山市
45	しんじゃいけ 深蛇池	県天然記念物	役行者が友ヶ島の蛇池に住む大蛇を退治したといわれる。今はススキの生い茂る湿地地帯であり、中央に封じ込め岩がある。	和歌山市

番号	ふりがな 文化財の名称	指定等の状況	ストーリーの中の位置づけ	文化財の 所在地
46	閼伽井跡 （あかいあと）	未指定 （史跡）	友ヶ島の５ヶ所の行所の一つ。元は仏前に備える用水を汲む場所とされ、井戸はないが、江戸時代に立てられた石碑が残る。	和歌山市
47	神島剣池 （かみしまつるぎのいけ）	未指定 （史跡）	友ヶ島の５ヶ所の行所の一つ。神話において日本を創造したという少彦名命（すくなひこなのみこと）と大己貴命（おおなむちのみこと）の祠が神島（淡島）に祀られたことが、淡島神社の起源とされる。	和歌山市
48	加太春日神社　えび祭り （かだかすがじんじゃ　まつ）	未指定 （無形民俗）	葛城修験はじまりの地、和泉山地の西端で海に面する加太では、漁業を生業とする。その氏神であり修験の守護神でもある加太春日神社の春の例大祭では、かつて神前に伊勢海老が奉納され、大漁が祈願されたことから、えび祭りと呼ばれる。現在は５月第３土曜日に神輿渡御が行われ、宝太鼓を先頭に獅子舞や長刀振りなど各々の催し物を御旅所で披露しながら加太の町を巡幸する。	和歌山市
49	紀州加太浦 「採燈大護摩供」 （きしゅうかだうら　さいとうだいごまく）	未指定 （無形民俗）	毎年４月、聖護院の春の峰入りに合わせて、加太北ノ浜では大護摩供が行われる。一時期、途絶えていた伝統を、近年に地域の住民が加太浦大護摩供顕彰会として復興した。厄除・家内安全・交通安全・身体健全・学力増進・海上安全が祈願され、多くの観覧者で賑わう。	和歌山市
50	阿字ヶ峰行者堂 （あじがみねぎょうじゃどう）	未指定 （建造物）	修行の地、友ヶ島が眺められる高台にある、開祖役行者を祀るお堂。今も修行を行う行者達が訪れ、参拝を行う。	和歌山市
51	加太淡嶋神社 （かだあわしまじんじゃ）	未指定 （史跡）	全国に広がる淡島神社の総本社で、人形供養が有名。加太の行所の一つで、今も修験者が参拝を行う。	和歌山市
52	常行寺 （じょうぎょうじ）	県天然記念物	中世、加太にあった伽陀寺は葛城二十八宿第一品の地とされたが、戦国時代末の羽柴秀吉の紀州攻めにより焼失し、その本尊が常行寺に移されたと伝わる。	和歌山市
53	西念寺 （さいねんじ）	未指定 （建造物）	葛城二十八宿の二ノ宿として、修験者を迎える。二十八宿第二品の神福寺が廃寺となった後、その十一面観音が西念寺に移されたという。	和歌山市
54	鳴滝山圓明寺 （鳴滝不動尊） （なるたきさんえんみょうじ　なるたきふどうそん）	未指定 （建造物）	葛城二十八宿第三品の大福山の麓に位置し、役行者が開基と伝わる。その行所である滝の名から、この地が鳴滝と呼ばれる。中世、根来寺の末寺となり、中世末には根来寺と同じく秀吉の紀州攻めを受けたという。	和歌山市
55	大福山本惠寺 （直川観音） （だいふくさんほんえいじ　のうがわかんのん）	未指定 （建造物）	役行者が開基し、本尊の千手観世音菩薩像は役行者の作と伝わる。葛城二十八宿第三品の大福山の登り口に位置し、大福山と号す。奈良時代に桓武天皇の勅願寺となったという古刹。春の観音会式では、大餅投げが風物詩となっている。	和歌山市

番号	ふりがな 文化財の名称	指定等の状況	ストーリーの中の位置づけ	文化財の 所在地
56	墓の谷行者堂（はかのたにぎょうじゃどう）	未指定 （建造物）	役行者が大峰山で修行をした際、母の白専女（しらとうめ）がその後を追い、この地で没したため「墓の谷」と呼ばれたという。現在も母が子の大成を願う霊地として信仰される。	和歌山市
57	中山王子跡（なかやまおうじあと）	未指定 （史跡）	葛城修験の道ともう一つの信仰の道である熊野古道が交差する滝畑では、熊野参詣道紀伊路の中山王子跡が行所の一つとなっている。	和歌山市
58	慈眼院（じげんいん）	未指定 （史跡）	役行者作で秘仏とされる十一面観音が祀られている。	大阪府泉南郡 岬町
59	高仙寺（こうせんじ）	未指定 （史跡）	役行者の母の墓と伝えられる石積が残されている。	大阪府泉南郡 岬町
60	根來寺伽藍古絵図（ねごろじがらんこえず）	県有形 （歴史資料）	峯入道が描かれており、葛城信仰が受け継がれていることが分かる。ねごろ歴史資料館でレプリカを展示。	和歌山県 岩出市
61	中津川行者堂（なかつがわぎょうじゃどう）	未指定 （建造物）	葛城修験において、葛城灌頂という特殊な儀式が行われてきた重要拠点。今も中津川の集落の人々が守り続け、４月には修験者によって護摩供が行われている。	和歌山県 紀の川市
62	熊野神社（くまのじんじゃ）	市指定建造物	『紀伊続風土記』に、近世、社の造営を聖護院が行い、また大護摩修行も行われたとある。中津川村の絵図には護摩鉢が描かれている。神社まで石道標もある。	和歌山県 紀の川市
63	犬鳴山（いぬなきさん） （七宝瀧寺（しっぽうりゅうじ））	府名勝	葛城二十八宿修験道の根本道場。斉明天皇７（661）年役行者が開基。大和大峰山より６年早く開山し、元山上と呼ばれる。倶利伽羅大竜王を本尊とする。行者の滝には男女問わず全国より修験体験に訪れる人が年中絶えない。修験道会館資料館併設。指定文化財等の寺宝を展示する。「義犬伝説」により山号「犬鳴山」を宇多天皇よりいただく。	大阪府 泉佐野市
64	葛嶺雑記（かつれいざっき）	未指定 （歴史資料）	名称や位置が流動的であった葛城二十八宿を踏査した智航上人が嘉永２年に著した嶺中記で、七宝瀧寺にあった葛嶺雑記を、大坂の和泉屋藤兵衛が版を起こし、嘉永３年に出版した。葛城二十八宿とその行程が記され、この本によって「葛城二十八宿」の名称や位置を比定することができた。現在、犬鳴山七宝瀧寺では嘉永３年当時の版本を所蔵する。	大阪府 泉佐野市
65	政基公旅引付（まさもとこうたびひきつけ）	未指定 （歴史資料）	1501 年に日根荘入山田村長福寺に滞在した九条政基が残した日記『政基公旅引付』では、瀧宮（火走神社）、七宝瀧寺での雨乞いの儀式が書かれている。	大阪府 泉佐野市
66	行者の滝を含む７つの滝（ぎょうじゃのたきをふくむななつのたき）	未指定 （名勝）	寺号「七宝瀧寺」の由来。淳和天皇（824～834）の時代、全国的な干ばつ時に犬鳴山での祈願が行われ、泉州一円は雨に恵まれたという。そこで、天皇は、犬鳴山中にある行者の滝を含む著名な七つの滝を金銀などの七宝にちなんで、七宝瀧寺と命名した。行者の滝では毎年８月に行者と一般参加者が一堂に会し、入滝を行うお滝まつり滝行大護摩供が行われている。	大阪府 泉佐野市

番号	ふりがな 文化財の名称	指定等の状況	ストーリーの中の位置づけ	文化財の 所在地
67	かつらぎおど 葛城踊り	府無形民俗	和泉葛城山頂に鎮座する八大竜王社（高おがみ神社）に、雨乞いや降雨に感謝する雨礼のために奉納するものである。	大阪府 岸和田市
68	おがみじんじゃ　あめふりのたき 意賀美神社　雨降りの滝	市天然記念物	意賀美神社雨降りの滝は、役行者ゆかりの神於寺縁起で有名な神於山裾に位置する岸和田市域の重要な水源地。意賀美神社の社伝によれば陽成天皇が、元慶８（884）年大旱魃のとき、菅原道真に降雨を祈らせたことから「雨降り大明神」とも呼ばれる。日照りに、村人がこの水をさらえて神前に祈ると、必ず雨が降ったことから、地元では雨の神様として知られる。この滝に汚物を放り込むと竜神の怒りで雨が降るとも言われている。	大阪府 岸和田市
69	ささおど 笹踊り	未指定 （無形民俗）	中世の頃から伝わる、大阪府南部、旧和泉国いわゆる泉州地域に数多く伝承されていた「風流太鼓踊り」の芸脈を引くもので、華麗な衣装をつけ、しめ太鼓や笛などの楽器を伴奏として歌い踊る雨乞い踊りのひとつ。	大阪府 和泉市
70	ほりこしやくかんのん 堀越癪観音	未指定 （建造物）	役行者が癪病を患った母の回復を願って彫った十一面観音菩薩が本堂に鎮座する。毎年５月３日に開催される躑躅祭では、柴燈護摩祈祷と火生三昧修行が行われ、犬鳴山の修験者が法螺貝を吹き行者問答の後、弓矢や剣で清めの儀式を行い大護摩に点火。焼けた護摩木を並べ火渡り修行を行う。多くの参詣者が訪れる。	和歌山県伊都郡 かつらぎ町
71	かつらぎざおうごんげんしゃ 葛城蔵王権現社	未指定 （建造物）	かつらぎ町と大阪府河内長野市との境界、蔵王峠に鎮座している。７世紀末、役行者が修験道の行所を開いたところといわれている。４月に開催される春の例大祭では、各地より信者が集まり玉串奉納、護摩供養、盛大な餅まきが行われる。	和歌山県伊都郡 かつらぎ町
72	てんにょさんしょうらくじ 天女山正楽寺	未指定 （史跡）	聖護院宮が、嘉永２（1849）年の役行者1150回忌における箕面山滝安寺での法事の帰途、葛城修験ルートの一部を巡った。そのうちのひとつである天女山正楽寺では、宮を迎えて昼食が献じられた。その際の二畳台や戸帳の幕などは、和歌山から運ばれてきたものであった。	和歌山県伊都郡 かつらぎ町
R3-2	しごうせんりょうおど 四郷千両踊り	未指定 （無形民俗）	「中橋家日次記」に寛延三年（１７５０）の奉納に係る記録があり、登場役「棒振り」の口上で、棒振りは葛城山で修行する山伏に仕えて世話をする役割を持った鬼であると名乗っている。また、同じく登場役「シンポチ」の口上で、葛城修験者が頭巾をつけた山伏姿で現れて四郷地区の豊穣や繁昌を祈願して踊ると述べている。千両踊りは修験者の伝えた風流芸能であることを語っている口上であり、ストーリーにあるように、まさに葛城修験が里人とともに守り伝えられてきたことを示すものである。	和歌山県伊都郡 かつらぎ町

番号	ふりがな 文化財の名称	指定等の状況	ストーリーの中の位置づけ	文化財の 所在地
73	おみねじ 小峯寺	未指定 （建造物）	役行者の開基といわれ古くから修験道の行所だった古刹。役行者母公墓と伝わる十三重の塔がある。毎年３月には秘仏である馬頭観世音菩薩の御開帳がある。	和歌山県 橋本市
74	ふどうやま　きょせき 不動山の巨石	未指定 （史跡）	集落の外れから６３５段の階段を登りつめた先にある行所。役行者が葛城山から吉野金峯山へ橋を架けようとし、一言主神に命じて石を集めさせた跡と伝わる。	和歌山県 橋本市
75	とうかくじ 東覚寺 はちだいりゅうおう　かつらぎみょうじんはるまつ 八大龍王・葛城明神春祭り	未指定 （無形民俗）	４月末～５月上旬に行う葛城修験の本尊である葛城明神と水の神である八大龍王のための春祭りで、不動明王のために柴燈大護摩が行われる。以前は、龍王講が中心となって行っていたが、現在は春祭りの会員が中心となっている。見学可能。	和歌山県 橋本市
76	みやのこう 宮ノ講と かつらぎじんじゃとしこ　ぎょうじ 葛城神社年越し行事	未指定 （無形民俗）	宮ノ講員が行う新年の行事で、大松明を造り、葛城神社より北へ 100 mほどいった場所にある滝で滝行を行う。	和歌山県 橋本市
77	ぎょうじゃ 行者まいり	未指定 （無形民俗）	毎年１月２日に水と半紙にミカン、祝柿、栢実を包み西の行者杉に参る。参拝後、下山の際に薪を拾いながら帰宅し、これを仕事始めとした。	和歌山県 橋本市
78	こうたきじ 光滝寺	市名勝	役行者が 36 歳の時、ここで修行し葛城修験の行所として開いたといわれる。境内には不動明王を祀る本堂などがたつ。	大阪府 河内長野市
79	こうたきじすみやきふどうそん 光滝寺炭焼不動尊	市有形民俗	不動明王が老翁に化身し、寺の住職に白炭の焼き方を伝授したことに由来する。	大阪府 河内長野市
80	だいたくじ 大澤寺	県指定（美術工芸品） 市指定（美術工芸品）	19 番経塚のある神福山の南麓にあり、山号は「神福山」。本尊は、役行者が彫ったと伝える薬師如来立像（秘仏、平安時代、県指定文化財）。境内の琵琶ノ池の霊水が眼病に効くといわれ、「目の薬師」の信仰を集める。紅葉は、江戸時代（19 世紀初め）の詩画帖『五條十八景』に「勢堂紅葉」として取り上げられるほど美しく、写真愛好家も多い。毎年１月７日に初薬師・行者会、５月５日に花会式が行われ、多くの参拝者で賑わう。	奈良県 五條市
81	じふくじ 地福寺	未指定 （建造物）	明治時代初めの神仏分離などにより、明治４年、金剛山転法輪寺から本尊の法起菩薩立像を迎え入れ、翌年の旧暦６月７日から蓮華祭りが始まった。毎年７月７日に行われる現在の蓮華祭りでは、境内に護摩壇が組まれ、最初に行者がその四方に矢を射たり、護摩壇に斧で切り付けたりする。参拝者は、足元に射られた矢を縁起物として持ち帰る。その後、護摩壇に点火され、住職や行者が参拝者の供えた護摩木を投げ込む。煙の流れる方角でその年の豊凶を見るという。	奈良県 五條市
82	たもんじあと 多聞寺跡	未指定 （史跡）	金剛七坊の一つ。転法輪寺まで続く千早道（現・千早本道）が始まる千早地区内に位置し、今でも修験者たちが参詣している。史跡内には、村民によってお堂が再建されている。	大阪府南河内郡 千早赤阪村

番号	ふりがな 文化財の名称	指定等の状況	ストーリーの中の位置づけ	文化財の 所在地
83	てんぽうりんじ 転法輪寺	未指定 （建造物）	金剛山の葛木岳山頂の西方にあって、役行者の開基と伝わっている。明治の初めまで女人禁制で、天台・真言宗の修験の地である。毎年７月７日の役行者の命日に開かれるれんげ大祭では蓮華をお供えし、柴燈護摩を厳修し、役行者に報恩感謝をささげる。その後に行われる「火渡り修行」は一般参拝者も参加できる。	奈良県 御所市
84	きっしょうそうじ 吉祥草寺	未指定 （建造物）	寺のある茅原（ちはら）は役行者の出生の地であり、吉祥草寺は役行者を開基と伝える。 「役行者三十二歳像」、「役行者母公像」が祀られている。産湯井戸、行者の腰掛けなどの名所も多い。小正月に行われる左義長（さぎちょう）大法要（茅原の大トンド）は、雌雄一対の大松明を作り、法要の後にこれを燃やして、その年の天下泰平・五穀豊穣・人類和合を祈る。１３００年以上続く伝統行事として県無形民俗文化財に指定。	奈良県 御所市
85	かつらぎひとことぬしじんじゃ 葛城一言主神社	未指定 （建造物）	全国各地の一言主神を奉斎する神社の総本社。祀られている一言主は、一言で願いを叶えてくれる神として崇敬されている。人々からは「いちごんさん」と呼ばれている。この神は、役行者が金峯山に橋を架ける工事をした際に、顔が醜いという理由で、夜間のみ工事に従事したために、役行者によって呪縛された神でもある。699 年に役行者が伊豆に配流されたのは、不満を抱いた一言主が朝廷に讒言をしたためであるという。	奈良県 御所市
86	たいまでらたけのぼう 當麻寺竹之坊	未指定 （建造物）	本尊は役行者。約３０年前までは、行者が修行の祈願に訪れていた。	奈良県 葛城市
87	たかおでら 高雄寺	県指定 （美術工芸品）	役行者開基。本堂は平成 11 年１月、放火により焼失し、現在、収蔵庫のみが残る。鎌倉時代作の役行者像は県指定文化財で、収蔵庫にて保管。	奈良県 葛城市
88	どんづる峯（ぼう）	県指定 （天然記念物）	二上山の２６番経塚から亀の瀬に至る最短ルートで、古代の大坂越えに位置する。二上山の火砕流堆積物の露出地帯で、奇岩景勝地。葛城修行の行所。	奈良県 香芝市
89	あなむしとうげ　ばとうかんのん 穴虫峠の馬頭観音	未指定 （彫刻）	二上山の２６番経塚から亀の瀬に至る最短ルートで、古代の大坂越えに位置する。祠には、石造馬頭観音坐像が祀られ、碑伝が奉納されている。	奈良県 香芝市
90	かんのんじ　みわじんじゃ 観音寺、三輪神社	未指定 （建造物）	二上山から亀の瀬に至る最短ルートに位置し、２７番経塚があった可能性が指摘される。観音寺は、楠木正成ゆかりの木造十一面千手観音立像を祀り、隣接する三輪神社には、碑伝が奉納される。	奈良県 香芝市
91	せきやじぞうそん 関屋地蔵尊	未指定 （彫刻）	長尾街道と明神山を経て亀の瀬に至る最短ルートの分岐点に祀られている。祠には、石造地蔵菩薩坐像が祀られ、碑伝が奉納されている。	奈良県 香芝市

葛城修験の概要

第2章

第１節　葛城の地について

大阪と和歌山の府県境を東西に走る和泉山脈と、大阪と奈良の府県境を南北に走る金剛山地にまたがる総延長 112 ㎞に及ぶ一帯の山地は「葛城」と呼ばれている。現在、和泉山脈には和泉葛城山（858 m）、南葛城山（標高 922 m）があり、その南麓の紀ノ川沿いには和歌山県伊都郡かつらぎ町が所在する。また、金剛山地には中葛城山（937 m）、葛城山（大和葛城山 959 m）のほか、かつて葛城嶺と呼ばれた金剛山（1,125 m）があり、その東麓には奈良県葛城市が所在している。

このように現在も広域に地名として残る葛城の地は、古代からの山岳信仰・修行の地として一言主神や役行者にまつわる数々の説話・伝承が残されており、中世・近世には役行者が初めて修行を積んだ修験道の聖地として認められていた。葛城の地は、平成 16 年（2004）に「紀伊山地の霊場と参詣道」として世界遺産となった吉野・大峯と並ぶ「修験の二大聖地」とも称されており、令和２年（2020）に「葛城修験―里人とともに守り伝える修験道はじまりの地」（以下、日本遺産葛城修験との略称を併用）として日本遺産に認定されている。

第２節　葛城修験の祖、役行者

修験道の祖とされる役行者（役小角）は賀茂一族の出身で、大和国葛城山麓、現在の御所市にあたる地で生まれたとされている。役行者が最初に修行をした場所が葛城の地で、山中の行場には法華経８巻 28 品を１品ずつ埋納したと伝えられている。また、葛城の地には役行者開基の寺や役行者作の仏像のほか、数々のエピソードをもつ場所が広域に点在しており、滝や巨石等の行場をつないで、総称としての「葛城修験」が構成されている。

修験道の祖とされる役行者は、日本各地の修験の地の祖とされているが、『続日本紀』文武天皇三年（699）５月 24 日の条にある記事は以下のとおりである。

「役君小角伊豆島に流さる。初め小角葛木山に住みて、呪術を以て称めらる。外従五位下韓国連広足が師なりき、後にその能を害ひて、讒づるに妖惑を以てせり。故、遠き処に配さる。世相伝へて云はく、「小角能く鬼人を役使して、水を汲み薪を採らしむ。若し命を用いずは、即ち呪を以て縛る」といふ。」

この記事から、役行者が実在する人物で、修験道の祖とされる験力をもって活動していたことが知られる。また、日本各地に役行者が開いたとする修験の山があるが、この正史に記された記述から、役行者は元々、葛木（葛城）にいたことがわかり、葛城修験の特別な位置づけが知られる。

役小角の出自は、『続日本紀』養老三年（719）７月 13 日条の「従六位上上賀茂役首石穂に正六位下、千羽三千石等一百六十人に、賀茂役君姓を賜ふ」とある賀茂の役君と考えられている。

また、平安時代初頭の景戒『日本現法善悪霊異記』上巻の「孔雀明王の呪法を修持し、異験力を得、現に仙術を行って天を飛んだ話　第二八」には「役優婆塞者は賀茂役公氏、今の高賀茂朝臣の出なり」と記されている。高賀茂氏とは賀茂氏の一派で、葛城山の高鴨阿治須岐託彦根神社を祀る氏族と考えられ、「天文暦法を掌る一家で、両道を」し、大宝元年（701）正月条に見られる吉備麻呂を始祖としている。

このように葛城は、役行者と賀茂一族の実在が確認できる修験道始まりの場所であり、残された文化財を未来に継承していくことが重要と認識される。

第３節　葛城地域における修験道の様相

修験道は、日本古来の神道や仏教、道教などの影響下に山岳修行を行い、験力を得る活動を行う宗教として、平安時代後期に形作られたとみられている。中世以降、本山修験宗（総本山聖護院）と真言宗醍醐派（総本山醍醐寺三宝院）、金峯山修験本宗（総本山金峯山寺）等に分かれ、大峯山での修行を中心に活動が続けられている。

これらの修験道の宗派では、役行者が後に本格的な修行の場として開いた吉野・大峯の修行の地に対し、葛城修験の地は年代的に先行する行場であり、特に重要で必ず修行しなければならない行場として認識されている。

平安時代の峰入りを記録した『諸山縁起』は、鎌倉時代初期か、それ以前に編集されたものとみられており貴重である。その内容は安土桃山時代の『葛城峰宿次第』（奥書天正 17（1589）年）等で転写されて今に伝えられており、葛城第１宿の「一阿布利寺序品窟」に始まり、「九十五普賢寺、勧発品第二十八、亀尾宿」まで、法華経二十八品の経塚を含む葛城行所九十五箇所と記している。

また、室町時代初期に京都若王子千勝院の鎮永（1394 ～ 1427）によって書かれたとされる『葛城峯中記』の内容は、その他の峯中記に書写され、江戸時代に山林抖擻の定本として広く流布されている。行所の数は一の序品窟から百八の亀尾宿まで 13 箇所増え、各行所までの道が記載されている。

江戸時代末期、嘉永３年（1850）に智航により『葛嶺雑記』がまとめられており、序品窟から亀瀬岩第二十八経塚まで百八所の行所について記されている。犬鳴山七宝瀧寺がこの書をもとに経塚・行所を踏査し、平成元年（1989）に『葛城回峰録』として刊行している。日本遺産葛城修験の経塚・行所を確認の際に、この『葛嶺雑記』が参考とされている。

修験者は行場において、法螺貝を吹き、香を焚き、経をあげ、傍らに碑伝（ひで）という入峯の年月日や名前が書かれた木札を置いていく。現在でも経塚や行場にいくと、多くの碑伝が置かれている。

第3章 地理的・歴史的環境

第１節　地理的環境

日本遺産葛城修験の構成文化財は、和泉山脈と金剛山地に所在する。

１．和泉山脈

和泉山脈は、大阪府と和歌山県の府県境にある東西方向の山脈で、東端で金剛山地と繋がる。

中央構造線北側の活断層沿いに形成されており、西は紀淡海峡の友ヶ島に面した和歌山市加太・大阪府岬町に始まり、東は金剛山地と接する紀見峠まで続く、東西約 50 ㎞の範囲に連なる山脈である。

和泉山脈の主峰は 897 ｍの岩湧山で、三国山（886 ｍ）、南葛城山（922 ｍ）などがある。地層は中生代白亜紀の和泉砂岩層で、礫岩、砂岩、頁岩の互層から成る。山頂は隆起準平原の平坦面を残して高原状を呈している。山脈の南斜面は中央構造線の断層崖となり、山麓には紀ノ川が西流し、紀伊山地が遠望できる。

山地の北斜面はなだらかであるが、２列の前山列があり、山深い地形を成している。複数の谷が刻まれ、河川が南東から北西方向へ流れており、交通路や市町村の境界も河川流域ごとに形成されている。

２．金剛山地

金剛山地は、大阪府と奈良県の府県境にある南北方向の山地で、南端で和泉山脈に繋がる。

山地は大阪平野と奈良盆地を分断する丘陵地となっており、大和川により北側の生駒山地と分断されている。南端は橋本市・河内長野市にまたがる紀見峠から五條市付近にあたり、北端の地は大和川に面した明神山と亀の瀬で終わっている。南北約 20 ㎞、東西約５㎞の範囲に山が連なっている。

主峰は金剛山（標高 1,125 ｍ）で、水越峠を経て北側には葛城山（959 ｍ）さらに竹ノ内街道を経て北側には二上山（517 ｍ）、が所在している。奈良県側は急斜面となっており、大阪府側はゆるやかに傾斜している。

地質は西南日本内帯の領家変成帯に属しており、花崗岩や片麻岩から成っている。北端の二上山は新第三紀の旧火山であり、白色の凝灰岩から成る屯鶴峯などが形成されている。

第２節　歴史的環境

１．周辺の遺跡と歴史の概要

旧石器時代の遺跡は、金剛山地の二上山がサヌカイトの原産地として特に有名である。二上山北麓遺跡群や西麓の藤井寺市国府遺跡、羽曳野市翠鳥園遺跡では、瀬戸内技法と呼ばれる技法を用いた国府型ナイフ形石器の生産が行われていた様子がわかっている。和泉山脈においても、山麓の溜池崖面を中心にナイフ形石器や尖頭器等、また縄文時代の石鏃などが表採されており、人々の行動が読みとれる。

縄文時代から弥生時代にかけての集落遺跡は山麓の平野部にみられ、山地にはあまり築かれていない。縄文時代の遺跡は土面が出土した和泉市仏並遺跡や、大型竪穴建物が発見されたかつらぎ町中飯降遺跡があり、多量の土偶が出土した橿原市橿原遺跡なども近接している。弥生時代には、周辺平野部に集落遺跡が築かれ、和泉市・泉佐野市池上曽根遺跡や和歌山市太田黒田遺跡、田原本町唐古鍵遺

跡等が知られており、葛城周辺にも多数の集落遺跡が築かれている。後期になると、瀬戸内海沿岸を中心に高地性集落と呼ばれる集落が山地に築かれており、海にやや近い和歌山市橘谷遺跡や和泉市観音寺山遺跡のような集落が散見される。

古墳時代中期になると、葛城の地は渡来文化を取り入れた最先端の地となり、葛城氏や蘇我氏、紀氏などの豪族が勢力を張るようになる。

金剛山地の東西山麓では、古墳時代中期・後期の遺跡が特に多数展開する。大王墓をはじめとする巨大古墳が築かれた古市古墳群から南へ石川沿いを遡ると、金剛山地西麓沿いに磯長谷古墳群や一須賀古墳群、平石古墳群など著名な古墳群が多数形成されている。金剛山地東麓沿いにある御所市の南郷遺跡群では大規模な複合遺跡が展開し、渡来文化を吸収した先進地の様相を示している。周辺では室大墓と巨勢山古墳群が築かれており、金剛山地東麓にも大規模な群集墳が展開する。

和泉山脈の北側には大王墓を含む巨大古墳を築いた百舌鳥古墳群があり、その上流域の山中もその影響が及んでいたと考えられる。岸和田市摩湯山古墳や久米田古墳群などもあり、古墳時代の前半期からの勢力が存在していたことをうかがわせる。和泉山地の西部では紀氏の遺跡群が形成されており、和歌山市木ノ本（釜山）古墳群や大谷古墳、巨大な倉庫群のみつかった鳴滝倉庫群、岬町淡輪古墳群などが山麓に展開している。また、周辺には岩橋千塚古墳群が築かれている。

飛鳥・奈良時代の古代寺院は、畿内地域の大和・河内で多数築かれており、役行者生誕地とされる金剛山地の東麓には、當麻寺や尼寺廃寺・石光寺・二光寺廃寺・朝妻廃寺、高宮廃寺など、多数の寺院が築かれている。また、和泉山脈の南麓には、古佐田廃寺・神野々廃寺・名古曽廃寺・佐野廃寺・粉河寺・上野廃寺・直川廃寺等が築かれた。大阪府側の寺院は山中の谷筋に創建され、瓦等の遺物が出土しないため考古学的な把握は難しいが、多数の寺院の創建が伝えられている。一言主神社や高鴨神社など、在地の信仰を集めていた神社における神社建築も、このころに成立したものと考えられる。遺跡として残る場所は限られるが、葛城修験の成立に繋がる文化的な発展の萌芽がみられる。

平安時代の葛城は都から遠い立地へと変わり、山麓の交通路の性格も変化する。南海道は金剛山地や和泉山脈東部の山麓から離れて大阪府の沿岸部を通り和泉山脈西部を抜けるようになり、既存の道の性格も高野街道などの参詣道として性格を変化させていったものとみられる。吉野・大峯では、寛弘４年（1007）の年号をもつ金峯山経塚での埋納が行われ、その後、全国的に経塚が築かれるようになっていく。

葛城修験の経塚の埋納場所と年代は遺跡からはあまり実態がよく分かっておらず、平安時代の『諸山縁起』から江戸時代後期の『葛嶺雑記』までの峯中記をもとに、数々の考察が行われている。平安時代から鎌倉時代にかけて各地に荘園が成立し、参詣道も次第に往来が多くなっていく。

鎌倉時代末期には南河内の山中に楠木正成が現れ、鎌倉幕府の六波羅探題と千早城や上赤坂城、下赤阪城を中心に葛城の山中で転戦し、幕府崩壊の大きな契機となった。南北朝時代には、後醍醐天皇の南朝が吉野山に入り、その後、この地域に大きな影響力をもつようになった。

室町時代には、河内・紀伊を領国とした守護畠山氏の内訌があり、応仁の乱と連動して多数の戦いが繰り広げられている。戦国時代には三好三人衆や石山本願寺がいた大阪と松永久秀や筒井順慶のいた奈良、雑賀衆や根来衆がいた和歌山へ、織田信長や羽柴秀吉の侵攻があり、多数の城館が築かれ、戦いが行われている。

江戸時代には和泉山脈より南には紀州徳川家の紀州藩が置かれ、その北側及び金剛山地周辺にはいくつかの小藩と有力寺院の寺領などが配置された。

第１節　葛城修験の構成文化財について

日本遺産葛城修験の構成文化財は、令和２年（2020）度の申請・認定の際のリストでは１～91として掲載しており、この番号を基本として、各種地図やホームページでの構成文化財の紹介を行っている。

経塚には複数の候補地が示されている場所があり、第３・14・28経塚は、例えば3-1などと枝番号をつけて表記をしているため、91番までの番号に94か所の構成文化財があることになる。

また、令和３年（2021）７月に２か所の構成文化財の追加をしたが、この際には追加される文化財の数が少なかったこともあり、当初の番号をそのまま活かして、R3-1、R3-2という追加番号を設定している。

このような経緯で作成された構成文化財の一覧表が元となり、各種の紹介記事や地図の表記が行われていることから、構成文化財番号の数は一見すると91番までであるが、96の構成文化財がある。

以下、重複するところもあるが、各構成文化財別の内訳を少し説明しておく。

葛城二十八宿の経塚には１～28までの番号を振っているが、第３・14・28の３か所の経塚では複数の候補地が並立している。これらのほかにも、経塚として伝えられる場所は多数存在しているが、今回の調査報告書では構成文化財となっている経塚について記述し、各市町村で把握している候補地については、それぞれの判断で若干の紹介をしている。

葛城修験の行所等について、認定申請時に国指定文化財に関連する行所としてリスト掲載した文化財は29～43までの番号で管理しているが、この他には令和３年に追加されたもの（R3-1）が１件存在している。

このほか、国指定文化財以外の行所として、44～91までリスト掲載されており、この他に令和３年度末に追加されたもの（R3-2）が１件ある。

構成文化財については、パンフレットやホームページ等でも紹介しているので、ご参照いただきたい。

第２節　葛城二十八宿の経塚（構成文化財１～28）

役行者は、葛城の地に法華経８巻 28 品を１品ずつ埋納したと伝えられており、その法華経が納められた１～ 28 の経塚とされる場所が伝えられている。各書物により場所の記載が異なる場合も散見され、候補地が複数存在する経塚も多数みられる。

ここでは日本遺産に認定された経塚の地とされる 31 か所の地について、所在地と経塚の全体像、石造物がある場合はその略図や写真を掲載して紹介することとした。経塚についての記述は、各経塚の所在する自治体で調査・把握している内容を記載した。

（１）経塚とは

経塚とは仏教の経典を地下に埋納した塚のことである。仏教の教えを後世に伝える作善行為と考えられるが、一般的には平安時代後半の末法思想の影響で土中に経典を埋納する行為が広がるようになった。紙に筆写した法華経を金属製の経筒に入れ、陶器製の外容器に入れ、霊地に埋納することが多く、古い例としては、寛弘４(1007) 年に藤原道長が金峯山山頂に埋納した金峯山経塚が知られている。葛城修験における二十八宿の経塚はそれに先行する話として伝わる事例であるが、証明は難しく、中世以降、その埋納位置について各種の考察が行われるとともに、信仰対象としての伝承がおこなわれてきた。経塚の成立過程を考えるうえで重要な場所であり、今回は現在に伝えられてきたその経塚について若干の記録を作成した。日本遺産への認定の際に場所の特定作業が行われているが、その場所についての情報を表形式として各市町村で記載するとともに、全体像の分かる略測図を示し、写真で補足した。本来、経典を埋納した場所の上面に表示をする必要はないが、後世に埋納位置と認識して表示物が設置された場所が多く、比較的古い時期に製作されたことの分かる石造物について、図化と撮影を行って記録を作成した。現地には石積みや祠を設置したものも多く、その現況を本書に報告する。

（２）経塚の分布

経塚の立地を大きく分けると、第１経塚から第 18 経塚までが和泉山脈、第 19 経塚から第 28 経塚が金剛山地に所在している。第１経塚の序品は友ヶ島にあり､その所在地の洞窟は序品窟と呼ばれている。第２番経塚は加太から和泉山脈に入っていき、第３経塚は山頂にあるが、間近に海を臨む場所に築かれている。第４経塚は熊野古道による峠越えの場所にあり、第５経塚遺構は古道より東の山中に入る。

第５～７・９・12 ～ 14 － 1 の経塚は和泉山脈の稜線から南の和歌山県側にあり、紀の川を望見する山中に位置している。第７経塚の近くには葛城修験の中台と呼ばれ、本山派修験における葛城灌頂という儀式が行われる重要な場である中津川行者堂が所在している。

また第８・10・11・14 － 2 ～ 18 は和泉山脈の北側の小河川の谷沿いに分布する寺社等に近い霊場に位置しており、第８番経塚の近くには役行者が大峰山に先行して開山したことから元山上と呼ばれる犬鳴山七宝瀧寺が所在している。

第 19 ～ 23 経塚は役行者の生誕地周辺にあたる､大和盆地南西部に所在している。金剛山がそびえ、東麓に一言主神社が造営されている。第 24 ～ 28 経塚は金剛山地北部の二上山周辺から大和川までに分布し、當麻寺等が所在している。

1．第一経塚　友ヶ島（ともがしま）　序品（じょほん）（和歌山市）

(1) 位置と周辺の状況

葛城修験の第１番経塚である序品は、和歌山市加太の沖合に浮かぶ友ヶ島の虎島に所在する。

友ヶ島は沖ノ島・地ノ島・神島・虎島の４つの島から成っており、葛城修験の経塚・行所等が５箇所所在する。友ヶ島の中で中心的な島と位置づけられる沖ノ島は、南西から北東方向に細長く伸びた形をしており、長さ約３㎞、幅 800 m、最高地点の標高が 119 mある起伏に富んだ島である。沖ノ島の北東端に接する小島が虎島で、干潮時に海中から現れる岩場の道で沖ノ島と繋がる。虎島は、直径約 300 mの小さな島で、海面から円錐形の山がそびえる地形をしている。海岸沿いに島の南端へ向かった場所に序品のある洞窟である序品窟が所在する。

(2) 現地の現況

序品窟は海に面した巨大な岩盤の割れ目にできた洞窟であり、洞窟は幅約 0. 6～ 1.4 m、奥行きはおよそ 15 mほどとみられる。地面は多数の礫がある斜面で、割れ目に挟まった大岩が天井代わりになっている。暗い洞窟内の隙間から光が射し、出入り口の先には青い海がみえ、独特の世界を形成している。

洞窟内には台座に乗せられた四角い花崗岩製の石碑があり、中央に「妙法蓮華経序品第一」、右側に「熊野三山前検校二品親王道晃御筆」、左側に「三山奉行若王子晃海、勝仙院晃玄記」と彫られている。石碑の傍らには碑伝が置かれている。

(3) 歴史的背景

平安時代の『日本後記』には「伴島」とあり、後の『紀伊続風土記』には「役小角、葛城を開くに沖島を以って開首とせり、友島、日本後記に伴島と書けり」と説明されている。　鎌倉時代初頭頃の『諸山縁起』には「阿布利寺、序品、七池あり。蓮華池という」、江戸時代の『葛城峯中記』には「阿布利寺、若原島、序品岩屋納経也」と記されている。

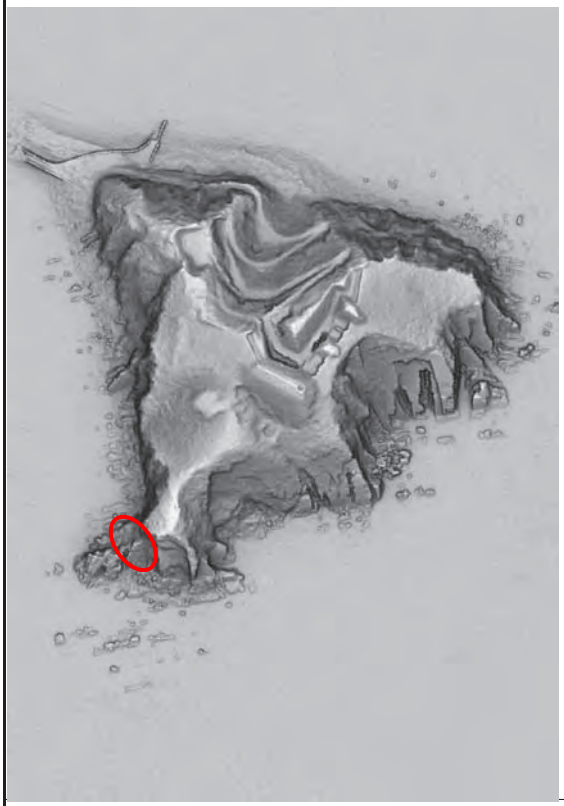
(4) その他

虎島へ渡る堤防は途中くずれており非常に危険なため、現在渡ることができない。

1．第一経塚　友ヶ島・序品

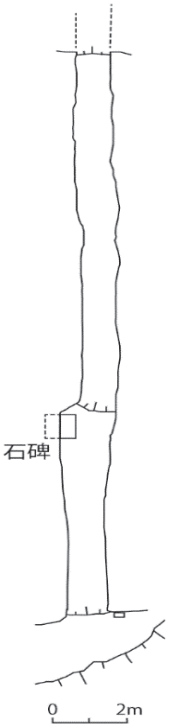
所在地	和歌山市加太　虎島	地　形	洞窟
緯度・経度	北緯34° 17′ 28″ ・東経135° 1′ 33″	標　高	3m
設置物	石碑 標柱（現代）、碑伝		
備　考	洞窟幅0.6～1.4m、奥行約12～15m程度、高さ約1.5～6m程度		

経塚略測平面図



経塚写真（全景）

序品窟北側入口

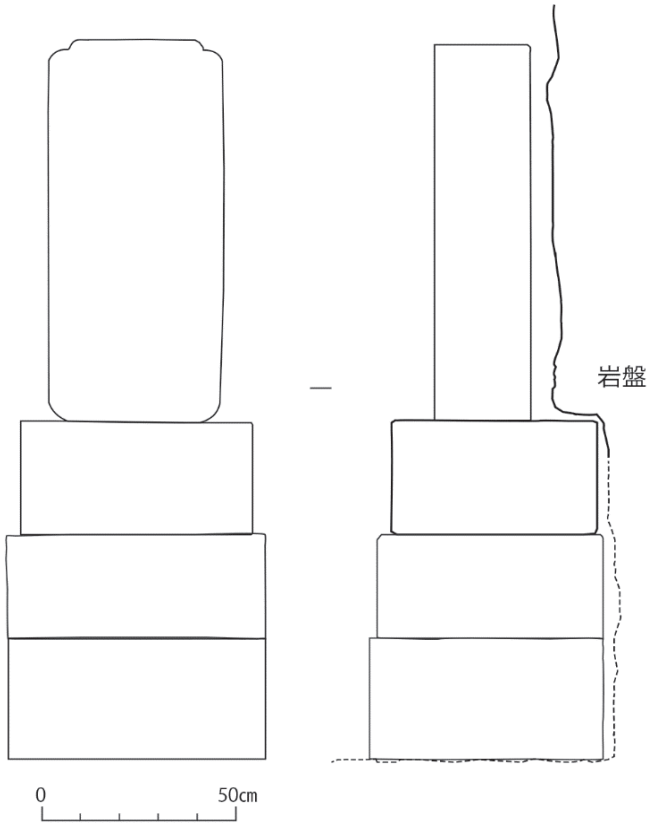


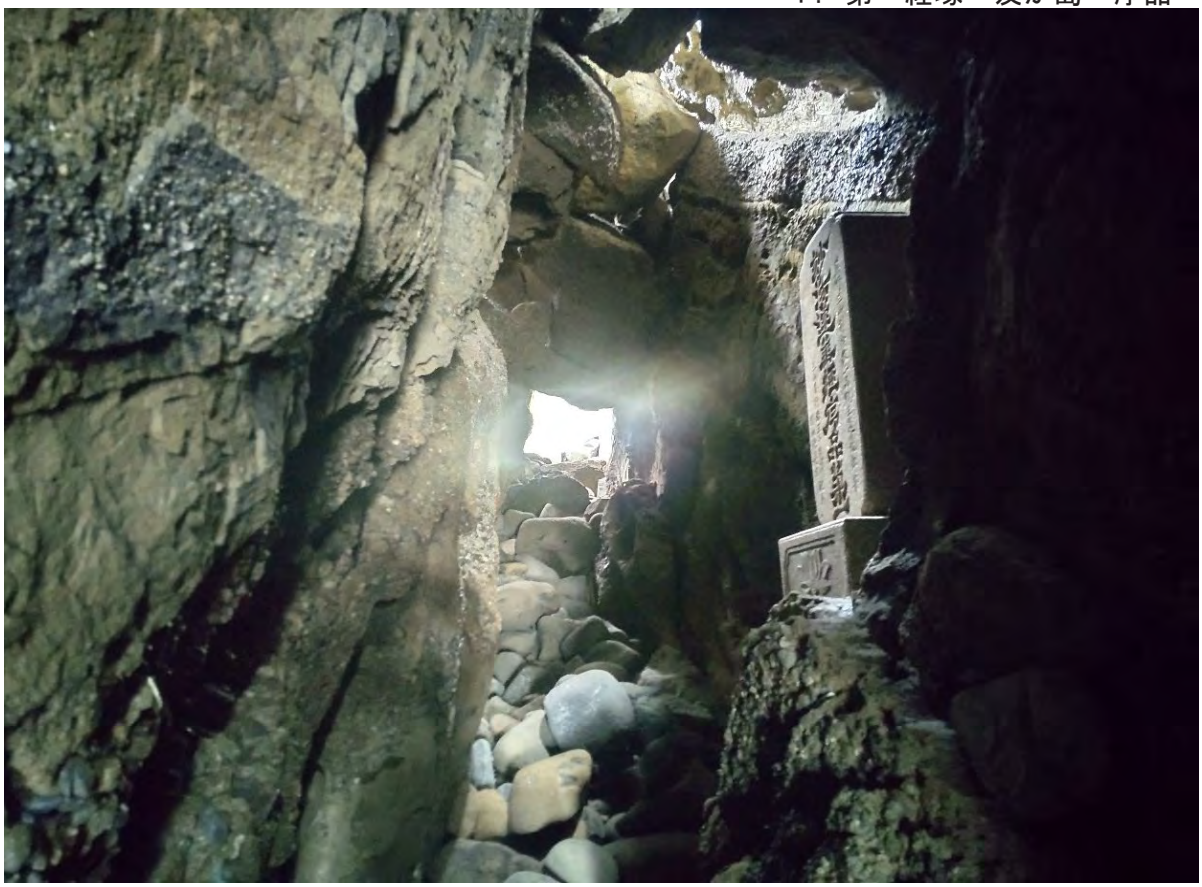
序品窟平面略図

1．第一経塚　友ヶ島・序品石造物

石　材	花崗岩	形　式	石碑
法　量	幅43cm・奥行25cm・高さ102cm	年　代	江戸時代
銘　文	「熊野三山前検校二品親王道晃御筆／妙法蓮華経序品第一／ 三山奉行若王子晃海・勝仙院晃玄記」		
備　考	台座は３石積み上げ		

石造物略測図・写真

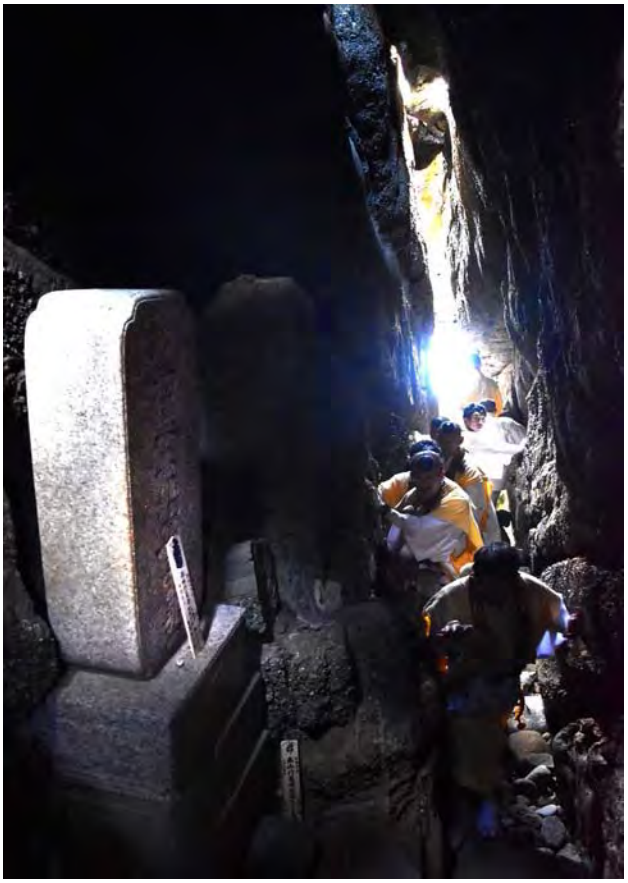




1　序品窟内（南から）

2　序品遠景（写真中央部・北から）

3　序品南側入口前



4　序品窟内での修行状況

2．第二経塚　神福寺跡（じんふくじあと）　方便品（ほうべんぼん）　（岬町）

(1) 位置と周辺の状況

和歌山北高校の前を通過し、車道を約 800 m進むと右手に「史蹟葛城山二之宿観音堂」と刻まれた石碑がある。裏手には紀州備長炭窯があり、その横を通って未舗装道路を約 100 m進むと左手に神福寺跡がある。明治時代にこの辺り一帯は陸軍の軍用地として接収され由良要塞の一部となっており、この他に紀淡海峡の防御のために設置された砲台跡が淡路島、友ヶ島などにも残されている。炭焼き窯は堡塁跡で、東に 100 m離れた場所には佐瀬川高堡塁跡があり、周辺は戦争遺跡としても重要な地域である。

神福寺が廃寺となった後は、本尊等は和歌山市の西庄にある西念寺へと移されている。境内にある燈籠には「葛城山二ノ宿永代、文化二年三月」と刻まれている。このことからも神福寺の遺品が西念寺に移されたことがわかる。

(2) 現地の現況

入母屋造りの石祠があり、屋根材１、奥壁材１、側壁材２、底石材１で構成されており、奥壁材には梵字と蓮台が印刻されている。背面は部分的に、コンクリートで補強されている。周りはブロックで囲われ、石祠の傍には花筒、賽銭、行者石などが置かれている。碑伝は以前、祠の中に置かれていたが、現在は石祠の横に置かれた籠に並べられている。また手前左には小さな手水鉢が置かれている。近くには近畿自然歩道の整備で設置されたベンチが２つある。三之宿にあたる横手の三輪神社に石祠が３基あり、その内の１基が同じ形状をしている。

(3) 歴史的背景

『葛城峯中記』に「方便品第二　今　八幡　號鳩留。東へ嶺續駈入也。行者返　尾傳、艮へ往。釋迦留道より左谷に平地、木四五本有り。金剛童子跡皈、東へ尾傳に登れば東の谷に日野里見るなり。十輪寺地藏　河東山原八王子金剛童子。是より後東の谷を六七丁往は上に道有。」とある。

『葛城先達峯中勤式廻行記録』に「二ノ宿分　観音堂、金剛童子、此所にて有、座禪石有、又方便品ノ石有、観音堂十一面　クズ大明神森有」と十一面観音像が祀られていたとある。

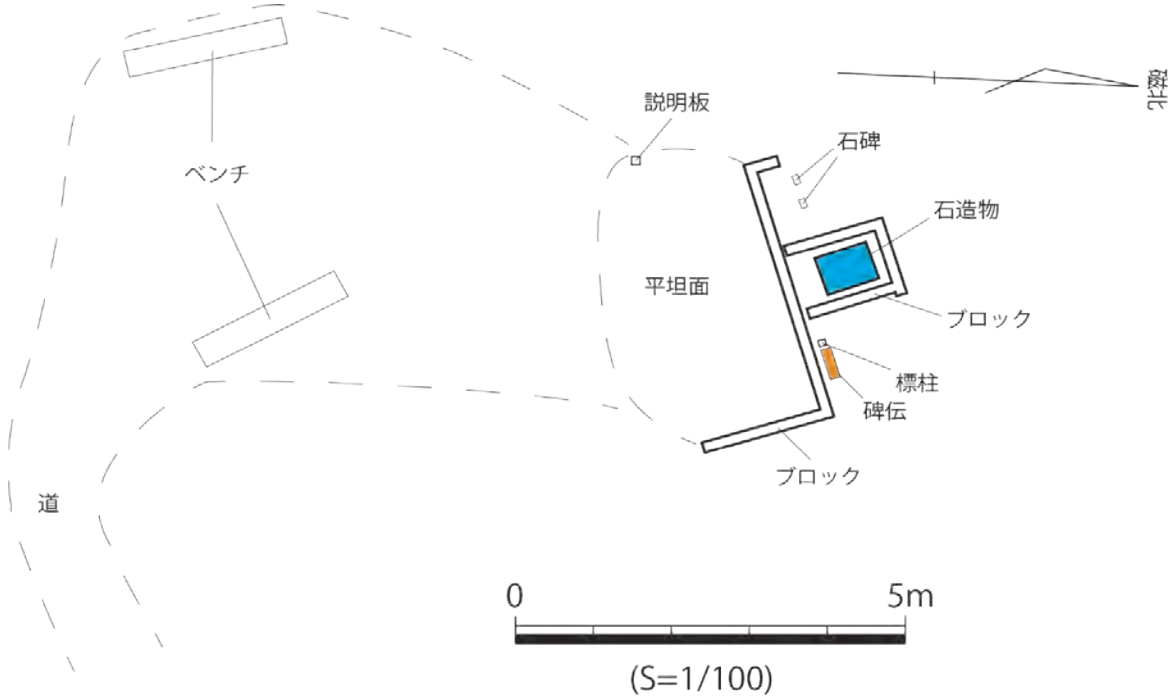
『紀伊續風土記』には「二之宿観音堂　村より北葛城峯にあり本尊十一面観音脇士八幡大菩薩大威徳明王なり三像共に役行者作といふ又此堂の西に行者堂一宇あり皆八幡社司本山氏別當なり堂の前方便品の經を藏めし秀倉あり山伏の行所にして毎春聖護院宮代僧誦經執行の所なり又五月には高野山先達も爰に來て護摩を執行す　行者堂の西より北に出る谷あり泉州佐瀬川までの直路にて谷川に至る道なり此谷の南に池あり二之宿の蓮池と云　古は二之宿の外に苗代之泊鳩之泊百足之泊行者還阿振寺といふ五箇所の行所ありしとそ今皆其地を知らす」と当時の様子が記されている。

『葛城雑記』に本堂十一面観音・役行者座禅石・善女が池・高祖堂、其側に塚あり。方便品第二之地」とある。

2．第二経塚　神福寺跡・方便品

所在地	大阪府泉南郡岬町多奈川谷川	地　形	中腹
緯度・経度	北緯34° 16’21”・東経135° 06’40”	標　高	149m
設置物	石碑（現代）・標柱（現代）・碑伝		
備　考			

経塚略測平面図

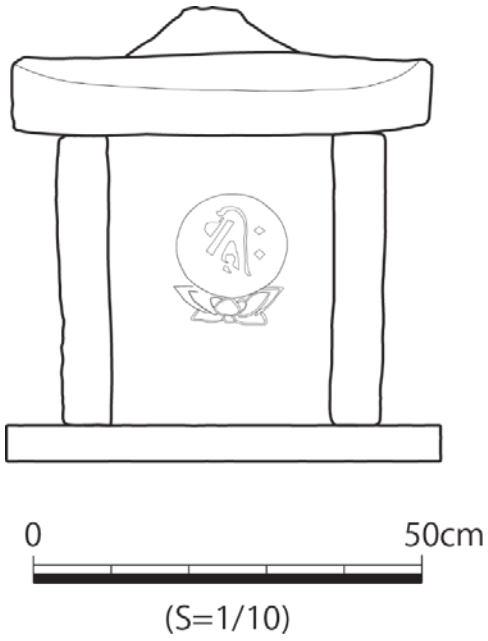


経塚写真（全景）

2．第二経塚　神福寺跡・方便品石造物

石　材	砂岩	形　式	不詳
法　量	高さ59cm・幅56cm・奥行59cm	年　代	不詳
銘　文	梵字		
備　考			

石造物実測図・写真



石造物正面（南から）

3-1. 第三経塚　大福山（たいふくさん）　譬喩品（ひゆほん）　（和歌山市）

(1) 位置と周辺の状況

第３譬喩品の経塚の所在地は説が分かれているが、比較的古い文献に記述がある候補地の１つが和歌山市北部の大福山山頂である。大福山（427 m）からは和歌山市や岬町、友ヶ島の眺望が開け、南山麓には、鳴滝山圓明寺（鳴滝不動尊）、大福山本恵寺（直川観音）、墓の谷行者堂などの行所がある。役行者が大峰山上ケ岳で金剛蔵王大権現を感得した際に出現した 15 体の金剛童子のうち、東南仏の福集童子が配祠されたため「大福山」と呼ばれているという。

(2) 現地の現況

山頂には東西約 25 m、南北６～ 10 mほどの平坦地があり、南東と西に道が続く。山頂の西側には南面する石造物等が並び、その前面は平坦地、背後には樹木が生い茂る。

西側の一群の西端には幅 74 ㎝、奥行き 50 ㎝、高さ 92 ㎝の寄棟造りの石祠が台上に祀られている。祠の中には手に蓮華、額に化仏をあしらった聖観音菩薩の彫られた石柱が安置されている。足元には古い石碑状のものが立ち、後ろに碑伝を入れる透明のケースが設置されている。

次に、石製で「妙経譬喩品第三之地、大福山千手寺葛城第七福集童子鎮座」、木製で「大福山千手寺跡」と記された柱が並立し、後ろに「日本遺産葛城修験行所　葛城之峯東南位結界　大福山の金剛童子」という表題の説明板が立っている。また、新しい祠が築かれて、辯財天像が祀られている。

東端には高さ１mほどの花崗岩製石碑があり「大福山」と大きく刻まれ、下半は埋没している。右面には「元禄九丙子（1696）三月二十八日建之、大田松軒日秀」、左面には「紀伊国名草郡直川村」、裏面には「葛城道大十二番行處提婆品窟」と刻まれている。

大福山山頂から北方の俎石山に向かう途中の尾根筋にも「第三経塚」と呼ばれる集石地がある。長さ１m以内の石が多数集まり、中央上方の二つの石の隙間に碑伝が置かれている。

(3) 歴史的背景

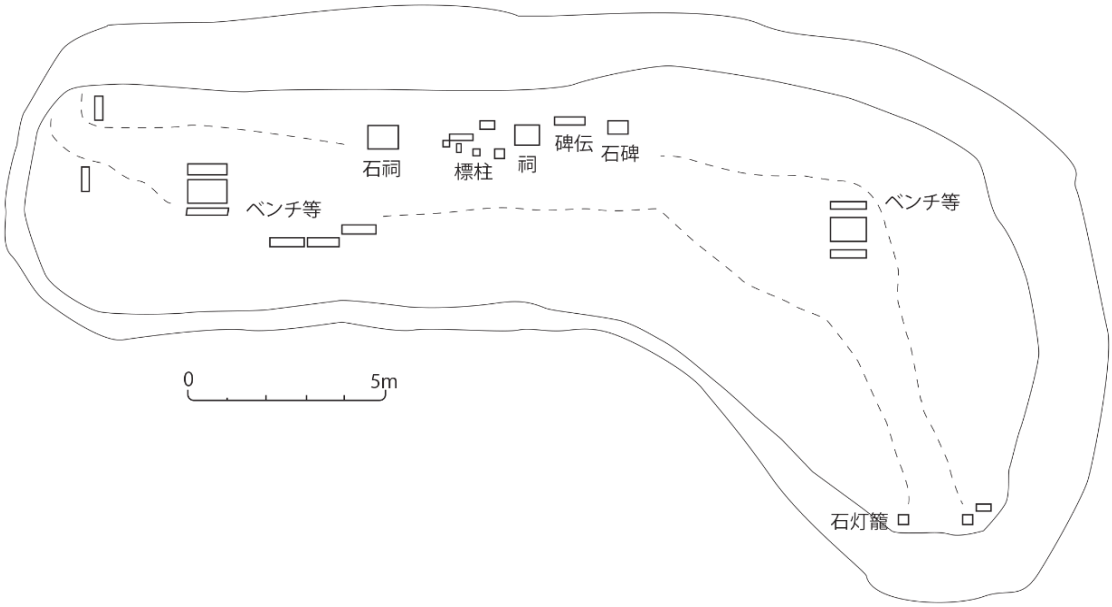
鎌倉時代初期の作といわれる『諸山縁起』には「譬喩品」、室町時代初期の作といわれる『葛城峯中記』には、「奥院、福寿童子、譬喩品第三、谷二千手寺」、加太向井家の『葛城峯中記』には「奥院、福寿童子、不動明王、譬喩品経塚」と記されている。

『紀伊続風土記』には「雲山か峰に次ての高峰なり、眺望大抵雨の森（雲山峰）に同じ。絶頂に松樹うつとして石の宝殿あり、仏像を石に彫たり是を弁財天といふ。山伏第十二番の行所なり。本恵寺の観音は古此地に有しといへり、地形を察するに堂など構ふべき地なし、観音の小堂ありしなるへし。今此所を奥の院といふ。傍に石碑あり正面大福山と刻めり、下は土中に埋れて見えす」とある。また、『紀伊国名所図会』では「大福山弁財天之窟、また提婆品の窟ともいふ。是すなはち本恵寺の旧地なり」とある。中世には経塚・寺院、近世には行所・寺院旧跡という記述となっているようである。

3－1. 第三経塚　大福山・譬喩品

所在地	和歌山市直川	地　形	山頂
緯度・経度	北緯34° 18′ 8″ ・東経135° 12′ 28″	標　高	427m
設置物	石造物祠２、標柱３、碑伝２か所、石灯篭２ ベンチ		
備　考			

経塚略測平面図

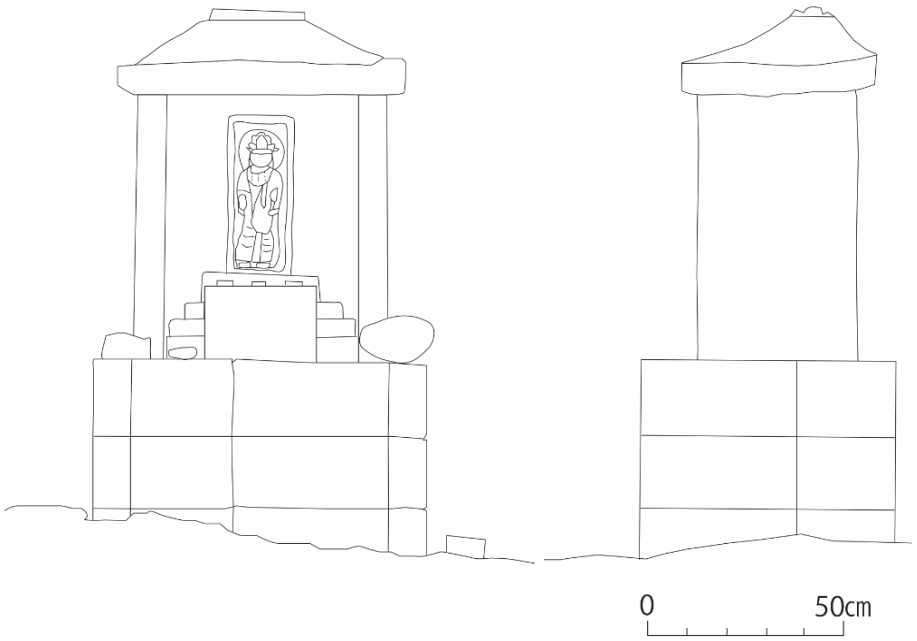


経塚写真（全景）

3-1. 第三経塚　大福山・譬喩品石造物

石　材	石造物・祠：花崗岩、屋根：凝灰岩	形　式	聖観音菩薩石板、寄棟造石祠
法　量	石造物幅16cm、高さ42cm	年　代	不詳
銘　文	なし。脇に立てられた標柱に大福山聖観音菩薩と記してある。		
備　考			

石造物実測図・写真



1　山頂の祠と標柱（南から）

2　大福山石柱

3　譬喩品石柱

4　弁財天の祠

5　大福山北方山中の伝「第３経塚」

3-2. 第三経塚　雲山峰（うんざんぽう）　譬喩品（ひゆほん）（和歌山市）

(1) 位置と周辺の状況

雲山峰は、葛城修験の第３譬喩品の経塚とされる場所の１つである。

300 ～ 400 ｍの山が連なる紀泉アルプスと通称されるエリアの最高峰で、標高は 489 ｍである。大福山から東に直線距離で約３㎞、尾根沿いを徒歩で歩くと約 90 分の場所に位置する。この山の東方にも稜線が続き、約３～４㎞で雄山峠越えの谷筋があり、熊野古道や現在の JR 阪和線が南北に通過している。眺望はあまり開けていないが、山頂付近にある集石遺構が経塚と考えられている。

(2) 現地の現況

山頂には「三等三角点点名天下森、山名雲山峰標高四八九.九ｍ」と墨書された木杭が立つ。

そのすぐ南側には東西６ｍ、南北５ｍほどの低い砂岩の石積みがまわり、北側中央と南東に集石部、南西部にも山頂に向かう通路の影響で少し崩れているが、積みなおされたとみられる集石部があるものとみられる。北側中央の砂岩の石積みは幅約２ｍ、奥行き約 2.5 ｍあり、花崗岩の石祠を載せた全体の高さは約 1.2 ｍある。石祠は屋根材１、奥壁材１、側壁材２枚×２面、底石材１から成り、幅 63 ㎝、奥行き 48 ㎝で、高さは 70 ㎝前後と推定される。屋根材は大棟が幅５㎝の突状、側面上半は二本の線刻で細部を表現し、下半は線刻が無く屋根の角度が変わることから入母屋造りの屋根とみられる。屋根と壁、底石の接地面は加工されているが、ややずれた状態で組まれている。

石祠の中央に置かれた板には「祈雨本尊、（梵字□）、八大龍王、勧請、鉄山」の文字があり、その両側に 13 枚以上の碑伝が重なる。また、お供えもののほか、錫杖頭、新しい子安観音ないし慈母観音像とみられる像が置かれている。

この経塚とみられる集石上の石祠の手前脇には、正面に「七大龍王、葛之峯　法華経譬喩品第三ノ地、金剛童子」、背面に「奉葛嶺聖抖擻　証厳坊、令和元年　法界同利益」と刻まれた花崗岩の石碑があり、その手前には扁平な石と茶碗が２つ置かれている。

(3) 歴史的背景

『紀伊続風土記』には「雨が森といふ（中略）近国渡海の船此嶺を望み方角を知るといへり最も絶景なり。頂上松樹一簇の中、八大龍王の社あり。境内百四十間、修験者の行所なり」とある。また、『紀伊名所図会』では、まず雲がかかり雨が降る「雨候」として、「雲山峰天明神」が祀られる場所としている。

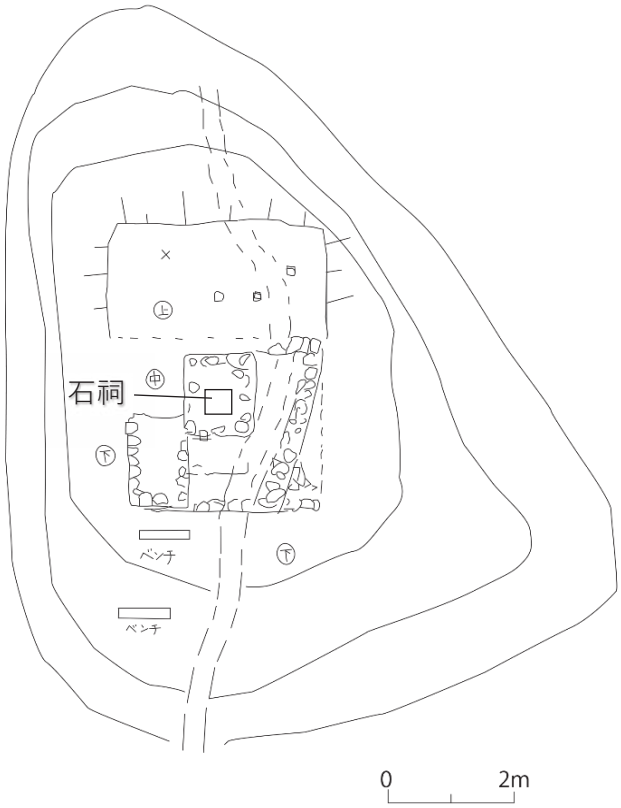
(4) その他

雲山峰山頂の石積み上の石祠のある場所は譬喩品の経塚とされるが、中世以前の記述では大福山（山頂か北側尾根筋）とするものが多くみられ、『葛嶺雑記』では「はかの谷といふ所に塚、妙譬喩品第三之地」と記述されている。

3－2. 第三経塚　雲山峰・譬喩品

所在地	和歌山市直川・府中・落合	地　形	山頂
緯度・経度	北緯34° 18′ 6″ ・東経135° 14′ 6″	標　高	489.m
設置物	石組、石祠、標柱、碑伝 ベンチ		
備　考			

経塚略測平面図

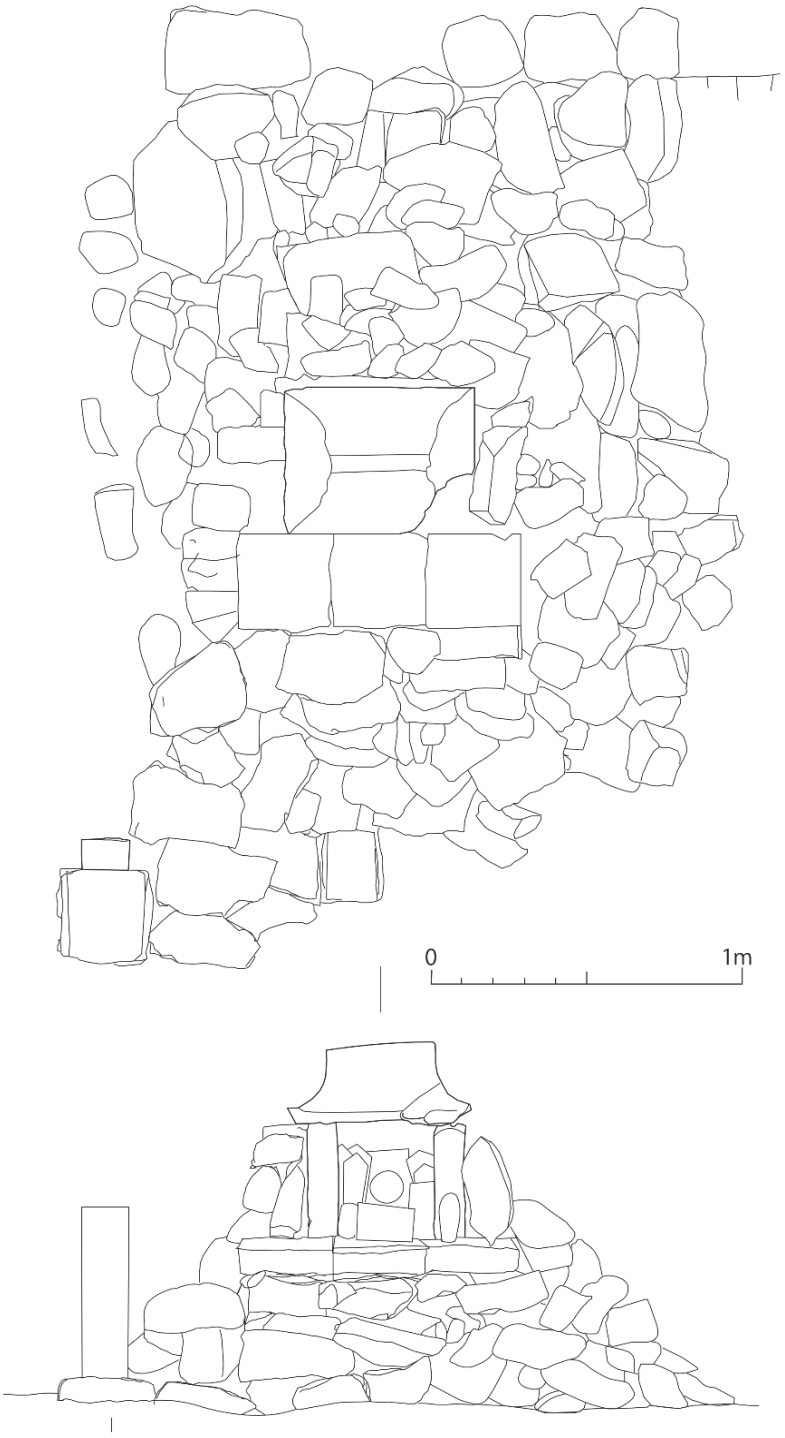


経塚写真（全景）

3－2. 第三経塚　雲山峰・譬喩品石造物

石　材	石祠：花崗岩、石組：砂岩	形　式	入母屋造石祠
法　量	幅2m、奥行2.5m、高さ1.2m	年　代	
銘　文	石祠内に納められた板に「祈雨本尊、ボ（不空検索観音の種子）、八大龍王、勧請、鉄山」とあり。		
備　考			

石造物略測平面・立面図



1　石造物（石組の台と祠：南から）

2　経塚周辺の石積み

3　石祠

4　石造物（石組の台と祠：東から）

5　石祠屋根

4．第四経塚　さくら地蔵　信解品（阪南市）

「さくら地蔵」とも呼ばれる。阪南市山中渓の南端、和歌山県との府県境付近に位置する。

嘉永 3（1850）年に記された『葛嶺雑記』には、「入江宿除蔵王　泉州日根郡山中村の地なり／かつらき御修行の節、先達中はじめ一同御改、事実明かなり／此所に老木の桜あるが故に、さくらぢざうといふ／〇宿着童子本地度一切世間苦悩　西方佛／泉紀国境入江宿に鎮座し給ふ／此尊号は、宿習の業を捨て、彼岸に着するの義、また／所名は、弘誓の船筏をうかめ、かのきしにとどめんとの意／〇山中の宿着すきて彼岸のいりえにそ見るさくら地蔵を／三十歩斗ゆきて梵字石あり　妙　信解品第四之地／くたつ日のくるる入江に灰さすは法のまことの道しるへかも」とある。この記述からすると、山中宿を過ぎた所にさくら地蔵があり、そこからさらに 30 歩（約 54 m）の所にある梵字石が第四経塚であるとする。明治期における廃仏毀釈や修験道の廃止令に伴う葛城修験の衰退もあり、一時は第四経塚の位置は忘れ去られていたようであるが、昭和 31（1956）年 2 月に山中渓の郷土史家である小川清氏により、第四経塚を示すであろう石碑が発見された（清水智俊編 1958、宮城泰年 1991）。和泉砂岩製の自然石で、正面の平坦面に「（梵）キリーク」と「文安五（1448 年）／八月吉日」の銘がある（以下、文安 5 年銘碑）。銘は正面のみである。正面はノミ痕が見られ、側面及び背面はほぼ未調整である。現況は基部がコンクリートで固められており、高さ 113 ㎝以上、最大幅 49 ㎝、最大厚 16 ㎝である。

文安 5 年銘碑は現在、府県境にある最後の仇討場として知られる境橋より北東へ 100 m、さらに阪和自動車道をくぐって 60 mほど行った地点にあり、経塚の中では比較的訪れやすい環境になっているが、これは阪和自動車道の開通に伴い移設されたものである。昭和 31 年発見時の位置は、「境橋より約一町半北に街道脇に農具小屋があり、此所より七八間（おそらく 7 ～ 8 間の意）登る」とある。つまり、かつては現在より北へ約 160 mの位置にあったことがわかる。また、この石碑の現在地から西へ約 150 m地点には「桜地蔵」や「桜地蔵川向」という字名がある点も興味深い。

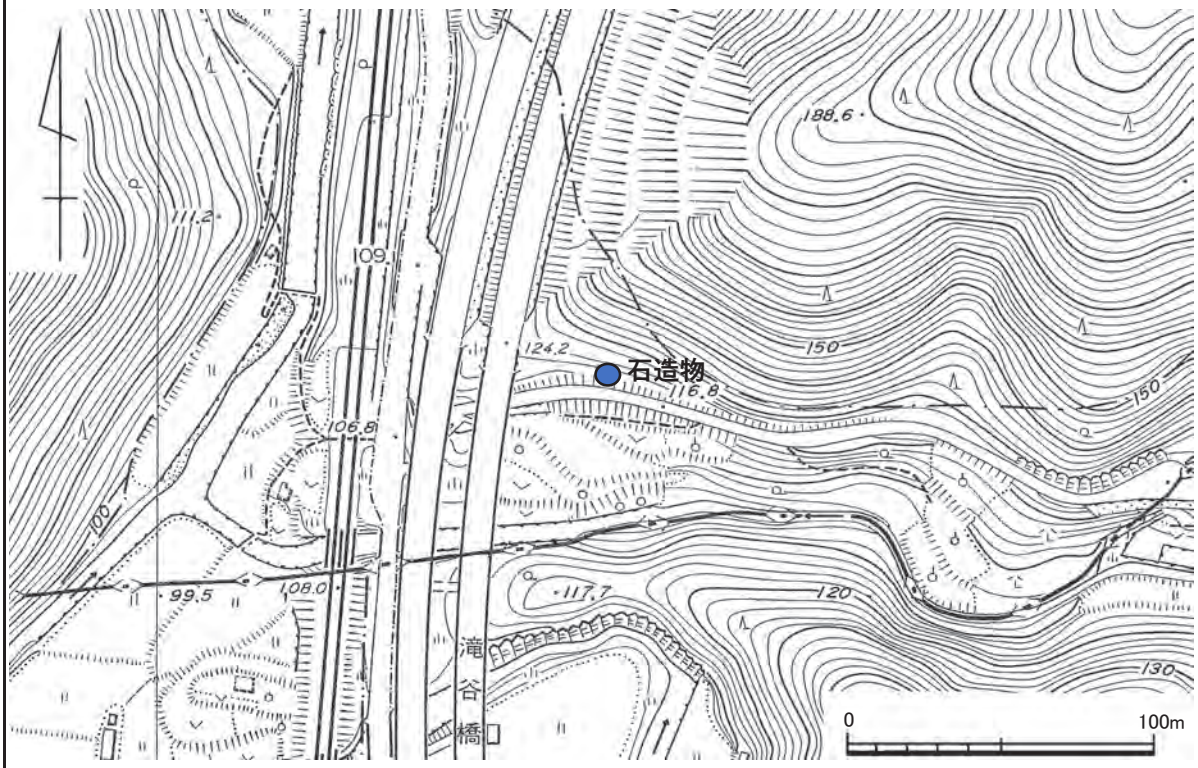
さて、第四経塚にはもう 1 つの候補がある（東條仁進監修 1989）。JR 阪和線山中渓駅より南へ約 150 m地点に位置する「奉納大乗妙典」碑（以下、永禄 12 年銘碑）で、現在は「山中関所址」碑と並んで建つ。永禄 12 年銘碑前には、文安 5 年銘碑と同じく葛城修験に関する碑伝が納められている。石碑は和泉砂岩製の板碑である。正面は丸囲みの「バク（梵字）／奉納大乗妙典」、中段右側から「永禄十二（1569）年／六十六部／供養所／九月吉日」、下段に「浄泉／敬白」、右側面には「六身眷属」、左側面には「七世父母」、背面には「法界普利□」と各面に銘がある。銘文からすると法華経納経を目的としているものの、六十六部回国納経に関する石碑であることがわかる。また、この石碑は、その型式により明治期の再建であろうと推測されていたが、令和 2 年 4 月の府道拡幅工事に伴い、地中より真二つに割れた永禄 12 年銘碑が出土した。出土石碑の割れ目は古いことから、何らかの理由で割れた原作を地中に埋め、全く同じ銘文を彫った石碑を再建したのであろう。

文安 5 年銘碑と、永禄 12 年銘碑の 2 基については、複数の文献がこれについて紹介し、所見が述べられている。前述のとおり『葛嶺雑記』の記述や、石碑の立地環境の経緯、「桜地蔵」という字名等から総合的に勘案すると、文安 5 年銘碑が原位置は保っていないにせよ、葛城修験第四経塚信解品の位置を示す石碑とみなすことは行き過ぎた考察ではないであろう。

4．第四経塚　さくら地蔵・信解品

所在地	大阪府阪南市山中渓	地　形	山裾（平坦地）
緯度・経度	北緯34° 20′ 13″ ・東経135° 30′ 12″	標　高	125m
設置物	石造物「(梵)文安五八月吉日」(1448年) 石碑（文安5年銘）・標柱（現代）・碑伝ほか		
備　考	現在地は阪和道移設に伴う移転地。		

経塚略測平面図



経塚写真（全景）

4．第四経塚　さくら地蔵・信解品石造物

石　材	和泉砂岩	形　式	自然石
法　量	高さ113cm・幅49cm・奥行16cm	年　代	文安５（1448）年
銘　文	正面「(梵)キリーク」「文安五」「八月吉日」		
備　考			

石造物実測図・写真

1　石造物正面（南から）

2　石造物へ続く階段（南から）

3　石造物（背面から）

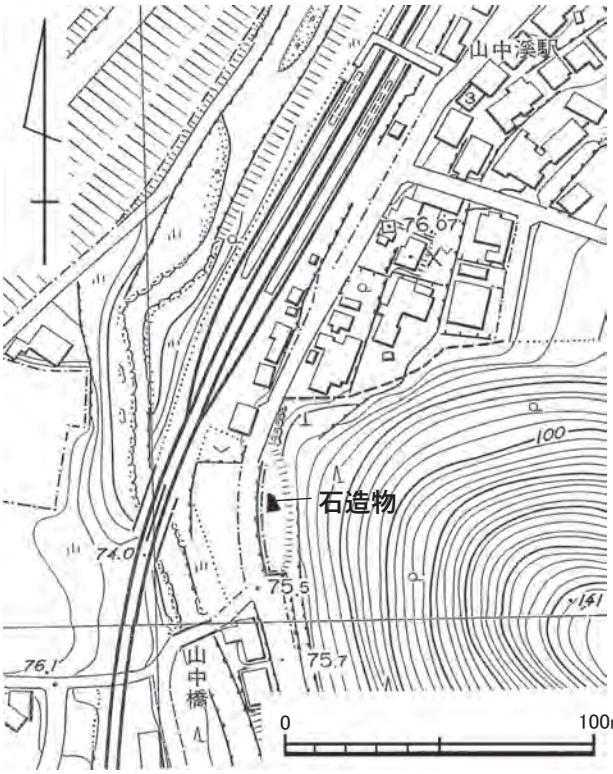
4　石造物（右側面から）

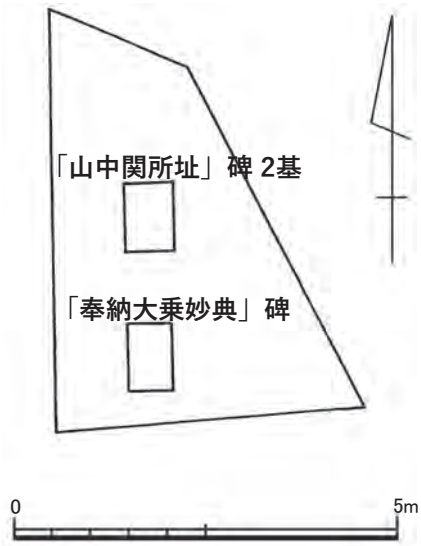
5　石造物（左側面から）

4．第四経塚　さくら地蔵・信解品（参考）

所在地	大阪府阪南市山中渓	地　形	道路沿い
緯度・経度	北緯34° 19′ 28″ ・東経135° 16′ 10″	標　高	75m
設置物	石造物「(梵)奉納大乗妙典」(1569年) 石碑（山中関所址・奉納大乗妙典）（年代不詳）、石碑（山中関所址）（現代）ほか		
備　考	複数回の移転により原位置不明。令和2年に付近の法面から石碑の原作が出土。		

経塚略測平面図





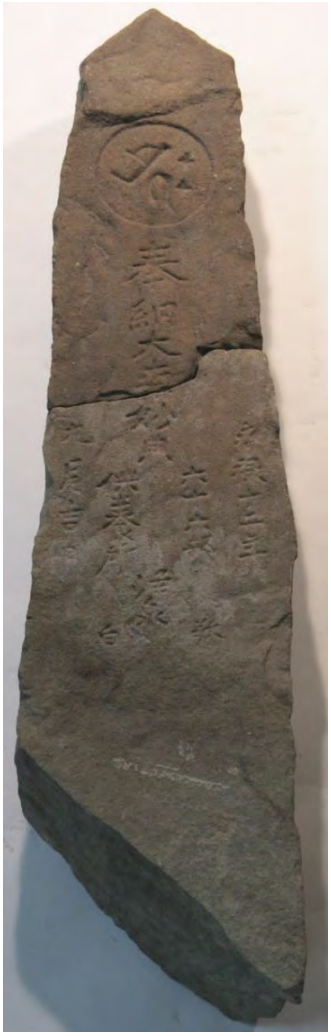
経塚（参考）写真（全景）

4．第四経塚　さくら地蔵・信解品石造物（参考）

石　材	和泉砂岩	形　式	自然石
法　量	高さ104cm・幅25cm・奥行19cm	年　代	永禄12（1569）年
銘　文	正面「(梵)バク」「奉納大乗妙典」「永禄十二年」「六十六部」「供養所」「九月吉日」「浄泉」「敬白」、右側面「六身眷属」、左側面「七世父母」、背面「法界普利□」		
備　考	設置場所及び東側法面の整備工事で「奉納大乗妙典」碑の原作が出土。		

石造物実測図・写真

（出土石造物）



（再建された石造物）

５．第五経塚　倉谷山（くらたにやま）　薬草喩品（やくそうゆほん）　（紀の川市）

(1) 位置と周辺の状況

根來寺から北東方向へ和泉山脈を登ると菩提峠を経て土仏峠に至る。土仏峠は岩出市と紀の川市の境に位置し、峠から東へ尾根を進むと倉谷山に至る。倉谷山山頂から南西側 480 mに平坦面が形成されており、第５経塚とされる石造物と灯籠が設置されている。経塚から北東方向には、現在、廃村となった今畑村がある。池田荘に含まれた今畑村は、中世には「芋畑」とも称され、江戸時代には山崎荘に属す。村の産土神は天野四社明神社であったが、現在では白髭神社の社が残されているのみである。白髭神社を祀った佐々木家は、史料によると、南北朝時代に軍功をあげ近江国（現滋賀県）から紀伊国（現和歌山県）へ移り住んだようであるが、本来は、葛城山中に居住した山伏の集団であったといわれている。宝永６年（1709）の「葛城先達峯中勤式廻行記」には、神社は葛城修験の行場の１つで護摩を焚いていたとある。神社と同じ境内地には、かつて多聞寺が建っており、江戸時代の「葛嶺雑記」に行場の１つとして掲載されている。現在は礎石のみが残り、仏像を祀る小さな堂が建てられている。村から 300 m程度南には金剛童子の滝（龍王の滝）、その滝の上に役行者の家地があり、暫く居住していたと伝えられている。

(2) 現地の現況

経塚は、東西約 13 m、南北約 9.5 mを測る楕円形の平坦面中央付近に設置されている。砂岩の石造物と灯籠の他、現代の標柱や碑伝が配置されており、周囲には樹木が生い茂る。石造物の西・東・南面は平滑に加工され、１段窪む南面には不動明王の梵字が刻まれている。上部には笠石がのる。足元の周囲には直方体の石が配され、北側の石の上面中央にも不動明王の梵字が刻まれている。石造物の南東約 1.5 mには砂岩の灯籠の受と火袋から上部が残る。石造物の西側には、現代に設置された七大龍王の花崗岩の石柱があり、その南西側には第５経塚を示す標柱がある。石造物の東側に近接して、現代の陶製の仏像が置かれ、少し離れて複数碑伝が置かれている。

(3) 歴史的背景

第５経塚については、鎌倉時代初期の『諸山縁起』に「光明寺薬草喩品第五、石曳瀧寺、豊福寺菩提ノ井、行者の閼伽井なり」とある。光明寺は今の円（炎）明寺か光明堂、あるいは六尾留とされる。室町時代初期に書かれたとされる『葛城峯中記』には「炎明寺、薬草喩品第五」として根來寺内にあると記されている。一方、江戸時代前期に記されたと考えられる向井家の『葛城嶺中記』には「中畑村入口より十丁斗、右の谷へ行く、経塚」とある。また、幕末に記された『葛嶺雑記』には、今畑多聞寺の項で「このさとよりくらたに山の経塚遥拝　妙　薬草喩品第五之地」と記されていることから、天正の兵火以後には倉谷山に第５経塚が退転したことが窺える。

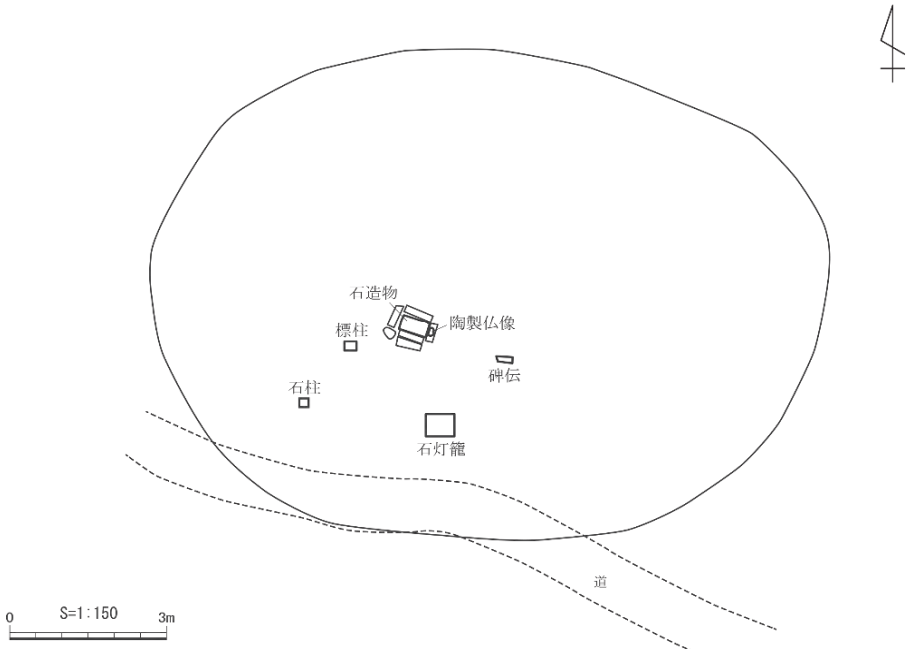
(4) その他

同経塚は別名「稚児ヶ（の）墓」といわれ、葛城修験とは異なる伝承が伝えられている。『打田町の民話と伝説』によると、天正 13 年（1585）に豊臣秀吉が根來寺を滅ぼした時、ある武将の母子と家来たちが根来から逃げのび、母子はこの地で命を落とし、慰霊のために石造物が建てた。そのことから、この地が「稚児ヶ墓」と呼ばれるようになったとある。

5．第五経塚　倉谷山・薬草喩品

所在地	和歌山県紀の川市西山田	地　形	尾根頂上（平坦地）
緯度・経度	北緯34° 30′ 88″ ・東経135° 34′ 27″	標　高	465m
設置物	石造物「不動明王」（年代不詳） 石灯籠（年代不詳）、石柱・標柱・陶製仏像・碑伝（現代）		
備　考			

経塚略測平面図



経塚写真（全景）

5．第五経塚　倉谷山・薬草喩品石造物

石　材	砂岩	形　式	笠付角柱形石塔
法　量	高さ64cm・幅29cm・奥行19cm	年　代	不詳
銘　文	正面「梵字（カンマン）」		
備　考			

石造物実測図・写真

1　経塚全景（南西から）

2　石造物（背後から）

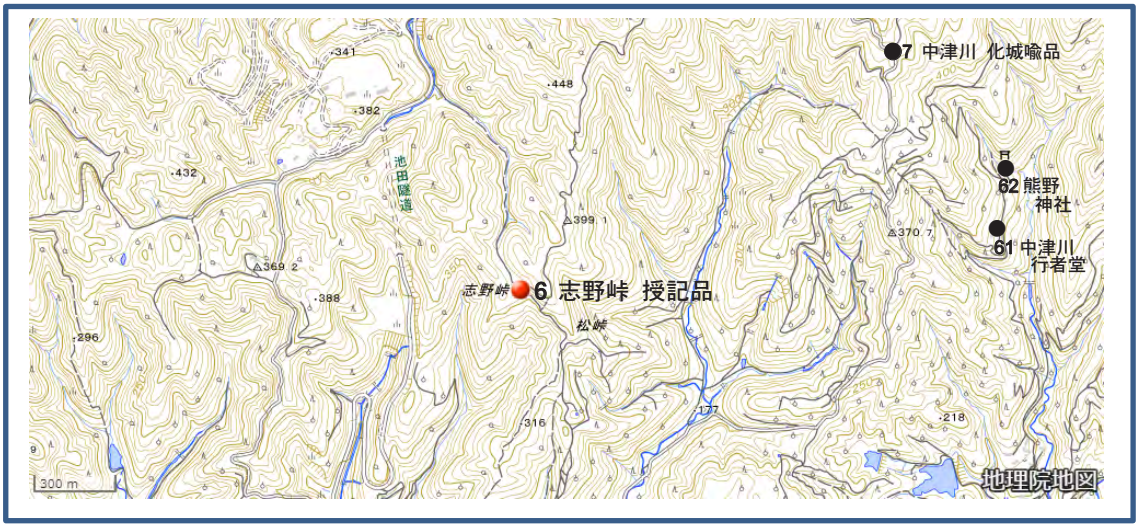
3　石造物西面

4　石造物北側に配された石上面

5　石灯籠（南西から）

５．第５経塚　倉谷山 薬草喩品

６．第６経塚　志野峠 授記品



７．第７経塚中津川 化城喩品

6．第六経塚　志野峠（しのとうげ）　授記品（じゅきほん）　（紀の川市）

(1) 位置と周辺の状況（参考地図 46 頁）

紀の川市から犬鳴山への県道を上り池田トンネルを過ぎると神通に至る。神通から山道を南へ下ると粉河寺へたどり着くが、途中、第６経塚のある志野峠がある。志野峠は、南は粉河寺、西は根來寺、北は犬鳴山七宝瀧寺、東は和泉葛城山と葛城修験にとって重要な場所に位置する。峠は三叉路になっており、東への道を進むと中津川の第７経塚や行者堂・熊野神社へ至る。三叉路の南東側は、北西側から続く尾根が南の山道により切られ丘陵状の形状をなし、その尾根筋から少し下った南側に経塚が設置されている。

第５経塚から東側約４㎞に位置する第６経塚への道筋には室町時代以降、神社や滝などいくつもの行場が設けられている。その一つに神通の万蔵谷に所在する「万蔵地蔵」と呼ばれる石仏を安置したコンクリート造の小堂がある。室町時代初期の内容を記す『葛城峯中記』には「満蔵　不動堂･弁才天･石地蔵有リ」とある。江戸時代後期の地誌『紀伊続風土記』には山伏の行所であると記載され、現在の小堂の対岸が行場であったとされ、石仏も元々は対岸に安置されていたと伝えられている。砂岩の一材で造られた石造地蔵菩薩坐像は、像高 79.2 ㎝、台座と舟形光背を含めると高さ 134.3 ㎝を測る。製作は南北朝時代の 14 世紀に遡るものと見られ、紀の川市最古の石仏となる可能性がある。像の背面には、不動明王を表す梵字の「カンマン」の一字が刻まれている。

(2) 現地の現況

三叉路を少し東へ進むと、経塚へと続く南側への細い道がある。経塚とされ拝まれているのは、砂岩の自然石で西を正面として釈迦如来を示す「バク」の梵字と「経塚」の文字が刻まれる。その他、年代等を示す文字は刻まれていない。石造物の背面となる東側には、直径 0.9 ｍ、高さ 0.5 ｍの円形の土盛がある。裾部には石が配されているが整然としておらず、裾部以外に石は配されない。経塚に関連する可能性があるが、現在は樹木が生え、過去の記録より規模が縮小し、風雨による浸食が進んでいる。石造物の南側近接地には現代の碑伝が置かれる。北東側３ｍの位置には、石造地蔵菩薩と現代の陶製の仏像が北向きに設置されて、その周囲に石が配されている。

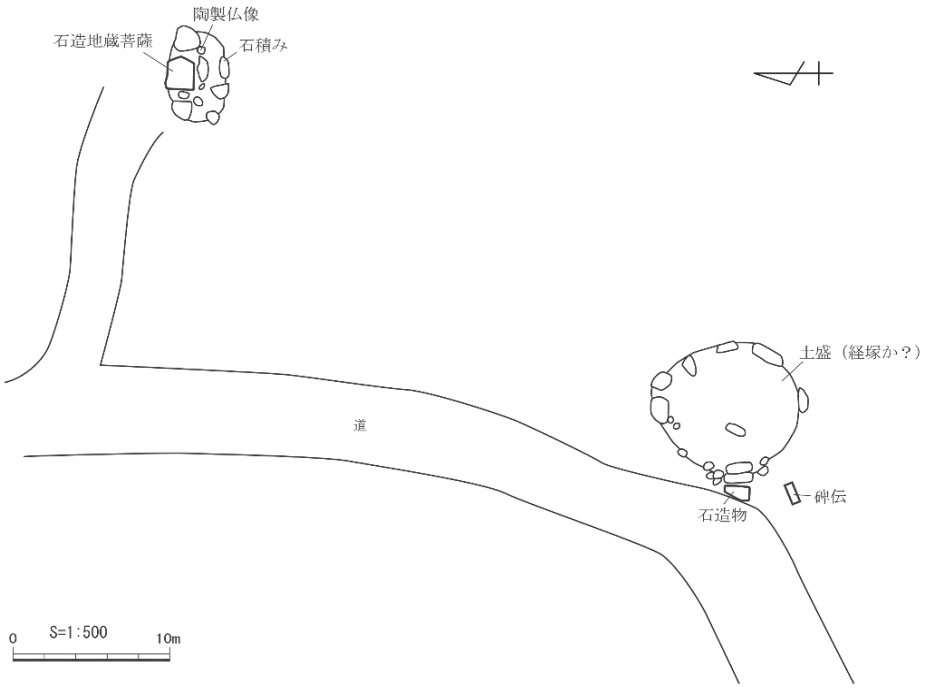
(3) 歴史的背景

第６経塚（授記品）については、鎌倉時代初期の『諸山縁起』には「西持経者〈授記品第六〉」と記されている。室町時代初期の『葛城峯中記』にも神通畑の項で「西二持経者　授記品第六　里中有　行者閼伽井石」と記されている。宝永６年（1709）の『葛城先達峯中勤式廻行記』には神通畑にアカイがあるとする。また、同時期の『葛城峯中記』（向井家）には「神通畑二閼伽井　一経塚　一業秤木　一咒願松」と神通畑に経塚の存在が記され、江戸時代末期に記された『葛嶺雑記』の神通畑の項には「（前略）古記に西持経の塚東持経猪垣のたわとみえける、されは志野峠の塚あり。妙　受記品第六之地」と志野峠の塚が第６経塚であると言及している。こうしてみると、第６経塚については、共通して神通畑に所在している。その他、宮家準氏の『修験道辞典』には、葛城二十八経塚の中で発掘調査されたものは、志野峠経塚と経塚山経塚ぐらいであると書かれ、志野峠の塚からは人の骨などが出土しており、経塚よりは行人塚である可能性もあるとしている。一方、志野峠から南へ 200 ｍ程下った地点の松峠には、昭和 36 年に設置された石造物がある。西側を正面とし、「梵字（バク）　妙法蓮華経　授記品第六松峠持経塚」と刻まれ、一時期には第六経塚とされていた。中野榮治氏は『葛城の峰と修験道』の中で、松峠についても新しく設けられたとも考えにくい、とも述べているが、松峠に経塚を新しく建てた可能性も否定していない。

6．第六経塚　志野峠・授記品

所在地	和歌山県紀の川市神通	地　形	尾根上
緯度・経度	北緯34° 30′ 70″ ・東経135° 38′ 32″	標　高	373m
設置物	石造物「経塚」（年代不詳） 石碑（現代）・標柱（現代）・碑伝		
備　考			

経塚略測平面図



経塚写真（全景）

6．第六経塚　志野峠・授記品石造物

石　材	砂岩	形　式	自然石
法　量	高さ73cm・幅56cm・奥行23cm	年　代	不詳
銘　文	正面「梵字（バク）／経塚」		
備　考			

石造物実測図・写真

1　経石正面（西から）

2　　経石と土盛（北西から）

3　経石背面（東から）

4　石造地蔵菩薩（西から）

5　石造地蔵菩薩（北から）

7．第七経塚　中津川　化城喩品（紀の川市）

(1) 位置と周辺の状況（参考地図 46 頁）

紀の川市中津川の小字名「経塚」に所在する第７経塚は、標高 474 m程度の和泉山脈山腹に位置する。中津川行者堂とは直線距離で約 570 mの位置にあり、かつては行者堂の西側にある細い山道が第７経塚とを結ぶルートであったが、現在は定かではない。志野峠の第６経塚から東側へ向かう山道があり、かつては第７経塚や中津川行者堂などへ向かう修験道であった可能性があるが、通行は難しい。

第７経塚のある場所は「アラレの宿」と呼ばれ、三叉路の中央にある南北に細長い楕円形の土地に経塚とされる石造物が設置されている。三叉路を南へ下ると桜池、粉河寺方面へ続き、途中、中津川の熊野神社や行者堂へと至る分岐点がある。三叉路から北西方向への道は、かつては第６経塚への修験道が続いていたが、現在は旧粉河町のごみ焼却場へたどり着く。経塚から東側へは平坦な尾根が続き、和泉葛城山の第９経塚へ至る。その途中、犬鳴山への分岐点に「秤木ノ宿、金剛童子」がある。砂岩の石祠が設置され、金剛夜叉を表す「ウン」の梵字が刻まれた石が祀られている。秤木ノ宿は、江戸時代後期に書かれた『紀伊続風土記』の中津河村の項に「村の丑の方二十町許山上にあり、嶺頭松樹茂れる中に石の秀倉あり、これを金剛童子といふ」と記されている。橋本市郷土資料館報第 36 号の『葛城修験二十八宿の変遷』では、『葛城峯中記』（向井家）には神通畑から犬鳴山に至る途中に「金剛童子、業秤木」とあり、第７経塚のことである可能性を記している。

(2) 現地の現況

経塚とされる石造物は、南北約 20 m、東西 10 mの楕円形の土地の中央東側に祀られている。砂岩を直方体に近い形に加工し、正面となる南面には釈迦如来を示す「バク」の梵字と、「□□□□（風雨順時カ）／大乗妙典一石□字　祈□／五穀成就」の文字が刻まれている。「大乗妙典」は法華経をさす。西面には「寛延四辛未夭四月」（1751）の年号が刻まれている。風化によって南面は部分的に剥離し、下端が欠失し、コンクリート製の土台に建てられている。経塚東側には、最近建てられた花崗岩の石柱と金属製の標柱が建てられ、近接して碑伝が置かれる。かつてこの場所の目印となっていた１本松は枯死しているが、周辺には現在でも松の木が多く生えている。

(3) 歴史的背景

第７経塚について、鎌倉時代の『諸山縁起』では関柱の宿（化城喩品、妙法経、釈迦の水）とある。室町時代の『葛城嶺中記』には粉河寺から先の順路部分で「関桂宿　本坂実殿三あり。皆梵字（胎蔵界大日如来）なり、二丁ばかり南本社。愛染　寺地あり。護摩堂の跡　南の麓に閼伽井あり。化城喩品第七釈迦水あり。中津川秘所参あり。（後略）」と記され、粉河寺から中津川秘所（行者堂）までの間に第七経塚があることがわかる。一方、寛永３（1850）に出版された『葛嶺雑記』には中津川高祖堂の項で「化城喩品第七之地」とある。他の経塚同様、第７経塚についても、その場所に変遷がみられ、江戸時代にいたるまでは､粉河寺から中津川行者堂へ至るまでの間の関柱（桂）宿に経塚がある。現在の場所が経塚となったのは、遅くとも石造物に刻まれた寛延４年（1751）であり、中津川を中心とする聖護院門跡による葛城修験を確立した智航上人が整備する以前から、連綿と信仰された葛城修験を示す重要な遺跡である。

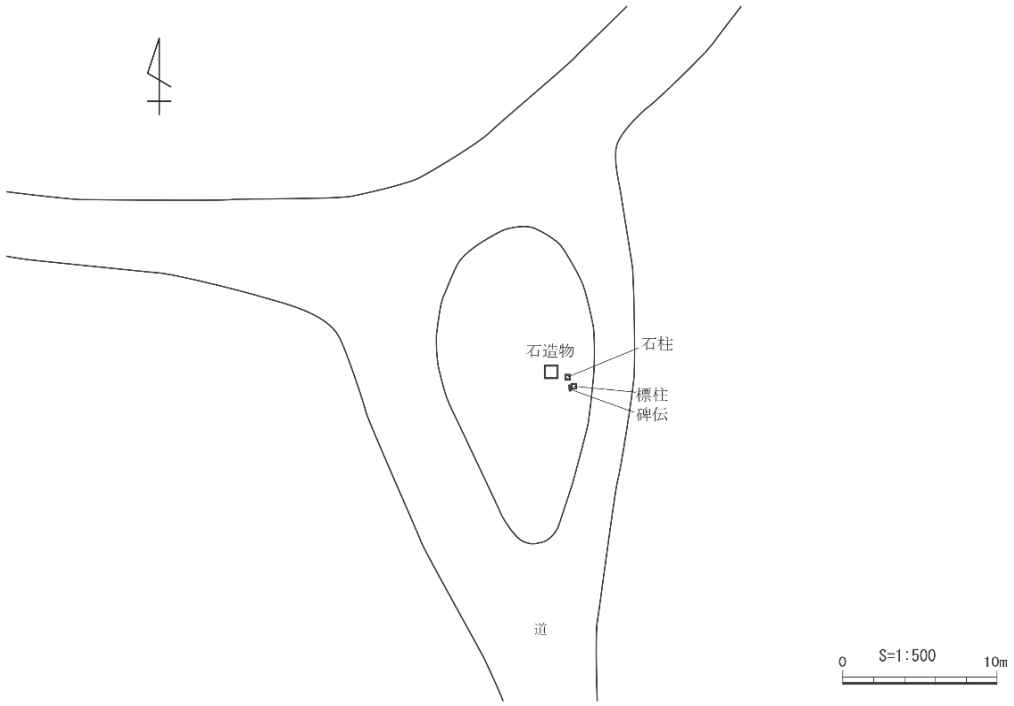
(4) その他

粉河寺から中津川周辺には多くの行場があり、『紀伊国名所図会』には中津川村の南に「桧木宿」が描かれて、今でも現代の石碑が建てられている。

7．第七経塚　中津川・化城喩品

所在地	和歌山県紀の川市中津川	地　形	尾根上（平坦地）
緯度・経度	北緯34° 31′ 40″ ・東経135° 39′ 83″	標　高	474m
設置物	石造物「大乗妙典一石□字」（寛延四年（1751）） 石碑（現代）・標柱（現代）・碑伝		
備　考			

経塚略測平面図



経塚写真（全景）

7．第七経塚　中津川・化城喩品石造物

石　材	砂岩	形　式	自然石
法　量	高さ73cm・幅56cm・奥行23cm	年　代	寛延四年（1751）
銘　文	正面「梵字（バン）／大乗妙典一石□字　祈□／〔　〕／五穀成就」 側面「寛延四辛未天四月」		
備　考			

石造物実測図・写真

1　石造物正面（南から）

2　経塚全景（南から）

3　経塚全景（北から）

4　石造物西側面（西から）

5　石造物西側面（西から）

8．第八経塚　犬鳴山七宝瀧寺鈴杵ヶ嶽　五百弟子受記品（泉佐野市）

(1) 犬鳴山七宝瀧寺

和泉山脈の燈明ヶ岳北嶺を流れる犬鳴川の渓谷に沿って伽藍の広がる古刹、泉佐野市大木にある犬鳴山七宝瀧寺は、葛城修験の行場として知られる山岳寺院である。斉明７年（661）に役行者によって開山されたが、大和大峰山より６年早く開山されたことから、元山上とも呼ばれる。役行者作と伝わる倶利伽羅大龍不動明王を本尊とし、江戸時代には当山派に属する修験道場であった。犬鳴山というのは、七宝瀧寺の山号であって地名ではないが、一般に「犬鳴山」といえば七宝瀧寺が所在する燈明ヶ岳と高城山全体を示す愛称として親しまれており、大阪府の名勝に指定されている。

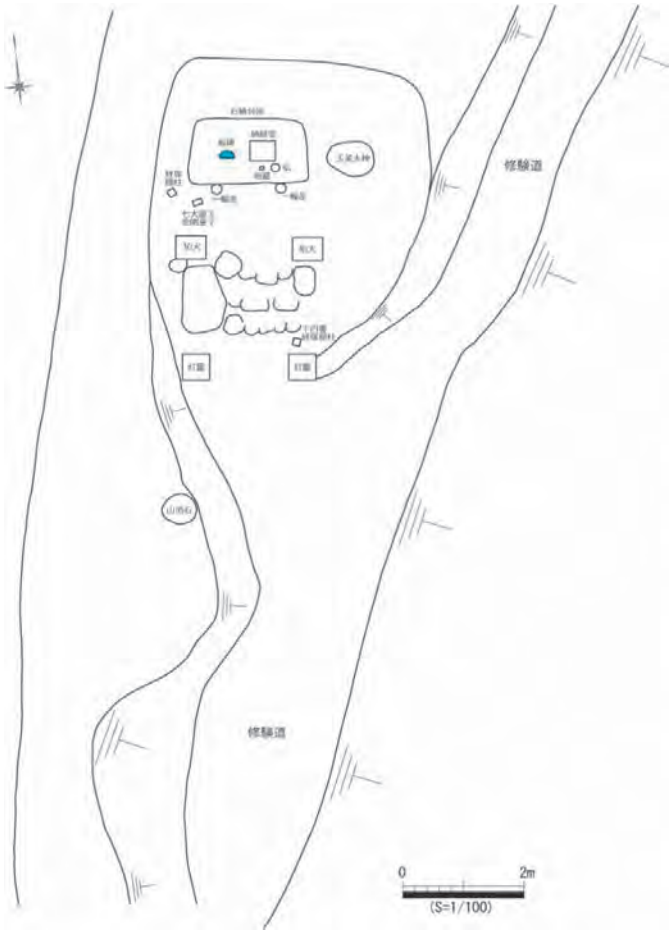
(2) 経塚周辺の状況

嘉永３年（1850）に記された『葛嶺雑記』には、「泉州日根郡大木谷にあり（中略）かつらきみねおくのいん也。本堂倶利加羅・右脇神変大士・左脇弘法大師・熊野社・屏風岩不動・十一面堂・弁天社・燈明ヶ岳の不動、口の滝高祖、八大竜王祠。惣じて滝七つまた行場あり。滝宮明神、大木村に鎮座す。神名帳に火走神社、右明神は犬鳴山、口の滝より出現し給ふが故に此名あり、また此山を犬なきとは寛平己後のことなりとかや。右記に鈴杵かだけとみえたり経塚もあり。妙五百弟子受記品第八之地。」と記されている。経塚のある鈴杵ヶ嶽は現在経塚権現山と呼ばれており、七宝瀧寺境内の身代不動前広場より登山道に入る。急坂を 40 分ほど登ったところに石壇があり、壇上に「一乗　長禄三（1459）巳卯年　五百弟子受記品」と刻まれた板碑と、「嘉永二酉（1849）」の刻がある石祠が並んでいる。石壇の背後は崖面となっており、樹木の間からは国の重要文化的景観に選定されている大木地区を見ることができる。また、経塚のすぐ下には犬鳴山奥之院と称されている行場があり、護摩壇が設けられている。この護摩場を含む経塚周辺一帯は犬鳴山の裏行場と呼ばれ、現在も修験者の修行が行われている。

8．第八経塚　犬鳴山七宝瀧寺鈴杵ヶ嶽　五百弟子受記品

所在地	大阪府泉佐野市大木	地　形	尾根
緯度・経度	北緯34° 20′ 07″ 288　東経135° 23′ 10″ 371	標　高	558m
設置物	板碑(経塚)、納経堂、狛犬、灯籠、石積台座		
備　考			

経塚略測平面図



経塚写真（全景）

8．第八経塚　犬鳴山七宝瀧寺鈴杵ヶ嶽　五百弟子受記品石造物

石　材	大阪府泉佐野市大木	形　式	板碑(山形・二条線あり)
法　量	高さ90cm・幅23cm・奥行20cm	年　代	長禄三年（1459）
銘　文	一乗　長禄三己卯年　五百弟子受記品第八　妙典　十月十五日		
備　考			

石造物実測図・写真

一条　長禄三己卯年(1459)
五百弟子受記品第八
妙典　十月十五日

８．第八経塚　犬鳴山七宝瀧寺鈴杵ヶ嶽　五百弟子受記品

1　経塚正面(近景)

2　経塚遠景

3　七代龍王金剛童子、経塚標柱

4　板碑　納経堂(東側より)

９．第九経塚　嶺の龍王　授学無学人記品（紀の川市）

(1) 位置と周辺の状況（参考地図 63 頁）

東西に連なる和泉山脈は大阪府と和歌山県を隔て、尾根筋は修験道とされ、周辺には多くの行場が存在している。第７経塚「アラレの宿」から東側へ尾根伝いに進むと犬鳴山への分岐点・秤木ノ宿へ至り、さらに東へ進むと標高 858 ｍの和泉葛城山山頂へたどり着く。南側には紀の川平野、北側には和泉平野が広がることから、水源となる和泉山脈を代表する葛城山は古くから雨乞いの山として信仰を集めている。山頂の大阪府側には高鬮神社（葛城神社）があり、周辺には国の天然記念物に指定されているブナの原生林が広がる。葛城一言主命と八大龍王を祀る高鬮神社は北を正面とし、麓から参拝の為の参詣道が続いている。紀の川市となる南側には第９経塚として金剛童子を祀る石製の祠が建てられ、南方には紀州富士といわれる龍門山が望まれる。第９経塚は南側を正面とし、尾根伝いの道から石階段が繋がる。

(2) 現地の現況

第９経塚は、金剛童子の砂岩の板石を納めた花崗岩製の祠を中心に、多くのものが現代に設置あるいは修理されている。祠の表面には石製の一枚扉が付き、上部には笠と方形の部材・宝珠がのる。祠は自然石を並べた石組の上に置かれる。祠の左側には龍王神社と刻まれた石柱がたち、それらを花崗岩製の玉垣が囲む。正面となる玉垣の南側には現代の石製灯籠１対と八大龍王の額がついた石製の鳥居が設置されている。その他、七大龍王の石碑や「法華経授記無学人記品第九経塚」の白いポールが建てられている。玉垣の東側には、石造地蔵菩薩が祀られている。祠については、表面の扉を開けると、高さ 30 ㎝、幅 20 ㎝程度の石碑が入っており、正面に「カン（金剛童子）」、泉州神尾寺、天正□□□月」と刻まれているとされる。神尾寺とは、現在の神於寺と推測され、683 年に役行者によって創建されたとされる。

(3) 歴史的背景

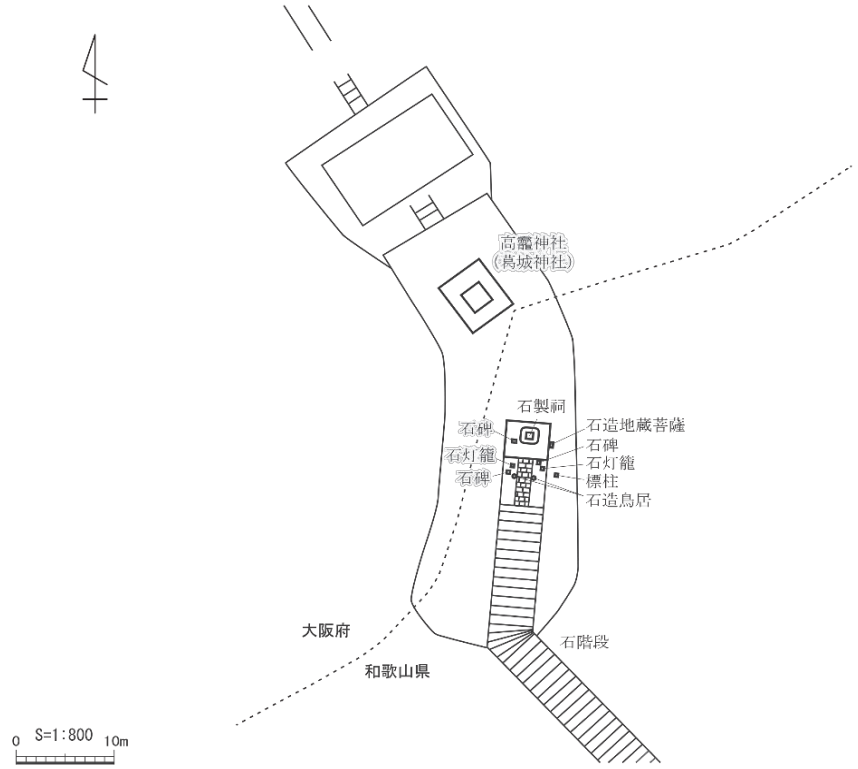
鎌倉時代初期の『諸山縁起』には「竜宿、竜多輪」〈人記品第九。一千二百三十七字、行基堂所多輪四アリ、閼伽井、出世法文出世宝、口伝アリ〉と記されている。室町時代初期の『葛城峯中記』にも「龍宿　人記品第九」と同様の記載があるが、室町時代末期に記された『葛城修行灌頂式』では第７経塚が「龍宿」、第９経塚が「七越」と大きく異なる。一方、江戸時代中頃の『葛城峯中記』（向井家）には「金剛童子　泉州八大竜王の下是ゟ牛瀧迄廿町」とは記されているが第９経塚についての具体的な記載はない。江戸時代末期の『葛嶺雑記』には「嶺の龍王」の項に「同国郡同領分塔原村の嶺に有、五ケ村の氏神といふ　本社八大龍王晴雨にかかはらず此高ねに氏子の輩日供を運び奉る。」とある。五ケ村とは塔原・相川・河合・蕎原・木積で、いずれも大阪府に所在する。また「金剛童子祠」の項には「紀州那賀郡にて龍王の脇にあり　此祠を　妙　授記無学人記品第九之地に建し経つかといへり。」としている。これらの各時代の葛城修験の根本史料をみると、一部を除き第９経塚について龍宿と併記していることが多く、現在につながる『葛嶺雑記』が最も具体的に嶺の龍王と第９経塚である金剛童子の祠を別々に記している。しかし、現在では、金剛童子の祠の周囲に龍王神社や七大龍王の石碑、八大龍王の鳥居が建てられ、また、嶺の龍王は正式名称である高鬮神社と呼ばれることで混同が生じつつある。

その他、『紀伊続風土記』には、名手荘葛谷村に「金剛童子石秀倉」として、「葛城の山峯、泉州の界にあり、山伏の行所なり。泉州牛瀧並に大坂辺に行く者これを道路とす」あり、行場であり往還の道でもあったと記され、大阪府教育委員会の『歴史ノ道調査報告書』には「岸和田藩の家老が正保二年（1645）に造立した石殿がある。金剛童子は約三十間紀州側に移したという」とある。

9．第九経塚　嶺の龍王・授学無学人記品

所在地	和歌山県紀の川市切畑	地　形	葛城山山頂
緯度・経度	北緯34° 34′ 81″ ・東経135° 43′ 44″	標　高	858m
設置物	石祠（現代）・内部石造物「金剛童子」（天正年間） 石碑・石灯籠・石灯籠・石造鳥居・標柱・碑伝（現代）、石造地蔵菩薩（年代不詳）		
備　考			

経塚略測平面図

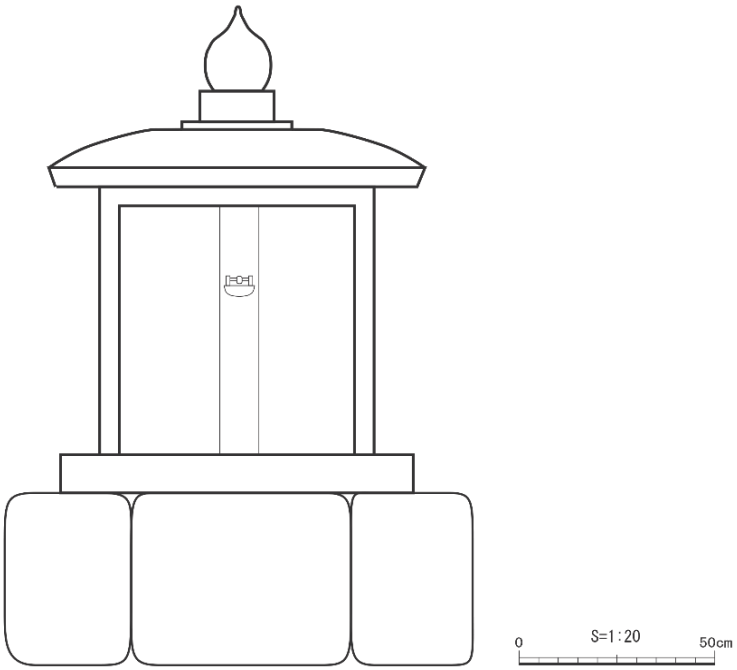


経塚写真（全景）

9．第九経塚　嶺の龍王・授学無学人記品石造物

石　材	砂岩（内部石造物）	形　式	板石
法　量	高さ30cm・幅約20cm	年　代	天正年間
銘　文	内部石造物「梵字（カン：金剛童子）／泉州神尾山／天正□□□月」		
備　考	花崗岩の石祠の内に納められている。		

石造物実測図・写真



９．第九経塚　嶺の龍王・授学無学人記品

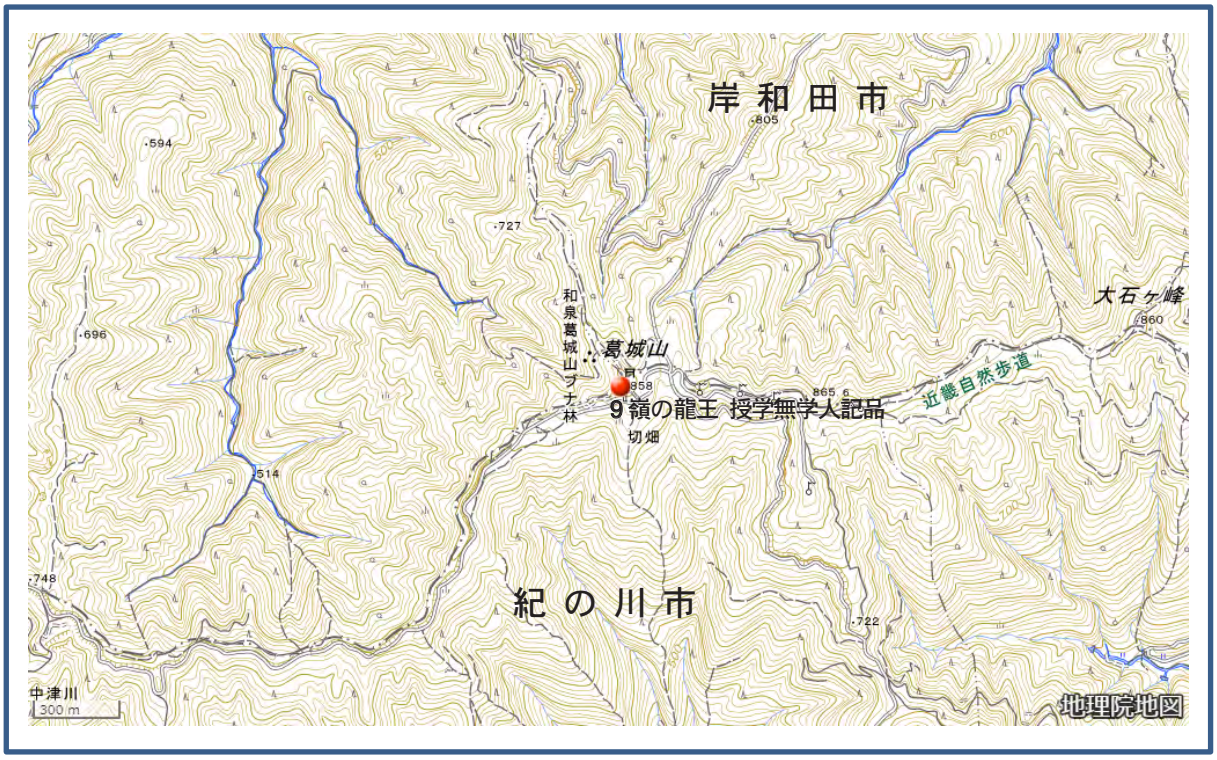
1　経塚全景（南から）

2　経塚全景（北から）

3　高靇神社（北から）

＜参考地図＞

９．第９経塚　嶺の龍王　授学無学人記品



10．第 10 経塚　大威徳寺　法師品

10. 第十経塚　大威徳寺（だいいとくじ）　（妙法）法師品（ほっしほん）　（岸和田市）

(1) 位置と周辺の状況（参考地図 63 頁）

もみじの名勝牛滝山として知られる山岳寺院、牛滝山大威徳寺境内に位置する。大威徳寺は現在、天台宗だが、近世以前は真言・天台兼学寺院であった。役行者の開創と伝えられ、古来、葛城修験の一霊場として崇敬された。

『葛嶺雑記』では、牛滝山大威徳寺の条で「本堂は大威徳明王　（中略）　惣門の中に経石あり　妙法法師品第十之地」とされる。これは葛嶺雑記の編者である智航の見解だが、現状ではこれらの見解に従って、当地が第十経塚となっている。

葛城修験の他の経塚でも見られることだが、他にも経塚の候補地があり、『諸山縁起』では、大沢の轉法輪寺の条に「峰に三十余の瀧穴あり。龍宮。霊験第一の処也　大威徳の瀧より峯を分け二十丁の処にある」と記される。石蔵王山の条で「法師品第十　一千一百六十三字　蔵王湧出地なるべし」とあり、この地が法師品第十の地であるとの説もみられる。現地には高座山山頂に高座石があり、修験の碑伝も置かれる。

(2) 現地の現況

大威徳寺境内の経塚だが、外観はまったくの自然石であり、また、惣門から多宝塔へ向かう参道脇にあるため、石の前に碑伝が置かれなければ、経塚と認識しにくいものである。約３ｍの大きな自然石の北側面に浅い円形を穿ちバンの種字を刻む。完全な自然石と考えられていたが、一部、円形を掘りくぼめるなど、加工が認められる。全体的に掃苔を要するが、この他に刻字は見られない。バンの字は通常、大日如来を表すもので、法師品にある薬王菩薩、または大威徳寺の龍王や不動明王または大威徳明王を示す種字でないことにやや違和感がある。大威徳寺は近世以前、真言・天台兼学寺院であった名残かとも考えられるが詳細は不明である。

また、この石は結界を示すものという説もあるが、参道で下手にある対とされる大石には今のところ、バン字の対になるア字の種字はみられず、結界の標石としても確かなものではない。

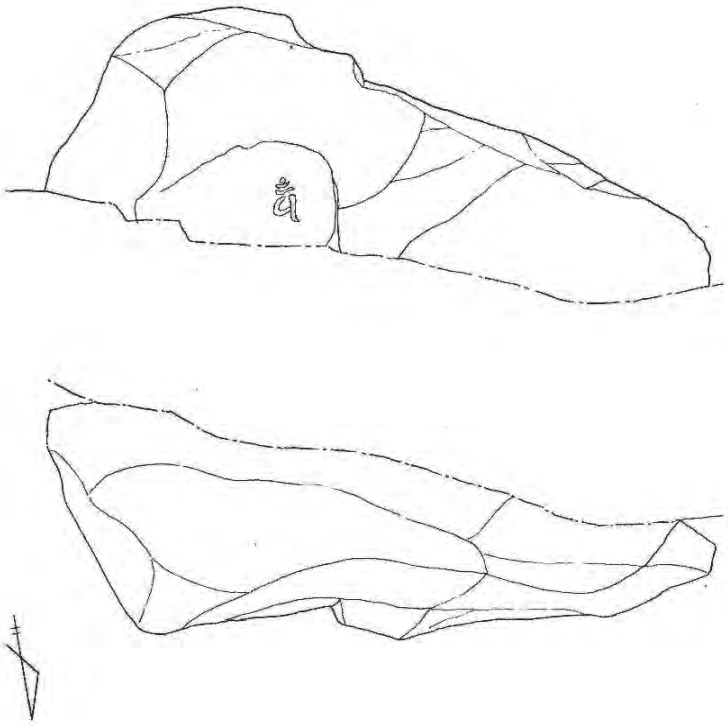
(3) 歴史的背景

大威徳寺が位置する「牛滝山」という山はないが、牛滝山は江戸時代から紅葉の名勝として知られ、大威徳寺の山号が地名になったと考えられる。『和泉名所図会』には牛滝山大威徳寺の項で「初め役の行者こゝに来って第二の瀧の上に修錬し、不動尊を彫刻して、これ安置す。今の明王堂なり」と記されている。境内にある多宝塔は国指定重要文化財である。

10. 第十経塚　大威徳寺(妙法)法師品

所在地	大阪府岸和田市大沢町1178-1	地　形	山岳寺院
緯度・経度	北緯34° 22′ 17″ ・東経135° 26′ 54″	標　高	295m
設置物	自然石、碑伝		
備　考			

経塚（大威徳寺）位置図



経塚写真

1　経塚（自然石）

2　梵字部分拡大

11. 第十一経塚　七越峠経塚山（ななこしとうげきょうづかやま）　見宝塔品（けんほうとうほん）　（和泉市）

(1) 位置と周辺の状況

泉州と紀州を結ぶ主要な街道のひとつに七越峠がある。『葛嶺雑記』（嘉永３年）の七越峠の項では、「此山は、往古龍宿山七輿寺とて七堂伽藍にして十余の堂塔、宮祠、四十余の僧舎あり、魏々たる霊場なりしに平治の乱に焼亡せしこと古記にみえたり」と記されている。また、交通の要衝として栄えた七越峠には、近世から昭和初期まで茶所が置かれ、旅人に親しまれてきたという。

七越峠から近畿自然歩道を 20 分ほど西に行き、経塚山への分岐を北に数分登ると山頂（標高８２５メートル）に至る。山頂の２～３０メートルほど手前に「七輿寺跡」と記された木製の碑が建っており、その西側に１１番経塚が位置している。一方、七越峠の東側は、「童子の杜」「宿山」とよばれ、修験の行場であった。

(2) 現地の現況

経塚は、山頂の手前に広がる東西６メートル、南北７メートルほどの平坦面に位置している。平坦面の中央に、掌大から人頭大の石が積まれ、塚を成している。塚の直径はおよそ２メートル、その高さは１メートルほどである。平坦面の外周には、１～２段の石を重ね置き、境界としている。

塚の中央には、「梵字　妙経　宝塔品第十一之地」と記された石碑が建つ。「泉州犬鳴山修験道」により、昭和６３（１９８８）年に建立されたものであるが、古い写真を確認すると、この石碑は、別の位置に置かれている。おそらく参詣者によって何度も場所が移動させられているのであろう。

また、塚の北（塚に向かって右手）には、平成３１（２０１９）年に「葛城古験証厳坊」によって設置された「葛城之峯　七大龍王　法華経見寶塔品第十一　金剛童子」と記された石碑がある。塚の南（塚に向かって左手）には、碑伝を奉納するスペースが設けられており、木製の碑伝が数十枚納められている。

(3) 歴史的背景

『葛嶺雑記』には、「夫（七越峠）より西の堂屋敷といえるに経塚あり」とある。『大阪府全誌』（大正１１年）には、「経塚は七越峠と鍋谷峠の間なる山頂字駒田口にありて円形なり。広さ壱百坪余にして、瓦を以て造りたる小祠あり。四囲には樹木鬱蒼せり。伝えいふ、昔役小角の法華経二十八品を葛城の支嶺に置く　塚は即ちその随一なりと。」と記されている。

七越峠の西に経塚があるという点で、両者は共通しているが、字名は異なっている。また、『大阪府全誌』のいう「瓦を以て造りたる小祠」は、現在は確認できない。

また、『葛嶺雑記』によれば、七越峠の「東のしげりは童子の杜にて宿山といふ」とあり、経護童子本地須弥頂が紀泉河三国の境である一乗が岳に鎮座しているという。現在も、七越峠の東、近畿自然歩道沿いに、金剛童子祠があり、祠から南側（和歌山側）に１～２分ほど下ったところに、七大龍王が鎮座している。

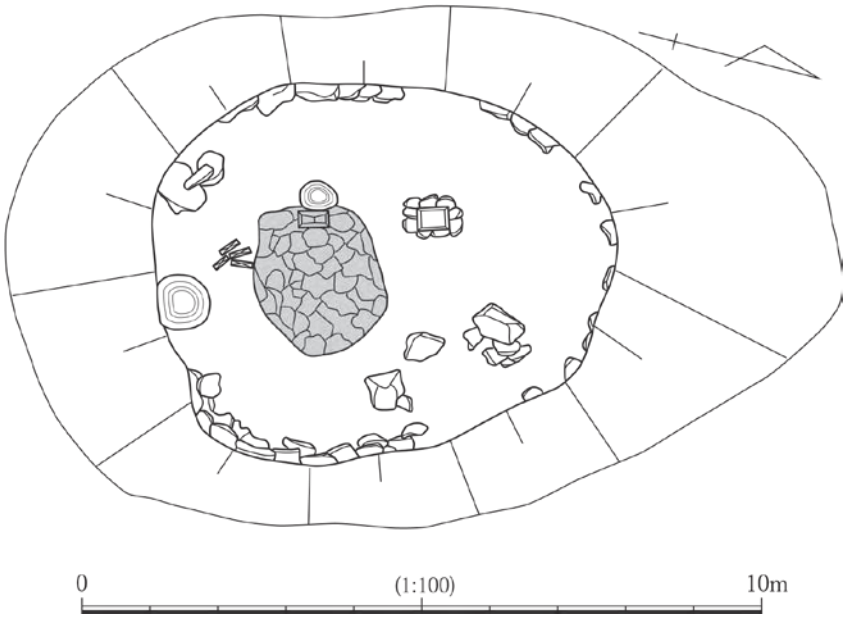
(4) その他

経塚山一帯は私有地であることから、参詣については控えられたい。

11. 第十一経塚　七越峠経塚山・見宝塔品

所在地	和泉市父鬼町	地　形	尾根頂上（平坦地）
緯度・経度	北緯34° 35′ 40″ ・東経135° 47′ 27″	標　高	825メートル
設置物	石造物「梵字　妙経　宝塔品第十一之地」（昭和63年） 石造物「葛城之峯　法華経見寶塔品第十一」（平成31年）・碑伝		
備　考			

経塚略測平面図

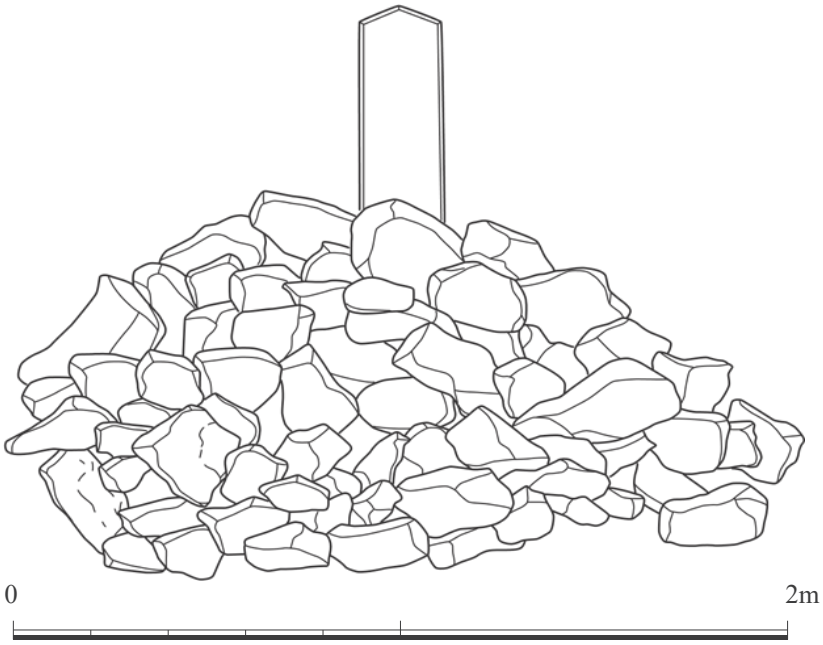


経塚写真（全景）

11. 第十一経塚　七越峠・見宝塔品石造物

石　材	花崗岩	形　式	石塔
法　量	高さ74.0cm・幅19.8cm・奥行12.0cm	年　代	昭和63年
銘　文	正面　梵字　妙経　宝塔品第十一之地 裏面　昭和六十三戊辰年四月吉日建立／泉州犬鳴山修験道		
備　考			

石造物実測図・写真



1　全景

2　石造物と碑伝

2　石造物（左斜め前から）

4　石造物（右斜め前から）

12. 第十二経塚　護摩のたわ朴留　提婆達多品　（かつらぎ町）

(1)　位置と周辺の状況

経塚比定地は一箇所のみであり、かつらぎ町大字東谷に所在する。和泉山脈を構成する三山（南葛城山・三国山・和泉葛城山）の一つ、三国山の尾根の緩斜面部に立地し、里道に沿って南面する。この里道は、槙尾山施福寺にも通じ、修験者が山中抖擻する道でもある。

(2)　現地の状況

「左　まきのを」銘の道標を左折後約 20 m行くと、北側に 2.3 m四方の窪地があり、その中に積石と碑伝がみられ、付近に埋経があることを彷彿させる。窪地のすぐ外にも碑伝の集積がある。また、石碑が窪地に建てられているが、これは、後述するように現代のものである。経塚に伴う盛土はみられない。

積石は、和泉砂岩製のものがほとんどであり、東西 2.9 m×南北 2.8 mの範囲に 50 ㎝径のもの、人頭大のもの、拳大のものをランダムに配置する。碑伝は、木札（現在はこれを碑伝としている）であり、窪地の中の積石の中央付近と窪地のすぐ外に集積がある。

石碑は、花崗岩製であり、高さ 52 ㎝、幅 20 ㎝、奥行 12 ㎝を測る。卒塔婆形であり、正面に梵字及び埋経に係る内容を、裏面に建立年月日及び建立者銘を刻む。それぞれの翻刻は、次のとおりである。

（正面）　キリーク　妙経　提婆達多品第十二之地

（裏面）　昭和六十三年戊辰四月吉日建之　泉州犬鳴山修験道

銘文の内容から、犬鳴山山伏の有志が二十八宿第十二番経塚を後世に伝えるべく現代に建立したものであることがわかる。

(3)　歴史的背景

全て経塚で構成される二十八宿として後世に整理された修験者の行場は、鎌倉時代初期には経塚以外も含む九十五宿であった。これは、宮内庁書陵部所蔵本が唯一の完本である『諸山縁起』から明らかであるが、欠如もみられる。その欠如を一部補うのが、かつらぎ町の『滝区有文書』である。同文書では、第九・十一～十四番経塚についての記述があるほか、五十五宿が槙野寺、五十八宿が光滝寺であることがわかり、さらに五十四宿の七越寺についての記述が詳細である。

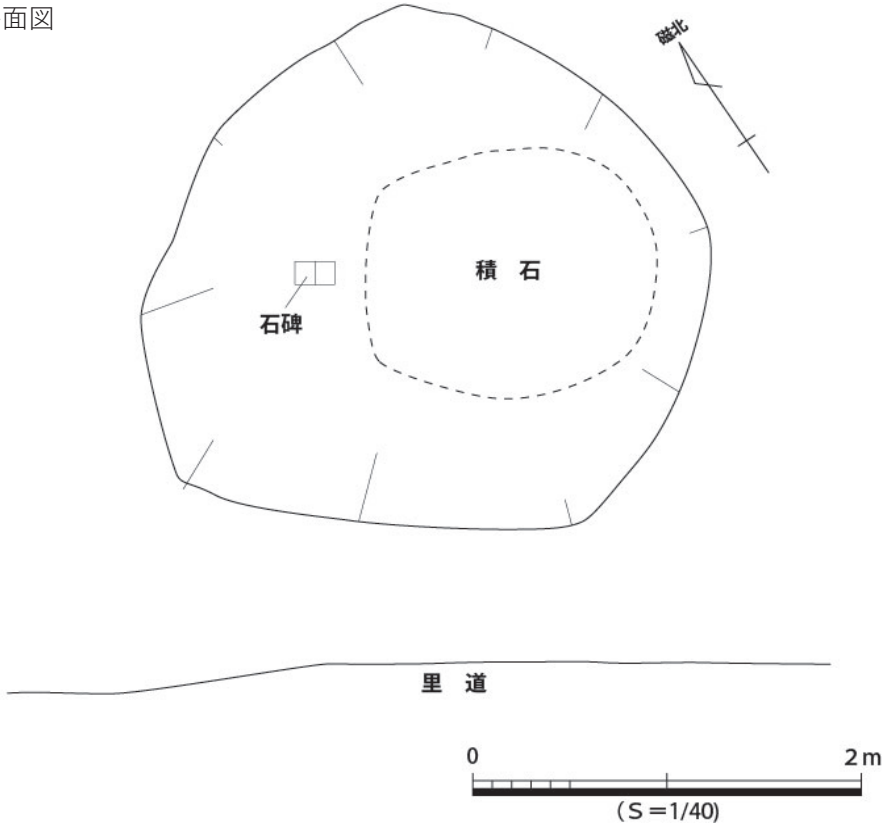
第十二経塚は、『諸山縁起』及び『滝区有文書』では五十六宿で、朴留と呼ぶ。納経は、『諸山縁起』では提婆品、『滝区有文書』では提品と記されている。現在は、1850 年に智航大徳が著した『葛嶺雑記』に基づき、「護摩のたわ朴留」と呼称し、「提婆達多品」を埋経するとされる。

本来の経塚に伴う石造物の存否は明らかでないが、地元に「朝日照り夕日輝くミツバオツゲのその下に、黄金埋め置く後の世のために」という歌があり、若い者がかなり深くまで掘ると瓦の破片や掛軸の金具などが出土したという話がある。これは、出土品こそ経塚に伴うものではないにせよ、後世のために埋経を行ったという経塚本来の姿に通じるものがあり、古相の経塚が伝え継がれてきたことを示唆しつつ、周辺には廃寺等の遺構がある可能性を思量させるものである。

12. 第十二経塚　護摩のたわ朴留・提婆達多品

所在地	和歌山県伊都郡かつらぎ町東谷	地　形	尾根斜面部
緯度・経度	北緯34° 20′ 55″ ・東経135° 30′ 9″	標　高	826m
設置物	石造物（経塚の東20mにある道標、近世か） 石碑（現代）・標柱（現代）・碑伝		
備　考			

経塚略測平面図



経塚写真（全景）

第十二経塚　護摩のたわ朴留・提婆達多品石造物（道標）

石　材	砂岩	形　式	自然石
法　量	高さ50cm　幅35cm　奥行20cm	年　代	近世か
銘　文	正面「左　まきのを」		
備　考			

石造物実測図・写真

（参考）十二経塚勤行の様子：道標のところを左折後20m地点に十二経塚はある

13. 第十三経塚　向い多和（むかいたわ）　勧持品（かんじほん）（かつらぎ町）

(1)　位置と周辺の状況

向い多和としての第十三経塚比定地は、先述した小丘陵頂上で西面する。里道の突き当りに位置しており、この里道は経塚に行く為だけの専用ルートとなっている。松の木が一本立ち、その根元に微かな高まりがあり、石造物を建立している。石造物の地下に、埋経を行っていると考えられる。なお、高まりのすぐ外には、石碑や碑伝など現代においても信仰が継続されている証が認められる。

(2)　現地の状況

里道の突き当りが丘陵の頂上となっており、盛土の可能性のある範囲は、表面観察からはおよそ2ｍ×２ｍの範囲と考えられるが、発掘調査等を行っておらず、極めて微かな高まりを認める程度のものであるため、明確ではない。あるいは、松の木の根上がりによって盛り上がっている可能性もある。しかし、あまり根の影響を受けないであろう石碑前面にも微かな盛り上がりが認められる。

石造物は、和泉砂岩製であり、高さ 73 ㎝、幅 56 ㎝、奥行 23 ㎝を測る。銘文以外の加工はみられず、自然石のままである。正面に尊名を刻む。翻刻は、次のとおりである。

（正面）　大日如来

紀年名は認められないが、字の形態から、近世に遡る可能性がある。大日如来は真言宗の中心となる仏であるが、高野山の僧侶が葛城入峯する際はもちろん、天台宗では法華経と同一視され、三井寺の大峯修験でも大峯山そのものを大日如来の曼荼羅と観じるなど、役行者に並ぶ修験の本尊のひとつといえる。

なお、盛土すぐ外の石碑は、第十二経塚と同じく犬鳴山山伏の有志が二十八宿経塚を後世に伝えるべく現代に建立したものである。碑伝についても、現代のものである。

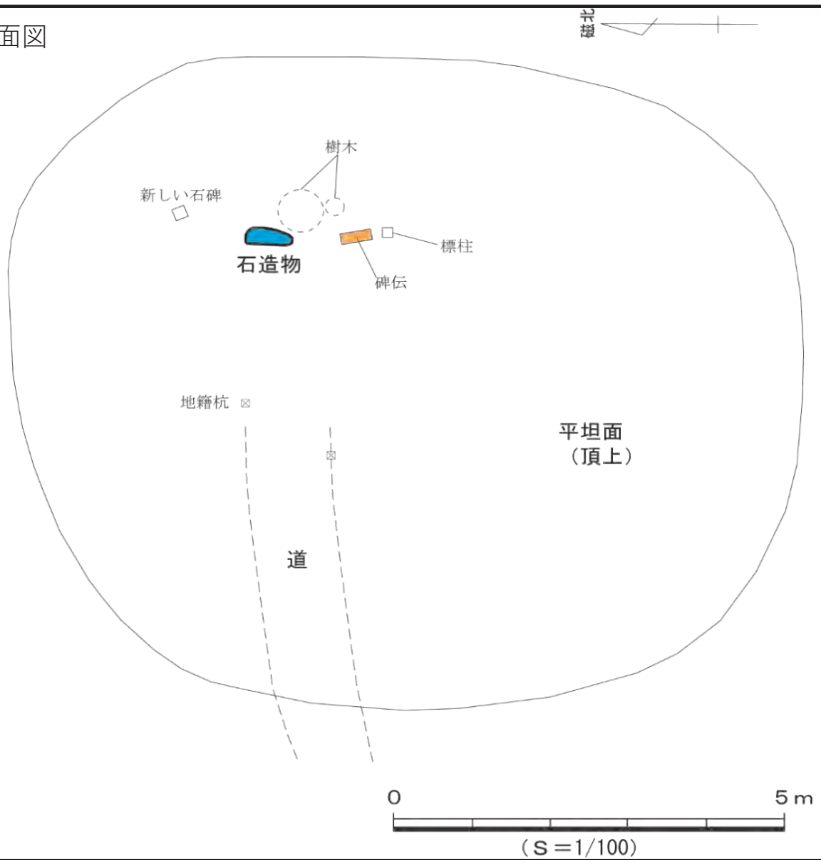
(3)　歴史的背景

第十三経塚は、『諸山縁起』及び『滝区有文書』では五十七宿であって、堀越宿と灯明峯寺の二か所が記されている。納経は、『諸山縁起』では勧持品、滝区有文書では勧品と記されている。『葛嶺雑記』では「向い多和」又は「鎌多輪」と呼称し、「勧持品」を埋経するとされる。比定地はいずれもかつらぎ町大字東谷に所在し、堀越集落の南東 1km にある小丘陵尾根頂上の平坦地と、三国山から派生した丘陵・燈明岳（標高 856.840 m）頂上平坦面の二か所がある。『諸山縁起』中の堀越宿は前者、灯明峯寺は後者にそれぞれ関係すると考えられるが、定かではない。『葛嶺雑記』に記載されている向い多和は、前者に比定され、これが現在第十三経塚とされるものである。なお、灯明峯寺については、70 の堀越癪観音にて後述する。

13. 第十三経塚　向い多和・勧持品

所在地	和歌山県伊都郡かつらぎ町東谷	地　形	尾根頂上（平坦地）
緯度・経度	北緯34° 20′ 13″ ・東経135° 30′ 12″	標　高	705m
設置物	石造物「大日如来」（年代不詳） 石碑（現代）・標柱（現代）・碑伝		
備　考			

経塚略測平面図

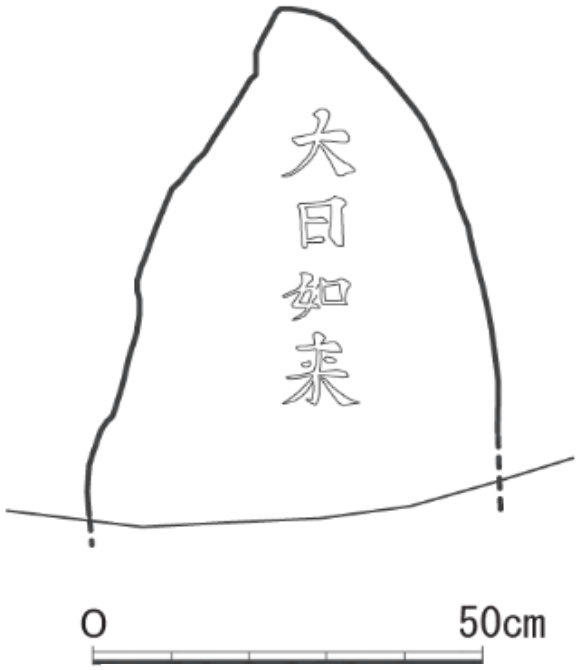


経塚写真（全景）

13. 第十三経塚　向い多和・勧持品石造物

石　材	砂岩	形　式	自然石
法　量	高さ73cm・幅56cm・奥行23cm	年　代	不詳
銘　文	正面「大日如来」		
備　考			

石造物実測図・写真



13. 第十三経塚　向い多和・勧持品（鎌の多輪）

1　石造物正面

2　全景

3　石造物と碑伝、標柱

4　石造物と前面の空間

5　石造物（右側面から）

14-1. 第十四経塚　南葛城山鏡宿　安楽行品（橋本市）

(1) 位置と周辺の状況

第 14 番経塚の所在地は 2 つ説があり、その 1 つが橋本市高野口町九重にあり、標高 922m の南葛城山の山頂付近に位置する鏡宿である。鏡宿までは高野口町九重から途中まで車で山道を進むことができる。この場所はダイヤモンドトレイルというハイキングコース上にあり、植林された杉林の中を登ると一本杉に出て、トタン葺きの小屋が建っている。なお、もう一つの第 14 経塚は大阪府河内長野市の光滝寺である。

(2) 現況

トタン葺きの小屋の周囲には金剛生駒紀泉国国定公園の「一本杉」の看板があり、「妙法蓮華経安楽行品第十四経塚」と書かれた標柱が立っている。小屋の西には、2 基の花崗岩の石碑があり、小屋の中には南に 2 基の和泉砂岩の石碑、北に 1 基の花崗岩の石碑がある。これらの石碑のうち、2 基の泉砂岩の石碑は左が「善女龍王」（最大幅 54cm、高さ 158 cm、奥行 30 cm）、右が「大聖不動明王」（最大幅 46 cm、高さ 147 cm、奥行 40 cm）と書かれている。2 基とも明治 16 年に当時の九重村と嵯峨谷村の村人が発起人となっている。不動明王の石碑には、金五円を九重村と嵯峨谷村、金一円を竹尾村と田原村、上中村、下中村が出資していることが記されている。善女龍王は雨乞いとの関係が深く、2 つの石碑は江戸時代の修験の名残を示すと考えられる。他の花崗岩製の石碑は大正 4 年、昭和 34 年、令和元年に建てられている。現在、熊野修験や葛城修験の碑伝が置かれていることを確認した。

(3) 歴史的背景

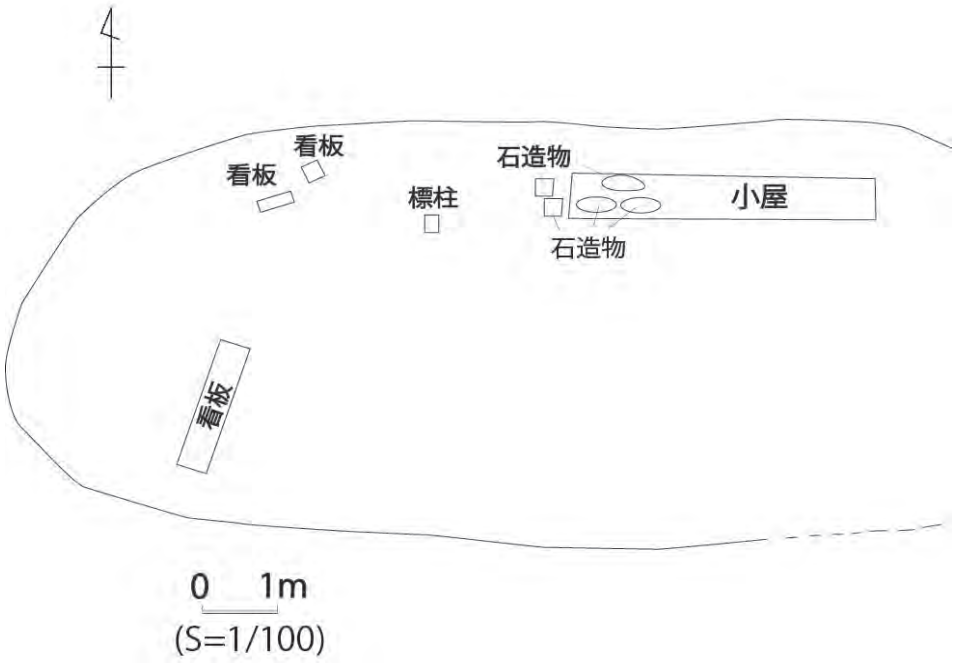
『紀伊国名所図会』によると、鏡宿は「楠遠見の壇」と言われ、楠延尉がこの地に登り、四方を遠望し、白銅鏡を埋めた所とされる。山上には穴があって、石を覆い、古くから雨乞いのときにこれを取り除けば雨が降るとして、雨蓋と名付けていたという。

宮本佳典氏は『橋本市郷土資料館報』の中で、この九重にある鏡宿は近世以前の経塚であり、第 14 経塚の光滝寺は近世の行所であると述べている。また、修験者が直接関わった形跡が見られないが、地元の人々にとって当地が雨乞いの山となっていること、山麓の嵯峨谷には「嵯峨谷の神踊り」と言われる雨乞い芸能が残っていることから、葛城修験の行所との関わりをみることができる。なお庶民信仰の観点から、葛城修験の発生は葛城山と呼ばれる峰々にあり、それらの山は雨乞いに代表される信仰の存在であることなどから南葛城山はそれらをもつ霊山のひとつとして位置づけることができる（宮本 2021）。

14-1. 第14経塚　南葛城山鏡宿　安楽行品

所在地	橋本市高野口町九重	地　形	山頂
緯度・経度	34° 21'27.0N、135° 32'25.8"E	標　高	922m
設置物	和泉砂岩製石碑2基、花崗岩製石碑3基、看板、標柱		
備　考	※調査不十分のため、今後追加調査の実施を検討する。		

経塚略測平面図

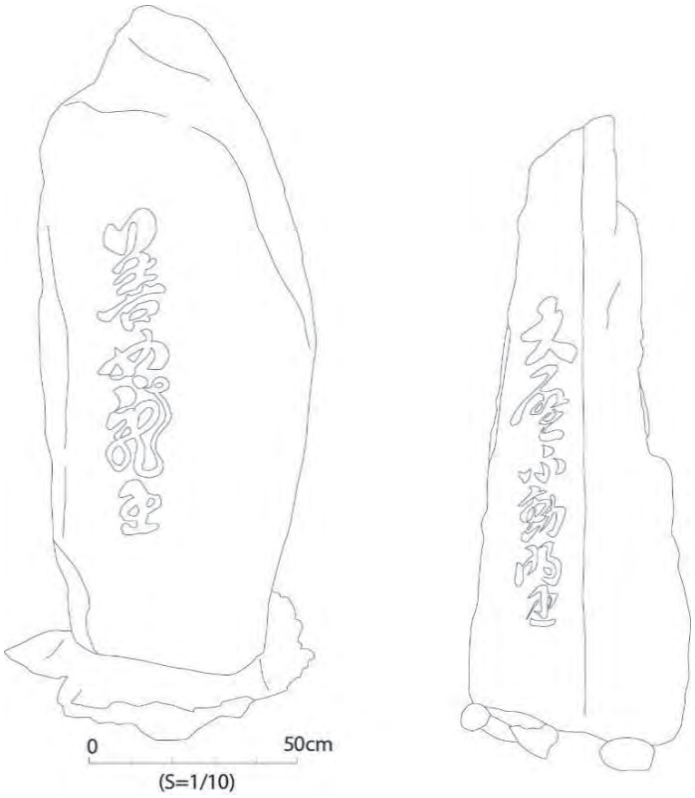


経塚写真（全景）

14-1. 第14経塚　南葛城山鏡宿・安楽行品石造物

石　材	和泉砂岩（2基ともに）	形　式	
法　量	左：最大幅54cm×高さ158cm×奥行30cm	年　代	明治16年
銘　文	左石：（正面）善女龍王　（正面右）二体施行発起人　九重村　（人名） 嵯峨谷村　（人名）癸未八月建之		
備　考	右石の法量は文中に記載。一部銘文は漢字表記を新字体に統一、発起人名は省略。		

石造物略測図（正面銘文）

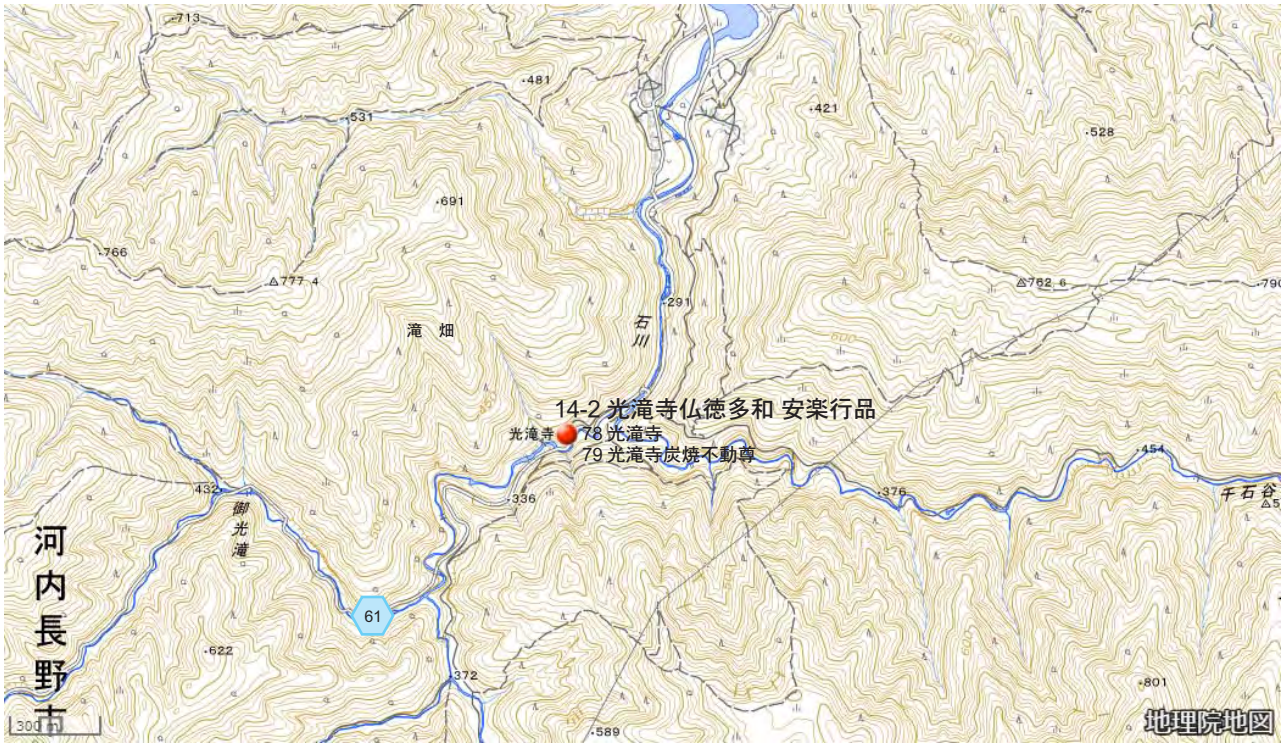


14-2. 第十四経塚　光滝寺（こうたきじ）　仏徳多和（ぶっとくたわ）　安楽行品（あんらくぎょうほん）（河内長野市）

本経塚は、河内長野市南部の滝畑地区の光滝寺境内にあったとされる。なお、第十四番経塚と考えられる場所は、２カ所あり、このうち河内長野市内の光滝寺境内とされる部分をここで説明する。なお、本経塚がある滝畑地区の多くは、中世に槇尾山施福寺の所領として栄えた場所であるが、江戸時代には、狭山藩領となっている。

明治時代まで、本堂の東に多宝塔があり、五智如来が祀られており、役小角が法華経の安楽行品（第十四品）を境内の庭に納めて塚をつくり、その上に多宝塔を建て、持っていた錫杖を立てたという伝承が残っている。境内には塔跡とされる配石と植え込みがあり、石仏が祀られている。現在、経塚の遺構と考えられる構造物は残っていない。

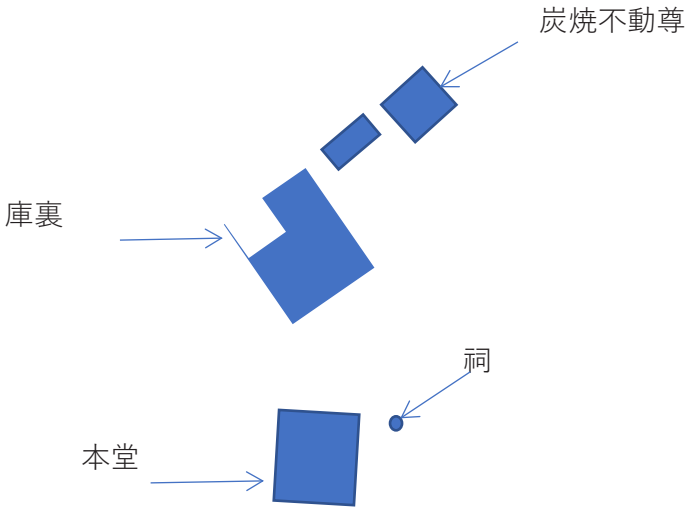
『葛城雑記』には、「扇山弁財天今は才神山といふ、此里の小松が宅の辺に熊野権現、また仏徳多輪の経塚あり。妙　安楽行品第十四之地」との記載がある。



14-2.　第十四経塚　光滝寺仏徳多和・安楽行品

所在地	大阪府河内長野市滝畑	地　形	光滝寺境内（平坦地）
緯度・経度	北緯34° 22′ 11″ ・東経135° 31′ 5″	標　高	
設置物	祠（木造）、石仏（2体）		
備　考			

経塚略測平面図



光滝寺境内見取り図

0　50m
（s =1/1000）

経塚写真（全景）

15. 第十五経塚　岩湧山　従地湧出品（河内長野市）

(1) 位置と周辺の状況

本経塚は、河内長野市南部の加賀田地区の岩湧山（897 m）の南斜面、岩湧寺の南側に所在し、加賀田地区と滝畑地区を結ぶ林道の北側の尾根上に位置する。周囲には、岩湧寺の他、臥龍洞、行者の滝など修験道に関わる行場や伝承地が存在している。

(2) 現地の状況

この経塚は周囲の谷を見渡せる小高い尾根上にある。経塚の周辺には碑伝や供物などが供えられている状況がみられるため、信仰が続いていることがわかる。静寂な杉林の中に佇む姿は厳かな印象を与える。

(3) 構造物

花崗岩製の石塔があり、付近には五輪塔（ただし上部が欠けている）石仏・碑伝・標柱も存在している。

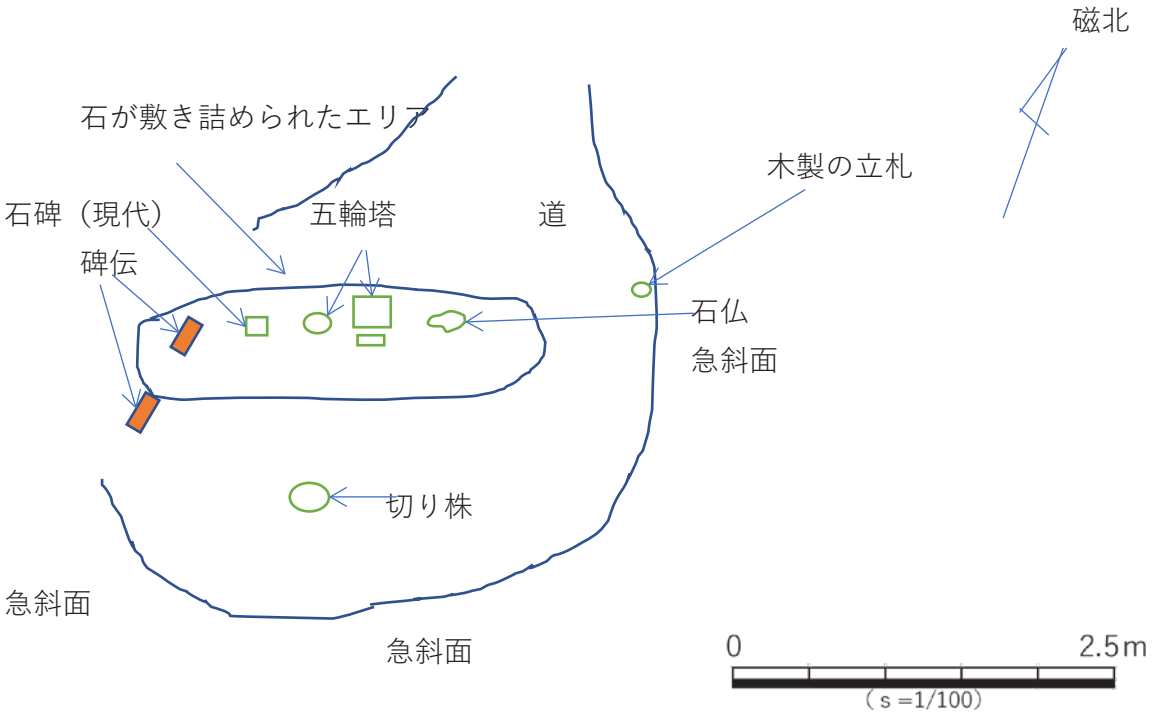
(4) 文献史料にみえる状況

『葛城雑記』には、「本堂十一面・神変大士・二重塔・経塚。妙　従地湧出品　第十五之地　おもひきや岩湧寺の名におひて経つかさへもふたつありとは」との記載がある。また、『葛嶺雑記』の歌や『葛城先達峯中勤式廻行記』などの記載からは、「西ノ経ヅカ」、「東ノ経ヅカ」の記載があり、２つの経塚があるようにとれる。また、文久２年（1862）の寺社改帳にはこの２つの経塚が描かれており、西経石ノ塔とされているものが現在ある第十五経塚と考えられ、一方、東経石ノ塔は現在の行者堂と滝の上に描かれているが所在は不明である。

15. 第十五経塚　岩湧山・従地湧出品

所在地	大阪府河内長野市加賀田	地　形	山中の尾根道の尾根先
緯度・経度	北緯34° 22′ 53″ ・東経135° 33′ 19″	標　高	約543m
設置物	五輪塔2基（ただし、1基は上部なし）・石仏・碑伝・標柱・石造物（現代）		
備　考			

経塚略測平面図



経塚写真（全景）

15. 第十五経塚　岩湧山・従地湧出品石造物（その１）

石　材	砂岩	形　式	自然石（加工あり）
法　量	40×40cm、残存高約90cm	年　代	延宝５(1677)年
銘　文	東面：奉納大乗妙典一部養□院僧正晃□菩提延宝五巳年四月十五日敬白 南面：我等与衆生皆具成仏道、北面：願□以是功徳普及於一切　と刻字		
備　考	五輪塔、水輪なし		

石造物写真

１　石塔正面

２　石塔左側面

３　石塔右側面

15. 第十五経塚　岩湧山・従地湧出品石造物（その２）

石　材	砂岩	形　式	自然石（加工あり）
法　量		年　代	不明
銘　文	（判読不明）		
備　考	石仏		

石造物写真

1　石造物裏面（右側の五輪塔。左側は石仏の裏面）

2　木製の立札

3　石造物１・２正面

16. 第十六経塚　流谷金剛童子（ながれだにこんごうどうじ）　如来寿量品（にょらいじゅりょうぼん）（河内長野市）

(1) 位置と周辺の状況

本経塚は、河内長野市南部の天見地区流谷に所在する。付近は高野街道が南北に走り、古くから河内と紀伊を結ぶ信仰の道として多くの人々が往来していた。流谷は、中世において石清水八幡宮の荘園となっていた場所であり、甲斐荘山郷と呼ばれていた。江戸期には支配領主が膳所藩、西代藩、神戸藩と変遷したことがしられている。地区内にある八幡神社には延元５（1340）年の銘がある鉄製湯釜があり、地区内にも荘園関係の文書が残る。

(2) 現地の状況

国道 371 号線の出合ノ辻交差点から西に流谷の集落内の道を進むと徒歩でおよそ 30 分、流谷川を越えた北側の山腹に経塚は位置している。谷あいの地形にあり、周囲の眺望はきかない。現在の経塚は昭和 53 年に再興されたもので、祠には集落の中心を流れる流谷川から引き上げた不動明王像などが祀られたという。この再興時には経塚の対岸で護摩焚きが行われ、天見駅から経塚まで行列ができるほどたくさんの山伏が法要に訪れたという。

(3) 構造物

昭和 53 年に建立された石碑と祠、近年設置された新しい石碑、碑伝、標柱などで構成されている。また、祠には「御屋根修理之事」と書かれた木札が立てかけられており、「大工棟梁　阪元滝造　奉仕人　登尾長晴　七十七翁　森下隆太郎　七十六翁　右斉戒沐浴以是為者也　昭和五十三年四月十五日吉瑞」とある。祠は木造で、高さ約 50 ｃｍの石段の上に設置され、軒下除く本体は幅 66 ｃｍ、奥行き 65 ｃｍ、高さ 75 ｃｍ、屋根は幅 87 ｃｍ、奥行き 112 ｃｍ、中心の高さ 30 ｃｍ程度である。昭和 53 年建立の石碑には表面に「(梵) 妙法蓮華経　如来壽量品第十六」向かって右面には「本山修験聖護院門跡光徹誌」向かって左側面には「昭和五十三年四月建立」とあるが、裏面には記述は見えない。

(4) 文献史料にみえる状況

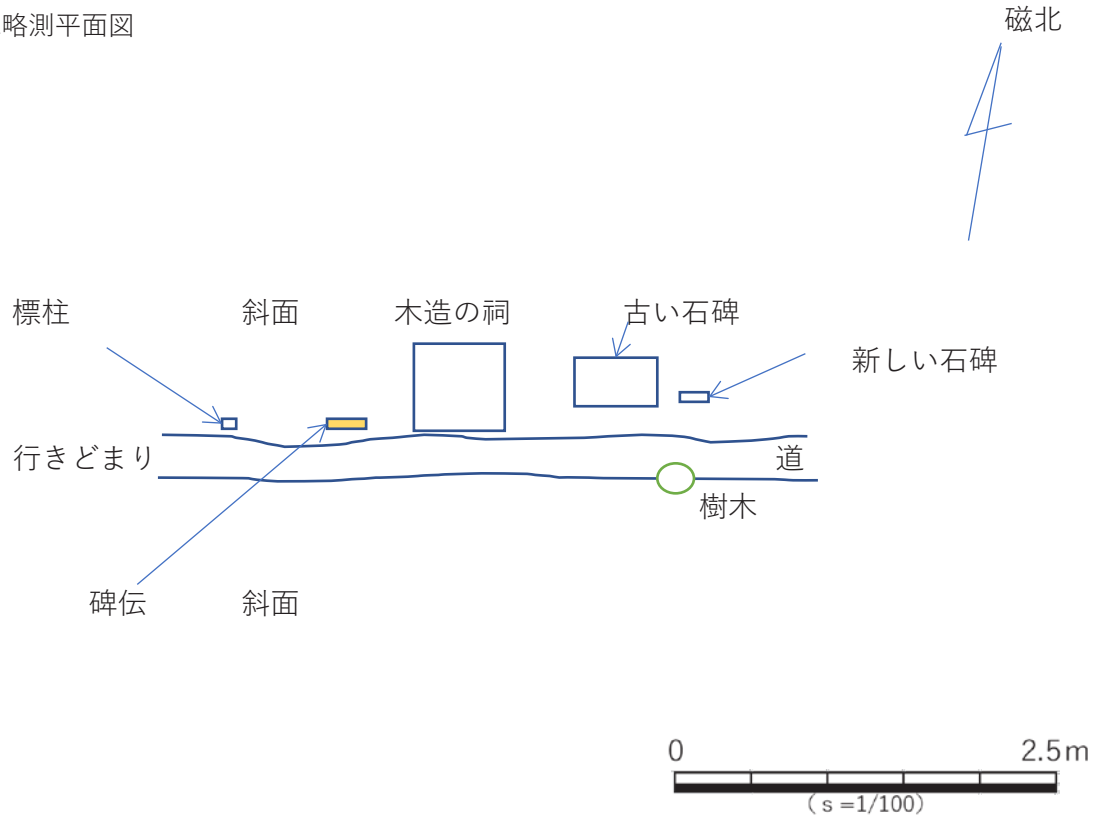
『葛城雑記』には、「流谷金剛童子　同国郡※　ながれ谷村　岩わき寺より山の半腹をゆくみちに古記にあるごとく所々川中に不動尊とて、大の石にしめなど引はへて祭れり、みな役行者の御勧請のよしにて、これをこの里に、十六泉とて、深く尊崇し奉るなり、また経塚は此童子ならんかといへり。妙　如来寿量品第十六之地」との記述がある。

※…同国郡＝河州錦部郡

16. 第十六経塚　流谷金剛童子・如来寿量品

所在地	大阪府河内長野市流谷	地　形	里山の山腹（斜面）
緯度・経度	北緯34° 23′ 37″ ・東経135° 34′ 53″	標　高	約351ｍ
設置物	石碑「（梵）妙法蓮華経　如来壽量品第十六」（昭和53年建立）・石碑（現代） 祠（年代不明）・標柱（現代）・碑伝		
備　考			

経塚略測平面図



経塚写真（全景）

16. 第十六経塚　流谷金剛童子・如来寿量品石造物			
石　材	花崗岩	形　式	2層構造
法　量	高さ83cm×幅35cm×奥行23cm	年　代	昭和53年
銘　文	正面：「（梵）妙法蓮華経如来壽量品第十六」		
備　考	※上記法量は上段部分。土台部分は40cm×55cm×55cm		

石造物写真

正面

左側面

右側面

16. 第十六経塚　流谷金剛童子・如来寿量品

1　祠（木造・屋根は鉄板のかぶせあり）

2　祠・石造物背面

3　祠左側面の木札

17. 第十七経塚　天見不動（あまみふどう）　分別功徳品（ぶんべつくどくほん）（河内長野市）

(1) 位置と周辺の状況

本経塚は、河内長野市南部の天見地区下天見に所在する。大阪府と和歌山県を隔てる分水嶺となっている金剛葛城山系の稜線に位置している。なお、この稜線は、ダイヤモンドトレールとして現在多くの人々に利用されている。

(2) 現地の状況

この経塚は、流谷の八幡神社近くから砥石谷を上り詰めたところの山中、尾根付近の比較的平坦な場所に祀られており、傍をダイヤモンドトレールが通っている。ここは天見の人々の雨乞いの場でもあり、「トイシの不動さん」としても親しまれている。木造の祠、碑伝、標柱などが設置され、祠は柱と波板屋根で構成された覆いによって保護されているが、覆いの柱の根元は虫害による損傷が激しい。祠は石積みの上に設置されており、木造、寸法はほぼ、第十六番経塚の祠と同じ大きさである。碑伝は覆いの前面柱上部などにある。石碑は特に見当たらない。

(3) 構造物

木造、波板屋根の祠があり、躯体部分は、高さ 65cm ×幅 63cm ×奥行 66cm（縁側部分除く）、屋根は片面）：高さ 40cm × 70cm ×奥行 110cm、廂：幅 93cm ×奥行 43cm である。

(4) 文献史料にみえる状況

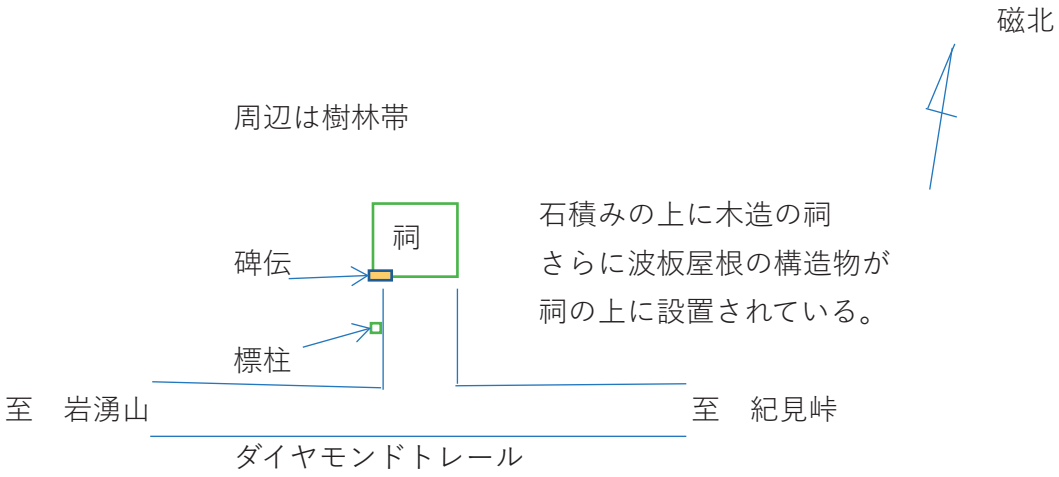
『葛城雑記』には、「天見不動　同国郡※　上天見村の不動の段なるへし　なかれ谷の村より山づたひにいたる、一にぼだにの池といふ、古記にしたがふところ、不動の石像あり。妙　分別功徳品第十七之地もゆる火のほたにの池にすめるみは華にそ光る蓮葉のつゆ」との記載がある。

また、享保６年（1721）に作成された流谷村古図には、本経塚と思われる造物が山間に描かれている。※同国郡＝河州錦部郡

17. 第十七経塚　天見不動・分別功徳品

所在地	大阪府河内長野市天見	地　形	和泉山脈尾根付近の山中（平坦地）
緯度・経度	北緯34° 22′ 33″ ・東経135° 35′ 21″	標　高	約440m
設置物	木造の祠		
備　考	石造物の類は設置されていない。		

経塚略測平面図



経塚写真（全景）

1　祠（木造・波板屋根の構造物あり）

2　祠裏面

3　屋根庇の現況

4　波板屋根の保護構造物

18. 第十八経塚　岩瀬経塚山（いわせきょうづかやま）　随喜功徳品（ずいきくどくほん）（河内長野市）

(1) 位置と周辺の状況

本経塚は、河内長野市南部の島の谷の北側に所在する。当該地区には、茅葺民家が点在しており、周囲の棚田、石垣、小径、小堂とあわせ歴史的な農村景観を形成している。中世には石清水八幡宮の荘園甲斐庄山郷の一部であったが、江戸期には支配領主が膳所藩、西代藩、神戸藩と変遷したことが知られている。

(2) 現地の状況

第十八番経塚は天見から旗尾岳を経由して府庁山、十字峠と続く尾根道沿い、また、上岩瀬の集落からは塞ノ神が祀られるサイノ神谷の林道を進んだ谷の奥、急坂を登ったピークにある。眺望は開けていない。

山頂は南北 10 m、東西２～３メートル程度の平坦地があり、その片隅に２基の砂岩製の石碑がある。ともに山形の扁平な石材で、一方の石碑には石碑正面に「(梵字) 妙経随喜功徳品第十八岩瀬山経塚」(裏面「昭和三十六年十月吉日建立願主　三井修験天台寺門宗　名古屋市　早川宗治　」) の銘文があり、法量は、高さ 75cm・幅 45cm・奥行 7cm である。もう一方の石碑には、正面に「(梵字) 葛城峯中亡霊回向塔」(裏面「維時昭和三十六年十月建之　三井修験天台寺門宗　宗務総長　中村鍵寿」) の銘文があり、法量は、高さ 75cm・幅 35cm・奥行 8cm である。この他、近年設置された新しい石碑、碑伝、標柱などが設置されている。

(3) 文献資料に見える状況

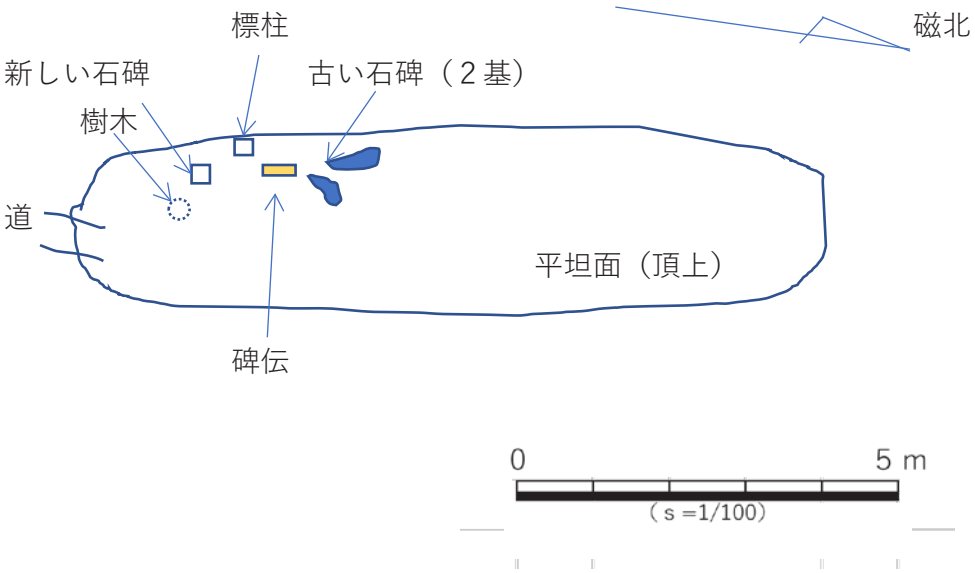
『葛城雑記』には、岩瀬の経塚山が第十八番経塚として記されているが、江戸時代の初め頃までは紀見峠の柱本（和歌山県橋本市）にあったという記録も残っている。同書には、「岩瀬の経塚山　同国郡※　不動の段より山づづき、しかし通路なし遥拝。妙　随喜功徳品第十八之地　武士の岩瀬の玉や光るらん経塚山を守るいさをに」との記述がある。

※…同国郡＝河州錦部郡

18. 第十八経塚　岩瀬経塚山・随喜功徳品

所在地	大阪府河内長野市岩瀬	地　形	山頂
緯度・経度	北緯34° 24′ 6″ ・東経135° 37′ 4″	標　高	約545m
設置物	石碑「（梵）妙経随喜功徳品第十八岩瀬山経塚」（昭和36年建立） 石碑「（梵字）葛城峯中亡霊回向塔」（昭和36年建立）		
備　考	この他、近年設置の石碑、標柱（現代）、碑伝あり		

経塚略測平面図



経塚写真（全景）

18. 第十八経塚　岩瀬経塚山・随喜功徳品石造物（その１）			
石　材	砂岩	形　式	自然石（加工あり）
法　量	高さ75cm・幅45cm・奥行7cm	年　代	昭和36年
銘　文	正面：（梵字）妙経随喜功徳品第十八岩瀬山経塚 裏面：昭和三十六年十月吉日建立願主　三井修験天台寺門宗名古屋市早川宗治		
備　考			

石造物写真

1．石造物正面

2．石造物裏面

3．石造物左側面

4．石造物右側面

第十八経塚　岩瀬経塚山・随喜功徳品石造物（その２）

石　材	砂岩	形　式	自然石（加工あり）
法　量	高さ75cm・幅35cm・奥行8cm	年　代	昭和36年
銘　文	正面：（梵字）葛城峯中亡霊回向塔 裏面：維時昭和三十六年十月建之　三井修験　天台寺門宗　宗務総長　中村鍵寿		
備　考			

石造物写真

1　石造物その２正面

2　石造物その２裏面

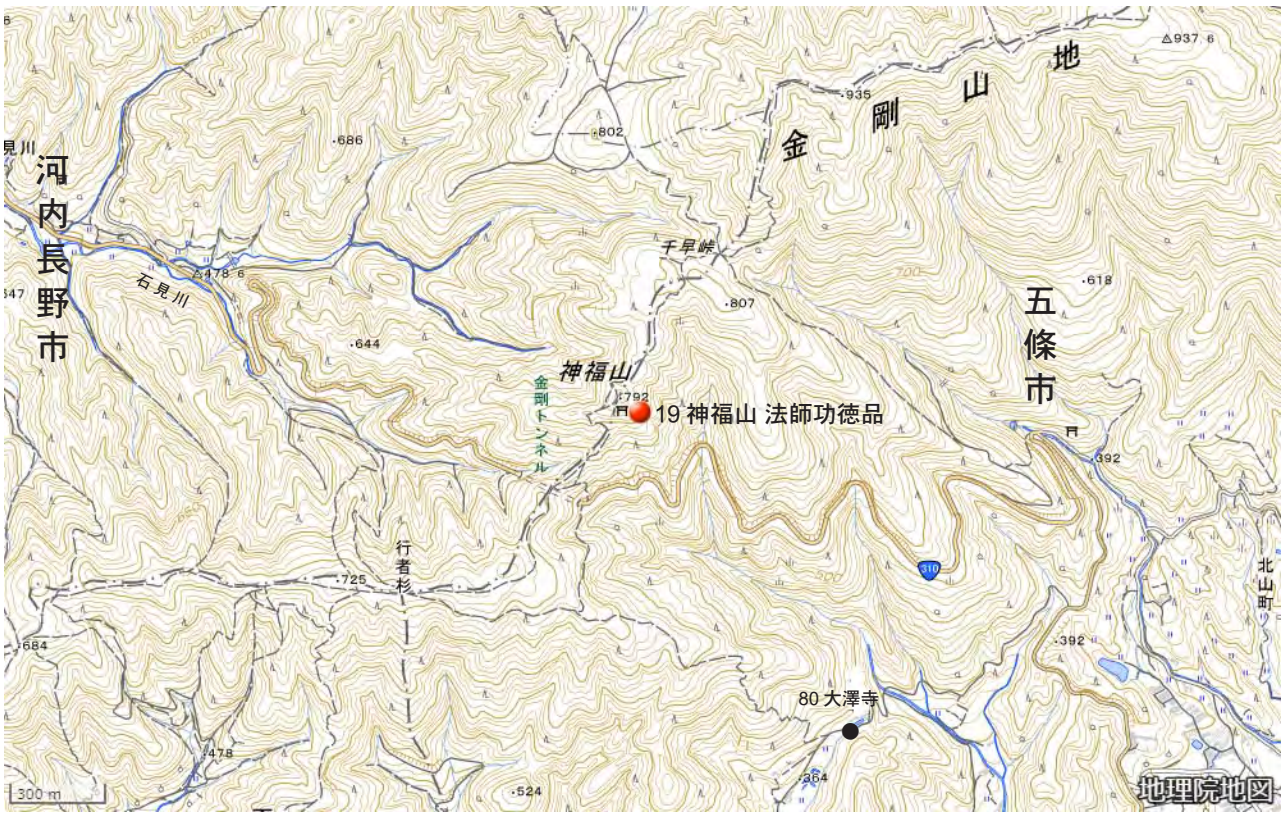
3　石造物その２左側面

4　石造物その２右側面

19. 第十九経塚　神福山（じんぷくさん）　法師功徳品（ほっしくどくほん）　（五條市）

この経塚は、第十八経塚「岩瀬経塚山・随喜功徳品」から東南へおよそ３㎞、ダイヤモンドトレールが走る神福山（標高 792 m、別名「笹尾山」）の山頂に存在する。登頂して目に付く盛土は、鏡が三面出土した場所と伝えられるが、現在は経塚と考えられている。

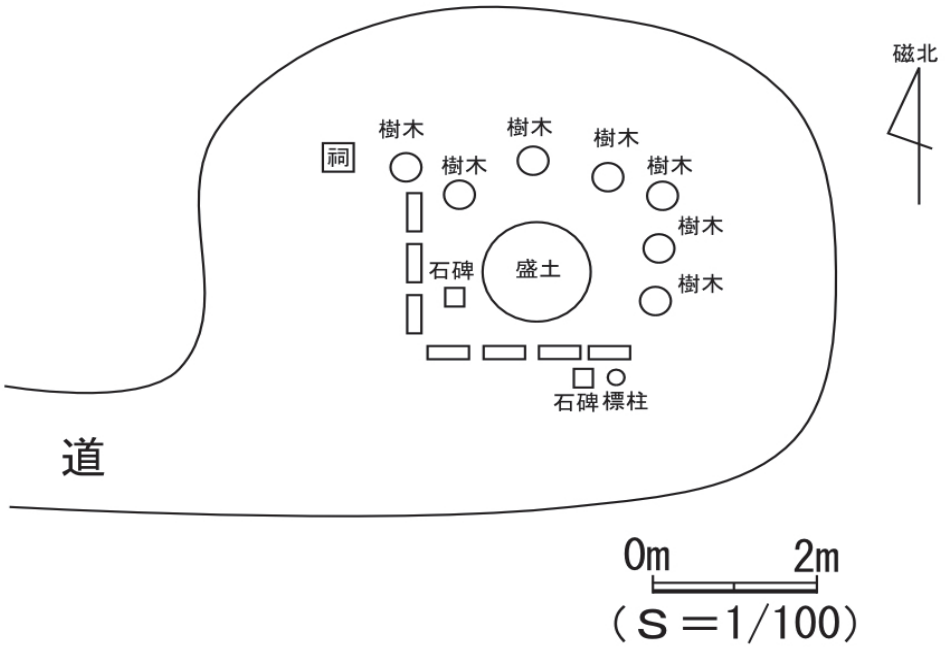
なお、経塚の隣には「延喜式」神名帳の高天山佐太雄神社に比定されている高天佐太雄神社の小祠、麓には修験道に関係する大澤寺、草谷寺、地福寺がある。



19. 第十九経塚　神福山・法師功徳品

所在地	奈良県五條市上之町	地　形	神福山頂上（平坦地）
緯度・経度	北緯34° 23′ 22″ ・東経135° 39′ 31″	標　高	792m
設置物	石碑（現代）・標柱（現代） 石造物（現代）		
備　考	未指定（史跡）。		

経塚略測平面図



経塚写真（全景）

20. 第二十経塚　石寺跡（いしでらあと）　常不軽菩薩品（じょうふきょうぼさつほん）　（御所市）

(1) 位置と周辺の状況

石寺跡　常不軽菩薩品（葛城修験第二十経塚）は、御所市鴨神の金剛山山腹に所在する。当該地に至る登山道の道中には、地元から「高宮さん」と呼ばれる、白鳳時代の史跡高宮廃寺跡があり、そこから 20 分ほど上った場所に石寺跡はある。石寺跡の地形は平坦になっており、南北 80m、東西約 50 m の規模を誇る。山頂側や麓側が石垣となっていることから、斜面を平坦に切り開いたと考えられる。

(2) 現地の現況

石寺跡の現況は、草木が生い茂っており、倒壊した五輪塔が散見されるが、寺域内の全容を把握することは困難な状態である。平坦面の山頂側には、石垣が辛うじて残っており、今にも崩落しそうな状態である。

石寺跡より少し下った場所には、修験僧の墓地がある。石塔は約 10 基確認したが、その内の最も古いと思われる五輪塔は、寛正 3 年（1462）と刻字された室町時代のものである。

第二十番経塚は、石寺跡より一段上の広場中央やや北よりにある。高さ 2.8 m、幅 2.7 m、奥行 1.1 mの花崗岩で、他の葛城修験経塚とは一線を画した巨石が、訪れる者を圧倒する。石寺跡と同様に斜面を平坦に切り開いたと考えられ、経塚の裏側に石垣が残存している。正面から見て左手前に 2 本の石碑と修験者の碑伝がある。経塚は全体的に凹凸が激しく、加工の痕跡は認められないことから、自然石と考えられる。前面の中心やや右側に、径約 10cm の円の中に 3 本線を刻んだ線刻が確認でき、刻まれた時期は不明であるが、家紋として用いられた引両紋の形に類似している。

(3) 歴史的背景

江戸時代の『和州寺社記』によると、石寺の寺域内は本堂、行者堂、葛城明神祠、金銅童子堂、八王子祠、三十八所社で構成されていた。本堂は役行者が請来したとされる薬師如来を本尊とし、その他に日光、月光、弥勒、文殊、普賢の菩薩が安置されていた。鎌倉時代初期のものと思われる『諸山縁起』第 75 条には、「七十五　本尊七躰なり。薬師三尊、弥勒三尊、月動大聖なり。梅・樫立つ。久清仙人の滝あり。行道所なり。法花経如法経の石の箱、他所に飛行す。大般若は留まる。閼伽の水あり。般若野の般若経は口伝あるべし。常不軽菩薩品第二十。千四百八十三字なり。」とあり、嘉永 3 年（1850）に刊行された『葛嶺雑記』の石寺の条では「和州葛上郡金剛山惣坊の内、五條御代官支配所。本堂薬師と日光月光仏、又弥勒・文殊・普賢、開山堂御作の神変大士御壮年の像もあり小野篁作、三十八所明神、経塚石。妙　常不軽菩薩品第二十之地」と記されており、両書の記述は一致している。そして、『葛嶺雑記』に所収された、智航上人が詠った和歌には、

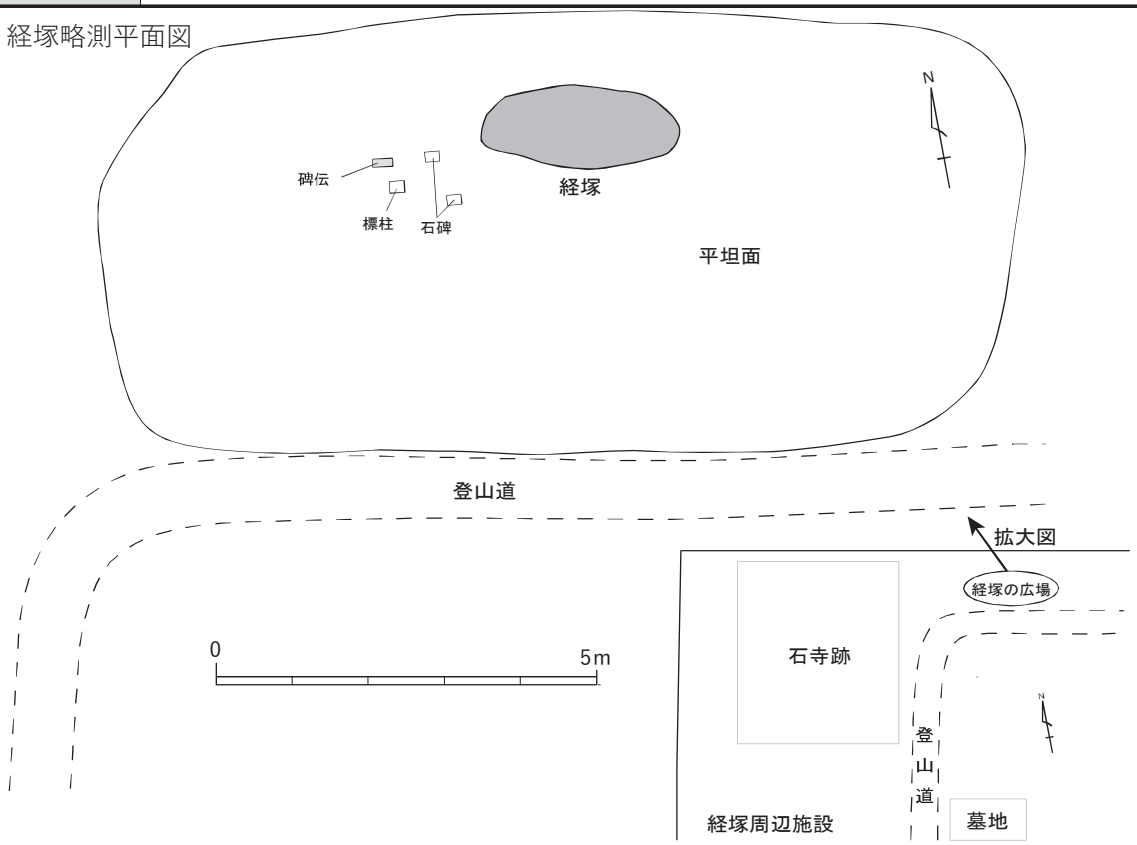
石寺に　緑の色の　真木葉たつ
　華の盛りを　見るよしもがな

とあり、江戸時代の末期には既に荒廃していたことが窺える。

20. 第二十経塚　石寺跡・常不軽菩薩品

所在地	奈良県御所市鴨神	地　形	山腹
緯度・経度	北緯34° 24`34”・東経135° 41`17”	標　高	768m
設置物	経塚、石碑（現代）2本、標柱（現代）、碑伝(現代)		
備　考			

経塚略測平面図

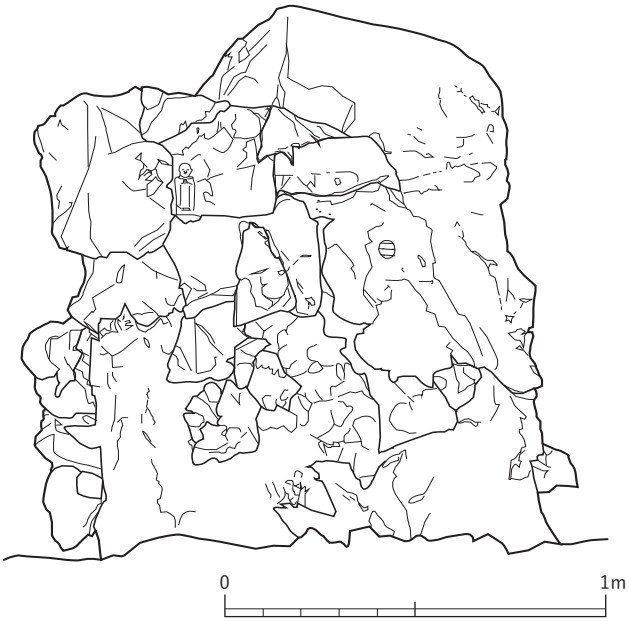


経塚写真（全景）

20. 第二十経塚　石寺跡・常不軽菩薩品石造物

石　材	花崗岩	形　式	自然石
法　量	幅2.7m、奥行1.1m、高さ2.8m	年　代	不詳
銘　文	なし		
備　考	前面に仏像と中央右寄りに引両紋と思しき刻印が確認できる。		

石造物実測図・写真



2　引両紋？

3　経塚と碑伝・石碑（東から）

1　経塚正面（南から）

4　経塚背面（北から）

21. 第二十一経塚　金剛山（こんごうざん）　如来神力品（にょらいじんりきほん）（御所市）

(1) 位置と周辺の状況

金剛山　如来神力品（葛城修験第二十一経塚）は、御所市高天に所在する。金剛山山頂より東に下った湧出岳山頂の一角に佇んでおり、周囲には電波塔、展望塔、一等三角点などがある。展望塔は現在、上ることはできない。

(2) 現地の状況

経塚は、コンクリートと石で作られた土台の上に、石碑を乗せた形となっている。数年前まで、経塚の周囲には柵による囲いが設置されていたが、現在は取り払われている。経塚全体の規模は、高さ、幅、奥行のいずれも 1.5 mで、石碑の石材は花崗岩である。正面から見て左手前に修験者の碑伝置き場が設けられている。石碑の表面には「梵字（バク）（註 1）妙　法蓮華経如来神力品第廿一」とあり、裏面には「昭和四十六年四月再建之　葛城二十八宿顕彰会」と刻されている。

(3) 歴史的背景

鎌倉時代初期のものと思われる『諸山縁起』第 76 条には、「湧出嶽、神力品第廿一。一千百卅八字なり。方丈池あり。第八未出光童子は湧出口に坐す。東北方仏の垂跡なり。般若心経一万巻ありと云へり。千巻ありとも云へり。両説あり。七寸の玉埋むと云ふは、金玉なれば云ふか。口伝尋ぬべし。これ等の在処吉々秘すべし。」と経塚にかんする詳細が記されている。また、前文の第 75 条には第二十番経塚の石寺にかんすることが、後文の第 77 条には金剛山寺（現在の転法輪寺）にかんすることが記載される。つまり、当時の修験ルートは、石寺（第二十番経塚）→湧出嶽（第二十一番経塚）→金剛山寺の順番で巡るルートとなっていた。

また、嘉永 3 年（1850）に刊行された『葛嶺雑記』の金剛山転法輪寺の条では、「金剛山より、石寺にいたらんとなすみち、左りに入る、湧出のたけ経塚有。妙　如来神力品第二十一之地」とあり、金剛山転法輪寺から石寺へと向かう道中に、湧出岳があると記されている。つまり、金剛山転法輪寺→湧出岳→石寺の順番となる。

このように、湧出岳の位置については、両書の記載順は逆転しているものの、前後の位置関係については違いがない。

また、上記に続いて添えられた和歌には、

出給ふ　佛ともなく　神となく

経とくきけは　山彦の声

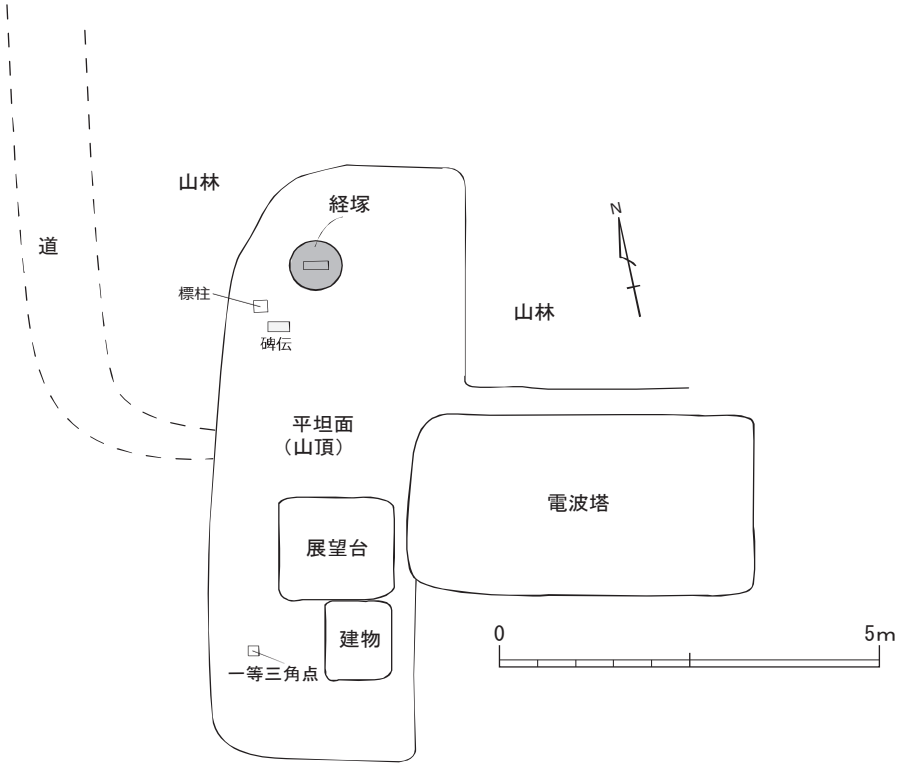
と詠まれている。「仏でもなく神でもなく、お経のように聞こえるのは山彦の声である」と直訳できる。

註 1：石碑に刻まれた梵字は古代インド文字で、一字で仏や菩薩を表現している。本経塚に刻まれた梵字は釈迦如来と考えられる。

21. 第二十一経塚　金剛山・如来神力品

所在地	奈良県御所市高天	地　形	山頂
緯度・経度	北緯34° 24’55”・東経135° 40’55”E	標　高	952m
設置物	経塚、標柱（現代）、碑伝（現代）		
備　考			

経塚略測平面図

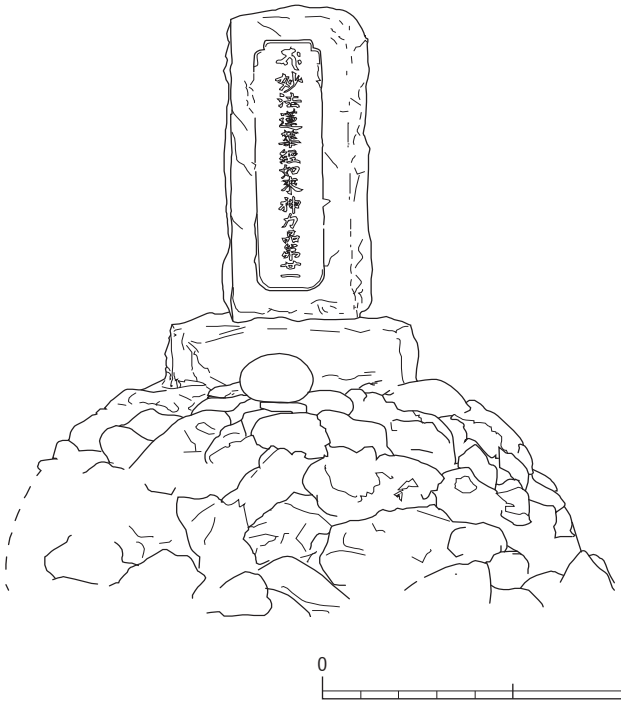


経塚写真（全景）

21. 第二十一経塚　金剛山・如来神力品石造物

石　材	花崗岩	形　式	加工石
法　量	高さ1.5m幅1.5m奥行1.5m	年　代	昭和46年（1971年）
銘　文	梵字（バク）妙法蓮華経如来神力品第廿一		
備　考	左下の部分は苔が生えており、礫の大きさなどが確認出来なかった。		

石造物実測図・写真



1　経塚正面（南から）

2　裏面拡大

22. 第二十二経塚　水越多和（みずこしたわ）　嘱累品（ぞくるいほん）　（御所市）

(1) 位置と周辺の状況

水越多和　嘱累品（葛城修験第二十二番経塚）は、御所市関屋の金剛山山腹に所在し、金剛山と葛城山の間を通る古道、水越峠近くの山頂にある。金剛山より下山し訪れる場合は、朝原寺跡を経由する。

(2) 現地の状況

経塚は、大きな杉の木の根元にあり、荒廃していた祠が昭和 61 年（1981）に再建されたものである。石垣の上に設置されており、祠の付近に新しい石碑が 2 カ所設置されている。祠の中には、１躯の石造仏があり、その背後には祠を再建した人々の名前が、銅板に刻まれ立て掛けられている。石造仏は風化が激しいものの、ハートの形を呈した光背の前面に頭部や体部の輪郭を目視で認識することができ、右手には錫杖が表現されている。

(3) 歴史的背景

鎌倉時代初期のものと思われる『諸山縁起』第 80 条には、「八十　水越の宿　属累品第二十二。四百六十三字なり。飛経が獄　大隣下（おおとうげ）」とあり、飛経が獄と大隣下は、水越峠を指していると考えられている（桜井 1975）。

嘉永 3 年（1850）に刊行された『葛嶺雑記』水越経塚の条には「和州葛上郡関屋村の水越たわの地蔵是也。妙　属累品第二十二之地」とある。葛上郡関屋村は、御所市に所在する水越峠付近の集落を指している。また、上記に続いて添えられた和歌には、

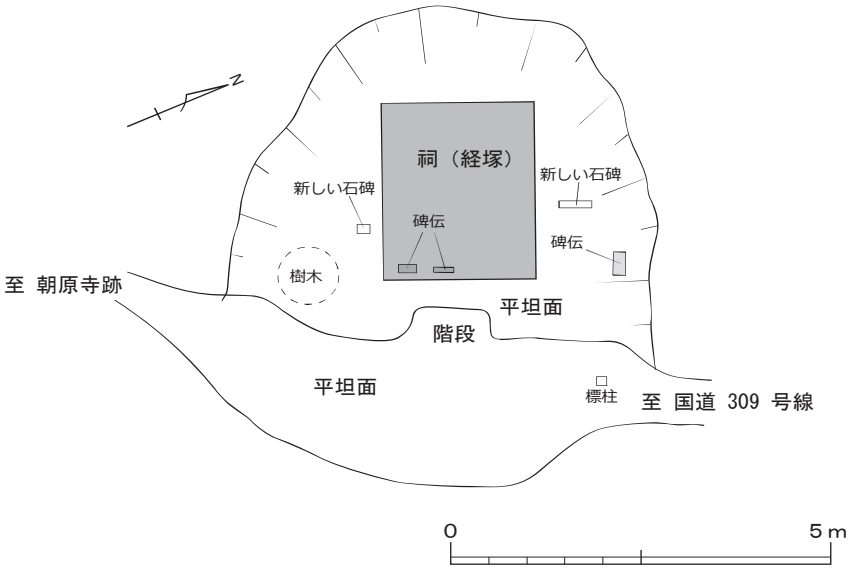
国分の　関屋をあけて　川守は
　法に随ふ　みつこしのさと

と記されている。

22. 第二十二経塚　水越多和・嘱累品

所在地	奈良県御所市関屋	地　形	山腹
緯度・経度	北緯34° 26’12”・東経135° 41’50”	標　高	396m
設置物	祠（経塚）、石碑（現代）2カ所、標柱（現代）、碑伝（現代）3カ所		
備　考			

経塚略測平面図

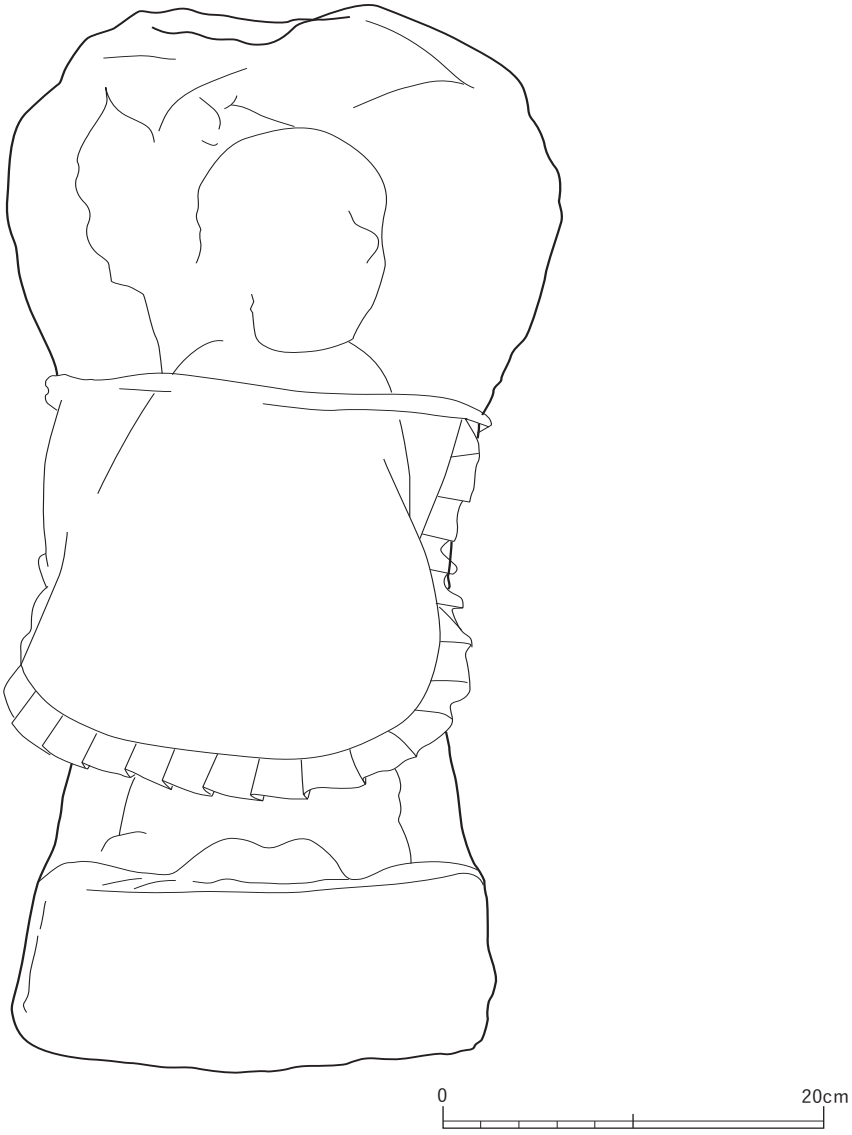


経塚写真（全景）

22. 第二十二経塚　水越多和・嘱累品石造物

石　材	花崗岩	形　式	石造仏
法　量	高さ60cm、幅:最大30cm最小21cm、奥行21cm	年　代	不明
銘　文	なし		
備　考	石造仏背後に経塚を再建した人の名前が刻まれた銅板が置かれている。		

石造物実測図・写真



1　石造仏正面（東から）

2　全景（東から）

3　経塚と碑伝、標柱

23. 第二十三経塚　倶尸羅（くしら）　薬王菩薩本事品（やくおうぼさつほんじほん）（御所市）

倶尸羅　薬王菩薩本事品（葛城修験第二十三番経塚）は今日まで正確な所在地が分かっていない。候補地として挙げられる「倶尸羅の経塚」、「櫛羅の滝」、「猿目の六地蔵」の 3 カ所は、いずれも御所市櫛羅に所在する。現在は「倶尸羅の経塚」が最も有力な候補地とされているが、その他 2 カ所はそれぞれの文献から異なった位置が想定されているため、その諸説を紹介する。

23-1　倶尸羅　薬王菩薩本事品（葛城修験第二十三番経塚）

現在第二十三経塚地とされている場所は、葛城山山頂に至る県道 213 号線の道中に所在する。現地は、奥に配置される室町時代中期の五輪塔が中心となり、石碑、石造仏、碑伝、標柱などが取り囲んでいる。この五輪塔は櫛羅の地蔵寺跡から移されたもので、幅と奥行が 57 ㎝、高さが約 1.5 ｍであり、「梵字（ア）（註 1)」が地輪に刻されている。

23-2　櫛羅の滝

櫛羅の滝は、葛城山の登山道中に所在する。経塚の候補地について、初めて文字資料として窺うことができるのは、鎌倉時代初期のものと思われる『諸山縁起』である。第 82 条堺（戒）那山の条には「八十二　北千坊あり。本仏は薬師、地主は牛頭天王宮の八王子なり。薬王品第二十三。二千八百五字なり。行者授法の本尊曼荼羅三尊を安置す。口伝あり。秘の中の秘なり。口伝すべからざるものなり。この獄は即ち葛木獄なり。三重の閼伽水あり。」とある。三重の閼伽水は、「櫛羅の滝」を指しているとされており、葛城山の東尾根中腹には堺（戒）那寺が構えられていた。また、この地には役行者が一言主を呪縛した言い伝えがある。現在、櫛羅の滝は崩落の危険性があるため、立ち入ることができない。なお、昔は滝行のための脱衣小屋も用意されていたが、現在は火災に遭い失われている。

23-3　六地蔵石仏

六地蔵石仏は、葛城修験第二十三番経塚の南方 100 ｍに所在する。嘉永 3 年（1850）に刊行された『葛嶺雑記』倶尸羅経塚の条では次のように記されている。「和州葛上郡くじら村字さるめのぢざうといふ所なり。妙　薬王菩薩本事品第二十三之地　此辺久米路にちかし」とある。つまり、櫛羅にある「猿目の六地蔵（註 2)」が六地蔵石仏に該当する。これに続いて

岩橋の　くしる世にこそ　なほみたし
　華に明けゆく　神の顔はせ

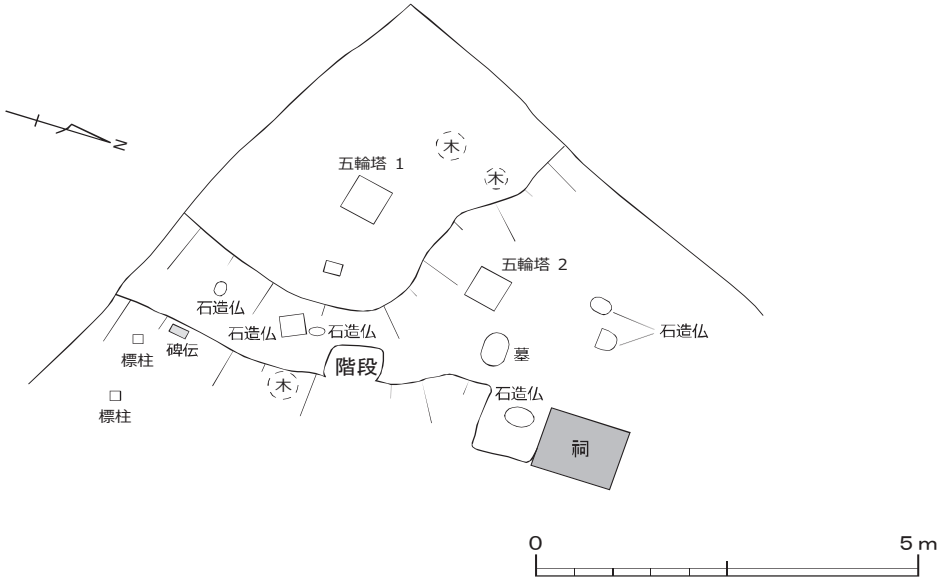
と記されている。華は法華経を表しており、「猿目の六地蔵」に埋納したことを暗示している。「猿目の六地蔵」は、呼称のとおり、1 つの巨石に 6 体の石仏が葛城山麓の方向に向けて彫られている。

註 1:五輪塔は上から、「空輪」、「風輪」、「火輪」、「水輪」、「地輪」として宇宙五大要素を象徴している。本経塚には、地輪のみに地を表す梵字が刻まれている。
註 2：現在は「六地蔵石仏」と呼ばれる。

23. 第二十三経塚　倶尸羅　薬王菩薩本事品

所在地	奈良県御所市櫛羅	地　形	山麓
緯度・経度	北緯34° 27’49”・東経135° 42’48”	標　高	151m
設置物	五輪塔1（室町中期）、五輪塔2（時期不明）、石造仏6体、碑伝（現代）、標柱2カ所（現代）、祠、墓		
備　考	建物の中に観音菩薩と不動明王が安置されている。		

経塚略測平面図

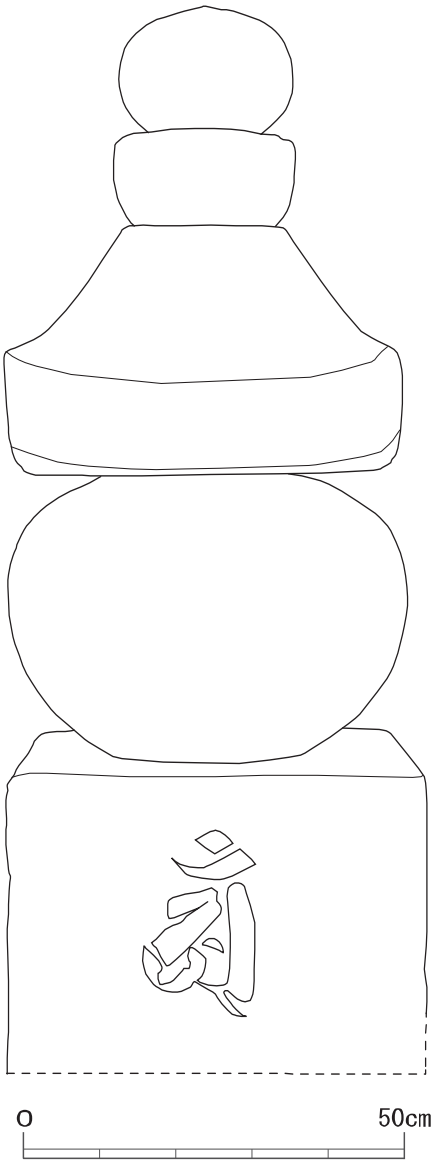


経塚写真（全景）

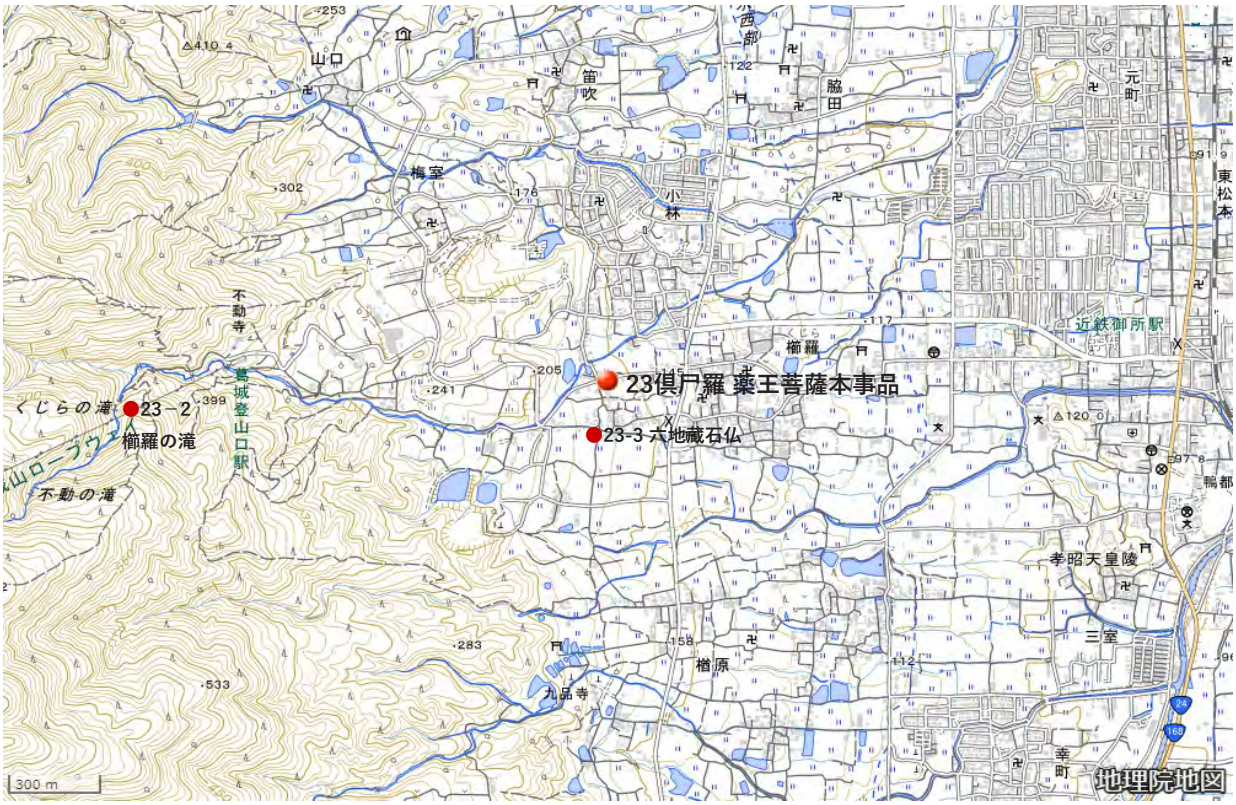
23. 第二十三経塚　倶尸羅・薬王菩薩本事品石造物

石　材	花崗岩	形　式	五輪塔
法　量	高さ1.5m、幅57cm、奥行57cm	年　代	室町中期
銘　文	梵字（ア）地輪		
備　考			

石造物実測図・写真



1　五輪塔正面(北から)

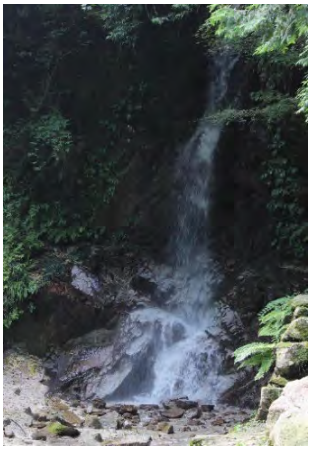


1　経塚候補地の位置

2　五輪塔と碑伝、標柱（東から）

3　六地蔵石仏（西から）

3　六地蔵石仏から見た葛城山麓（東から）



5　櫛羅の滝（東から）

24. 第二十四経塚　平石峠　妙音菩薩品（ひらいしとうげみょうおんぼさつほん）（河南町）

(1) 位置と周辺の状況

二上山の南、河内と大和の国境を成す岩橋山北嶺、平石峠にある葛城修験第 24 経塚。

第 25 経塚地の高貴寺から、里に 10 分程下り、東に平石峠を目指して上る。約 20 分から 30 分ほど山道を歩き、平石峠頂上手前の山の斜面に所在する。

この岩橋山周辺には、役行者と地主神である一言主神との伝説が語られる久米の岩橋や、巨岩が重なる胎内くぐりと呼ばれる行所など、修験の伝承と奇岩が多く見られる。

(2) 現地の現況

階段を上り、石積をした役行者石祠と不動明王が刻まれた石造が左右に建ち並んでおり、役行者と不動明王を刻んだ石仏２体が祀られている。

左側の幅 90 ㎝、奥行 60 ㎝、高さ 100 ㎝程の石祠の中に役行者が祀られている。役行者の石仏は右手に錫杖、左手には埋納されたと伝えられている法華経八巻２８品のうちの１品を入れた経筒を持ち、素足に下駄をはき、腰かけている様子である。その姿は修験者のみならず訪れた人々にそっと優しくほほえみ語りかけるような印象を与える。

右側の不動明王の石仏は高さ 80cm、奥行 45cm、幅 70cm 程で、不動明王の上部に梵字で不動明王を表す「カーン」が刻まれている。不動明王は、大日如来の化身とされている。その背中には光背（こうはい）と呼ばれる輪と火焔光（かえんこう）が刻まれており、火焔光は、怒りを炎で表現したものであり、その炎は煩悩を焼き尽くす意味がある。

(3) 歴史的背景

『今昔物語』に「昔、役優婆塞、葛城の峰より金御嶽へ通ひ給はんとて石橋をかけなんとす。これを諸々の神に命じ給ふ。葛城一言主神、容貌いと醜くければ昼の役をはばかりて夜を待ち給ひしより、橋を渡し得給はず。行者怒りて一言主神を呪縛して深谷に押し籠め置き給へり。…」とある。役行者が、現在の奈良県御所市に鎮座する一言主神（ひとことぬしのかみ）をはじめとする日本の神々に命じて、奈良県吉野地方にある金峰山（きんぷせん）まで磐の橋を架けようとしたという伝説で、ここから「岩橋山」の名前がついたと言われている。また、山頂付近にある久米の岩橋と呼ばれる石が、この時の橋の名残であると言われている。

この地は古来より河内と大和を結ぶ主要道の一つで頻繁な往来があったところであり、『今昔物語』からも久米の岩橋や鉾立石、鍋釜石、胎内くぐり等、この立石原一帯は往古の葛城修験行所であったと推察される。

24. 第二十四経塚　平石峠・妙音菩薩品

所在地	大阪府南河内郡河南町大字平石	地　形	峠頂上付近の斜面
緯度・経度	北緯34° 30′ 8″ ・東経135° 40′ 24″	標　高	378m
設置物	石祠２基・標柱（現代）		
備　考	役行者と不動明王を刻んだ石仏２体が祀られている。		

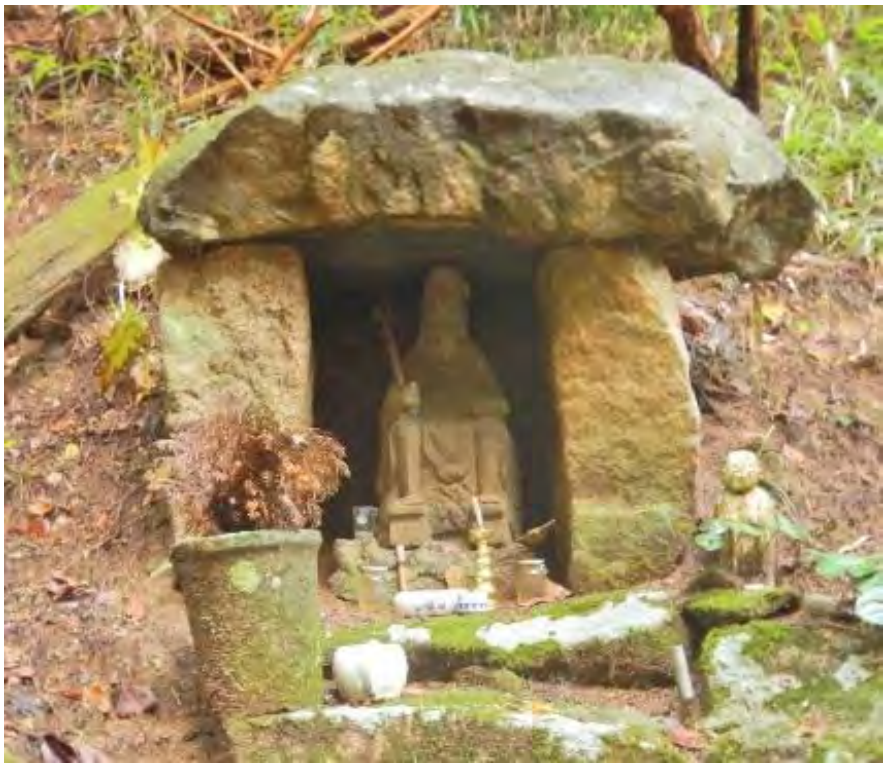
経塚略測平面図

経塚写真（全景）

24. 第二十四経塚　平石峠・妙音菩薩品石造物

石　材	不詳	形　式	石祠
法　量	高さ100cm・幅90cm・奥行60cm	年　代	不詳
銘　文			
備　考	役行者と不動明王を刻んだ石仏２体が祀られている。		

石造物実測図・写真



25. 第二十五経塚　高貴寺香華畑　観世音菩薩普門品　（河南町）

(1) 位置と周辺の状況

河南町平石にある高貴寺境内の山門を通り、本堂左脇を抜けて進んだ先に鎮守社があり、その左横に位置する。大きい石祠と小さい石祠とあり、『葛嶺雑記』によれば「経塚は香華畑なる地蔵堂の前に石塚２基あり、その小さき方かも。妙観世音菩薩普門品第二十五之地。」と記されている。地蔵堂の現在地については判明されていないが石祠２基のうち、小基が経塚とされている。

経塚のある神下山高貴寺周囲には磐船神社や平石城址といった神社や史跡がある。

(2) 現地の現況

平坦地で、祠の近くには鎮守社と石灯籠が建っている。また、周辺には大きな巨石が確認できる。

巨石の懐に大小２基の石祠がある。大きい方は高さ 82.5cm、横幅 86.5cm、奥行 88.2cm であり、小さい方は高さ 66.5cm、横幅 58cm、奥行き 59.5cm である。２基ともに石質は花崗岩で江戸時代のもので、小基が経塚、大基は稲荷社とされている。

小基は不動明王を祀り、金堂には本尊の五大明王、講堂には重要文化財で秘仏の木造弁財天座像とともに役行者、慈雲尊者像、弘法大師像などが安置され、祀られている。

(3) 歴史的背景

第２５番経塚周辺には、古くからの伝承や歴史が残る。

経塚のある神下山高貴寺は文武天皇の時代に役行者が開基したとされている。『高貴寺縁起』によれば「行者、葛城四七の勝窟を品選し、妙経に擬へて練行するに、此の山を普門品に配し、香花供養して勤修精進す。故に香華寺と名づくるなり。」とある。創建当時は仏に供養する香華が四季絶えなかったので「香華寺」と名付けられ、後に弘法大師が修練中に高貴徳王菩薩を感得されたので「高貴寺」と呼ぶようになった。11 世紀から 12 世紀の頃までは法燈輝いていたが、戦乱の世に焼失し衰微した。18 世紀の中ごろ、慈雲尊者が在住し寺門を再興した。

延宝７年製作の『高貴寺縁起絵巻』には、寺の創建を役行者に求め、寺に隣接して所在する磐船についての降臨伝承などが記載されている。絵巻には役行者が前鬼と後鬼を従えて、「葛城の諸嶽にして二十八ヵ所の霊場を開拓し妙法華の二十八品に準擬せり伝へいふ当山は第二十五品普門品にあたれりと役公ひそかに後世大慈大悲の菩薩の出現を此山にしてまちたまふもの」と記されている。

(4) その他

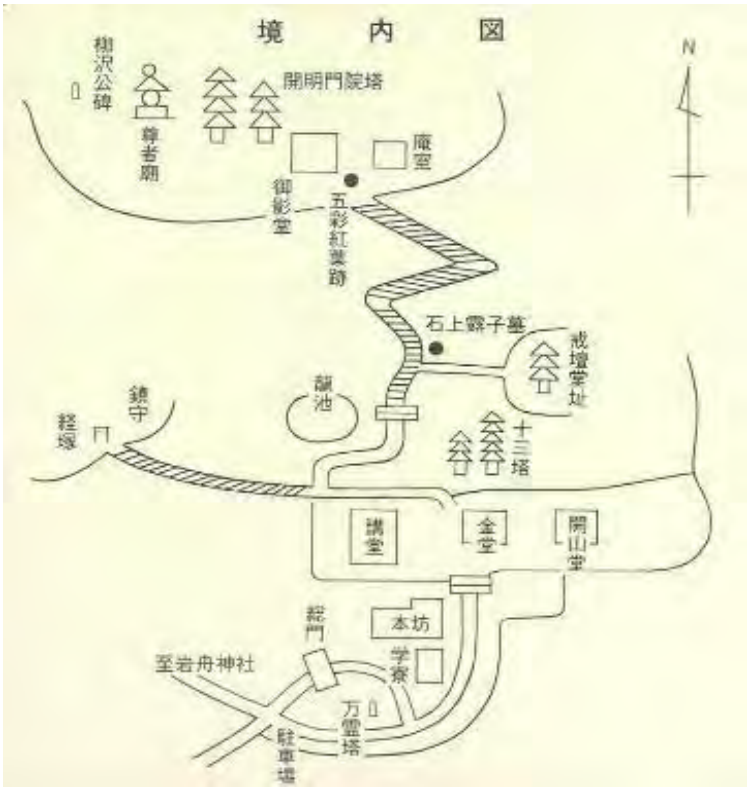
高貴寺の近くにある磐船神社は、『先代旧事本紀』によると饒速日命（にぎはやひのみこと）が天磐船に乗ってはじめておちつかれた河上哮峰(かわかみたけるがみね)であり、創祀はこれに由来するとされている。境内には奇岩巨石が重なるように並び、舟の形をした岩が 48 個あるといわれている。長い間、神社は日本の自然信仰の原点とも言えるような場所である「神奈備」の様式をとっていたようで、山全体がご神体として信仰していたと伝えられている。

江戸時代に高貴寺の慈雲尊者が神儒仏の学をきわめ、神社を「栂の宮（とがのみや）」と命名し、葛城真道の根本道場とした。明治初年の神仏分離によって高貴寺より離れ、磐船神社と称するようになった。

25. 第二十五経塚　高貴寺香華畑・観世音菩薩普門品

所在地	大阪府南河内郡河南町大字平石	地　形	境内平坦地
緯度・経度	北緯34° 29′ 59″ ・東経135° 39′ 50″	標　高	288.8m
設置物	石祠、碑伝		
備　考			

経塚略測平面図　　『神下山　高貴寺』リーフレットより



経塚写真（全景）

25. 第二十五経塚　高貴寺香華畑・観世音菩薩普門品石造物

石　材	花崗岩	形　式	石祠
法　量	高さ66.5cm・幅58cm・奥行59.5cm	年　代	江戸時代
銘　文			
備　考	左の小基が経塚とされている。		

石造物実測図・写真

26. 第二十六経塚　二上山（にじょうざん）　陀羅尼品（だらにほん）（葛城市）

二上山雄岳山頂に位置する。もとは二上山南麓の「岩屋」（大阪府太子町）にあったものを、現在の場所に移したと考えられている（『諸山縁起』より）。

現在の塚には、南側に遙拝するための石造の階段と、コンクリートを用いた小通路がとりつく。通路の両脇には、狛犬と石灯籠が１個体ずつ設置されている。なお、塚の周辺に石灯籠の台座と思われる石造物が放置されている。

塚は、外側に自然石を積み上げ、内部に土を充填する形態をとる。平面形状は東西径 2.2m、南北径 2.8m の楕円形を呈する。塚の外側石材は、広い面を表にして配置されている。使用石材の大きさにより、場所によっては１～３段程度石を積み上げる。高さは約 0.5 mである。

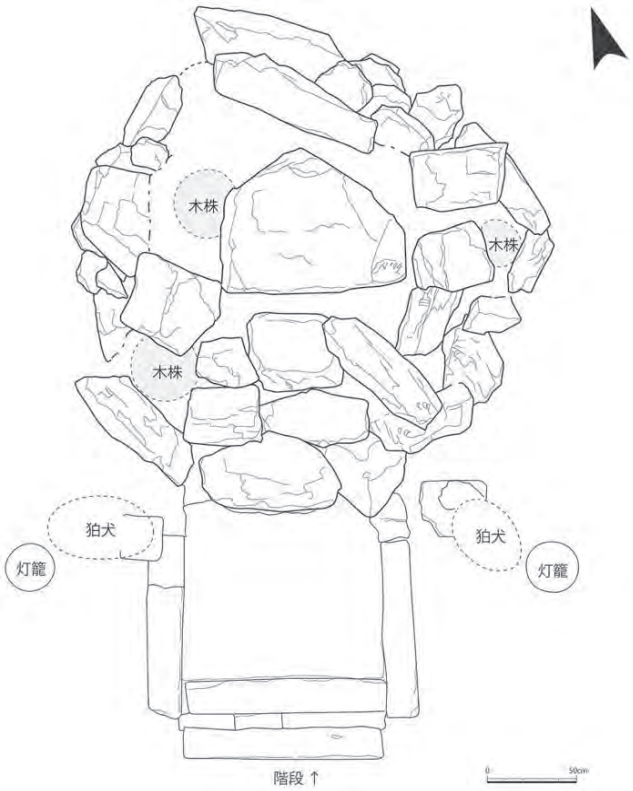
塚の中心には、上部が平坦な１m× 0.7 mの大石を据える。その南西隅に接するように、高さ 0.5 mの立石状の石材を配置する。

塚上面にはこれらの石材のほか、数石が南側を中心に配置されている。石材の間は、礫によって充填される。北側にこのような造作は認められないため、南側の遙拝用施設が設けられたことにともない、追加されたものである可能性が考えられる。

26. 第二十六経塚　二上山・陀羅尼品

所在地	奈良県葛城市染野	地　形	山頂
緯度・経度	北緯34° 40’41″ 、東経135° 40’41″	標　高	582m
設置物	石灯籠２、狛犬２		
備　考			

経塚略測平面図



経塚写真（全景）

27. 第二十七経塚　逢坂（おうさか）　妙荘厳王本事品（みょうしょうごんのうほんじほん）（香芝市）

(1) 位置と周辺の状況

第 27 番経塚は、香芝市西部逢坂の集落内に位置する。経塚周辺には、『古事記』崇神段や『日本書記』崇神天皇九年三月一五日の条にみられる、「大坂神」を祀ったとされる大坂山口神社が鎮座し、本殿は、奈良県有形文化財（建造物）に指定されている。大坂山口神社の付近には、香芝市を東西に横断する伊勢街道が通っており、近世・近代に社寺詣道や物資運搬道路として大いに利用されていた。

(2) 現地の現況

香芝市逢坂の集落内にある個人の邸宅内（一般非公開）に所在する。平成 11 年度に保存修理のため解体修理を実施し、同年度に香芝市有形文化財（建造物）に指定されている。

(3) 歴史的背景

鎌倉時代の『諸山縁起』には、「大坂の隣下」、室町時代の『葛城峯中記』には「八部山長谷寺」、同じく室町時代の『葛城修行灌頂式』には「田尻」と記されるなど、時代によって経塚の所在地が変わっている。嘉永三年（1850 年）刊の『葛嶺雑記』には「逢坂の経塚」と記されており、江戸時代に入って現在地に比定されている。

一方、『大和下田村史』及び『香芝町史』には「大坂直（おおさかのあたえ）の墓」と伝えられる『新撰姓氏録』の大和神別に「大坂直天道根命之五世之後也」とあり、古くは大坂山口神社に奉仕した祝部で、神職の祖であると伝えられている。

平成 11 年度に文化財指定に伴う解体修理を実施したが、方位に若干のズレが生じている点と、基礎石の下に経典類などの埋納物が無かったことから、原位置を留めていないことが明らかになっている。

(4) 層塔構成

現状は基礎・初層軸部・初層笠部・二層笠部・三層笠部・四層笠部・五層笠部・六層笠部の８石で構成され、初層笠部より上は、笠上に上層軸部を作り出す形式となっている。

基礎は二石に割れており、基礎の上に塔身（軸部と笠部）が据えられ、初層軸部は縦長で、縦横の比率が横 1 に対し縦 1.03 になる。塔全体に風化が激しく、現状では六層笠部（七層軸部）までが残されており、笠・軸部幅の逓減率から当初は九層であったと推定される。また、現状の六層部分は軒部が全て崩落し、上層軸部と区別がつかない。各部とも角がとれて丸くなり、細かい亀裂が全体にみられる。

層塔は、一般的には三・五・七・九・十一・十三層のものがみられるが、本塔の場合、六層部分の上面に相輪を差し込むほぞ穴が見られないことからも、さらに上層があったことが推定される。

基礎の四方に梵字が刻まれており、それぞれの方位の位置に金剛界四仏種子（阿閦如来・宝生如来・阿弥陀如来・不空成就如来）が月輪の中に刻まれている。月輪は軸部の幅に合わせて刻まれており、梵字は鎌倉時代以降の薬研彫りの部分もあるが、基本的には平安時代の平底彫りであり古い様式を残している。

使用石材が凝灰岩であることや月輪の径が軸部幅に近いこと、また梵字が平底彫りになっていることから、鎌倉時代初期の年代に位置づけられ、平安時代と鎌倉時代をつなぐ遺品として貴重である。

27. 第二十七経塚　逢坂・妙荘厳王本事品

所在地	奈良県香芝市逢坂	地　形	市街地
緯度・経度	個人邸宅内のため非表記	標　高	個人邸宅内のため非表記
設置物	層塔（6層）		
備　考	香芝市指定有形文化財（建造物）		

経塚略測平面図

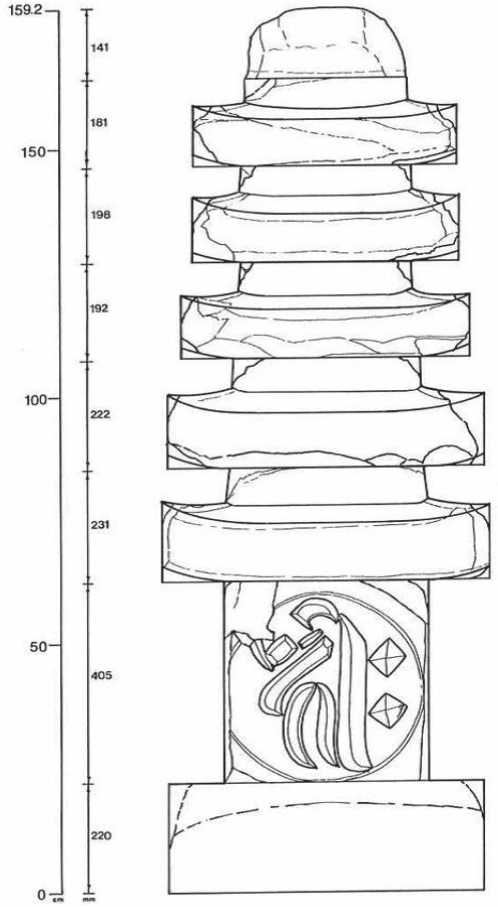
個人住宅内のため非公開

経塚写真（全景）

27. 第二十七経塚　逢坂・妙荘厳王本事品石造物

石　材	凝灰岩	形　式	加工石
法　量	総高159.2cm	年　代	鎌倉時代初期
銘　文	金剛界四仏種子（阿閦如来・宝生如来・阿弥陀如来・不空成就如来）		
備　考			

石造物実測図・写真



28-1. 第二十八経塚 亀の尾宿（かめおしゅく）　普賢菩薩勧発品（ふげんぼさつかんぼつほん）（柏原市）

（1）位置と現況

亀の尾宿は、明神山とともに葛城修験の第二十八経塚とされる。奈良県から大阪府へと流れ出す大和川は、府県境付近で渓谷となり、流れも一段と早くなっている。この地を「亀の瀬」という。亀の瀬には、川の中に多数の巨石がみられ、その一つに「亀岩（亀石）」と呼ばれる巨石がある。亀の甲羅のような岩石が川の中にあり、そこから小さな突起が南西に飛び出しており、まるで甲羅から首を出した亀のようにみえることから「亀岩」と呼ばれてきた。亀の瀬の語源も、この亀岩にあるとする説が有力である。『扶桑略記』の治安３年（1023）に菅原道長が詠んだ漢詩に「亀瀬山之嵐」とあり、遅くとも平安時代には「亀の瀬」と呼ばれていたことがわかる。

（2）歴史的背景

この「亀岩」が第二十八経塚とされている。亀岩は現在も川の中に鎮座しているが、安山岩の巨石であるため、どこに経塚が設けられていたのかわからない。『葛城峯中記』（室町時代初期成立）には、亀岩に梵字が刻まれて五輪塔が建っていたように記されている。その隣には宝篋印塔も建っていたということであり、これらの石塔を経塚としていたのかもしれないが、増水の危険性のある川中に実際に石塔が建てられていたのか、など疑問も残るところである。『葛嶺雑記』（嘉永３年・1850）にも梵字のみえる大石があり、「亀瀬の経石」と呼ばれたと記されている。亀岩が第二十八経塚とされていたことは間違いないようであるが、経塚の実態はわからない。

亀岩は少し増水すると首が見えなくなり、さらに増水すると亀岩自体が見えないこともある。『大和名所図会』（寛政３年・1791）の「龍田川」の挿絵に亀の瀬の風景が描かれており、そこに現在と同じ姿の「かめ石」が描かれている。周辺には「えぼし石」や「くもいし」も描かれている。この挿絵では、「かめ石」が川のほぼ中央に描かれている。しかし、亀の瀬は地すべりが繰り返されてきた地であり、明治以降の３回の地すべりによって右岸が南へ動き、左岸を開鑿したため現在は右岸近くに位置している。まるで亀岩が動いたように見える。奈良県明日香村にも「亀石」と呼ばれる石があり、「亀石」が動くと大和が洪水になるという伝説があるが、その「亀石」とは亀の瀬の「亀石（亀岩）」のことではないかとする説もある。地すべりが生じると大和川が閉塞され、奈良県の水は流れ出すところがなくなり、広範囲に浸水する。亀岩が動くと、奈良県が洪水になるのである。

亀の瀬の右岸に竜王社（龍王社）と呼ばれる小祠がある。現在の行者らは、この竜王社を第二十八番経塚としている。竜王社のすぐ下の河原が、江戸時代に大和川を往来した剣先船の船着場であった。渓谷となっている亀の瀬を船で往来することができなかったため、大坂から大和川を遡った剣先船はこの地で荷を降ろし、ここからは峠越えで大和国平群郡の立野（現三郷町）まで荷を運んだ。立野からは再び魚簗船に積み替えて大和各地に荷を運んだ。剣先船の船人は、舟運の安全を竜王社に祈っていた。「大坂剣先船問屋中」の建てた石燈籠や「堂島濱」と刻まれた石鳥居が立っている。江戸時代から竜王社が神聖な地として意識されていたことがわかる。

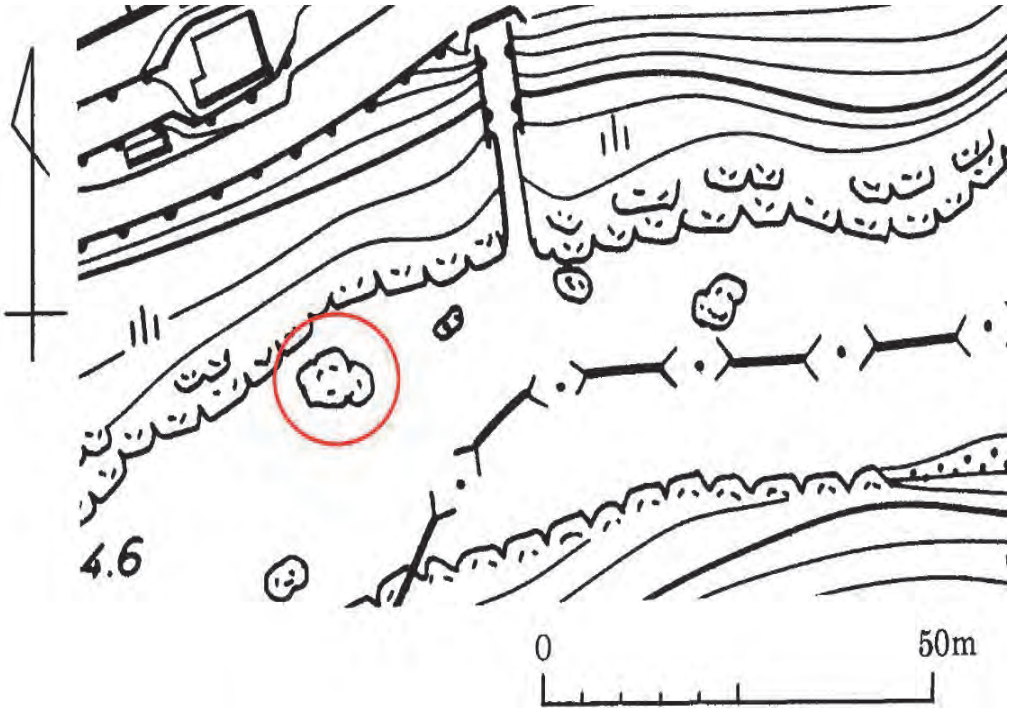
かつては川の中に入って亀岩を最終の修行地としていたのかもしれない。その後、その近くで船人らが祀っていた竜王社を最終地とするようになったのではないだろうか。

亀の瀬は、「もうすべらせない!!　龍田古道の心臓部「亀の瀬」を越えてゆけ」として、日本遺産「龍田古道・亀の瀬」にも認定されており、亀岩、竜王社はその構成文化財にもなっている。

28-1. 第二十八経塚　亀の尾宿・普賢菩薩勧発品

所在地	柏原市峠833番地先	地　形	河川（大和川）内
緯度・経度	北緯34° 34′ 30″ 東経135° 40′ 30″	標　高	22m
設置物	大和川の狭隘部亀の瀬にある亀岩は、川の中に露頭した自然石。		
備　考	亀の形状をした自然石を経塚とする。		

経塚略測平面図

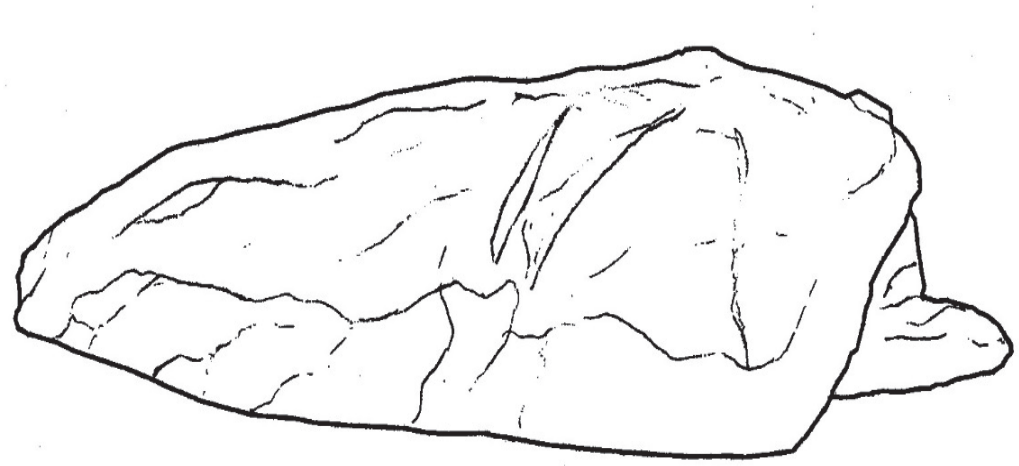


経塚写真（全景）

28-1. 第二十八経塚　亀の尾宿・普賢菩薩勧発品石造物

石　材	安山岩	形　式	自然石
法　量	長さ6.4m、高さ1.8m（水面上）	年　代	不明
銘　文	なし		
備　考			

石造物実測図・写真



『大和名所図会』に描かれた亀の瀬

1　亀の瀬全景

2　竜王社

＜参考地図＞

28-1. 第 28 経塚　亀の尾宿 普賢菩薩勧発品

28-2. 第 28 経塚　明神山 普賢菩薩勧発品

28-2. 第二十八経塚　明神山（みょうじんやま）　普賢菩薩勧発品（ふげんぼさつかんぼつほん）　（王寺町）

(1) 位置と周辺の状況（参考地図 129 頁）

第 28 番普賢菩薩勧発品の経塚の所在地は、亀の尾宿と明神山に説が分かれている。明神山にあるとする説は山頂に祀られる水神社が経塚とされている。標高 273.6m の明神山は金剛山地に位置し、同じく金剛山地にある第 26 番経塚の二上山、第 27 番経塚の逢坂から尾根を北上するようなかたちで続き、明神山を経て第 28 番経塚のもう一方の説である亀の尾宿（亀の瀬）へと連なる。亀の瀬は生駒山地と金剛山地を分ける大和川が流れる位置にあり明神山の北麓に当たる。第 28 番経塚が明神山と亀の瀬のいずれであっても、海から始まる葛城修験が川で終結する格好となる。

(2) 現地の現況

明神山の山頂は平成８年（1996）に「明神山自然の森」として公園化され、展望デッキ及びトイレが新設されて、従来から祀られていた水神社も建て替えられた。現在の水神社は南北約 40 ｍ、東西約 25 ｍの山頂広場の中央北寄りのところに、東西幅８ｍ、南北奥行き７ｍの方形土壇が築かれ、その上に木造小祠を納める鉄筋コンクリート造の覆屋が東面して建てられている。覆屋の大きさは南北幅約 2.2 ｍ、東西奥行き約３ｍで、屋根に千木が施されて神明造の様式を持っている。覆屋正面に設えられた観音開きの扉を開けると中に小祠が祀られている。小祠は幅 110cm、奥行き 130cm、高さ 46cm の石貼りの基礎の上に、最大幅 113cm、最大奥行き 89.5cm、最大高さ 175cm の大きさで、一間社神明造を基本にしている。葛城修験の碑伝は小祠の前に納められている。昭和 40 年（1965）頃に撮影された写真によれば、公園化される前の水神社も広場になった山頂にあり、石積み基礎の上に春日造の小祠が祀られ、小祠前に木製鳥居が建てられていた。なお、水神社に拝殿はなく、第 28 番経塚を示す石造物などもない。

(3) 歴史的背景

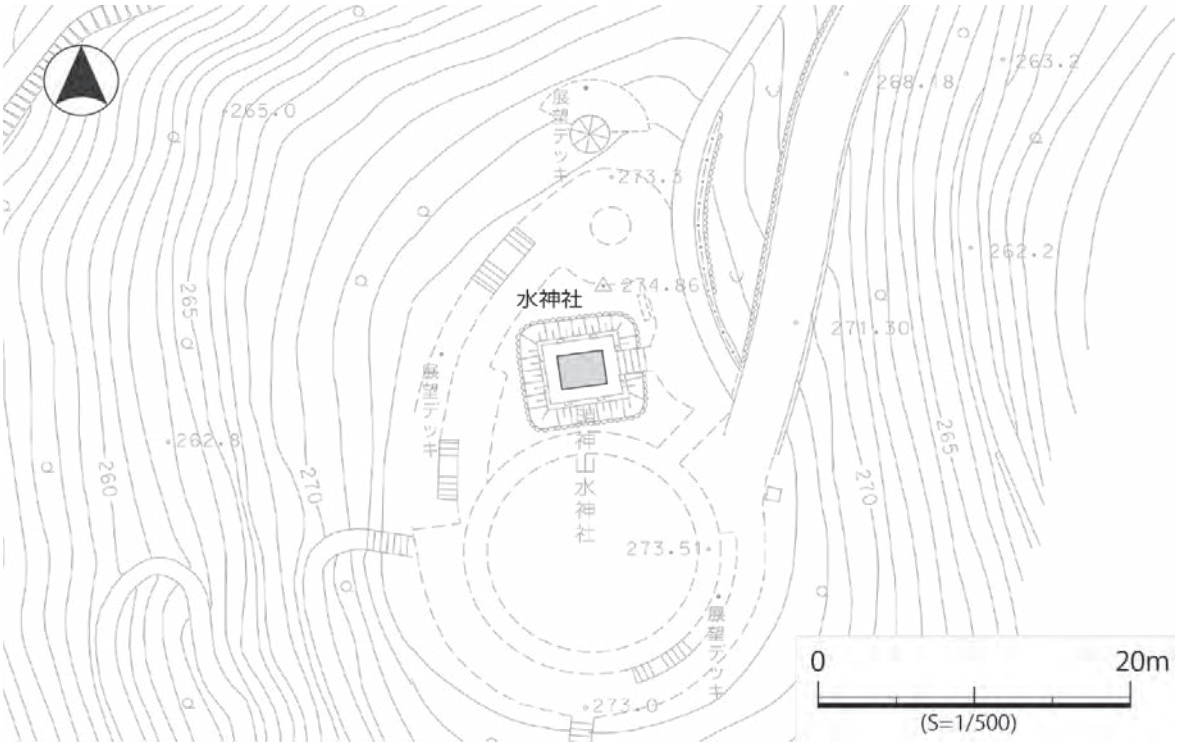
現在、水神社は王寺町畠田地区の畠田水利組合によって祭祀と管理が行われている。明神山は、近世の古文書・古記録では「西山」と記されており、これは畠田地区の集落から見て西に所在する山であることによる。明神山の中腹に畠田地区の水田を灌漑するカンゴ上池・下池があることから、山頂に水神社を祀っていると推測される。記録によればカンゴ池が築造されたのは文政元年（1818）である。水神社では今なお毎年９月１日にハッサク（八朔）の祭りが行われている。稲の実りを祝う祭りで、畠田のムラの人々が明神山で飲食を楽しんできた習慣がある。一方、一般に千駄焚きなどと呼ばれる雨乞いもかつては行われていた。また、明神山の山頂は文政のおかげ参りに伴って送迎（ひるめ）太神宮が創建された場所でもある。送迎太神宮は文政 13 年（1830）から翌天保２年（1831）にかけてのみ建立されており、伊勢の別宮として多くの参詣があった。送迎太神宮の名にある送迎（ひるめ）とは、畠田地区にある集落の名称で、その昔、聖徳太子が河内と斑鳩を往復した際に、送りの使いと迎えの使いが昼飯（ひるめし）時に落ち合った場所であることにより、送迎と書いて「ひるめ」と読む地名伝承がある。

嘉永３年（1850）『葛嶺雑記』によれば、第 28 番経塚は「亀の尾宿」にあると記されるが、天和４年（1684）『資道什物記』には役行者が法華経 28 品の序品を「伽陀ノ窟」に納め、巻尾を「卒都婆峯」に埋めたと記されている。この「卒都婆峯」が明神山に当たると解釈されるが、他に明神山をそう呼んだような記録もなく定かでない。しかしながら、昭和 44 年（1969）刊行の『王寺町史』には、水神社に同 36 年（1961）の年紀を持つ犬鳴山修験道による第 28 番経塚の碑伝が納められていることが記録されており、古くから明神山が第 28 番経塚の候補地であったことがうかがえる。

28-2. 第二十八経塚　明神山・普賢菩薩勧発品

所在地	奈良県北葛城郡王寺町畠田2640	地　形	山頂（平坦地）
緯度・経度	北緯34° 57′ 38″ ・東経135° 67′ 58″	標　高	274m
設置物	鉄筋コンクリート造小祠覆屋（現代） 小祠（現代）・碑伝		
備　考			

経塚略測平面図



経塚写真（全景）

28-2. 第二十八経塚　明神山・普賢菩薩勧発品石造物

石　材	木造	形　式	一間社神明造を基本とする
法　量	下図のとおり	年　代	現代
銘　文	なし		
備　考	経塚に関する石造物等はない		

木造祠寸法図・写真

基礎：奥行き130cm

小祠：最大奥行き89.5cm

第３節　行所等の参考資料（国指定関係）参考資料

第３節では、経塚以外の行所等のうち、国指定文化財であるもの、あるいは国指定文化財にに関係するものについて取り上げる。（構成文化財第 29 番～第 43 番）

29. 加太春日神社（和歌山市）

(1) 位置と周辺の状況

葛城修験の起点に位置する加太・友ヶ島は、江戸時代以前にその周辺の修行場を管理した家が現在でも存続し、法華経の序章にあたる「序品」が埋納された洞窟が良好な状態で残されており、「葛城二十八宿」のなかにおいても、修験の歴史を現代によく伝える場所であると言える。加太春日神社は、加太の町並みの中央に位置し、役行者が友ヶ島を行所として開いたとき守護神としたとされ、葛城修験の行者が必ず立ち寄り参拝を行う場所となっている。

(2) 現地の現況

本殿は、檜皮葺、一間社流造、千鳥破風と軒唐破風付きの建物で、蟇股・欄間・脇障子等に豪華な彫刻が施され、特に恵比寿、貝、海老等の彫刻がみられることは海村の神社として注目され、重要文化財に指定されている。

(3) 歴史的背景

加太春日神社は、創建年代は明確ではないが、『紀伊続風土記』の紀伊国造家旧記の記事によると、神話にいう神武天皇東征の際、紀国造氏の祖である天道根命が神鏡と日矛の二つの神宝を奉じて加太浦に上陸して頓宮を造営し、これが神社の始まりという。『紀伊国名所図会』によると、嘉元年間（1303～1317）に、藤原氏の祖神である春日三社を合祀し、春日神社と称するようになり、天正年間（1573～1592）に和歌山城代の桑山重晴が元は東の山中にあった社殿を現在の位置に遷したという。これを裏付けるように、社殿の棟札には慶長元年（1596）に桑山重晴が建立したことが記されている。

29. 加太春日神社

所在地	和歌山市加太1343	地　形	平野
緯度・経度	北緯34° 16′ 30″ ・ 東経135° 4′ 28″	標　高	6m
設置物	加太春日神社本殿（国指定重要文化財）、拝殿、社務所、鳥居		
備　考			

略測平面図

構成要素写真（全景）

30. 根來寺（ねごろじ） （岩出市）

真言宗中興の祖といわれる興教大師覚鑁上人（こうぎょうだいしかくばんしょうにん）が開山した新義真言宗の総本山。葛城巡礼第３４番の宿に定められた豊福寺（ぶふくじ）を淵源とすることから、葛城修験ゆかりの深い寺である。

根来寺の行者堂には、本尊像に役行者（神変大菩薩／しんべんだいぼさつ）を祀る。役行者は、根来寺の北に連なる葛城山系や大峰信仰を開いた修験道の宗祖。覚鑁上人は、葛城巡礼第３４番の宿に定められた豊福寺を大伝法院末寺とした（「諸山縁起」「根來要書」）。その末寺が現在の根来寺に発展した。

覚鑁上人が在世した平安時代後期は、山岳信仰が盛んな時代で、根来寺ともゆかりの深い鳥羽上皇は生涯に何度も熊野や葛城に入峯している。「根来寺伽藍古絵図」には行者堂の裏から葛城峯入道（みねいりみち）が描かれ、ここが峯入口の一つであった。

このほか、広大な境内には、日本最大の木造多宝塔である国宝の大塔、覚鑁上人の身代わりとなり、危難を救ったと伝わる「三国一のきりもみ不動尊」を祀る不動堂など、貴重な文化財が多数点在している。

30. 根来寺

所在地	岩出市根来2286	地　形	山林（平坦地）
緯度・経度	北緯34° 17′ 13″ ・東経135° 18′ 58″	標　高	106m
設置物	多宝塔（国宝）、大師堂・光明真言殿・大伝法堂・大門・不動堂・行者堂・聖天堂（いずれも重文） 根来寺境内（史跡）、根来寺庭園（名勝）、木造大日如来坐像・木造金剛薩埵坐像 ・尊勝仏頂坐像（いずれも重文）、絹本著色鳥羽天皇像（重文）、木造役行者像（未指定）		
備　考			

根来寺境内案内図（「ねごろ歴史の丘」案内板）

構成要素写真（全景）

1　根来寺行者堂

2　根来寺境内風景

31. 粉河寺（こかわでら）（紀の川市）

(1) 位置と周辺の状況

和泉山脈の山麓南端に位置し、北側の風猛山と南東側の秋葉山に囲まれた谷筋に沿って湾曲した自然地形を利用し、各堂坊が建てられている。粉河寺へは、第６経塚のある志野峠から林道を南へ下り、京奈和自動車道と並行する農免道路を東へ進むと、桧木宿跡を示す現代の石碑がある。石碑を南下すると粉河寺へ至り、北上すると中津川の集落を経て、中津川行者堂や熊野神社へ至る。

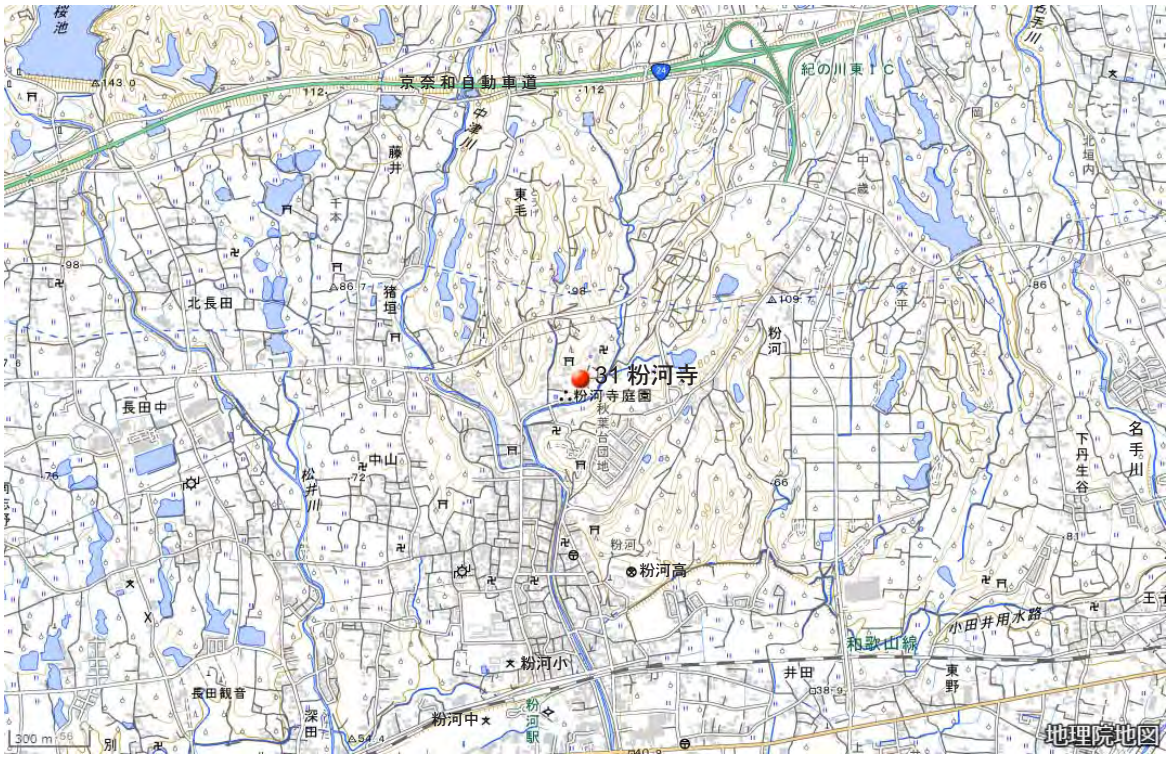
(2) 現在の現況

粉河寺は、天正 13 年（1585）など大きく５度にわたる伽藍焼失にあいながらも順次復興整備されている。現在では、享保５年（1720）に再建された本堂の他、大門、中門、千手堂が国の重要文化財に指定され、本堂前の庭園は桃山期の様式を示すことで国の名勝に指定されている。このように境内地には多くの文化財を有し、多くの信仰を集めてきた。葛城修験との関係も深く、境内地北西側には役行者を祀る行者堂が建てられている。

(3) 歴史的背景

古くは補陀落山と号した粉河寺は、西国三十三所観音霊場の第三番札所として知られている。寺伝では、宝亀元年（770）に大伴孔子古によって創建されたとされ、平安時代以降、観音信仰の霊地として、また、補陀落信仰の中心地として朝廷や貴族など多くの人々が参詣した。

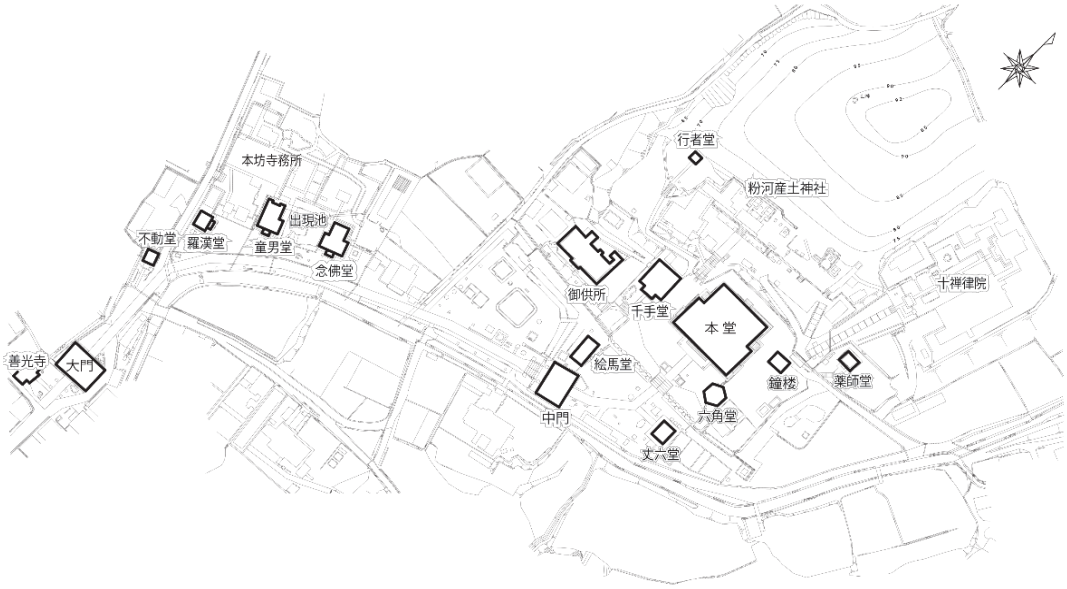
境内地には行者堂が建てられ本堂の北側に位置する粉河産土神社の祭礼である粉河祭は紀州三大祭の一つとされ、中津川の五鬼の子孫が祢宜として八ツ目草鞋をはいたまま社殿に上がり、本殿の鍵を開けることで祭りが始まる。また、北東側に隣接する十禅律院を修験者の宿としているなど、古くから葛城修験の行場として位置づけられてきた。また、中世には聖護院の末寺であった時期もある。



31. 粉河寺

所在地	和歌山県紀の川市粉河	地　形	和泉山脈南麓（谷間）
緯度・経度	北緯34° 28′ 09″ ・東経135° 40′ 59″	標　高	61m
設置物	本堂・千手堂・大門・中門・行者堂など、庭園、石造物		
備　考			

略測平面図



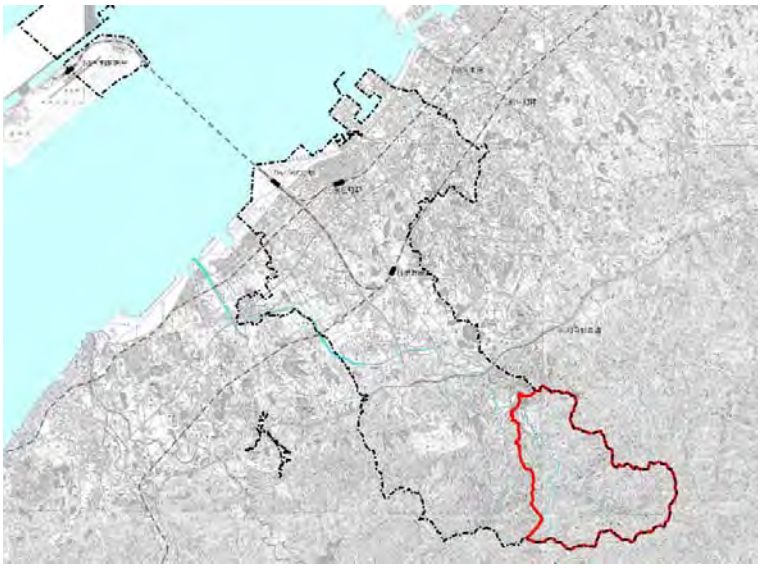
構成要素写真（全景）

32. 日根荘大木の農村景観（泉佐野市）

大阪府泉佐野市の大木地区は和泉山脈の麓に位置し、葛城修験の根本道場である七宝瀧寺（犬鳴山）からも約 4 kmと近いため、古くから七宝瀧寺との関わりがあった。大木地区は中世以来の伝統的な農村景観が現代にも受け継がれており、平成 25 年（2013）に大阪府で初となる重要文化的景観に選定された。

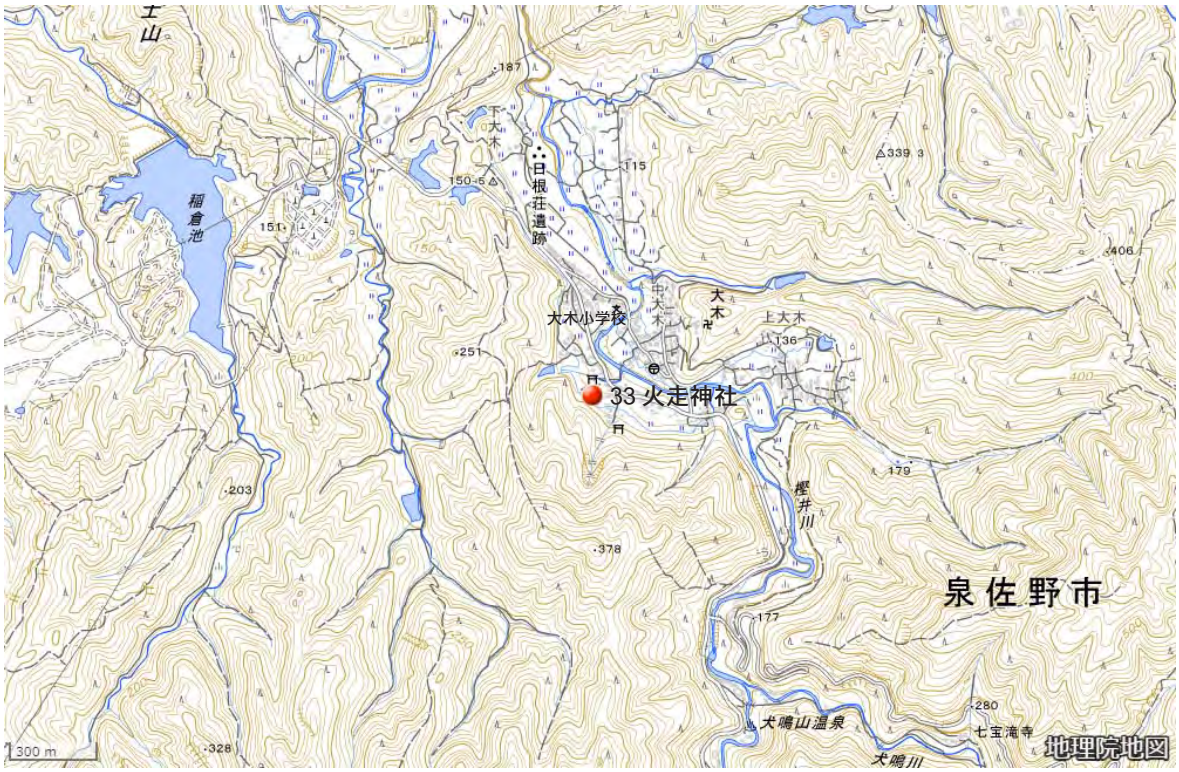
七宝瀧寺の寺僧（山伏）が雨乞いを行った火走神社をはじめ、村人たちが守り伝えてきた中世以来の寺社堂や水路が、その機能を維持しながら、現代の暮らしの中に受け継がれている。

32. 日根荘大木の農村景観			
所在地	大阪府泉佐野市大木	地　形	山地、丘陵部
緯度・経度	北緯 34°　21′　29″　907　東経 135°　22′　01″　234	標　高	約 100 m～ 200 m
設置物			
備　考	平成 25 年 10 月 17 日　大阪府初の国の重要文化的景観に選定		



33. 火走神社（ひばしりじんじゃ）（泉佐野市）

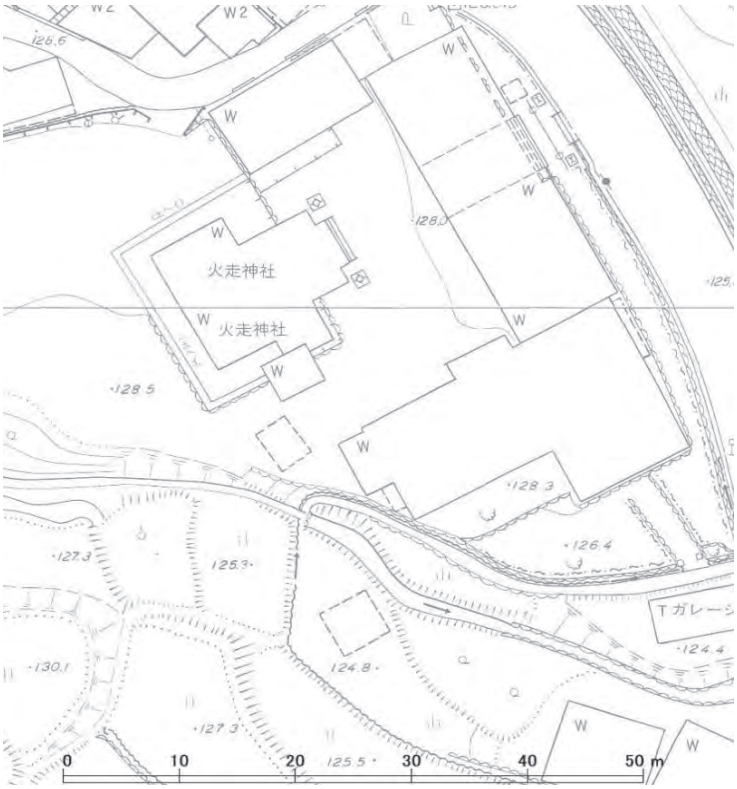
火走神社は、『延喜式神名帳』に載る式内社（国家から一般の神社とは別の待遇を得た神社）の一つで、中世には瀧宮・瀧大明神と呼ばれていた。火走神社は犬鳴山七宝瀧寺本堂から約 3 kmに位置し、古くから縁があった。当社でまとめられた『火走神社由緒記』には、正平年間（1346 ～ 70）に神宮寺が境内に置かれ、七宝瀧寺の志一上人が兼住して当社の祭事に奉仕していた、とある。また、文亀元年（1501）から 4 年間、日根荘入山田村（現在の土丸・大木地区）に滞在した九条政基が記した日記『政基公旅引付』には、旧暦 11 月に火走神社で七宝瀧寺の修験者がホタキ神事を行ったことや、旱魃に際して、七宝瀧寺の僧が当社で雨乞いを行ったことが記されている。



33. 火走神社

所在地	大阪府泉佐野市大木1534	地　形	平坦地
緯度・経度	北緯34° 21′ 8″ ・東経135° 22′ 10″	標　高	126.8m
設置物	荘園鎮守社、摂社幸神社本殿、鳥居、本殿、拝殿、幣殿、春日神社他末社・合祀社、石灯篭、狛犬、百度石		
備　考	摂社幸神社本殿（平成5年8月17日、国重要文化財に指定）、本殿（平成5年8月6日、市指定文化財）		

略測平面図



1/500

構成要素写真（全景）

34. 奥家住宅（泉佐野市）

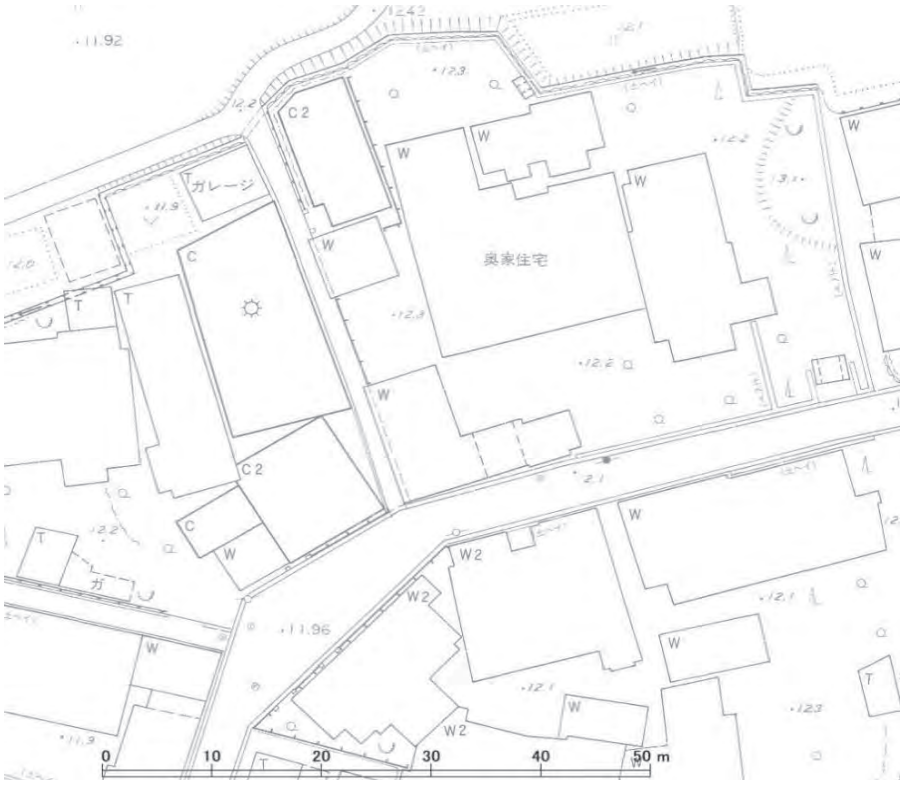
奥家住宅は府道和歌山貝塚線の熊野街道沿いにあり、白壁の土塀に囲まれた 17 世紀初めの庄屋の館である。広大な敷地の中に主屋、表門、長屋、土蔵などが建ち並んでおり、特に主屋については、現在は 13 間× 7 間の建物だが、当初は桁行 8 間、梁間 6 間の平入で、泉州地域特有の喰い違い四間取りの建物であった。泉南地域の大型民家としての価値が認められ、昭和 44 年（1969）に国の重要文化財に指定されている。

奥家住宅の屋敷地内の主庭には、かつて「森御殿」と称された草葺建物があり、本山派修験道の総本山である聖護院（森御殿）が葛城修行をおこなう際に休所として用いられていた。奥家住宅には、江戸時代後期の文化年間（1804 年～ 1818 年）以降のものが中心であるが、聖護院との関係を示す史料が現存している。奥家に残る文書の中には、中津川大護摩修行に向かう門跡に「草の餅」を献上するための材料が書き留められており、代々聖護院の修行の休息所として関わりがあったことがわかる。

34. 奥家住宅

所在地	大阪府泉佐野市南中樫井193－1	地　形	平坦地
緯度・経度	北緯34° 23′ 2″ ・東経135° 17′ 58″	標　高	3.3m
設置物	主屋、表門、東側土蔵、西側土蔵、長屋門、北土塀、東土塀		
備　考	主屋・表門・土蔵・附塀（昭和44年6月20日　国重要文化財指定）		

略測平面図



4

1/500

構成要素写真（全景）

上：長屋門　下：表門

上：西側土蔵　下：東側土蔵

35. 松尾寺（まつおじ）（和泉市）

(1) 位置と周辺の状況

阿弥陀山松尾寺は、和泉中央丘陵と呼ばれる低丘陵の西側、松尾川の支流の東松尾川により開析された谷筋に伽藍を構える古刹である。

(2) 歴史的背景

寺伝によれば、飛鳥時代に、役行者が当地で修行し、霊木を得て如意輪観音像を刻み、小堂を建立して安置したことに始まり、奈良時代に越前の僧泰澄が諸堂を建てて中興した、という。平安時代中期（10 世紀末）に書かれた「日本往生極楽記」にも「松尾の山寺」として登場する。

中世には、天台宗と真言宗の両方を学ぶ一山寺院として大いに栄えたが、天正九年（1581）、織田信長に攻められ、壊滅的な被害をこうむった。その後、豊臣秀頼によって再興された。現在、山内に残された堂宇は、金堂（大阪府指定文化財）・山門・不動堂をはじめ、すべて江戸時代以降に再建されたものである。古代から中世を通じて栄えた山岳寺院の姿を今に伝える貴重な文化遺産として、境内地が大阪府史跡に指定されている。

(3) その他

松尾寺には、和泉市指定文化財に指定された「役行者像」が伝わっている。制作年代は鎌倉時代初期にさかのぼる可能性があり、現存する役行者の絵画のなかでは最古の一例である。

35. 松尾寺

所在地	大阪府和泉市松尾寺町2168	地　形	丘陵
緯度・経度	北緯34° 26′ 01″ ・東経135° 27′ 48″	標　高	99m
設置物	本堂・山門・不動堂ほか		
備　考	和泉市指定文化財　役行者像（鎌倉時代）		

略測平面図

36. 槙尾山施福寺（和泉市）

(1) 位置と周辺の状況

泉州と紀州を結ぶ七越峠から、近畿自然歩道を西へ行けば11番経塚があり、東に進むと槙尾山に至る。その槇尾山山頂付近に槙尾山施福寺本堂がある。中世にまとめられた槙尾山大縁起（重要文化財）によれば、仏教公伝からまもなく、欽明天皇の勅願によって開かれたと伝えられる名刹である。弘法大師空海が仏門に入る目に剃髪したと伝えられる髪堂があり、空海の捨身伝説が伝わるなど、空海とのゆかりも深く、西国三十三所四番札所として知られる。

(2) 歴史的背景

槙尾山大縁起には、役行者が法華経の一部二十八品を写経し、品を分けて「葛木秘所」に安置し、そのうち不軽品を槙尾山の如法峰に埋めたことが記されている。法華経の末尾を埋めたことから、「巻尾（まきお）」と呼ばれるようになった話が広まっているが、不軽品は二十八品のうちの二十番目であり、実は、最後の品でも最後の巻でもない。

また、槙尾山大縁起には、「権者修行名所の事」として、「秘所随一　葛木縁起に之を載す」とあり、施福寺は、修験者の行場としての性格も有していた。

(3) その他

施福寺本堂の向かいの小山には、槙尾明神が祀られている。１９６１（昭和３６）年の第２室戸台風で山の斜面が崩れ、経塚がみつかった。平安時代末から室町時代にいたる１０基の経塚が発見され、保延５（１１３９）年の銘のある経筒や法華経文、銅鏡、中国製青白磁などが出土した。出土品は一括して和泉市指定文化財に指定されている。

36．施福寺

所在地	大阪府和泉市槇尾山町136	地　形	山腹
緯度・経度	北緯34° 23′ 35″ ・東経135° 30′ 42″	標　高	485m
設置物	本堂・山門・髪堂ほか		
備　考	和泉市指定文化財　槇尾山経塚出土品（平安時代～鎌倉時代）		

構成要素写真（全景）

37. 丹生都比売神社境内（にうつひめじんじゃけいだい） （かつらぎ町）

(1) 位置と周辺の状況

丹生都比売神社は、かつらぎ町大字上天野に所在し、紀伊山地に点在する小盆地北東端に立地する。紀伊山地北西部一帯の地主神である丹生明神を祀る神社であり、神仏習合をよく示す顕著な普遍的価値を有することから、世界遺産『紀伊山地の霊場と参詣道』の構成資産となっている。周辺は、氏子の集落である天野地区の農村景観、高野山への参詣道である三谷坂・町石道とこれらを囲む山林の景観をよく残している。

(2) 現地の状況

境内には、中世の碑伝として著名な石造五輪卒塔婆群 4 基：正応 6 年（1293）、正安 4 年（1302）、文保 3 年（1319）、延元元年（1336）が残る。これらは、丹生都比売神社に長床衆と呼ばれた高野山の山伏がおり、結集を行っていたことの証である。

(3) 歴史的背景

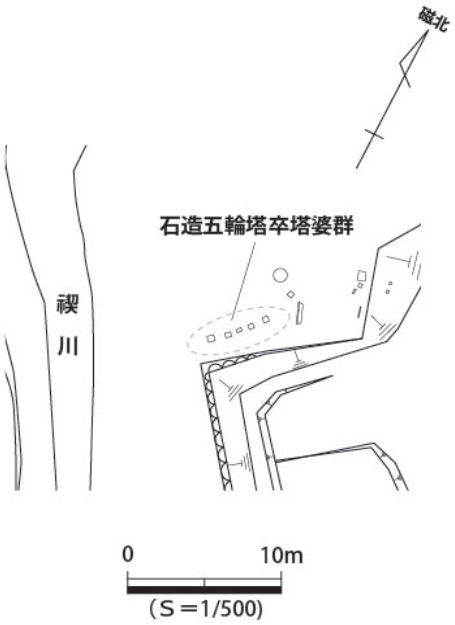
修験道については、高野山の僧が葛城入峯する際、まず本神社に参拝し、丹生明神を笈にうつす儀式「吹送の式」を行った（『葛城先達峯中勤式回行記』）：宝永 6 年（1709）。現在でも、このことに起源する「神還祭」が行われている。

山岳修行道場であった高野山の僧侶たちは、もともと修験的な傾向をもっていたが、入峯を終えて出峯したときに行われる蓮花会は、高野山壇上では 10 世紀後半から室町末期までであったのに対し、天野では 10 世紀前半にはすでに開始され、明治初年まで継続されていた。高野山系修験者の入峯最盛期は鎌倉時代で、天野長床衆の活躍が背景にあったとされる。なお、鎌倉末期の嘉暦元年（1326）に法印壇親によって入峯は大峯・葛城に分けられ、高野山大先達も大峯・葛城両大先達に分けられたが、天野では両方と関わりがあったものの葛城大先達のほうが上席とされた。天野すなわち丹生都比売神社は、鎌倉時代における蓮花会の開始から明治時代における修験の禁止に至るまで、葛城入峯の拠点であった。

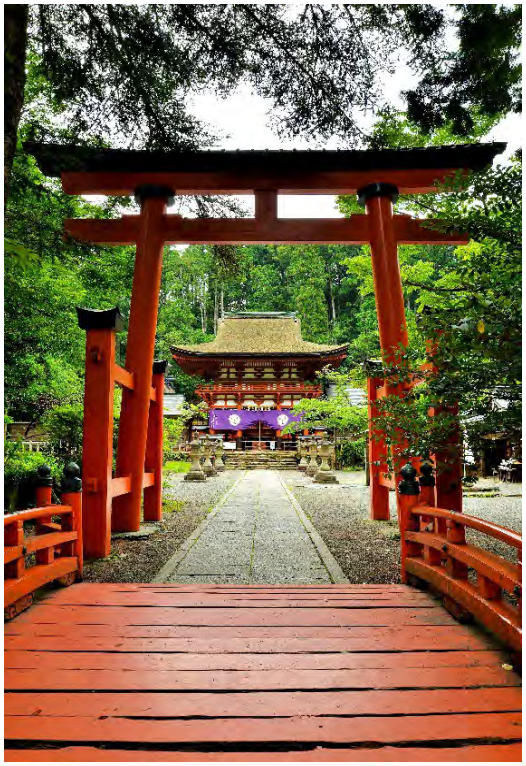
37. 丹生都比売神社境内

所在地	和歌山県伊都郡かつらぎ町上天野	地　形	盆地端部
緯度・経度	北緯34° 15′ 47″ ・東経135° 31′ 17″	標　高	465m
設置物	石造五輪卒塔婆群（県指定史跡）		
備　考			

略測平面図

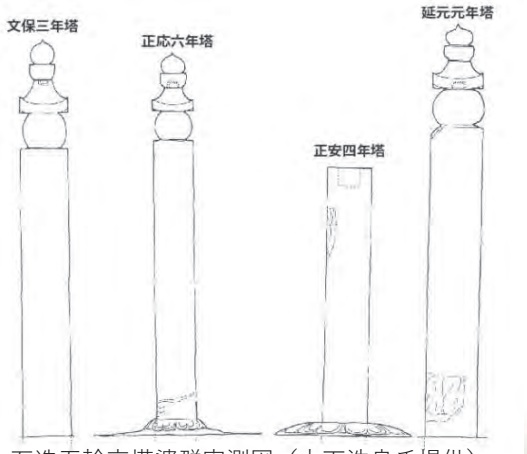


構成要素写真（全景）



境内（中ノ鳥居北から楼門を望む）

右から石造五輪卒塔婆群、光明真言碑、役行者像石龕



石造五輪卒塔婆群実測図（木下浩良氏提供）

38. 神野阿弥陀堂（こうのあみだどう）（かつらぎ町）

(1) 位置と周辺の状況

神野阿弥陀堂は、かつらぎ町大字東谷に所在し、四郷谷の階段断層状緩斜面に立地する展開する葛城修験の行所で、神野集落北部に位置する。周辺は、国登録有形文化財の的場家住宅など、江戸時代から続く茅葺古民家の景観がよく残る。

(2) 現地の状況

境内は、東西 18 m、南北 23 mを測り、ほぼ長方形を呈する。周辺地形が斜面であり、北東に位置する大将軍宮も平坦意識しながらも勾配が残るのに対し、神野阿弥陀堂境内は至って平坦である。北側に堂舎を建てるが、南側は堂舎の前庭であるとともに、北東に展開する正楽寺や大将軍宮へと通じる参道ともなっている。

堂舎は、棟札から貞享 3 年（1686）建築である。寄棟造平入で、茅葺であるが茅の保護のために金属板による仮屋根をかけている。規模は 10.4 m四方を測り、3 間四方の身舎に 3 間四方の庇が付く。身舎柱はケヤキ円柱で、虹梁形頭貫を架け、組み物は大斗肘木とする。側柱は栗の大面取り角柱に舟肘木である。梁材上には修験者の碑伝木札が累積し、東内壁には修験者のものと思しき墨書が遺存する。

墨書には、現在も法灯を継ぐ高野山の「巴陵院」がみえる。巴陵院は、金峯山奥の小笹に拠点を置く正大先達職の輪番寺院のひとつであり、大峯修験との関係が濃い。したがって、単に高野山の僧による葛城入峯を示すだけではなく、葛城修験と大峯修験との有機的な関係性の証左ともなる。

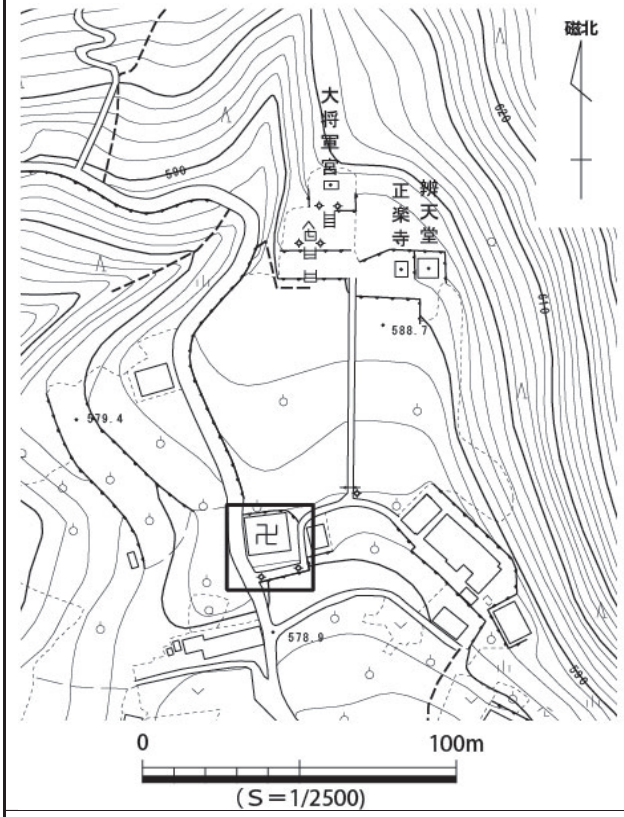
(3) 歴史的背景

『諸山縁起』及び『滝区有文書』並びに『葛嶺雑記』における記載はないが、嘉永 2 年（1849）の『聖護院宮葛城修行控帳』において、聖護院宮が役行者 1150 回忌巡行の際、後述する天女山正楽寺に立ち寄り、神野阿弥陀堂の前で大釜で茶を沸かし、大勢なので「汲み呑み」にした、という記録が残っている。「汲み呑み」は、大勢で器が不足したので、ひしゃくなどで大釜から直接飲むようにした、という解釈が考えられる。

38. 神野阿弥陀堂

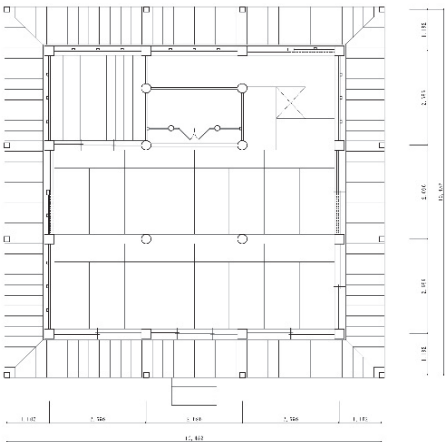
所在地	和歌山県伊都郡かつらぎ町東谷	地　形	階段断層状緩斜面
緯度・経度	北緯34° 20′ 57″ ・東経135° 29′ 0″	標　高	583m
設置物	村堂（登録有形文化財「神野阿弥陀堂）		
備　考			

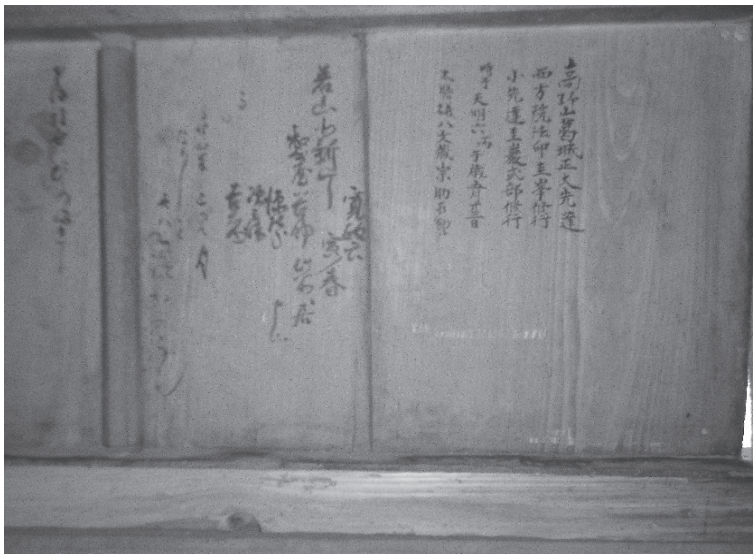
略測平面図



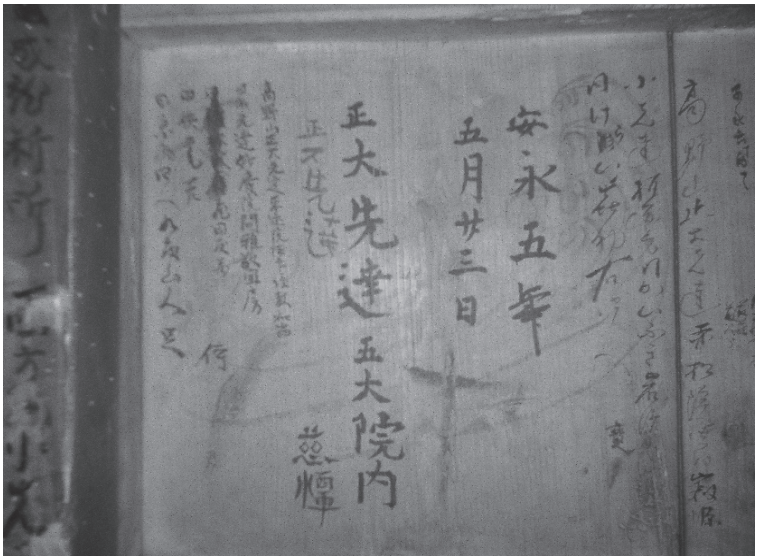
構成要素写真（全景）

（参考）建物平面図

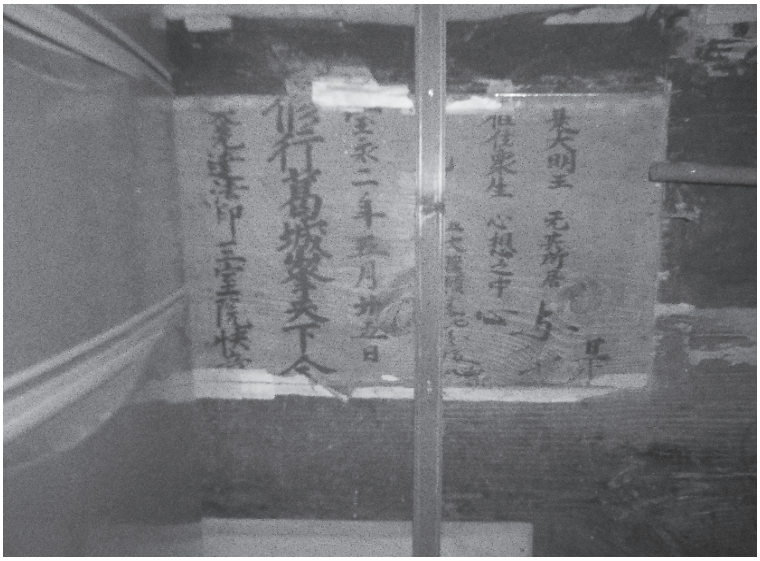




1　神野阿弥陀堂内墨書１



2　神野阿弥陀堂内墨書２



3　神野阿弥陀堂内墨書３

39. 岩湧寺（いわわきじ）（河内長野市）

(1) 概要（参考地図 82 頁）

岩湧寺は、大宝年間（701-704）に役小角が開基した寺で、文武天皇の勅願所であったと伝えられる。現在融通念仏宗極楽寺末であるが、往古は天台宗の霊場であったと伝えられる。河内長野市南部にある岩湧山の北斜面中腹に位置し、境内と周辺が大阪府の名勝となっている。境内には、本堂、多宝塔、庫裏がある。庫裏は特に大型のものであり特徴的である。

(2) 本堂

本堂は、正面柱間三間、側面柱間四間の規模で、屋根は宝形造、現在は銅板葺で、正面中央一間に向拝をつけ、周囲に縁をめぐらし、縁柱をたてる。当本堂の建立年代は、修行札の古いものに貞享三年（1686）のものなどが残されていることと、様式的な点から考えて江戸時代初期と考えられる。本堂内陣須弥壇上に厨子がある。この厨子は折衷様形式の精緻なものであるが、背面はつくらない。軸部は先端粽付で台輪を据え、頭貫を通し、先端を木鼻とし、内法長押・縁長押をまわして板扉を開く。拳鼻をつけ支輪・尾垂木を飾る。実肘木には絵様をつけない。詰組とし中央にのみ、中備に蟇股を入れる。斗栱・蟇股の様式から考察すると古式で、室町時代後期のものかと思われる。

(3) 多宝塔

多宝塔は、３間２層の多宝塔である。下層は中の間４尺８寸（復原尺）、脇の間３尺２寸（同）の 11 尺２寸四方の規模をもつ。亀腹上にたち軸部は円柱で頭貫を渡し先端を木鼻にし、腰貫を通して縁長押を打つのみである。四周には縁をめぐらしている。斗栱は平三斗組とし、中央の間にのみ蟇股を入れるのが後補である。内部は抜板敷、後寄りに来迎柱を立て、中の間では寄木の上に框をおいて床を張り大日如来坐像（重要文化財）を安置している。上層は 12 本の円柱を円形に建て並べ、台輪を据え内法長押を打って、斗栱は和様四手先、尾垂木を備え隅では二重とする。建立年代は天文年間（1532 ～ 1555）頃として支障はない。

(4) 庫裏

庫裏は、入母屋造り、銅板葺きである。内部は周囲に縁をめぐらし、内部に２間がある。

(5) カヤの木

イチイ科に属する針葉樹であり、岩湧寺境内、重要文化財多宝塔の南側にそびえたっている。

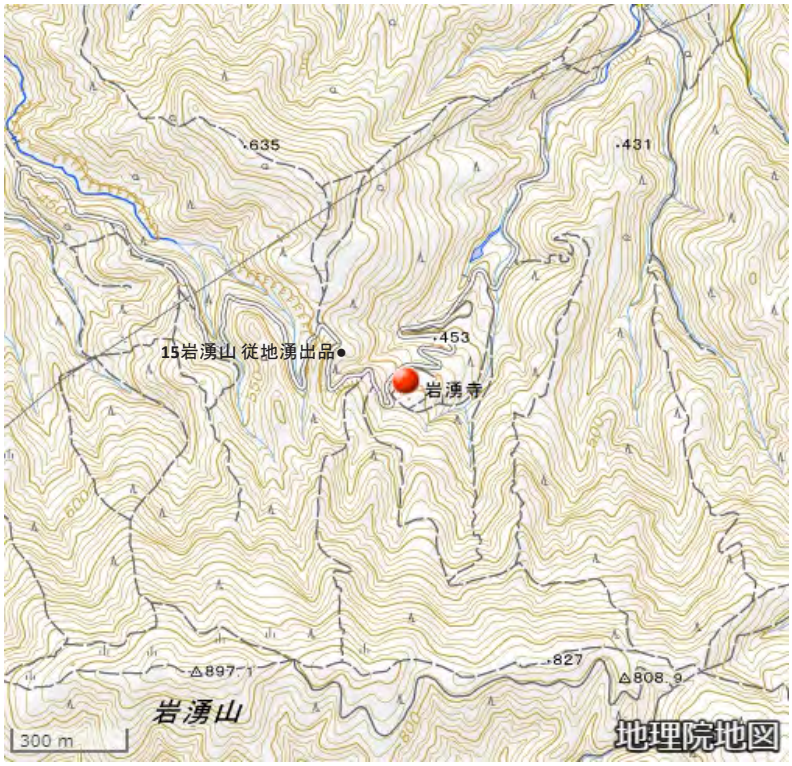
樹高は 20 ｍを測り、幹周は 597㎝ある。根元付近に空洞があるものの、幹と枝は中程から三方に分岐し、華麗な樹形を示している。樹齢は 450 ～ 550 年と見られ、その当時岩湧寺を目指した修験者が植栽し、その後岩湧寺により保護されてきたと考えられる。

周辺は樹齢 400 年を越える杉や檜の生産林に囲まれており、独特の景観を作っている。また付近には茅場があり、岩湧山一帯に貴重な自然環境が保全されている。

39. 岩湧寺

所在地	大阪府河内長野市加賀田	地　形	山中の緩斜面地
緯度・経度	北緯34° 22′ 50″ ・東経135° 33′ 25″	標　高	503m
設置物	多宝塔（重要文化財）、本堂		
備　考			

略測平面図



構成要素写真（多宝塔）

40. 草谷寺（そうこくじ）（五條市）

神福山の南麓にある高野山真言宗寺院。岸野山と号す。当寺の由緒によると、役行者の開基と伝わる。

文明年間（1469 ～ 1487）、永禄年間（1558 ～ 1570）、元和年間（1615 ～ 1624）と３度荒廃し、その都度再興され、現在の本堂は文久２年（1862）に建立された。

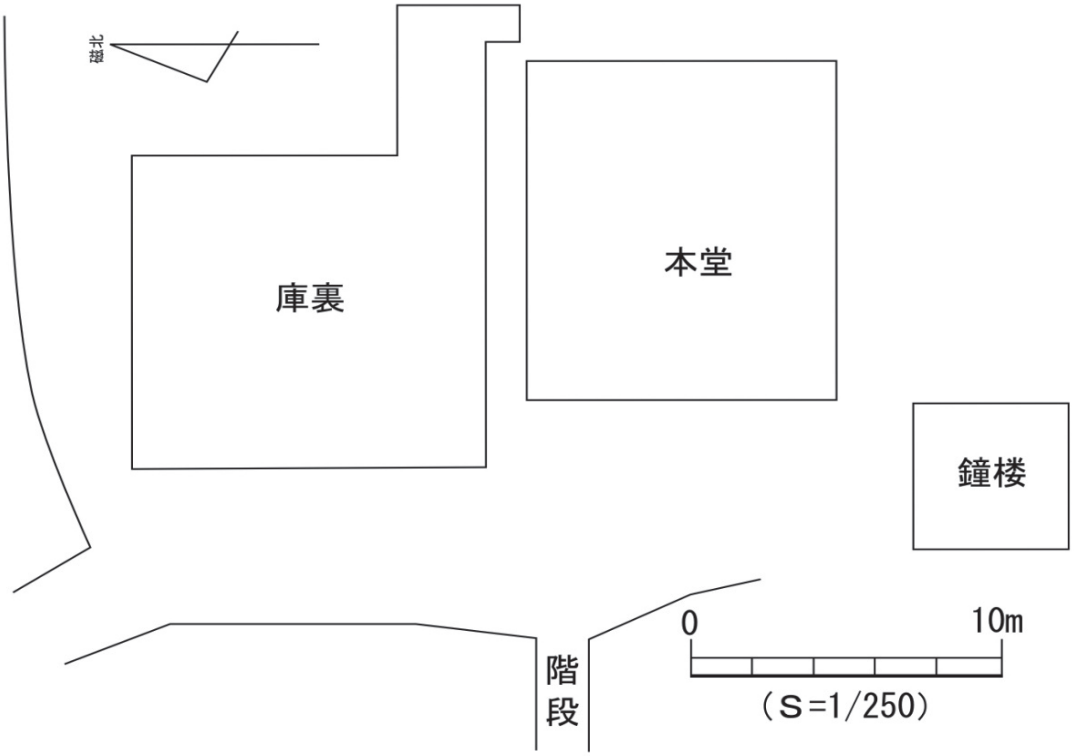
また、大澤寺と同じく龍にまつわる伝承も残されている。古来、当地に住み着いていた龍を修験者が頭・胴・尾に切断して退治し、３つの寺院（龍頭寺・龍胴寺・龍尾寺）を建立した。草谷寺は、龍尾寺にあたるという。その後、龍頭寺と龍胴寺は、龍尾寺に併合されたと伝わる。

本尊は国の重要文化財に指定され、平安時代の作である木造薬師如来坐像。この他、同じく重要文化財の木造不動明王坐像、木造薬師如来立像もあり、いずれも収蔵庫に安置されている。

40. 草谷寺

所在地	奈良県五條市北山町	地　形	山腹
緯度・経度	北緯34° 23′ 00″ ・東経135° 40′ 59″	標　高	305m
設置物	本堂・庫裏・鐘楼		
備　考			

略測平面図



構成要素写真（全景）

41. 金剛山（こんごうざん）（御所市）

(1) 位置と周辺の状況

金剛山は、奈良盆地の西南端に位置し、奈良県と大阪府にまたがる日本の名峰である。大阪府側の千早赤阪村から登山するのが一般的であるが、山頂一帯は奈良県御所市高天となる。昭和 9 年（1934）3 月 13 日に山頂付近が史跡に指定された。山頂には役行者の霊跡や南北朝時代に築かれたとされる国見城跡が所在する。

(2) 現地の現況

今日の金剛山は、修験者による修行の一方で、行楽目的による登山も行われている。休日は多くの観光客で賑わっており、売店などの施設が設置されている。

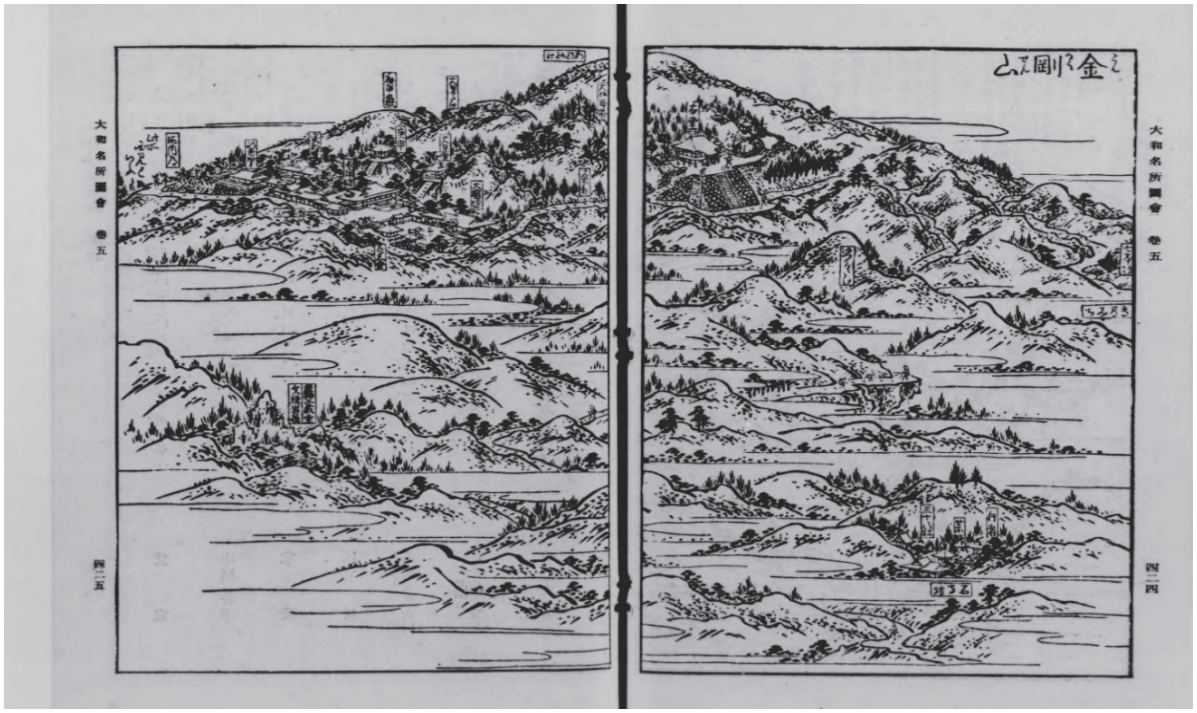
(3) 歴史的背景

この山はかつて葛木山と呼ばれていたが、役行者によって金剛山寺（現在の転法輪寺）が建立されて以降、金剛山の名前で呼ばれるようになった。文献による記録はあまり見られないが、伝承では奈良時代に役行者が金剛・葛城山地を修験道場にしたことに始まるとされ、古来より葛城修験の根本霊場として栄えた。役行者が呪術を用いて、金峯山と葛木山に橋を架けようとしたというものがある。この説話は、両山を往来していた当時の修験者の様子を反映したものとみられる。鎌倉時代初期のものと思われる『諸山縁起』第 77 条には、「この山に一度行く者、永く悪道に堕ちず」とあり、厚く信仰されていたことが窺える。

（国指定史跡）（金剛山総合文化調査委員会 1988）

41. 金剛山

所在地	奈良県御所市高天	地　形	山頂
緯度・経度	北緯34° 26’44”・東経135° 42’43”	標　高	1125m
設置物			
備　考			



『大和名所図会』より引用

構成要素写真（全景）

42. 當麻寺（たいまでら）（葛城市）

その創建については所伝により異なるが、聖徳太子の兄弟である麻呂子皇子（麻呂子親王）、あるいは当麻真人国見によって、河内に建立された前身寺院である万法蔵院を、天武十年（白鳳９年・681 年）に現在地に移したとことにはじまるという。

これらの伝承については様々な意見があるが、発掘調査をはじめとする各種調査により、現在地への寺院建立が 7 世紀後半であることは間違いないと考えられている。

伝承によれば、寺院を移設するに際して、役行者が練行地であった私領を寄進したという。また、法力により百済から四天王を、葛城山から一言主明神を、熊野から権現の化身・竜神を勧請した。その時に役行者が座った影向石などが、創建の伝承とともに今にのこる。

現在、當麻寺の塔頭寺院は 13 を数え、境内には国宝の本堂・東塔・西塔、金堂の弥勒仏坐像をはじめ、貴重な寺宝が数多く伝わる。

42. 當麻寺

所在地	奈良県葛城市當麻1263	地　形	平坦地
緯度・経度	北緯34° 30’57″ 、東経135° 41’33″	標　高	108m
設置物	本堂(国宝)、金堂(重要文化財)、講堂(重要文化財)、薬師堂(重要文化財) 西塔(国宝)、東塔(国宝)、梵鐘(国宝)		
備　考			

略測平面図

構成要素写真（全景）

43. 當麻寺中之坊（たいまでらなかのぼう）（葛城市）

當麻寺の創建に際し、役行者が熊野から勧請した竜神を祀り（龍王社）、行所として開かれたことにはじまるとされる。天平期には、住職の住房「中院御坊」となり現在にいたる。

国宝・綴織當麻曼荼羅の伝説で知られる中将姫の剃髪・修行の場でもあり、本尊の十一面観音像は、通称「導き観音」として信仰を集めている。

また坊中には、大和三名庭の一つに数えられる「香藕園」を擁し、霊宝殿には創建時の遺物や、中将姫ゆかりの宝物など数多く収蔵されている。収蔵品は、年 4 ～ 5 回の入れ替え制で常時公開をしている。

役行者の秘薬「陀羅尼助」が伝わることでも知られる。（葛城市 2012）

陀羅尼助は、黄檗を主成分とする胃腸薬である。中之坊では陀羅尼助をつくる際、導師が仏の言葉である真言陀羅尼をとなえ、薬がよく効くように祈った。

役行者が陀羅尼助をつくるのに使用したと伝承される井戸が、坊中にのこされている。

43. 當麻寺中之坊

所在地	奈良県葛城市當麻1263	地　形	平坦地
緯度・経度	北緯34° 30'56″ 、東経135° 41'42″	標　高	109m
設置物	庭園「香藕園」(名勝)、書院(重要文化財)、茶室「丸窓席」(重要文化財)		
備　考			

略測平面図

構成要素写真（全景）

第４節　行所等（国指定以外の構成文化財）

44. 観念窟（かんねんくつ）（和歌山市）

(1) 位置と周辺の状況

観念窟は、友ヶ島の虎島東部岸壁に所在する行場である。

葛城修験の第１番経塚・序品を出て、海中に点在する石を飛び移り、岸壁沿いに切り立った砂岩の一枚岩の崖の下まで行き、壁面を登った場所に所在する。または、島の頂部から縄をたらし、先達に従って下ると観念窟へ行く方法があるが、どちらも危険で先達がいないと行くのは厳しい。なお、『紀伊国名所図会』では、江戸時代には観念窟のすぐ下まで小舟を寄せて上陸していた様子が描かれている。

近くの岸壁には、寛文９（1669）年に紀州藩の朱子学者・李梅渓の書による「友嶋五所額」が彫られ、「禁殺生穢悪、友島五所、観念窟、序品窟、閼伽井、深蛇池、剣池、寛文己酉雕」と記されている。

(2) 現地の現況

観念窟は虎島東部の大きな１枚岩にある海に南面した狭小な窟で、波に穿たれた窟内には一辺３～５ｍ程度の平滑な空間があり、天井はやや崩れ、壁面は海蝕による凹凸が激しい。大人が立って歩けるような高さはない。窟内には台石と聖護院門跡・道晃法親王筆による「観念窟」と刻まれた近世の石碑が置かれている。

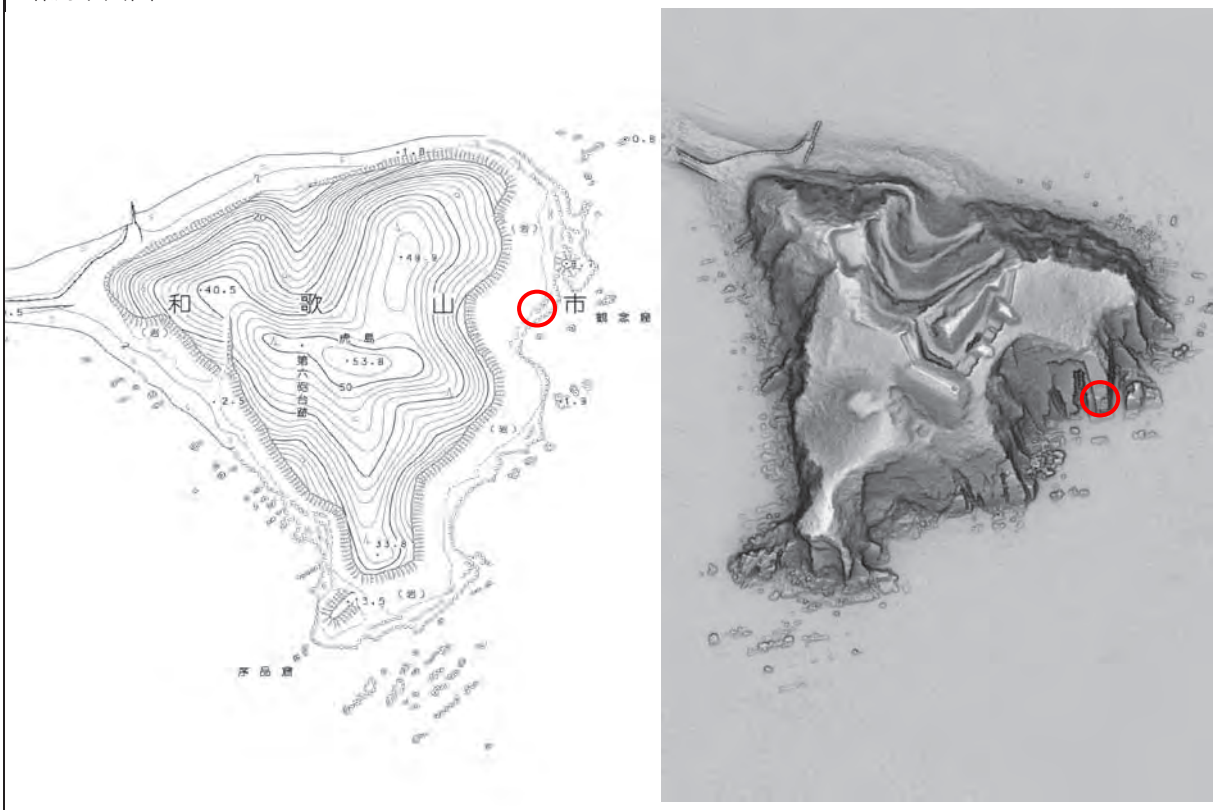
(3) 歴史的背景

『紀伊国名所図会』では、観念窟への道について「行者径といふ、これを窟に入るの正門とす。石厳は上に聳え、下は不測の淵に臨み躬を厳壁に着く、まずかに蟹行すべし、一跌されは忽砕粉となる」とあり、難所であったことを記している。

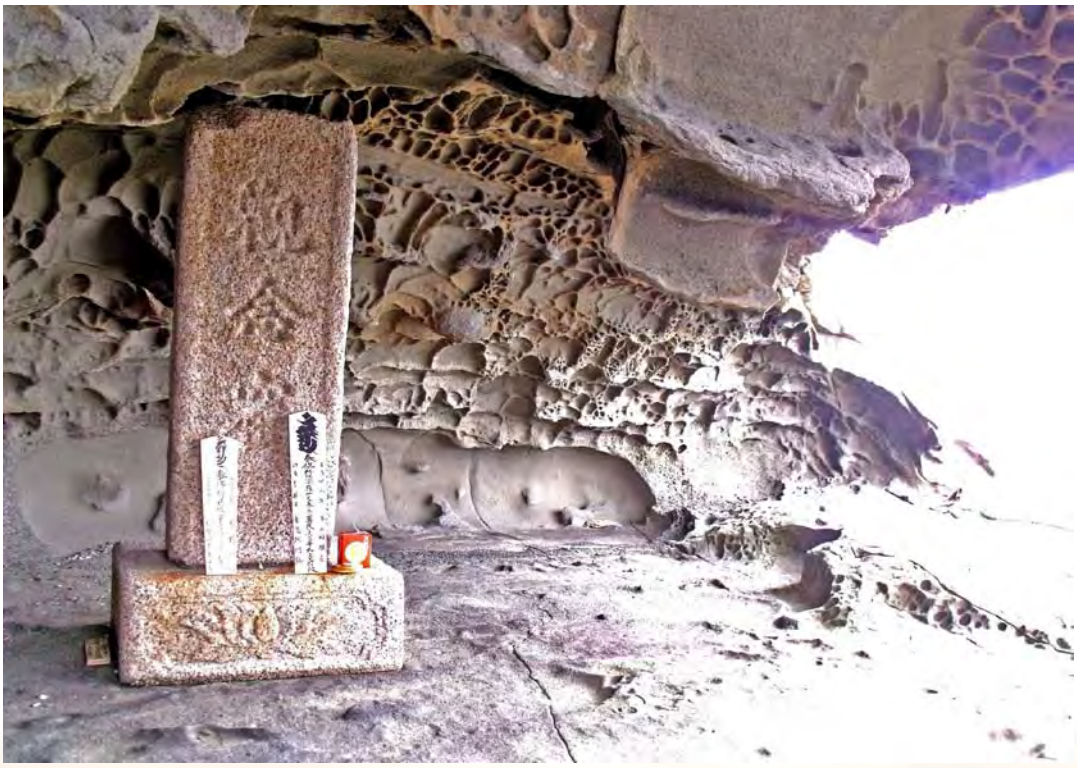
44. 観念窟

所在地	和歌山市加太　虎島	地　形	海蝕洞窟
緯度・経度	北緯34° 17′ 34″ ・東経135° 1′ 38″	標　高	4m
設置物	石碑「観念窟」		
備　考	洞窟幅3～5m、奥行約3～4m、高さ約1～1.5m		

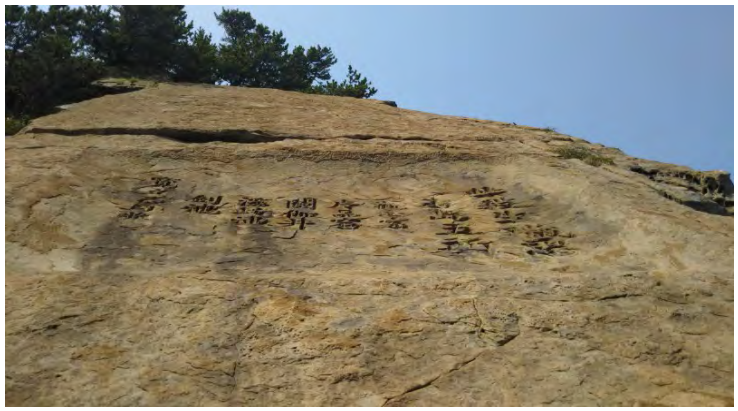
略測平面図



構成要素写真（全景）



虎島（東から）



友嶋五所額

観念窟

五所額・観念窟周辺（西から）

観念窟内部

45. 深蛇池（しんじゃいけ） （和歌山市）

(1) 位置と周辺の状況

深蛇池は、友ヶ島・沖ノ島の東南部に所在する池である。

沖ノ島の野奈浦から葛城修験の第１番経塚・序品に向かう途中に看板があり、右方へ５分ほど小道を下ったところに所在する。

(2) 現地の現況

深蛇池は沖ノ島東南部に位置する砂丘の後背湿地で、２ヘクタールほど広さの池（湿地）となっている。池は北方にはヒトモトススキが群生し、南方は蒲浦で海に近接するが、水は淡水である。湿地に張り出した方形の区画が行所となっている。

区画は周囲に石を並べ、土を入れて築かれており、護摩を焚く行場となっている。蓮華をあしらった石製の台が置かれている。また、その脇に碑伝が備えられている。

湿地性植物群落の植生地として和歌山県の天然記念物に指定されている。

(3) 歴史的背景

『紀伊国名所図会』に「池周回十町許、水なし、唯蒲草叢生す、池中石碑」とあり、亀形の台石の上に「深蛇池」と刻まれた角柱が建っている図が掲載されており、現在も池中に残る石柱がこれに該当すると考えられる。

また、役行者が大蛇を降伏してこの淵に封じ込めたという逸話が残る。

45. 深蛇池

所在地	和歌山市加太　沖ノ島	地　形	池・湿地
緯度・経度	北緯34° 17′ 10″ ・東経135° 1′ 4″	標　高	3 m
設置物	方形張出部、石製蓮台、碑伝		
備　考			

略測平面図

構成要素写真（全景）

深蛇池石柱付近

蓮華形石造物と池

蓮華形の石造物

46. 閼伽井跡（和歌山市）

(1) 位置と行き方

閼伽井跡は、沖ノ島東端の道沿いに位置している。

沖ノ島の港である野奈浦港から島のやや北側のやや起伏のある道を進んでいき、虎島に渡るすぐ手前の場所にあたる。

(2) 現地の現況

閼伽井跡は南に岩場を背負い、東西は沖ノ島から虎島に渡る道が横断している。水場はなく、水溜めの施設も今は見つからない。砂岩等の円礫による石組みの上に、連弁をあしらった花崗岩の台座を置き、その上に「閼伽井」と大書した花崗岩の石碑が据えてある。向かって右上には「熊野三山前検校二品親王道晃御筆」と刻書されている。左方にも文字があったようであるが､表面が剥落しており、ほとんど文字は残されていない。石組の間に碑伝を置き、石で固定させている。

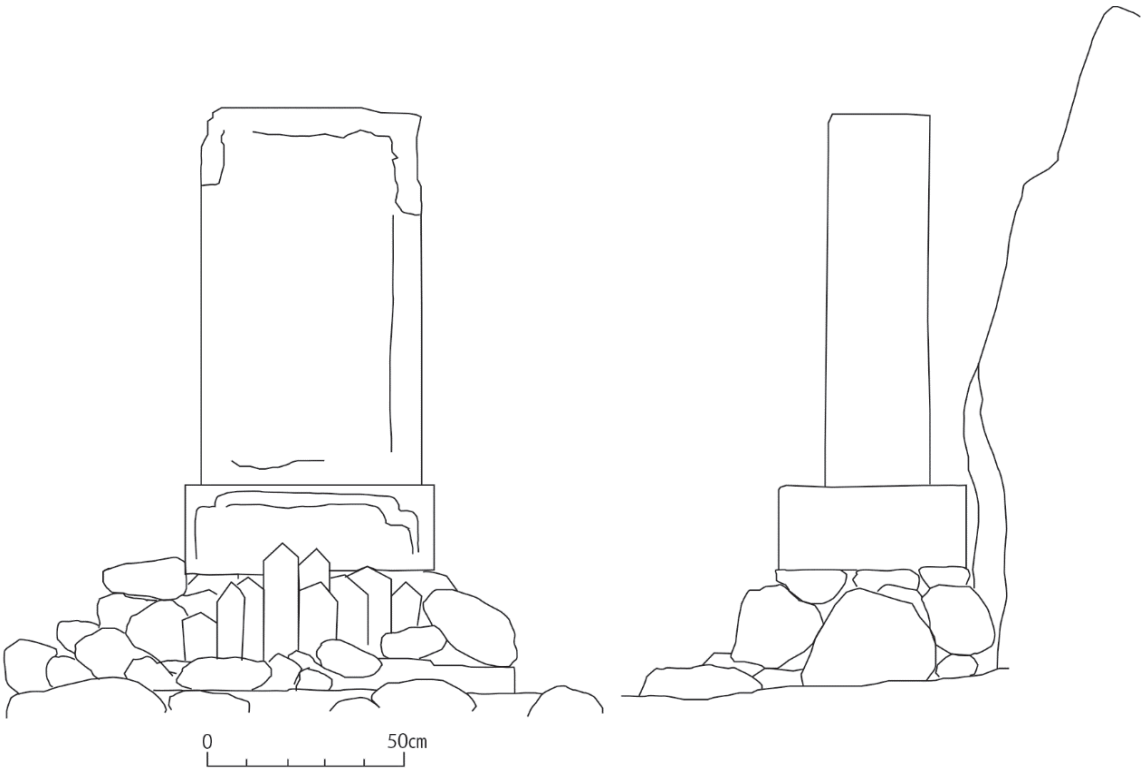
(3) 歴史的背景

『紀伊国名所図会』に「海潮の上る所にして、今は井なし」とある。

46. 閼伽井跡

所在地	和歌山市加太　沖ノ島	地　形	島嶼北端の岸壁下
緯度・経度	北緯34° 17′ 34″ ・135° 1′ 23″	標　高	2 m
設置物	石碑、台石、碑伝		
備　考			

略測平面図



構成要素写真（全景）

47. 神島剣池（かみしまつるぎのいけ）（和歌山市）

(1) 位置と遥拝所

神島は、沖ノ島の北に浮かぶ小さな島である。

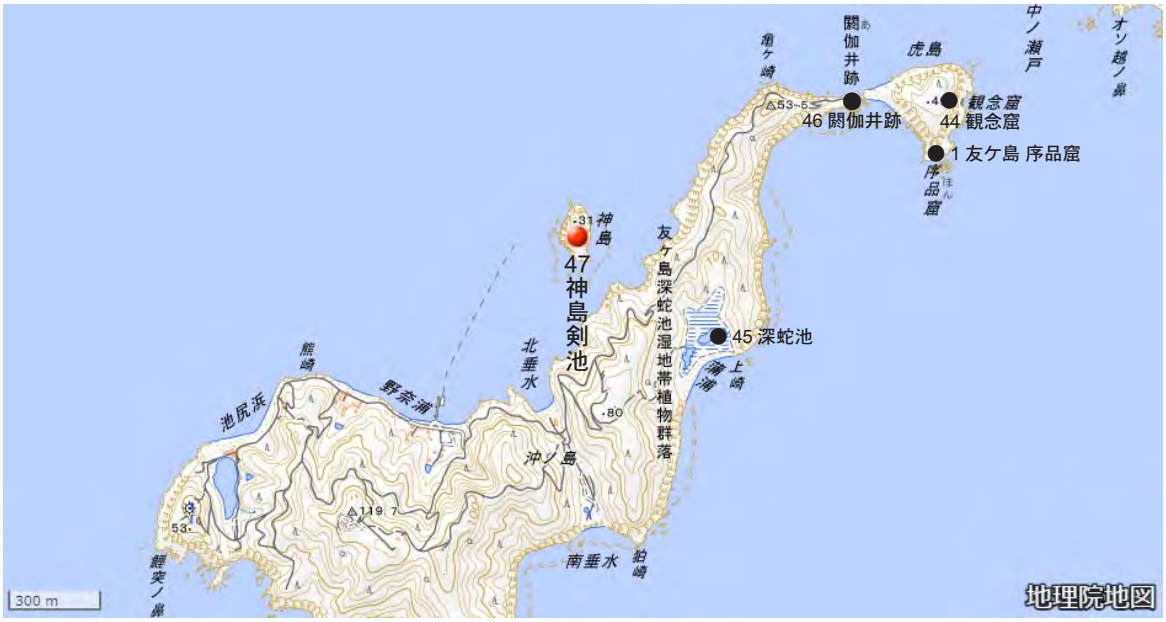
沖ノ島の野奈浦桟橋から北東へ歩くと、途中で神島がよく見えるポイントが数か所ある。神島は上陸禁止のため、これらのうち看板が立てられているポイントから遥拝する。

神島で役行者が神剣を手にしたことから､その場所を剣池と名付けたという。神島の名前の由来は、少彦名神が神島に降りられたことからきているという。

(2) 現地の現況

島は北側が山になっており、南側の小規模な平坦地に剣池とよばれる湿地帯があり、そこに「剣之池」と刻まれた石柱が建っている。『紀伊国名所図会』には、友ヶ島の五所の行所に建てられた道晃親王揮毫の石碑の様子が掲載されている。

道晃親王は寛永３年（1626）に聖護院第 28 世門跡となっており、聖護院が友ヶ島巡拝を重視したことが窺える。



47. 神島剣池

所在地	和歌山市加太　神島	地　形	池
緯度・経度	北緯34° 17′ 18″ ・ 135° 0′ 50″	標　高	1 m
設置物	石柱 遥拝地に碑伝		
備　考			

遥拝地からみた神島

構成要素写真（神島全景、池は島の南(手前)）

48. 加太春日神社えび祭　（和歌山市）

(1) 位置と周辺の状況

加太は、『万葉集』に潟見の浦と詠まれた景勝地で、紀淡海峡に面して美しい海岸線が続いている。『続日本紀』によると大宝２（702）年に、都から紀伊を通り淡路・阿波へといたる南海道の加太駅が置かれて以来、紀淡海峡の海上交通の基点として発展し、また紀淡海峡の早い潮目を前にして、水準の高い漁業技術が育まれた。漁業を生業とする加太において、大漁を祈願する加太春日神社のえび祭は、加太地区が一体となった祭礼として継承されている。

(2) 現地の現況

渡御行列は、加太春日神社を出発し、芸能披露である練り物の後に神輿行列が続き、加太地区の町中を練り歩く。淡島御旅所ではえび祭の最大の呼び物ともいえる獅子舞が奉納される。加太の獅子舞は男獅子と女獅子の２ 種類あり、高場とよばれる地上３ｍの高さに組んだ、２本の丸太の上で舞う勇壮な獅子舞で、高度な技を披露する。

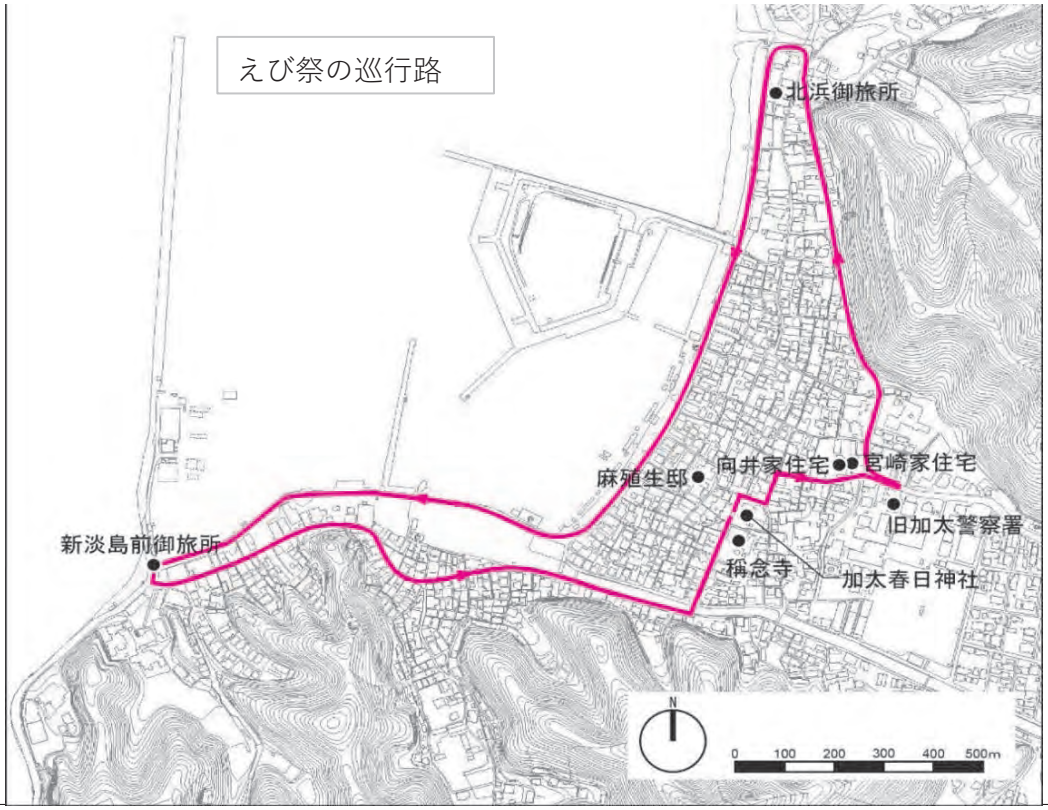
(3) 歴史的背景

加太春日神社の本殿の蟇股に彫刻されているように、かつては伊勢海老が多く獲れ、例大祭で神饌に必ず用いたので、えび祭とよばれるようになった。慶長２（1597）年に獅子頭が二頭奉納されたという記録が残っており、この頃には渡御行列に獅子が存在したことがわかる。大正 12（1923）年から現在のような神輿渡御が行われ、それ以前は各地区から大漁幟を台に乗せ、練り歩いたという。

48. 加太春日神社　えび祭

所在地	和歌山市加太	地　形	平野
緯度・経度	北緯34° 16′ 30″ ・135° 4′ 28″	標　高	6m
設置物	加太春日神社本殿（国指定重要文化財）、拝殿、社務所、鳥居		
備　考			

略測平面図



構成要素写真（全景）

49. 紀州加太浦「採燈大護摩供」（和歌山市）

(1) 位置と周辺の状況

葛城修験における巡行は、友ヶ島が第一歩である。「閼伽井」で水垢りをし、干潮を見はからい虎島に渡り、「序品窟」で勤行し、岩伝いに急傾斜の一枚岩をロープで登る。岩の中程には「五所額」の文字や「観念窟」があり、これらを拝して登る。読経して虎島での修行は終わり、沖ノ島の深蛇池に向かう。室町初期の『葛城峯中記』によると、友ヶ島を勤行した修験者は、加太の迎之坊（向井家）から伽陀寺とその山腹にある鳩留八幡社から尾根伝いに北東へいくとされている。江戸時代には修験道における重要な修行のひとつ護摩行が加太で行われていた。

(2) 現地の現況

葛城修験の春の峰入りの際、友ヶ島での修行を終えた後、大規模な護摩行が加太北ノ浜の砂浜で行われる。まず結界を張り、修験者が結界に入るための問答が行われる（山伏問答）。そして結界の四隅に弓を射て邪悪を追い払い、願文を唱え五穀豊穣・天下泰平・海上安全を祈る。護摩壇に点火し、修験者たちは般若心経等を読誦する。

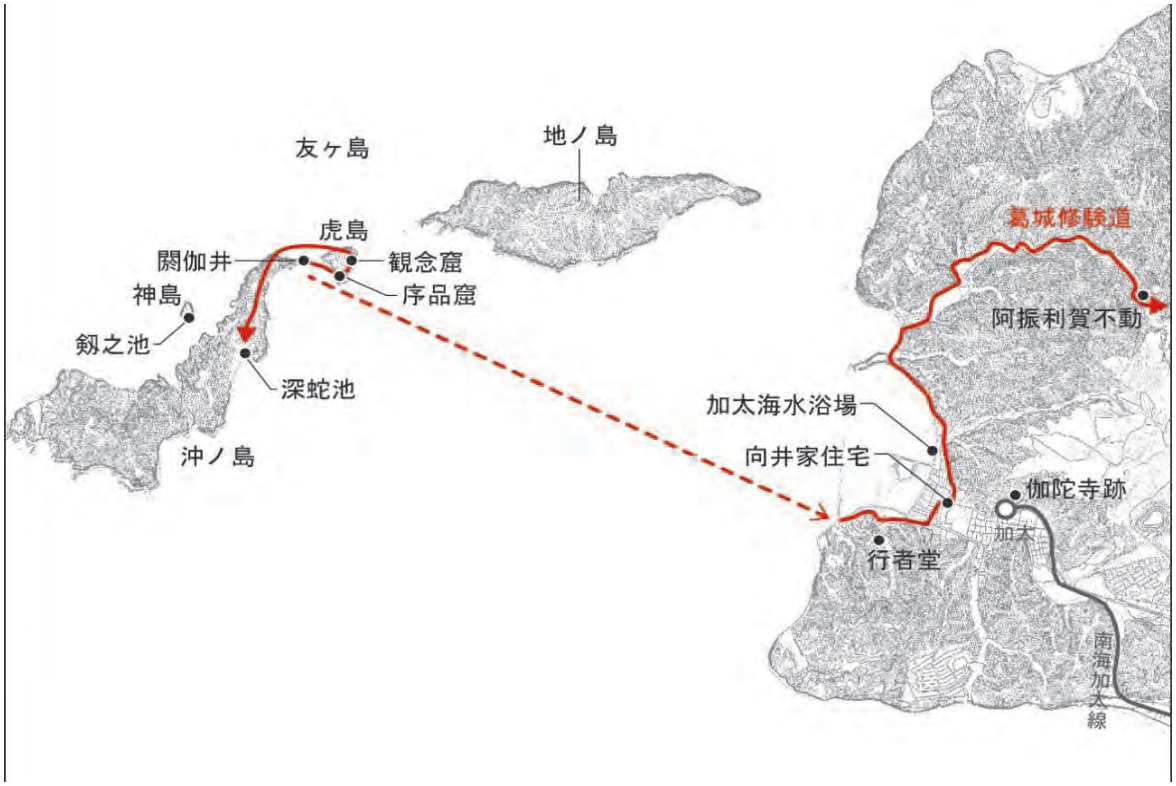
(3) 歴史的背景

加太の行所を管理する迎之坊である向井家に伝わる古文書では、江戸時代には行者堂で護摩行が執り行われていたことが確認できる。その後、行者堂が民家に近く、火を使用するうえで危険なことから、友ヶ島へ渡る汽船の発着場で行われるようになり、昭和 30 年代を最後に 50 年にわたり休止したが、平成 26 年（2014）に地元の有志により加太北ノ浜で再開した。

49. 紀州加太浦「採燈大護摩供」

所在地	和歌山市加太	地　形	海岸
緯度・経度	北緯34° 16′ 48″ ・東経135° 4′ 27″	標　高	1m
設置物	砂浜各種道具を一時的に設置		
備　考			

略測平面図



構成要素写真（全景）

50. 阿字ケ峰行者堂（和歌山市）

(1) 位置と周辺の状況

阿字ヶ峰行者堂は、友ヶ島を眺望する標高 35 mの阿字ヶ峰とよばれる尾根上に位置する。阿から始まり吽で終わる梵字の配列になぞらえ、葛城修験最初の第一宿である当地を「阿字ヶ峰」とし、最終の二十八宿とされる明神山が「吽字ヶ峰」とよばれる。加太・友ヶ島は葛城修験の出発の地であり、加太には葛城の行所を管理する迎之坊である向井家が残る。春の峰入りの際には向井家を訪れ、その後海を渡り友ヶ島で厳しい修行を行うのである。

(2) 関連文化財または現地の状況

修験の創始者である役行者像を安置する堂舎であり、加太の行者講が管理している。春の峰入りの際にはここを訪れ、友ヶ島を遥拝する場所となっている。阿字ヶ峰の登り口に立つ役行者堂碑は大正～昭和初期に当時の聖護院門跡の揮毫により建立されたもので、現在の行者堂の建物もその頃に再建され、当時はこの前で護摩行を行っていたという。

(3) 歴史的背景

慶長 13（1608）年写の『手日記并坊フセ柴燈記有之式等』に「安集峯」とあり、文化３年（1806）の『聖護院宮様就御入峯諸事留控』には「安集峯神変大菩薩堂」と記述がある。神変大菩薩とは役行者の諡号であり、いつ頃に阿字ヶ峰の字に転じたかは不明だが、阿字ヶ峰行者堂を指すと考えられ、江戸時代から行者堂が存在したことがわかる。

50. 阿字ヶ峰行者堂

所在地	和歌山市加太242	地　形	丘陵
緯度・経度	北緯34° 16′ 26″ ・135° 4′ 10″	標　高	33m
設置物	行者堂（建造物）、行者堂碑（石碑）		
備　考			

略測平面図

構成要素写真（全景）

51. 加太淡嶋神社（かだあわしまじんじゃ）（和歌山市）

(1) 位置と周辺の状況

淡嶋神社は加太の西方海岸部にある。

(2) 関連文化財または現地の状況

現在でも葛城修験において熊野三山検校でもある聖護院門跡が入峯する際に訪れる社寺の一つである。一般には「アワシマさん」と親しまれており、主な例祭としては２月８日の「針供養」、３月３日の「雛流し」、４月３日の「雛祭」などが知られている。

(3) 歴史的背景

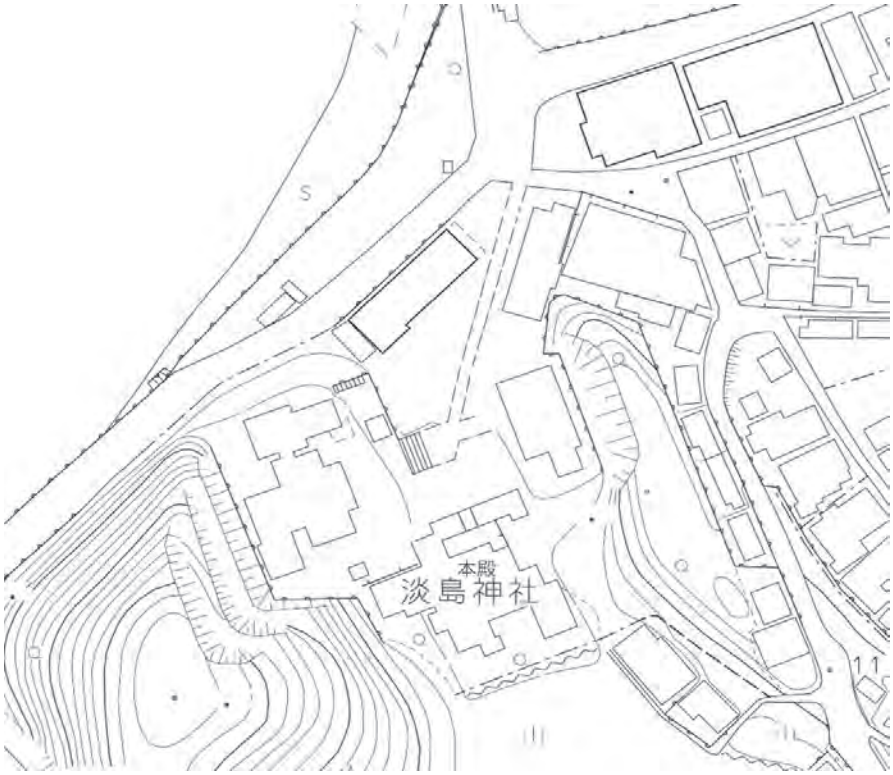
淡嶋神社は葛城修験において熊野三山検校でもある聖護院門跡が入峯する際に訪れる社寺の一つであった。宝暦７年の「熊野三山検校　聖護院宮御入峯式」によると友ヶ島への渡海については供奉の山伏による代参であったが、淡嶋神社や阿字ヶ峯の行者堂については聖護院宮増賞親王自身が訪れている。このことから、江戸時代を通じて淡嶋神社は聖護院門跡の大峰・葛城入峯の際に参拝する社寺の一つであり、今日でも修験者が友ヶ島に渡海する際に参拝を行う行所の一つとなっている。なお、淡嶋神社の神宮寺にかつて祀られていた虚空蔵菩薩坐像（室町時代）は現在、稱念寺（加太）にあり、神仏分離令および廃仏毀釈にともない稱念寺に遷されたと考えられる。

1　淡嶋神社本殿参拝

51. 加太淡嶋神社

所在地	和歌山市加太118	地　形	平地
緯度・経度	北緯34° 16′ 25″ ・東経135° 4′ 1″	標　高	5.1 m
設置物	本殿		
備　考			

略測平面図



構成要素（全景）

52. 常行寺（じょうぎょうじ）（和歌山市）

(1) 位置と周辺の状況

常行寺は加太の西方、加太小学校、加太春日神社、稱念寺等のある加太の市街地内にあり、向井家住宅の北側にある西山浄土宗の寺院である。

(2) 関連文化財または現地の状況

現在、常行寺には弁才天二十五童子像が２具（うち１具は和歌山市指定文化財）あり、これらは伽陀寺の弁才天祠の本尊及び扁額であったものが明治の修験禁止令以降に常行寺に移されたと考えられる。なお、弁才天像の台座内面や後景板の背面の墨書および、弁才天像に付属する扁額の裏面の刻銘から伽陀寺の弁才天祠の祭祀に別当迎之坊・聖護院門跡・和歌山城下の有力町人が関与していたことがうかがえる。

(3) 歴史的背景

創建時期不詳だが、天正年間に再建されたと伝わる。『紀伊続風土記』によれば、伽陀寺は役行者開基で、醍醐天皇の勅願により建立されたという。鎌倉時代初期の成立とされる「諸山縁起」では「轉法輪山」の宿の次第に「二伽陀寺」とあるが、正安二年十二月三日付伽陀寺寺僧連署置文（向井家文書）には「葛木一宿伽陀寺」とあり、鎌倉時代のある時期に葛城二十八宿の一宿が伽陀寺とされたものと思われる。なお、伽陀寺は天正十二年の豊臣秀吉の紀州攻めにより焼亡、衰微したと伝わり、江戸時代後期の郷土史「みよばなし」によると江戸時代後期には既に寺院の体裁をとどめていなかったと考えられる。このことから、旧伽陀寺本尊と伝わる仏像や伽陀寺の弁才天祠の本尊弁才天二十五童子像が常行寺に移されたのも伽陀寺の衰亡と修験禁止令によるものと想定される。

１・２　扁額及び裏面（江戸時代（安永７年（1778）52.4 × 35.2 × 9.5 ㎝）

52. 常行寺

所在地	和歌山市加太1523	地　形	平地
緯度・経度	北緯34° 16′ 35″ ・東経135° 4′ 34″	標　高	4.2m
設置物	本堂、山門		
備　考			

略測平面図

構成要素写真（全景）

弁財天十五童子像
（江戸時代　総高76.2㎝）

53. 西念寺（和歌山市）

(1) 位置と周辺の状況

和歌山市西庄にある西山浄土宗の寺院である。

(2) 関連文化財または現地の状況

本堂裏の観音堂には、秘仏本尊である十一面観音像および御前立像のほか、本尊脇侍と考えられる平安時代の地蔵菩薩像、大威徳明王像が祀られ、両脇壇には役行者像が祀られている。また、観音堂前にある手水鉢には「奉寄進　御□　　葛城二宿」と刻まれている。これらの像や什物や石造物などは、かつて葛城修験第二経塚にあった神福寺が明治時代に廃寺になった際に堂宇ごと西念寺に移されたものである。なお、西念寺に観音堂が移されて以降、葛城二十八宿の二ノ宿として、現在でも修験者を迎えており、観音堂には葛城修験の納札が収められている。

(3) 歴史的背景

『紀伊続風土記』西庄村の項「二之宿観音堂」には「本尊十一面観音、脇士八幡大菩薩、大威徳明王なり、三尊共に役行者の作といふ」と記されており、現在でもこれらに相当する尊像が観音堂に祀られている。西念寺は江戸時代から西山浄土宗の寺院であり、葛城修験とは直接的なかかわりは無かったものと考えられるが、修験禁止令により葛城二十八宿第二品、二ノ宿として修験者を迎えていた神福寺が廃寺となった際に、西念寺が西庄村の大寺であったことからその境内に神福寺の観音堂が移されたと考えられる。

53. 西念寺

所在地	和歌山市西庄	地　形	平地
緯度・経度	北緯34° 15′ 33″ ・東経135° 6′ 30″	標　高	5.4m
設置物	真福寺から移設した観音堂、手水鉢、石灯籠 本堂、山門、鐘楼、庫裏、墓地		
備　考	観音堂は修験禁止令時に西念寺に移設		

略測平面図

構成要素写真（全景）

役行者坐像
（江戸時代、像高50.4cm
ヒノキ、一木造、玉眼貫入）

秘仏本尊十一面観音御前立
（江戸時代　像高104.6cm、
ヒノキ、一木割矧ぎ造）

役行者椅像
（江戸時代　像高55.2cm、ヒノキ、
寄木造、玉眼貫入）

手水鉢
（江戸時代　花崗岩　100×53×33cm）
「奉寄進　御□　　葛城二宿」

54. 鳴滝山圓明寺（鳴滝不動尊）（和歌山市）

(1) 位置と周辺の状況

鳴滝山圓明寺は和歌山市と大阪府の府県境に位置する臨済宗妙心寺派の寺院である。また、鳴滝不動はこの鳴滝山圓明寺の北、鳴滝川の上流に所在する。

(2) 関連文化財又は現地の状況

鳴滝不動は役行者を開基とする葛城二十八宿の行場の一つとして、現在でも修験者を迎え入れている。不動瀧の前には護摩堂もあり、毎月 28 日に修行される鳴瀧不動尊の祭礼には、和歌山県内外から沢山の参詣者があり、現在も修験者による『護摩供養』や住職による『味噌封じ』が行われている。

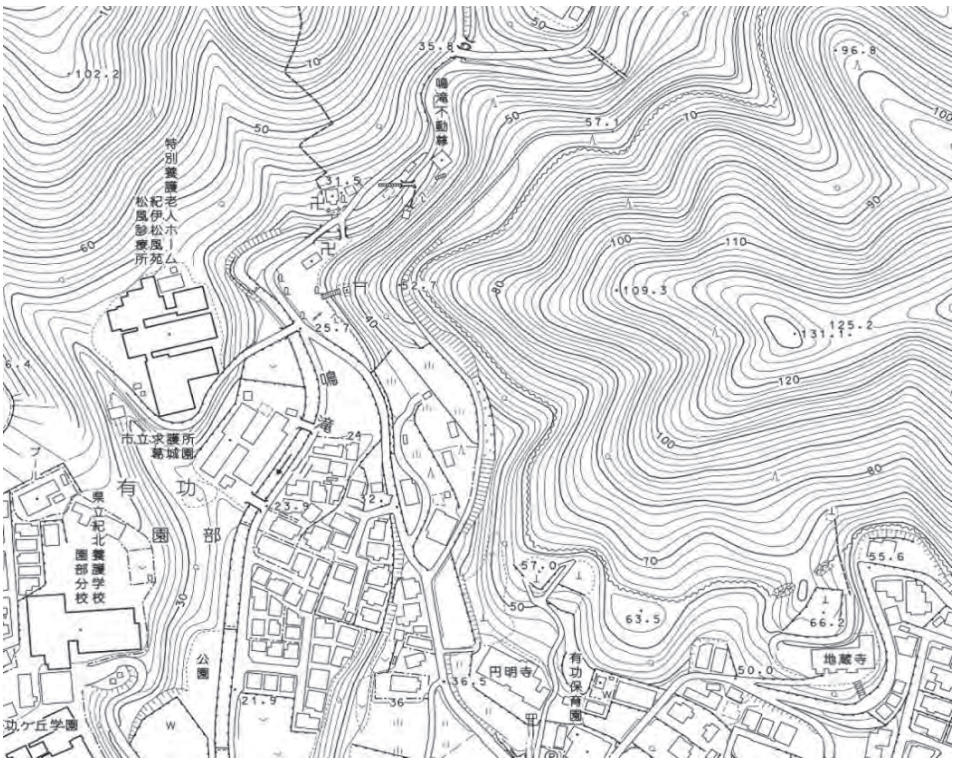
(3) 歴史的背景

現在の圓明寺の鳴滝不動尊は役行者が葛城二十八宿の第三宿とし、法華経第三巻比喩品が埋められた地であると言い伝えられている。圓明寺についての最も古い記録は正安年間に遡り、その後、覚鑁上人が開いた新義真言宗根来寺の末寺となった。圓明寺の寺域内には紀州より泉州に通じる間道が通り、僧兵数万と称した根来寺を護る要地でもあったが、秀吉による紀州征伐の時に根来寺と同じく焼き討ちに遭い七堂伽藍を失ったとされている。江戸時代に入ると、紀州徳川家から旧寺領を拝領し、徳川家の庇護の元、臨済宗興国寺派の寺院として現在地に本堂、庫裡、不動堂、弁財天堂等を順次再建し、臨済宗妙心寺派の末寺として現在に至っている。

54. 鳴滝山圓明寺

所在地	和歌山市園部	地　形	山麓
緯度・経度	北緯34° 16′ 21″ ・東経135° 11′ 23″	標　高	31.5m
設置物	護摩堂　不動の瀧（鳴瀧）		
備　考			

略測平面図



構成要素（全景）

55. 大福山本恵寺（直川観音）（和歌山市）

(1) 位置と周辺の状況

本恵寺は紀伊山地の谷あいの山麓にある。

(2) 関連文化財または現地の状況

本堂脇の観音堂には、秘仏本尊である十一面千手観音像および御前立像のほか、江戸時代の持国天像と増長天像、二十八部衆が祀られ、脇壇には役行者像が祀られている。また、観音堂には葛城修験の納札が収められている。

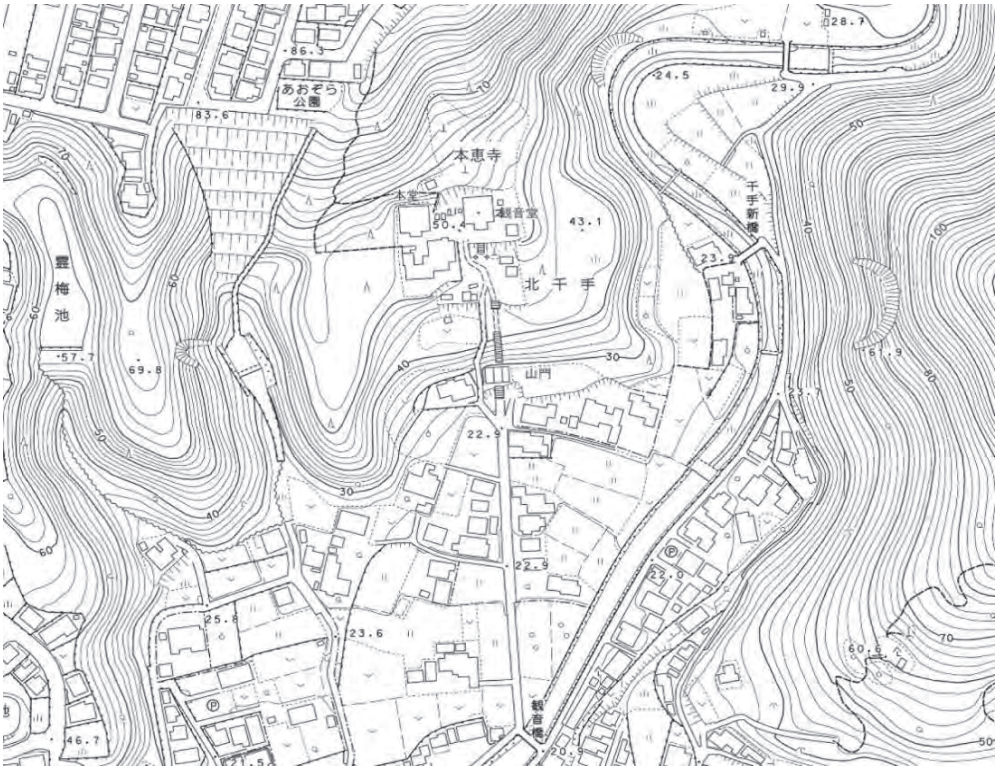
(3) 歴史的背景

本恵寺は大宝２年（702）、役行者による開創と伝わる。『紀伊国名所図会』によると草創の地は大福山山中の弁天の窟と呼ばれ、正応元年（1288）法燈国師の弟子、竜実により現在地に移され臨済宗寺院となった。豊臣秀吉の紀州征伐時の兵火により、焼失したがその後再興され、天和３年（1683）には紀州藩の付家老である新宮藩主水野家が新宮本広寺の住持日忠を招いて日蓮宗の寺院に改宗し、寺号も本恵寺と改めさせた。なお、観音堂の縁起である「大福山千手寺縁起」の写しが江戸時代に水野家により制作され本恵寺に伝来していることから、長禄四年（1460）十一月十五日付直川庄千手寺寺僧番頭等置文（『紀伊続風土記』所収玉井家文書）にみえる千手寺が現在の本恵寺であり、本恵寺の本来の寺号は千手寺であったと考えられる。

55. 大福山本恵寺（直川観音）

所在地	和歌山市直川	地　形	山麓
緯度・経度	34° 16′ 16″ ・東経135° 12′ 38″	標　高	50.1 m
設置物	観音堂、山門		
備　考			

略測平面図



構成要素（全景）

1 本恵寺　観音堂

2 葛城修験　納札

56. 墓の谷行者堂（和歌山市）

(1) 位置と周辺の状況

墓の谷行者堂は六十谷北側の山中、大福山本惠寺の北東にある。

(2) 関連文化財または現地の状況

堂内には明治三年の紀年銘のある砂岩製の役行者像および、コンクリート製の五輪塔がある。また、行者堂の脇には明治十二年の紀年銘のある宝篋印塔と、大正講による石塔があり、それらの前には文政２年の紀年銘のある石灯籠、奉納講名のある石製花筒がある。また、行者堂の背後にそびえる窟には現代のものと思われる役行者像等がある。なお、墓の谷行者堂は『紀伊続風土記』によると役行者の母の墓と言い伝えられたことから、今も月命日とされる７日には、参拝者の姿がみられる。役行者の母にあやかり、子供の将来を願う親の信仰が篤く、受験の合格祈願や就職や結婚、病気回復などの祈願に訪れている。

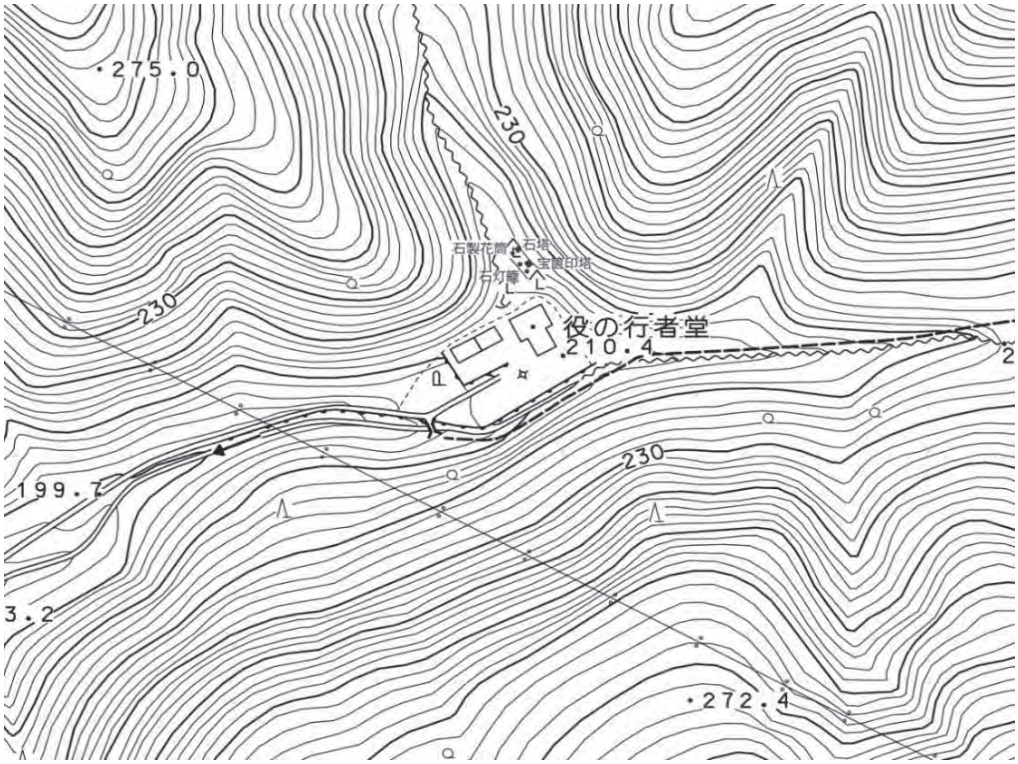
(3) 歴史的背景

『紀伊続風土記』には「修験者の行所なり。役小角の母の墓なりといふ」と、役行者の母公の墓と言い伝えられている。なお、葛城修験第三番経塚とする説があるが、行者堂脇にある文政２年の紀年銘のある石灯籠よりも古い石造品等も見当たらないことから、この石灯籠が造立されたころに新たに行場として整備されたと考えられる。

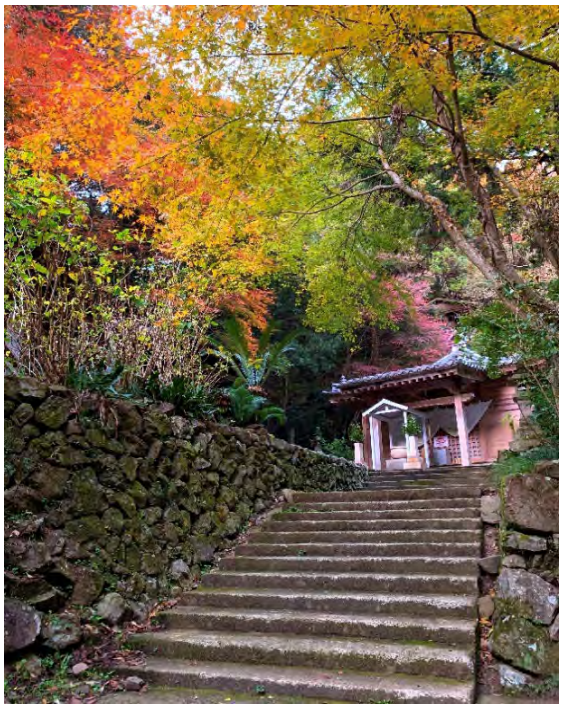
56. 墓の谷行者堂

所在地	和歌山市直川	地　形	山麓
緯度・経度	北緯34° 17′ 25″ ・東経135° 13′ 49″	標　高	210.4m
設置物	行者堂		
備　考			

略測平面図



構成要素（全景）



宝篋印塔（役行者千二百回■■寶■／明治十二年四月吉日当山二世■■）
宝篋印塔前石灯籠（文政■■／嶋屋■■）
石塔前石性花筒（　　一講中）

57. 中山王子跡（なかやまおうじあと）（和歌山市）

(1) 位置と周辺の状況

熊野古道紀伊路は、淀川河口付近の渡辺（窪津王子）から一路南下し、和泉山脈を越えて紀州に入る。雄山峠を越え中山王子のある滝畑から和歌山市域に入り、山口王子・川辺王子をへて紀の川を渡り、吐前・和佐をへて、矢田峠を越えて山東に入り、吉里・薬勝寺を通り、藤白王子に向かう。熊野参詣では、沿道に祀られた王子社に順次奉幣することが重要な作法とされた。和歌山市内には、中山王子をはじめ９社の王子社跡がある。

(2) 現地の現況

熊野詣の旅は、京都を出発しておおよそ４～５　日で紀伊国へ入るが、紀伊国最初の王子社が中山王子である。大阪と和歌山の境に位置する和泉山脈の標高 181 ｍの雄山峠を過ぎると、急峻でカーブの多い下り坂となり、峠の中腹にあたる滝畑集落に中山王子跡がある。滝畑は第三経塚の大福山への登山口となっており、熊野古道と葛城修験の道が交わる地点となっている。

(3) 歴史的背景

後鳥羽上皇の熊野参詣に同行した藤原定家の旅行日記である『後鳥羽院熊野御幸記』(建仁元年(1201年）成立）には、十月八日の項に「天、晴る。ウハ目王子に参る。次、中山王子に参る。」と記されている。中山王子跡は、市内滝畑集落の入り口にあたる位置に残されている。江戸時代の『紀伊続風土記』には滝畑村の王子権現社として、社方３　尺、境内周 36　間、村の東の端、道路沿いにあったことが記載される。

57. 中山王子跡

所在地	和歌山市滝畑	地　形	丘陵裾
緯度・経度	北緯34° 18′ 28″ ・東経 135° 16′ 9″	標　高	119m
設置物			
備　考			

略測平面図

構成要素写真（全景）

58. 慈眼院（観音寺）（岬町）

(1) 位置と周辺の状況

慈眼院は神福寺跡から未舗装道路を北東へ約１ｋｍ進んだ佐瀬川集落に位置する。二之宿の一つとされる西山浄土宗の寺院である。本堂には十一面観音菩薩像が祀られていることから観音寺として地元住民から信仰されてきた。境内には天正７年（1573）銘の砂岩製の地蔵菩薩像等がある。傍らには旧地蔵堂の屋根に葺かれていた路盤宝珠が置かれている。

(2) 現地の現況

史料に記されている山田家で守られてきた十一面観音菩薩像は本堂を増築した後に移されている。本堂に向かって右側に阿弥陀如来立像、左側に十一面観音菩薩像が厨子に安置されている。厨子の側面には延宝八年（1680）と記されている。本堂は老朽化が進み、建物の梁など傷みが激しい。喚鐘は元禄期のものである。

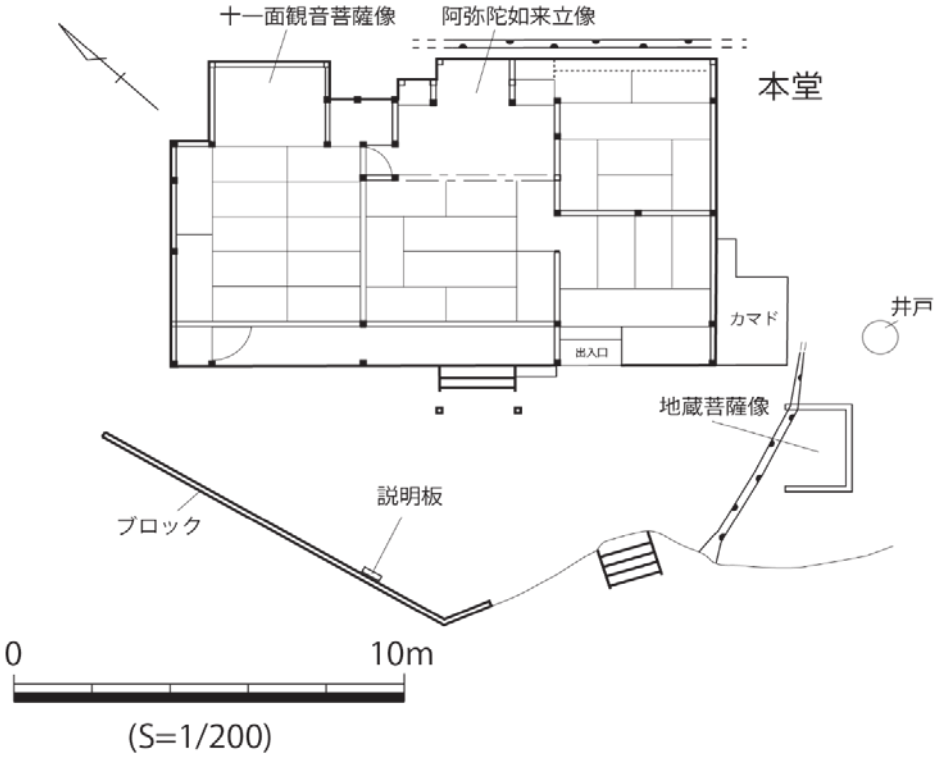
(3) 歴史的背景

『葛城先達峯中勤式廻向記』には「二ノ宿分　観音堂　金剛童子、此所にて有、座禅禪石有、又方便品の石有。行者堂　善女龍王ノ池　畑村分　泉領　観音堂十一面　金剛童子道上に有　辻ノ上也くず大明神森有　金剛童子　観音堂の下に有　横手村分　明神　森　八王子也　杖がやぶと云々　中孝子村分　道」とある。『葛嶺雑記』に「明鏡山慈眼院」「俗称山田孫太夫　領主土浦候　九頭龍明神・本地堂十一面・神変大士・金剛童子　山上に熊野権現有遥拝、但し三之宿と及びはんにゃがたけは此嶽とをいひもり山ともいへるなり。」と記されている。

58. 慈眼院

所在地	大阪府泉南郡岬町多奈川西畑911	地　形	山間
緯度・経度	北緯34° 16’43” 東経135° 06’48”	標　高	118m
設置物	説明板（現代）		
備　考			

略測平面図



構成要素写真（全景）

1　厨子　全景

2　厨子　屋根

3　本堂　西から

59. 高仙寺（孝子観音）（岬町）

(1) 位置と周辺の状況

上孝子地区にある曹洞宗の寺院である。通称､孝子の観音さんとして親しまれている。大宝２(702)年、役小角の開基とされている。元は真言宗だったが、改宗して曹洞宗となり、現在に至る。本堂には本尊である十一面観音菩薩立像が厨子に安置されている。普段は秘仏となっており、公開されていない。その代わりに室町時代製作の前立本尊が厨子の前に安置されている。本堂の裏側には高野山城への登山口がある。標高 285 mの高野山城は信長の根来攻めに関わった砦とされる。さらに、北東方向へ約２ｋｍの距離には飯盛山（384.5 m）がある。山頂付近には飯盛寺（千間寺）があったとされるが焼失しており、本尊の阿弥陀如来立像は淡輪の西教寺へ、釈迦如来像は中孝子の三之宿にあたる金輪寺へ移されている。

(2) 現地の現況

境内の最北端に「役行者母公の墓」と刻まれた石碑が建つ。その周囲約３ｍ四方に大きな平石などが集石しており、複数の地蔵菩薩像等もみられる。その東側には、崖地を刳りぬき、石積みで祠を造り、役行者像が祀られている。傍らに碑伝が置かれている。

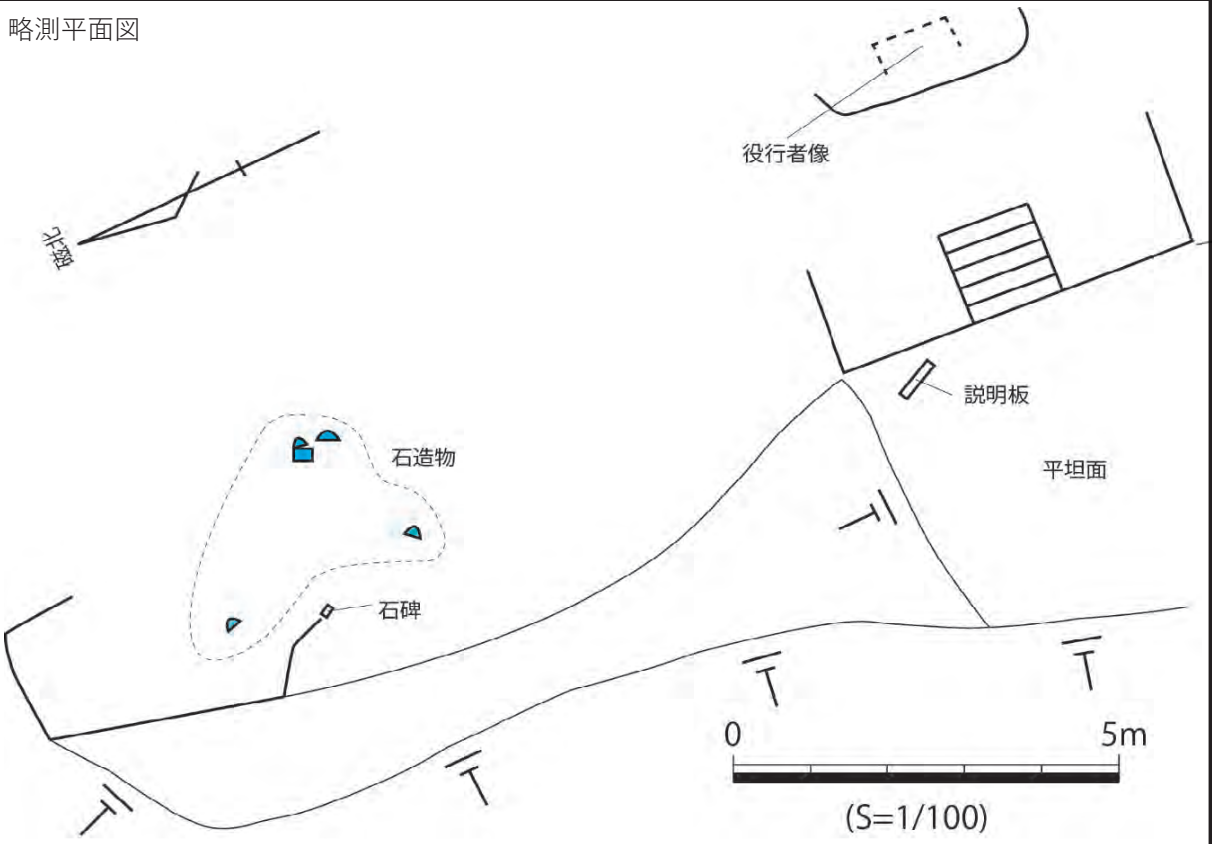
(3) 歴史的背景

『葛城峯中記』に「高山寺　寶杵山。行者持給三古有。永仁六年九月廿一日に行者佛具を御堀出し、弘安十丁亥年持物の三古正月十四日に御堀出し有。其節右御爪に障て一二分程欠る。高山寺の什物なり。役行者御母の墓在也。如法尾　如法經。行者住所也。」とある。『葛城雑記』に「本尊十一面　神変大士・役行者御母公の墓」と役行者母公の墓のことが記している。

59. 高仙寺

所在地	大阪府泉南郡岬町孝子1464	地　形	中腹
緯度・経度	北緯34° 17’20”・東経135° 09’29”	標　高	141m
設置物	石碑（現代）		
備　考			

略測平面図



構成要素写真（全景）

1　全景（南から）

2　石造物　遠景（西から）

3　本堂（南から）

4　石造物　近景（西から）

60. 根來寺伽藍古絵図（岩出市）

根来寺が最盛期を迎えた室町時代後期の境内の様子を描いた絵図。図中に「興教大師拝殿」の文字があることから、覚鑁上人（かくばんしょうにん）に大師号が追贈された元禄３年（１６９０）以降の制作とされる。

しかし、描かれている内容は、他の文献史料や、発掘調査の成果等とも合致する点が多くみられることから、何らかの根拠資料にもとに製作されたと考えられる。

また、葛城峯入道（みねいりみち）も図中に描かれており、葛城修験の信仰が受け継がれていることがうかがえる。

右端に日輪（太陽）と月輪（月）が描かれ、多くの人物も描かれていることから、参詣曼荼羅図の役割を持つ絵図であったとも考えられる。

この他、かつての根来寺境内の範囲を主張する目的もあったとみられ、北の結界は和泉山脈中腹の押川（おしがわ）集落付近の金剛童子社を含む形で描かれている。

この絵図は現在、「ねごろ歴史資料館」と根来寺で複製を見ることができる。

根來寺蔵「根來寺伽藍古絵図」（和歌山県指定文化財）

61. 中津川行者堂（なかつがわぎょうじゃどう）（紀の川市）

(1) 位置と周辺の状況

中津川は葛城修験の中台と呼ばれ、本山派修験において葛城灌頂という儀式が行われる重要な場である。和泉山脈を源とし紀ノ川へ注ぐ中津川沿いには、熊野神社、中津川行者堂、粉河寺といった葛城修験の中心的な行場が位置している。粉河寺から北へ約 2 ㎞には地区名「中津川」の集落が形成され、現在でも役行者に付き従った五鬼家と呼ばれる前鬼の子孫が住み、行場の維持管理や修験者の手伝いを行っている。集落から北の山中へ続く修験道には町石が設置され、約 1.2 ㎞登った標高 273 m の山復西側斜面に中津川行者堂が所在している。

(2) 現在の現況

修験道から西へ急な石階段を上がると平坦地となり、安永六年（1777）の紀年銘をもつ石製の護摩鉢が設置され、毎年、聖護院による春の峰入りの際には採燈護摩供が行われる。西側には複数の石造物が建てられており、「正平 24 年（1369）11 月日」銘の一字主尊板碑が最も古い。平坦地から短い石階段を西へ上がると中段となり、複数の石造物や祠、円形の池が配され、西側には庫裏が建てられている。中段から西へ長い石階段を上がると上段に行者堂が建てられている。行者堂は東を正面とし、桁行三間、梁間三間の寄棟造で、向拝を設け、本瓦葺きの屋根がのこる。現在の行者堂は、棟札から天保 13 年（1842）に建立されていることがわかり、概ね当初の姿を留めている。

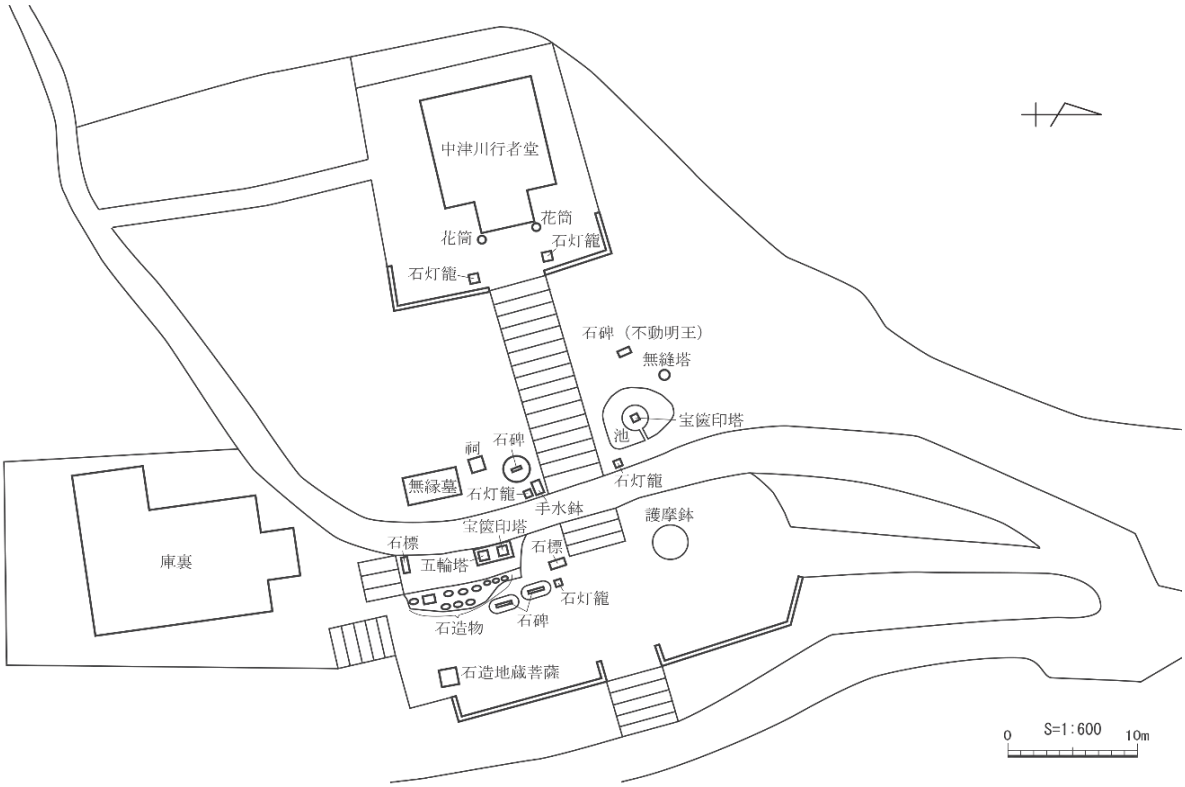
(3) 歴史的背景

行者堂は、もと極楽寺阿弥陀堂といわれ、阿弥陀三尊を祀る堂であったが、熊野神社の奥にあった一乗山七越寺無量坊が寛永 14 年（1637）に廃せられ、行者像が阿弥陀堂に祀られるようになったことで、行者堂または高祖堂と呼ばれるようになった。『紀伊国名所図会』には永徳元年（1381）の修理棟札があったことが伝えられ、『紀伊続風土記』には天保年間に極楽寺の側に無量坊が再建されたとあり、行者堂を含める境内地の変遷が窺える。

61. 中津川行者堂

所在地	和歌山県紀の川市中津川	地　形	山腹
緯度・経度	北緯34° 30′ 80″ ・東経135° 40′ 22″	標　高	273m
設置物	中津川行者堂、庫裏、祠、石灯籠、石碑、石造地蔵菩薩、無縁墓、五輪塔 宝篋印塔、無縫塔、石造物群、石標、手水鉢、石製鳥居		
備　考			

略測平面図



構成要素写真（全景）

62. 熊野神社（くまのじんじゃ）（紀の川市）

(1) 位置と周辺の状況

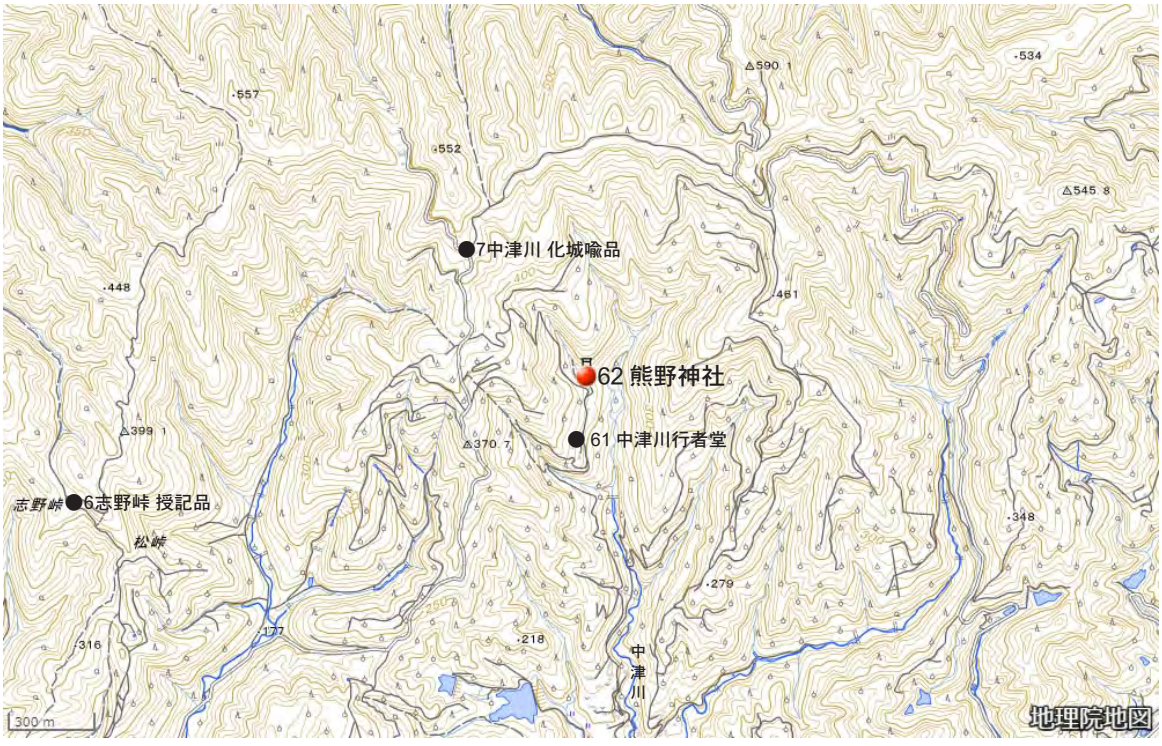
中津川の集落から町石をたよりに修験道を北へ約 1.2 ㎞登ると行者堂が姿を見せ、その北側 250 m の中津川沿いの谷間に熊野神社が建立されている。社殿は南向きに建てられ、社前は狭い平坦地となり、石製鳥居などの石造物が設置されている。

(2) 現在の現況

熊野神社は中津川の産土神社で、ほぼ同形式、同規模の本殿２社が並立する。一間社隅木入春日造で彩色が施され、昭和 40 年から屋根は銅板葺となった。向かって右に若一王子と熊野権現、左に丹生明神と妙見菩薩を祀る。現在の本殿は寛政９年（1797）に建立され、安政６年（1859）に修理を受けている。社の前には複数の石灯籠が並び、最も古い正平 24 年（1369）11 月の２基は、中津川行者堂の境内地にある一字主尊板碑と同年同月であるため関連が想定される。境内地西側には山伏達が修行中に背負う笈をおろしたと伝わる「笈掛け石」が遺されている。

(3) 歴史的背景

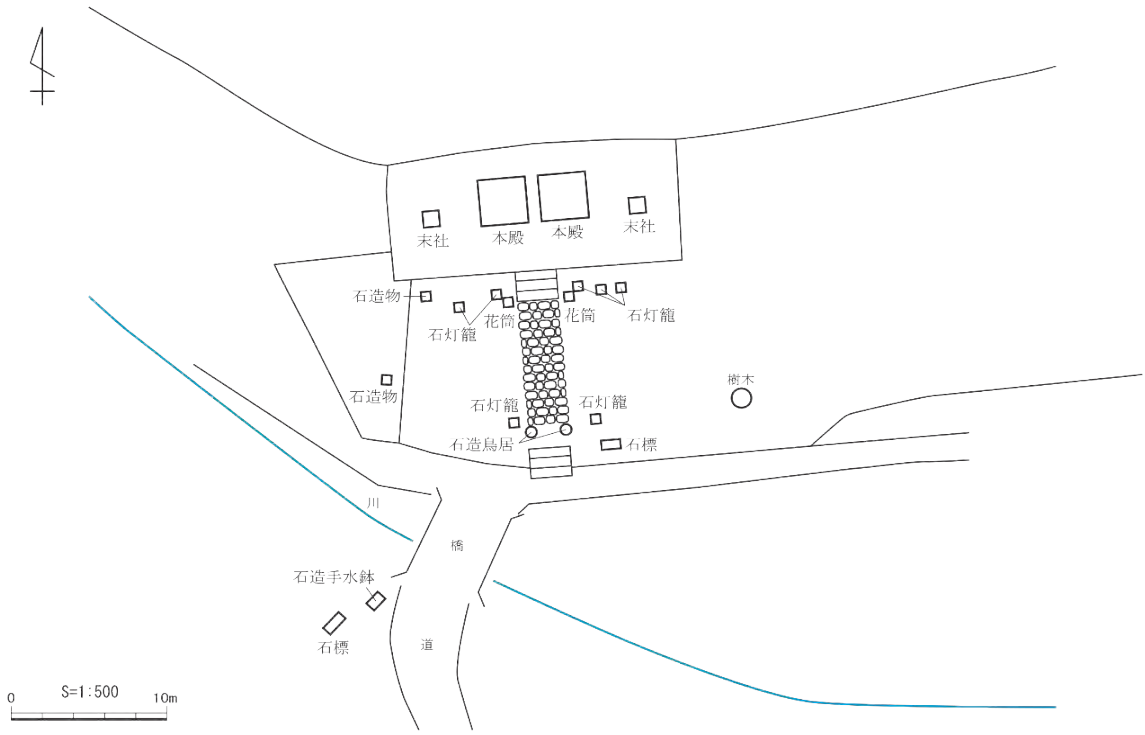
熊野神社には中世から近世の棟札が多数伝来し、康正３年（1457）銘を最古とする。神社の造営は、古くは極楽寺の僧や修験者、村衆などにより行っていたが、近世以降は聖護院により行われていたことが棟札からわかる。その他、享保４年（1719）の中津川村と山下十ヶ村の山論の裁決絵図には、熊野神社や行者堂の伽藍が描かれ、神社前の護摩鉢など、当時の行場の様子を知ることができる。その他、神社の奥には、一乗山七越寺無量坊が建っていたとされるが、現在では、複数の石造物が知られるのみである。



62. 熊野神社

所在地	和歌山県紀の川市中津川	地　形	山腹
緯度・経度	北緯34° 31′ 03″ ・東経135° 40′ 26″	標　高	264m
設置物	本殿２社、末社２社、石灯籠、石造物、石碑		
備　考			

略測平面図



構成要素写真（全景）

63. 犬鳴山（七宝瀧寺）（泉佐野市）

犬鳴山七宝瀧寺は、斉明７年（661）、修験道の開祖である役行者が 28 歳の時に開基した。大和の大峰山より６年早く開山されたことから元山上と呼ばれており、役行者の開山時に倶利伽羅大龍不動明王が出現したことから、これを本尊としたと伝えられている。また、弘法大師も修行をし、山内の七瀑に七福神をお祀りしたといわれている。そのため、七宝瀧寺では国家安穏・五穀豊穣・諸人快楽の密法が修されている。なお、この山の名前の由来は、「義犬伝説」により山号「犬鳴山」を宇多天皇より賜ったことに起因する。

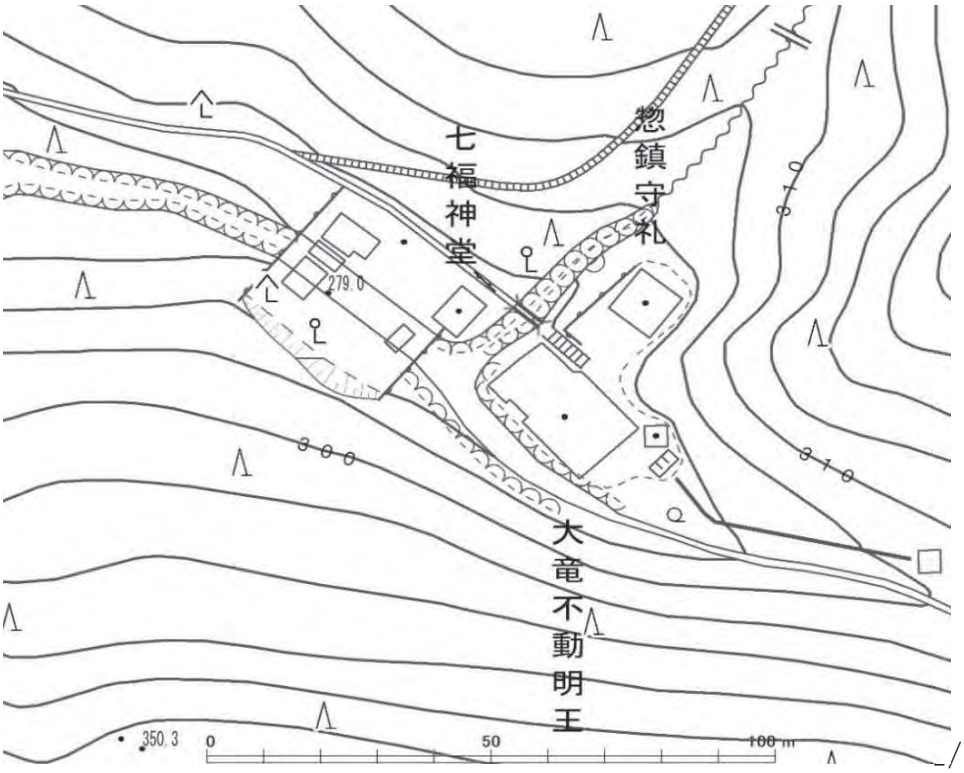
明治時代の初めに廃仏毀釈と共に修験道が禁止され、山内は著しく衰えたものの、明治時代後期には再興した。その後、昭和 25 年（1950）には往時の宗教体制に還り、新たに真言宗犬鳴派を公唱し、葛城二十八宿修験道の根本道場として修験道総本部を置いている。霊山の中でも国内最古級とされており、近年の研究では修験道史の研究も進み、修験道発祥霊山の可能性も指摘されている。真言宗犬鳴派大本山である七宝瀧寺は、葛城和泉の神仏習合霊場として現在に至る。

現在、行者の滝には、老若男女問わず全国から修験体験を目当てに年中多くの人が訪れている。

63. 犬鳴山（七宝瀧寺）

所在地	大阪府泉佐野市大木８	地　形	山地
緯度・経度	北緯34° 20′ 21″ ・東経135° 23′ 16″	標　高	256.2m
設置物	建造物（寺院・近代）		
備　考			

略測平面図



1/1000

構成要素写真（全景）

64. 葛嶺雑記（かつれいざっき）（泉佐野市）

『葛嶺雑記』は、『葛城嶺中記』『修験道伝説』『諸山縁起』等とともに、中世期に興ったとされる葛城修験道に関する数少ない文献の一つである。

この『葛嶺雑記』は、名称や位置が流動的であった葛城二十八宿を踏査した智航が嘉永２年（1849）に著した書物である。七宝瀧寺にあった葛嶺雑記を、大坂の和泉屋藤兵衛が版を起こし、翌嘉永３年（1850）に出版したものである。出版の経緯としては、当時、犬鳴の滝本坊（現在の七宝瀧寺）に置かれていた原本を所望する人が多かったことから、大坂堺筋の和泉屋藤兵衛が財を投じて印刷に付し、犬鳴山で修行する人のために寄付したといわれている。

『葛嶺雑記』には葛城二十八宿とその行程が記されており、この本によって「葛城二十八宿」の名称や位置を比定できるようになった。また、明和４年（1767 年）に出来た『葛城修行灌頂式』では二十八宿の序品が『葛嶺雑記』と同じく友ヶ島となっていることから、江戸時代中期頃に二十八宿の位置が定着したと考えられる。

現在、犬鳴山七宝瀧寺では嘉永３年当時の版本を所蔵している。

65. 政基公旅引付（まさもとこうたびひきつけ）（泉佐野市）

鎌倉時代から戦国時代にかけて、現在の大阪府泉佐野市域には日根荘という荘園があり、摂関家の１つ、九条家の治める荘園で、天福２年（1234）に立荘された。

『政基公旅引付』は日根荘領主・九条政基が文亀元年（1501）３月から永正元年（1504）12月までの日根荘滞在時に記した日記である。日記のなかで、当時の入山田村（土丸・大木地区）と犬鳴山七宝瀧寺との関わりを示す記述が度々登場する。以下に関連する記述を挙げる。

・入山田村での干ばつの際、七宝瀧寺の僧（山伏）が火走神社で雨乞い、降らなければ七宝瀧寺の滝の前で祈祷を行い、それでも降らなければ不動明王の堂にて祈祷を行い、それでも降らなければ滝壺に鹿の骨などの不浄のものを投げ入れる。〔文亀２年７月 20 日条〕

・根来寺と守護細川氏の戦の際は、九条政基は七宝瀧寺に避難。〔文亀２年８月 21 ～ 23 日条〕

・入山田村人が七宝瀧寺の坊に米・農具を預ける。〔永正元年３月 28 日条〕など。

宮内庁書陵部蔵「旅引付　甲、乙、丙、丁、戊」

66. 行者の滝を含む七つの滝（泉佐野市）

七宝瀧寺の山内にある四十八滝のうち、「七宝瀧寺」の寺号の由来となった代表的な七つの滝のことを指す。

淳和天皇（824 ～ 834）の時代、全国的な干ばつの際に犬鳴山で祈願が行われ、その結果泉州一円は雨に恵まれた。そこで天皇は、雨乞祈願成就の霊験を称え、犬鳴山中にある行者の滝を含む著名な七つの滝を金銀などの七宝に因んで、七宝瀧寺と命名した。

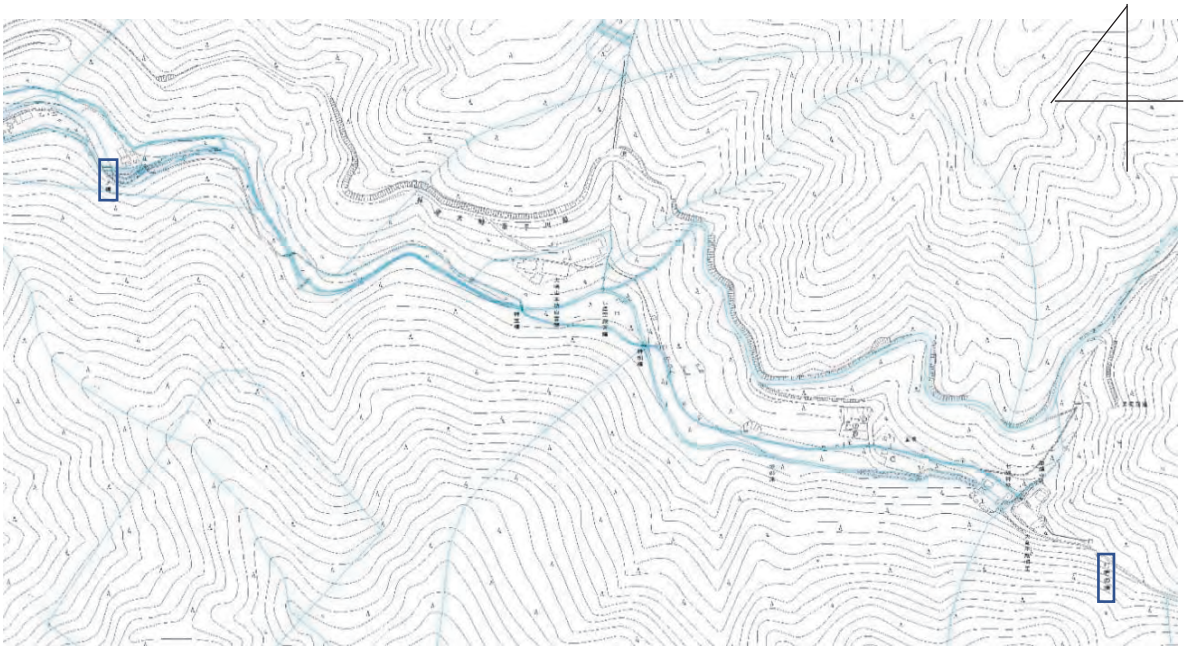
この七つの滝は、それぞれ「両界の滝」「塔の滝」「弁天の滝」「布引の滝」「固津喜の滝」「行者の滝」「千手の滝」と呼ばれているが、弘法大師が七福神を祭祀した後は、「七福神・不動の霊瀑」とも呼ばれている。そして、一度この山を参詣すれば七福神・不動明王の霊気を受け、福徳増進するといわれている。

役行者や弘法大師も修行したという行者の滝では、毎年８月に行者と一般参加者が一堂に会し、入滝を行う滝行大護摩供が行われている。また、滝行体験も行われており、老若男女問わず各地から信仰厚い修行者が集まっている。

66. 行者の滝を含む７つの滝

所在地	大阪府泉佐野市大木2240-1-1ほか	地　形	山地
緯度・経度	北緯34° 20′ 18″ ・東経135° 23′ 19″	標　高	301.1m
設置物			
備　考	犬鳴山七宝瀧寺境内地内に所在		

略測平面図



両界の滝、塔の滝、弁天の滝、布引の滝、固津喜の滝、行者の滝、千手の滝

1/4500

構成要素写真（行者の滝)

67. 葛城踊り（かつらぎおどり）（岸和田市）

(1) 位置と周辺の状況

江戸時代、和泉葛城山を中心とした塔原（とのはら）、相川（そうがわ）、河合（かわい）、木積（こつみ）（貝塚市）、蕎原（そぶら）（貝塚市）の五ヶ村（五ヶ荘）の人たちが、葛城山頂の高龗神社（八大龍王）に降雨を祈願、感謝するために行った、雨乞（あまご）い、または雨礼の踊りである。本来は山頂の神社前で奉納されていたといわれる。

明治時代末以後、一時途絶えたが、昭和 30 年に塔原町で復興され、現在は毎年 8 月 14 日夕刻、塔原町内にある弥勒寺（みろくじ）の境内で奉納されている。

現在では大阪府指定無形民俗文化財になっており、美しい衣装で太鼓を叩き踊る子供たちの姿は、地域の夏の風物詩となっている。

(2) 歴史的背景

葛城修験は山岳での修験だけではなく、地元にも深く根差していることが知られ、特に大阪府南西部、旧和泉国一帯には、祈雨の習慣が多く残されており、和泉葛城山を意識した雨乞いの踊りや降雨の伝承が数多く残る。

この葛城踊りは直接的に修験道とは関係しないが、山頂に葛城修験第九経塚「嶺の龍王」があるのも、地元により葛城山頂に高龗神、八大龍王が祀られるのも、決して偶然ではない。そもそも和泉葛城山は雨の山であり、龍王の山なのである。そこに役行者による修験が始まり、里人に雨の山の信仰が根付いたのが、現在の泉州の雨乞い文化の基層にあると理解できる。

このように葛城踊りは葛城修験から受け継がれる里人の伝統行事と位置付けられ、修験に育まれた文化のひとつなのである。

68. 意賀美神社（おがみじんじゃ） 雨降りの滝（あめふりのたき） （岸和田市）

(1) 位置と周辺の状況

雨降りの滝は、意賀美神社（おがみじんじゃ）の境内内にある。神社は式内社で旧社格は村社と位置付けられた。阿間河滝村・土生滝村の産土神であり、水利の要所に祀られる。

神社の祭神は水をつかさどる「闇龗神（闇淤加美神：くらおかみのかみ）」という龍神で、慈雨、五穀豊穣の神とされる。葛城山など山に鎮まる龍神は「高龗神（たかおかみのかみ）」とし、谷などに鎮まる龍神を、闇龗神とすることから、修験の山、葛城山と一対の神と位置付けることができる。従って現在の漢字表記である意賀美（おがみ）も本来は､龗（おかみ）であると解することができる。神社の境内は神於山（こうのやま）の北側の裾に位置する。神於山にも神於寺（じんおじ・こうのでら）があり開基は役業者であり、修験と密接に関係する。

(2) 現地の現況

神社の境内の前を流れる津田川の上手に雨降りの滝がある。左右に崖があり、濃緑色の滝つぼとあわせ闇龗、龍の鎮まる場を思わせる雰囲気がある。

天平４年（732 年）の聖武天皇のときに大かんばつがあった際、祈雨の霊験があったといわれる。また元慶８年（884）陽成天皇が、大かんばつに際し、菅原道真に降雨を祈らせたと伝えられ「雨降り大明神」とも呼ばれる。

日照りには、この水をさらえて神前に祈る、また、一説によると、汚物を投げ入れるなどすると、雨が降ったことから「雨降りの滝」と呼ばれている。

意賀美神社のある地域は比較的内陸にあるため、瀬戸内海気候に似て、梅雨後の降雨量が少ないという特徴がある。しかし境内を含む周辺は湿潤な環境を有しており、この付近には珍しい暖地の広葉樹種がみられ、豊かな自然環境の中に位置する神社であることもこの地の水が豊富なことを物語る。

(3) 歴史的背景

和泉国一帯には、祈雨の習慣が多く残されており、葛城山系にはこういった伝承が多く残る。これらは山頂に祀られる高龗神、八代龍王の関連からも、修験の影響を色濃く受けており、修験に育まれた文化のひとつと言える。

69. 笹踊り（ささおど）（和泉市）

(1) 歴史的背景

11 番経塚七越峠経塚山見宝塔品のふもとの里、和泉市南横山地域の氏神・八坂神社（和泉市父鬼町）に伝わる伝統芸能である。笹踊りの起源は詳らかではないが、中世から大阪府南部の泉州地域に数多く伝承されてきた「風流太鼓踊り」の系譜を継ぐ、雨乞い踊りの一つである。

『大阪府全誌』(1922（大正 11）年）の七越峠の項には、「甘露水は山の中腹にありて俗に雨壺といひ、旱天の時には其の蓋を取り村民挙りて祈祷するに必ず霊験あり」と記されている。ここには、七大龍王が鎮座しており（現在は八坂神社境内に遷座)、米、麦、野菜、酒、塩等をお供えして五穀豊穣を祈願すると共に降雨の無いときには雨ごいまつりを行い、雨乞い踊りも奉納されてきた」という（『父鬼郷土の記録』1982（昭和 57 年)。

(2) 現況

笹踊りは、大正３（1924）年に、八坂神社の正遷宮に際して奉納されたのを最後に途絶えていたが、平成 15（2003）年に再興され、地域の子供たちに受け継がれている。20 を超える演目があるが、現在演じられているのは、「道歌花見踊」と「鶯踊」の 2 種である。独特の複雑な文句とゆったりとした歌の調子、優雅な舞踊りが特徴である。

(3) その他

現在は演じられていないが、「お村踊」のなかでは、「きよづ可（経塚）そんぞう小角行者のふ里志あ登づきかつぎよぞあら目出度ゝ」と、経塚や役行者をうたっている。

なお、南横山笹踊り保存会は、途絶えていた笹踊りを復活させ、地域の小学生を対象として継続的に笹踊りの実技指導を行い、学校行事や地域行事の場で発表を行っている功績により、平成 26 年度大阪府教育委員会「文化の日の表彰」、令和３年度憲法記念日知事表彰を受賞している。

70. 堀越癩観音（ほりこしらいかんのん）（かつらぎ町）

(1) 位置と周辺の状況

堀越癩観音は、かつらぎ町大字東谷に所在し、四郷谷の階段断層状緩斜面に立地する葛城修験の行所で、堀越集落の南東部に位置する。周辺は、茅葺古民家の景観が良く残る。

(2) 現地の状況

南北軸 60 m、南辺 50 m・北辺 20 mの凸形の境内は、上中下 3 段にわかれており、下段に庫裏・本堂・客殿、下段と中段に倉、上段に護摩堂が配置される。

境内からから 500 m北北東に位置する、堀越癩観音と関係が深いとされる灯明岳頂部は、東西 6.5 m、南北 4 mの平坦地になっている。南東を入口として、北西奥には東面する役行者像を祀る石龕がある。長軸（東西）2 m、短軸（南北）1.6 m、高さ 0.9 mの基壇の上に安置されるこの石龕は、和泉砂岩製であり、基壇に平行に四方 0.58 m、高さ 0.84 mを測る。南北の下辺が短い舟型の底石を 2 枚、東西に並置し、その上に西の奥壁、南北側壁を立て、側壁の手前に観音開きの扉を設置する。扉は枘を造り出し、底石と天井石に枘穴を設け嵌め込む。天井石は扉と側壁によって支えられる。天井石の上には、笠石を置く。

石龕奥壁の内面には、施主の銘が刻まれている。翻刻は、次のとおりである。

（奥壁内面）　喜右ェ門
　　源之右ェ門

建立年月日は明らかでないが、「喜右ェ門」は向井家、「源之右ェ門」は左近家の先祖であるとわかっていることから、少なくとも江戸時代には遡る。

石龕周辺には、種類不明の石造物片が散乱しているが、一部にみられる銘文から、近世のものかと思われる。

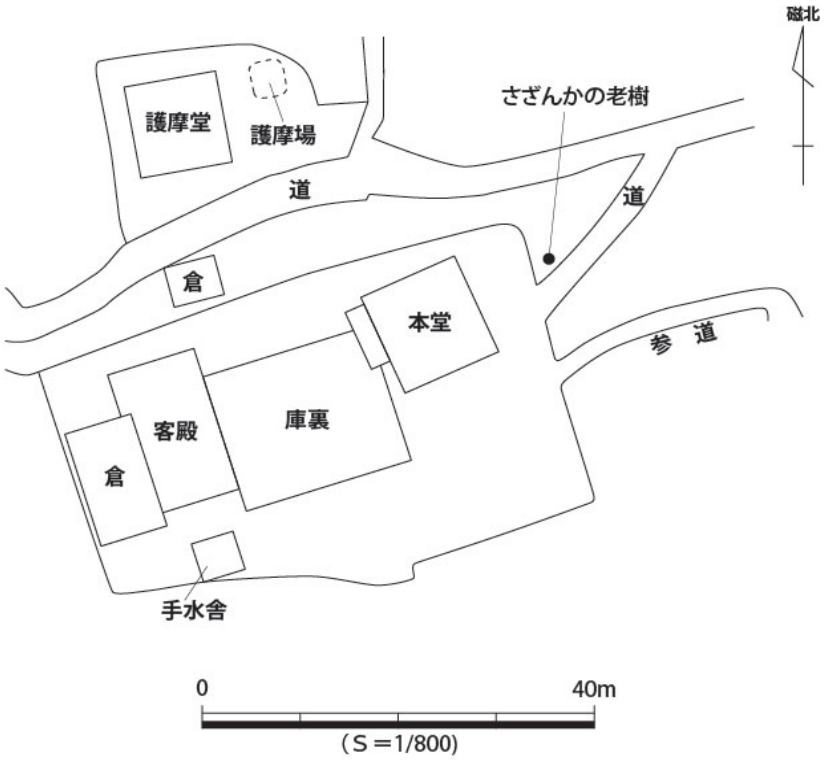
(3) 歴史的背景

『諸山縁起』及び『滝区有文書』には明確な記述がないが、堀越集落に座し向井家が住職を代々務めている本寺は、先述した五十七宿「向い多和」「鎌多輪」、即ち堀越宿や灯明峯寺との関係が濃いと考えられる。紀伊続風土記では、「癩除観音堂」と記載され、「堀越にあり　癩気に悩める者立願すれば験ありといふ　近世香華の客多し」と説明される。本寺の縁起では、「当山御本尊秘仏十一面観音菩薩は　天智天皇の四年役行者神変大菩薩葛城開峯の砌　御母公癩の病となられし時（中略）彫刻されし霊像是也　燈明ヶ岳に庵を営み安置祈念したる処（中略）平癒せられたり（中略）天正年間根来寺兵火に炎上せる時伽藍ことごとく焼亡せり」「（前略）慶長再建以来毎年聖護院御殿並びに葛城大先達の御法所として国家安穏の修法の霊跡地と」とあり、本尊の霊験により役行者母の癩病が治癒したこと・慶長年間の再建以来聖護院宮や葛城修験者の行所となっていることが説かれる。縁起にみえる燈明ヶ岳は、集落の北東に仰ぐ灯明岳のことを指していると考えられ、灯明峯寺との関連も想起される。

70. 堀越癪観音

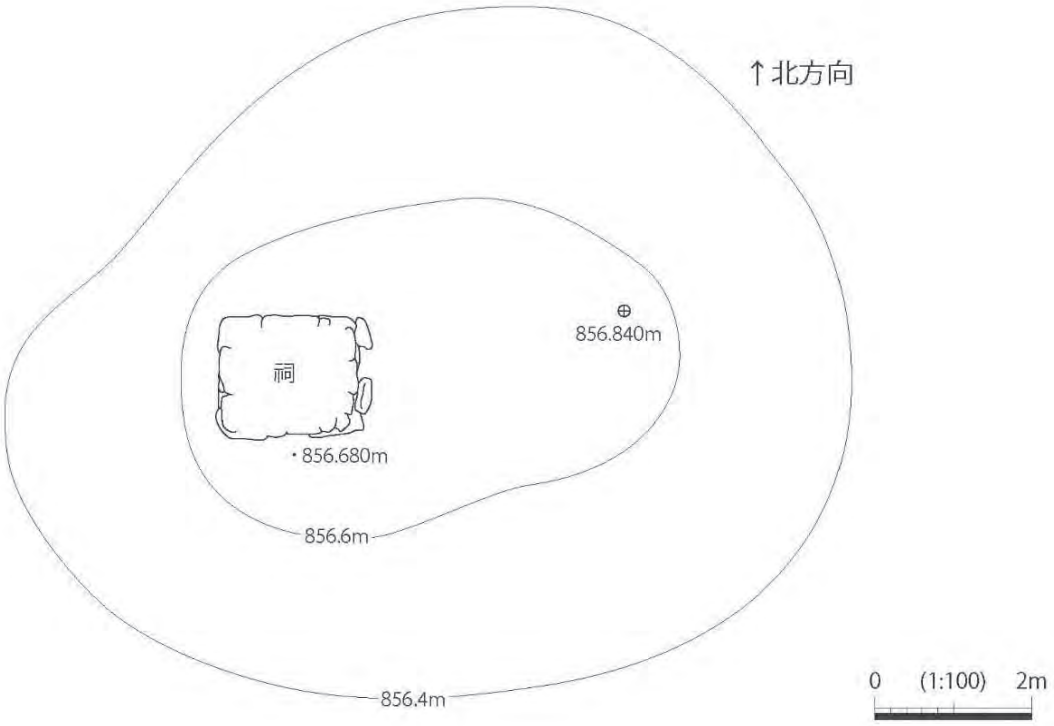
所在地	和歌山県伊都郡かつらぎ町東谷	地　形	階段断層状緩斜面
緯度・経度	北緯34° 20′ 24″ ・東経135° 29′ 60″	標　高	650m
設置物	庫裏（登録有形文化財「堀越癪観音庫裏」） 本堂、客殿、倉、護摩堂		
備　考			

略測平面図



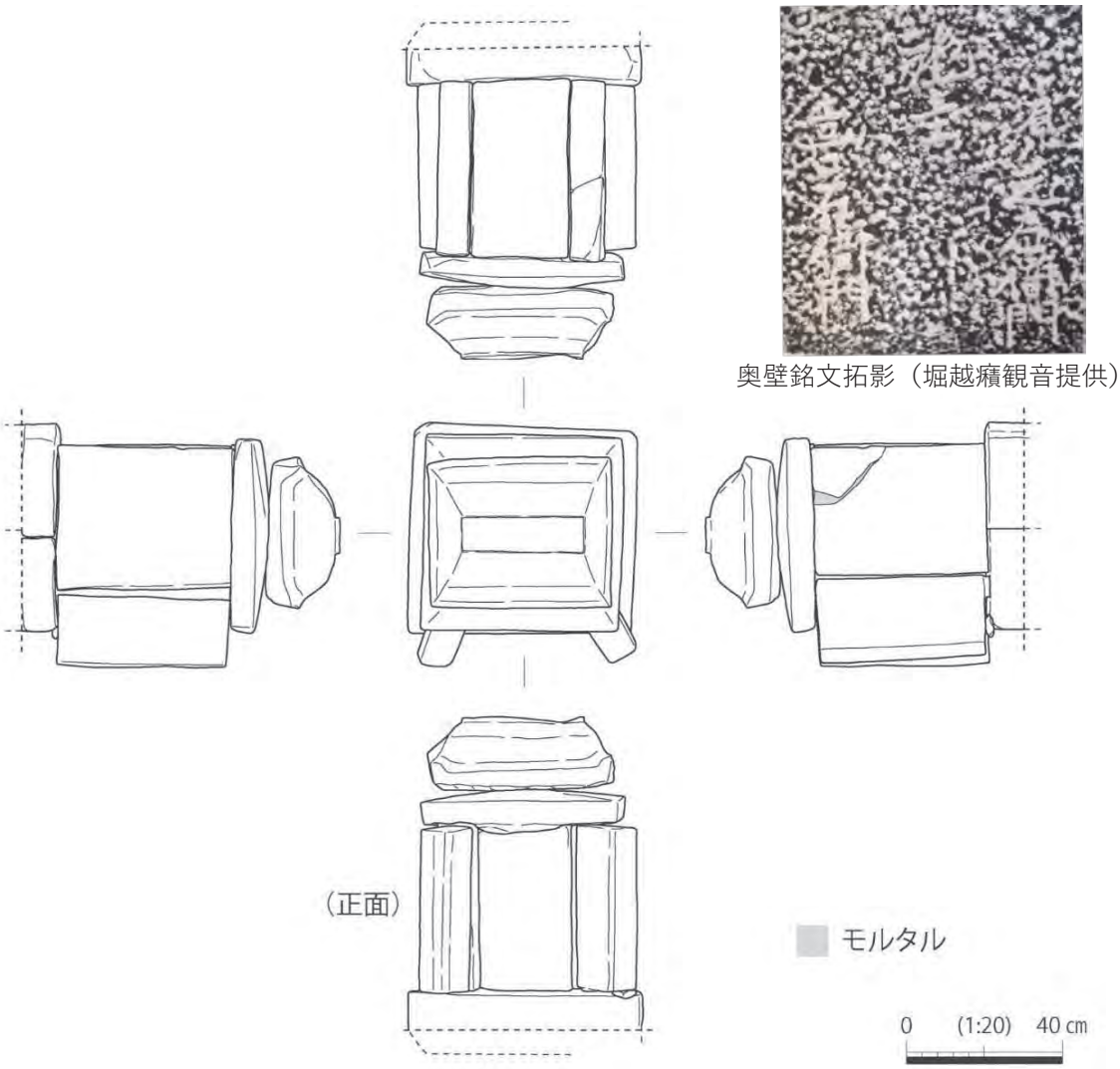
構成要素写真（全景）

右から本堂、庫裏



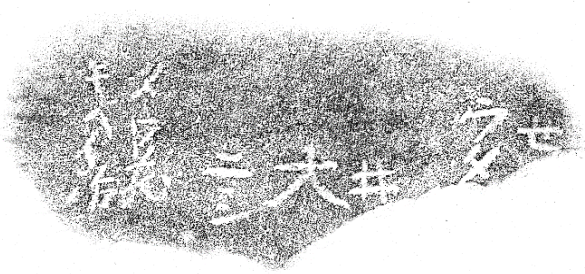
1　燈明岳頂部平坦面略測図（S=1/100）

2　燈明岳平坦面（西から）



3　役行者像石龕実測図（S=1/20）

4　役行者像石龕（西から）



5　石龕周辺散乱石造物片拓影

71. 葛城蔵王権現社（かつらぎ町）

(1) 位置と周辺の状況

葛城蔵王権現社は、かつらぎ町大字大畑に所在し、河内長野市とかつらぎ町との境界にもあたる蔵王峠東側に立地する、役行者が開いたとされる葛城修験の行所である。周辺は山林であるが、県道61号堺かつらぎ線が南接し、東西に通っている。

(2) 現地の状況

境内は、北東－南西方向に70ｍ、北西－南東方向に22ｍを測る。中央部の南東に、つづら折状の参道が取り付き、鳥居が連続的に建ち並ぶ。境内南西半は北東半よりも幅が広く、設置物が展開する。設置物は、本堂・倉・役行者像拝殿である。

本堂は、入母屋銅板葺で梁間14ｍ、桁行8ｍを測り、倉が取り付く。北西奥に木造役行者像を祀る。

役行者像拝殿は、入母屋造銅板葺で壁は設けず、屋根の下に石造役行者像を祀る。石造役行者像は、砂岩製で、舟形光背をもつ役行者像を彫出したものであり、幅60㎝、高さ137㎝、奥行35㎝を測る。石造役行者像背面には、当該地区である大畑と近隣地区の短野との境界山論に関係するとされる銘文があり、正保3年（1646）の年紀を有する。

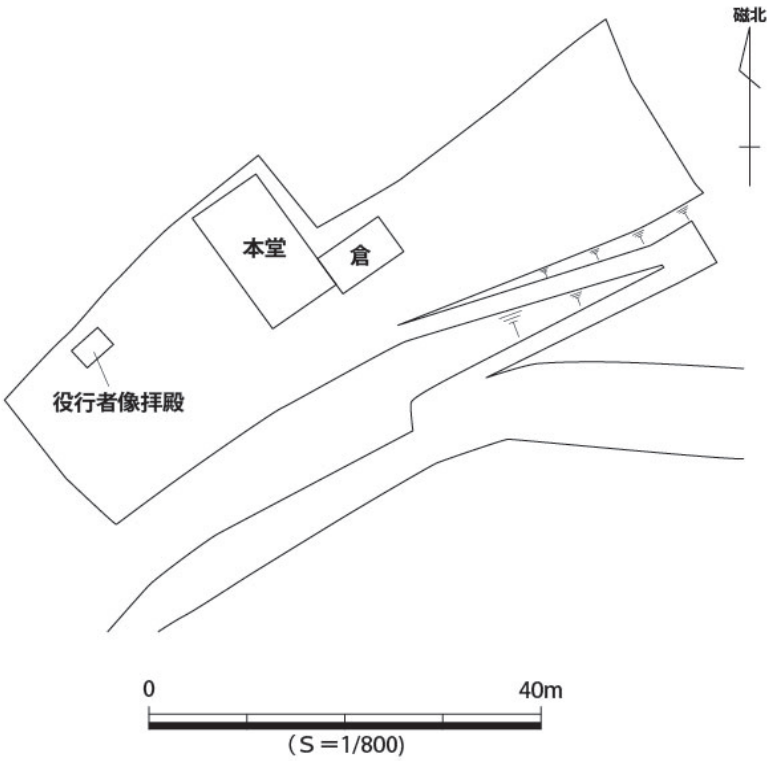
(3) 歴史的背景

蔵王峠には、鏡の宿と呼ばれた第十四経塚があったと伝わる。第十四経塚の詳細については別項に譲るが、『諸山縁起』では柚多輪、滝区有文書では鏡の宿・柚多輪・仏徳多輪と呼称し、安楽行品を埋経したとされる。現在、蔵王峠内に該当の経塚があった積極的な資料は残っていない。しかし、『紀伊続風土記』には「峰筋の西巌壁の中に、蔵王権現の像、自然に彫りたるが如きをもって、その像より蔵王峠という」という記述があり、同書には蔵王峠に「蔵王権現社」があった記録も残る。したがって、葛城蔵王権現社は、少なくとも江戸期に遡る蔵王権現及び役行者を祀った神社ということはできる。蔵王権現は、とくに大峯修験の本尊として知られる。明治時代の廃仏毀釈により境内が荒廃したが、昭和63年（1988）に至って地域住民が復興し、現在も修験者の拠点になっている。毎年4月21日に春の例大祭があり、本堂では護摩供養が、境内では盛大な餅まきが行われている。

71. 葛城蔵王権現社

所在地	和歌山県伊都郡かつらぎ町東谷	地　形	峠緩斜面
緯度・経度	北緯34° 20′ 23″ ・東経135° 30′ 50″	標　高	563m
設置物	本堂、役行者像拝殿、倉		
備　考			

略測平面図



構成要素写真（全景）

参道（右上が境内、東から）

本堂と餅まき（春の例大祭、西から）

役行者像拝殿（南から）

72. 天女山正楽寺（てんにょさんしょうらくじ）（かつらぎ町）

(1) 位置と周辺の状況

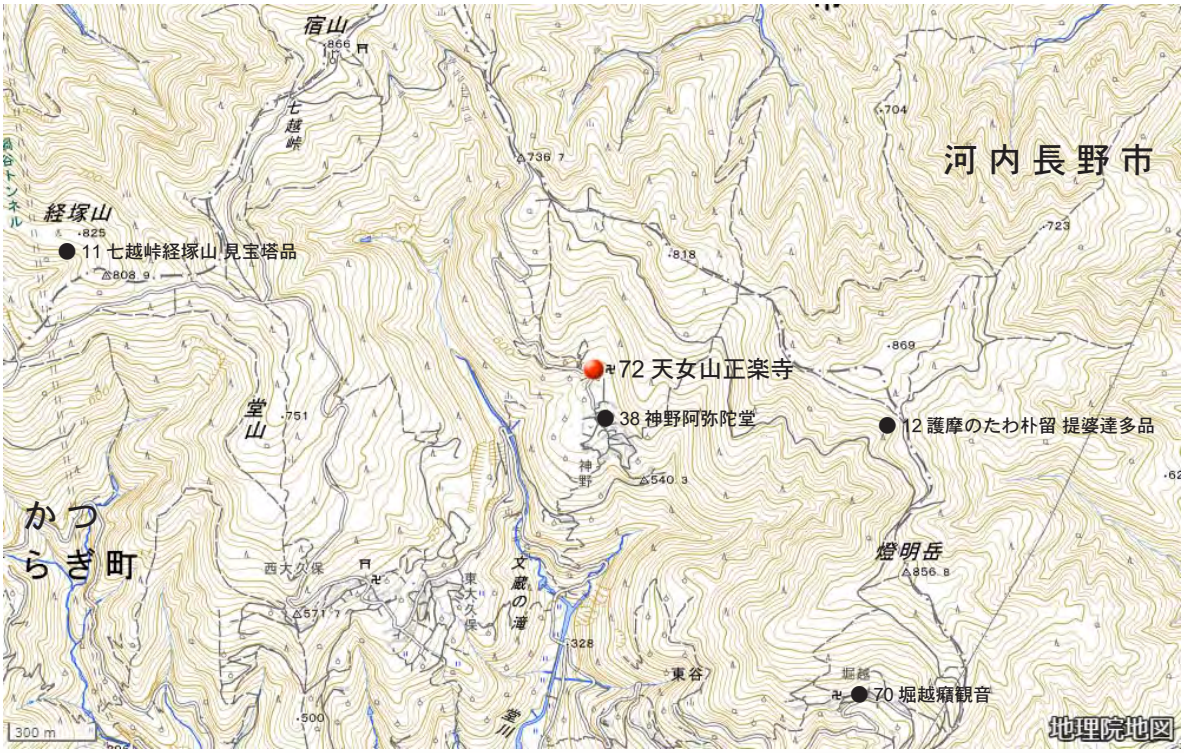
天女山正楽寺は、かつらぎ町大字東谷に所在し、四郷谷の階段断層状緩斜面に展開する神野集落北端に立地する、葛城修験ゆかりの寺である。行所ではないが、先述したとおり、聖護院宮が役行者1150回忌巡行の際に立ち寄った記録の残る場所である。周辺は、国登録有形文化財の的場家住宅など、江戸時代から続く茅葺古民家の景観がよく残る。

(2) 現地の状況

現在の本寺は、東西25 m、南北13 mの至って平坦な土地を境内とする。本堂は、辨天堂と並列し建っている。建物のない境内の空間は、さほど広くない。本堂の規模は、2間の庇を含め5 m四方と狭小であり、身舎は1間しかなく、聖護院宮をもてなす際、後述するような数部屋を準備できるようなものではない。これらのことから、本寺はいずれかの時点で建替や移築が行われた可能性がある。

(3) 歴史的背景

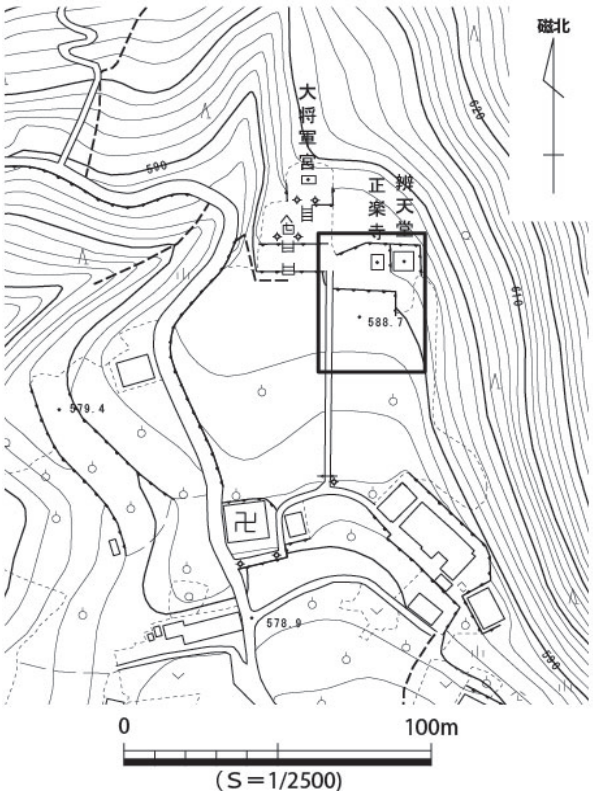
聖護院宮は嘉永2年（1849）6月、役行者1150回忌のため京都を出発し箕面山滝安寺へ登山した。その帰途に、泉州の犬鳴山七宝滝寺から紀の川市の中津川を経て13日に粉河寺へ入り、十禅律院に宿泊、翌日中津川で修法、その日は泉州牛滝山の穀屋坊に宿泊。翌15日、父鬼村から七越峠を越えてかつらぎ町の東谷村神野へ入り、堀越、大畑村を経て河内の滝畑村の光滝寺で宿泊、金剛山への道を辿った。　東谷村神野へ入った際に立ち寄ったのが本寺であり、ここで昼食をとったとのことである。聖護院宮を迎えた正楽寺の住職がその状況を綴った『聖護院宮葛城修行控帳』における記録によると、昼食では、本寺に二畳台・金屏風・垂幕をしつらえて聖護院宮の間とし、屏風で家老の間や台所を作り、里人から献上された大根・牛蒡・しいたけ・湯葉・麩・山いも・人参・かんぴょう・氷豆腐・昆布の青物十種という精進物や上等の酒を召し上がった。

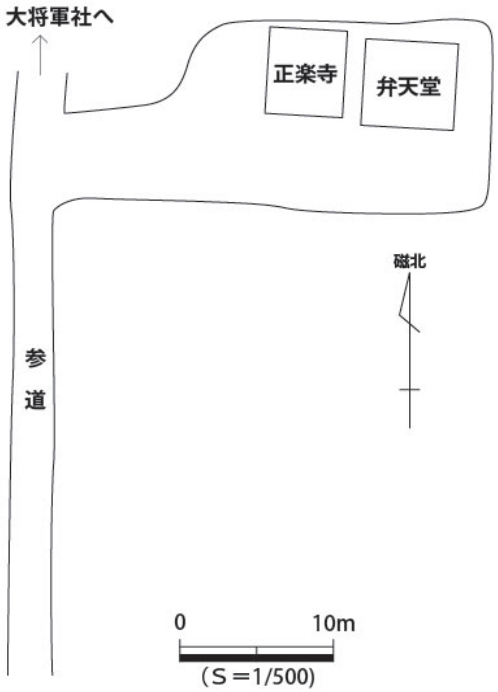


72. 天女山正楽寺

所在地	和歌山県伊都郡かつらぎ町東谷	地　形	階段断層状緩斜面
緯度・経度	北緯34° 20′ 59″ ・東経135° 29′ 30″	標　高	592m
設置物	本堂		
備　考			

略測平面図





構成要素写真（全景）

手前から正楽寺本堂、辨天堂（西から）

73. 小峯寺（おみねじ）（橋本市）

(1) 位置と周辺の状況

小峯寺は橋本市小峰台の丘陵上に位置する真言宗の寺である。現在、小峯寺の周辺には初芝橋本中学校・高等学校や橋本市立境原小学校、住宅地などがある。

(2) 歴史的背景

鎌倉時代に成立されたとされる「諸山縁起」には、修験の宿として小峯寺が記され、葛城修験の霊場として成立した寺院と考えられている。後に仁和寺と交流する中で仁和寺直末の寺となり、郡内に五か寺の末寺を持つ寺となった（『日本古刹大事典』（圭室 1992））。『紀伊続風土記』（仁井田 1970）によると、役行者の開基と記されており、修験の行場として記録されている。

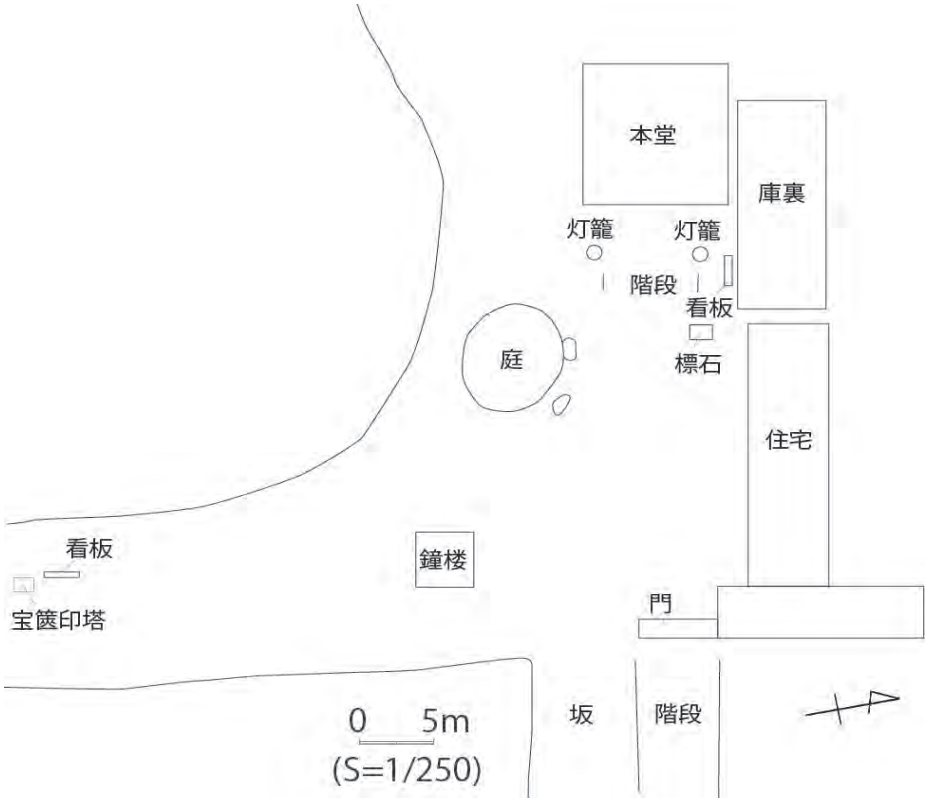
(3) 現況

境内には宝篋印塔 2 基と十三重石塔 1 基等の石造物が残る。『橋本市史　民俗・文化財編』（橋本市 2005）によると、宝篋印塔のうち 1 基（南塔）は現在の庫裏から南方の行者の峰にあり、もう 1 基（北塔）は行者堂に向かう尾根の鞍部にあるものを指す。なお、北の宝篋印塔は市指定文化財に指定され、近くには文化財看板が設置されている。また、十三重石塔はかつて行者堂の峰から尾根伝いの西方に塔の峰があったが、開発に伴ってこの峰は削り取られ、現在は行者堂の峰へ移設されている。この塔は役行者の母の墓と伝えられる。境内には市指定文化財の木造薬師如来座像がある。

73. 小峯寺

所在地	橋本市小峰台2-1	地　形	丘陵
緯度・経度	北緯34° 21'09''、東経135° 37'42'E	標　高	216m
設置物	宝篋印塔、一石五輪塔、文化財看板ほか		
備　考			

略測平面図



小峯寺正面写真

小峯宝篋印塔

74. 不動山の巨石（ふどうやまきょせき）（橋本市）

(1) 位置と周辺の状況

橋本市杉尾の不動山の標高約 445m 地点にある巨石群である。葛城修験の古刹の一つである明王寺の後ろにあり、635 段の階段を上った先にある修験道の行所として知られる。

(2) 歴史的背景

江戸時代の書物である『紀伊続風土記』（仁井田 1970）によると、役の小角が葛城から金峯山までに石橋を架けようとして、一言主神に一夜に石をこの地に集めさせたもの、と記されている。顔が醜かった一言主神は人目を避け、夜のみ姿を現し、昼は外に出なかったため、橋はできずに石を集めただけで終わったといわれている。なお巨石の下には、三社が祀られており、不動金剛童子八大龍王を祀り、明王寺の奥の院と記されている。

(3) その他

この巨石群の中には、穴が開いたものもあり、耳を当てると神秘的な音色が聞こえることから、「日本の音風景百選」にも選定されている。

74. 不動山の巨石

所在地	橋本市杉尾	地　形	山
緯度・経度	北緯34° 22'19″ ・東経135° 38'38''	標　高	445m
設置物			
備　考			

略測平面図

構成要素写真（全景）

75. 東覚寺（とうかくじ）　八大龍王（はちだいりゅうおう）・葛城明神春祭り（かつらぎみょうじんはるまつり）　（橋本市）

(1) 位置と周辺の状況

東覚寺は橋本市山内にあり、小峯寺・明王寺とともに、橋本市内に残る修験の古刹の一つである。

小峯寺から東にある岩倉池の北から山内の集落を北上すると、「東ノ行者」の峰の麓に、山を背に瓦葺きの本堂がある。

(2) 歴史的背景

『葛城の峰と修験の道』（中野　2002）によると、『諸山縁起』『葛城峰宿次第』といった文献から中世以来、古くから修験の行所として著名であったと紹介される。

役行者が葛城山中での修行の際、自ら刻んだ薬師如来の石仏を鎮座したのが始まりとされる。地元では眼病、中風除けの薬師としての信仰が厚い。

『紀伊続風土記』（仁井田 1970）には、現在の橋本市隅田町垂井にある大高能寺の末寺とあり、境内には八大龍王・葛城明神社があると記されている。また、葛城先達の行所であり、かつ痘神社と記されている。戦後になって、本堂裏に八大龍王と葛城明神の祠、本堂前に鐘楼が再建された。

(3) 春祭りについて

東覚寺では、毎年 4 月末～ 5 月上旬に葛城明神と、水の神・八大龍王を祀る恒例行事として春祭りが実施される。不動明王に捧げる柴燈大護摩も行われる。

75. 東覚寺　八大龍王・葛城明神　春祭り

所在地	和歌山県橋本市隅田町山内629（東覚寺）	地　形	寺院
緯度・経度	北緯34° 21′ 57″ ・東経135° 39′ 1″	標　高	283m
設置物			
備　考			

地図

構成要素写真（全景）

76. 宮ノ講と葛城神社年越し行事　（橋本市）

(1) 位置と周辺の状況

橋本市柱本にある葛城神社は紀見峠の南麓に位置している。柱本は和泉葛城と大和葛城の中継地に位置しており、葛城修験の重要ポイントであると考えられている。この里は紀見峠から東の尾根にある西ノ行者と言われる祠内の役行者像を背負い、柱本の葛城神社へ下り雨乞いをする風習があった。

(2) 内容

柱本には宮座があり、現在６軒が加入しており、この各家の嫡嗣が加入権利を受け継ぐが、分家は加入できない。宮座の集まりを「宮の講」と称し、毎年 12 月第１日曜日に葛城神社の社務所に寄り合う。今日に伝承する「宮の講」は、この寄り合いで座中輪番による一年神主の交替が行なわれ、「宮の講」の文書箱が新しい当番神主に渡される。この日から大晦日までの期間に座中全員により新年の神の来臨を願う年越しまつりの準備をおこなう。

大晦日の夜 11 時すぎになると、一年神主は、真っ暗のなか大松明を掲げ持つ２人を従えて近くの宮川にて下着姿で滝壷に入り禊をする。神社に戻ると、松明の火を神前にかかげ、盆に載せた鏡餅と串柿・蜜柑・カヤなど十二膳の神饌を供えて大祓の祝詞を読み上げ、新年の参拝をする。参加した人々は洗米をもらい、家から持ってきた蝋燭に火を移して持ち帰り、灯明をあげ、雑煮を炊く。この年越し行事は葛城の山岳信仰儀礼の片鱗を伝承していると考えられる。

（中野 2002、橋本市 2005）

76. 宮ノ講と葛城神社年越し行事

所在地	橋本市柱本273-3	地　形	神社
緯度・経度	北緯34° 22'18″ ・東経135° 36'49″	標　高	282m
設置物			
備　考			

略測平面図

構成要素写真（全景）

77. 行者まいり（ぎょうじゃ） （橋本市）

(1) 位置と周辺の状況

橋本市柱本には、紀見峠から千早峠への尾根筋の標高 725 ｍの場所、高さ 10 ｍを越える大岩の上に西ノ行者堂がある。

(2) 内容

毎年１月２日に、役行者を祀る祠がある行者杉に鎌と供え物を持って、西の行者杉と尾根伝いで東の行者堂に向かい、参拝する。供え物は、水と半紙、ミカン、祝柿、栢実である。参拝の後、下山して帰宅する際に仕事はじめとして、薪を拾いながら歩き、祠の近くの茅山にあるカヤを鎌で刈って、帰った。９日に田で水口に供え物と茅を立て、稲の豊作を祈った。

これを毎年の仕事始めとする風習が受け継がれている。

（橋本市 2005、2019）

77. 行者まいり

所在地	橋本市柱本	地　形	山
緯度・経度	北緯34° 22'59″ ・135° 37'32″	標　高	
設置物			
備　考			

略測平面図

構成要素写真（全景）

78. 光滝寺（こうたきじ）（河内長野市）

光滝寺は、河内長野市南部にある滝畑地区にある。飛鳥時代、欽明天皇の本願による行満上人の開基といわれている。本尊は不動明王立像（平安末期）である。江戸時代において、当寺は天台宗京都若王子の末寺で、葛城修験二十八宿の第十四宿であり、西国第四番の札所である槇尾山施福寺の奥院でもあった。現在境内には本堂・庫裏および炭焼不動堂が配置されており、その裏手には光滝と呼ばれる滝がある。光滝寺は、この滝にちなんでつけられたものという。平成十一年には炭焼不動堂の改築工事が行われている。

境内の動植物の種類も多く極めて恵まれた自然環境にある。特に植物では、もともとその土地で自然にできあがった自然植生が認められ、谷筋にあたる境内の傾斜面にシラカシを主にした常緑樹が繁茂し、湿気が多いため樹幹に着生するシダ類やラン類も多い。このシラカシ林には、シラカシのほかヤブツバキ・アラカシ・タラヨウ・ネズミモチ・イヌガヤなどの種類もみられる。

79. 光滝寺　炭焼不動尊（木造不動明王立像）（河内長野市）

本像は、河内長野市滝畑に所在する融通念仏宗の光滝寺境内の炭焼不動堂に安置されており、地域の人々に炭焼不動尊と呼ばれている。像高は、207cm あり、寄木造、彫眼で、室町時代の文安３年（1446年）に法眼来尊坊によって造立され、江戸時代の文政４年（1821）に江戸住義福によって修理が施されたことが墨書銘によりわかる。本像の名称の由来は、天慶６年(943)、老爺に化身した不動明王が光滝寺の住職に炭焼きの技術を伝授したという言い伝えによるものである。

なお、本像が安置されている炭焼不動堂は、享和２年(1802)の「狭山藩領村方明細帳」の滝畑村の項に、もとは西ノ村の山地にあったが、享和頃は光滝寺の山林に移されており、後堂に炭焼道具を納めていたとある。また、光滝寺西側山腹の鎮守屋敷にあったものが現在の位置に移されたとも言い伝えられている。

光滝寺のある滝畑地区は、古くから製炭業が盛んであり、滝畑に伝わる炭焼道具と枝炭は、平成 14 年３月 29 日に河内長野市有形民俗文化財として指定している。光滝寺では、年に一度、１月 28 日（現在は直前の日曜日）の初不動の縁日に法要が行われ、多くの人が参拝に訪れる。かつては、製炭業に従事する人々が炭焼道具やその年一番に焼いた炭を炭焼不動堂に奉納したと伝わる。

80. 大澤寺（だいたくじ）（五條市）

神福山の山麓にある高野山真言宗寺院。神福山青龍院瀬之堂と号す。「瀬の堂の薬師さん」として、地元の信仰を集めている。

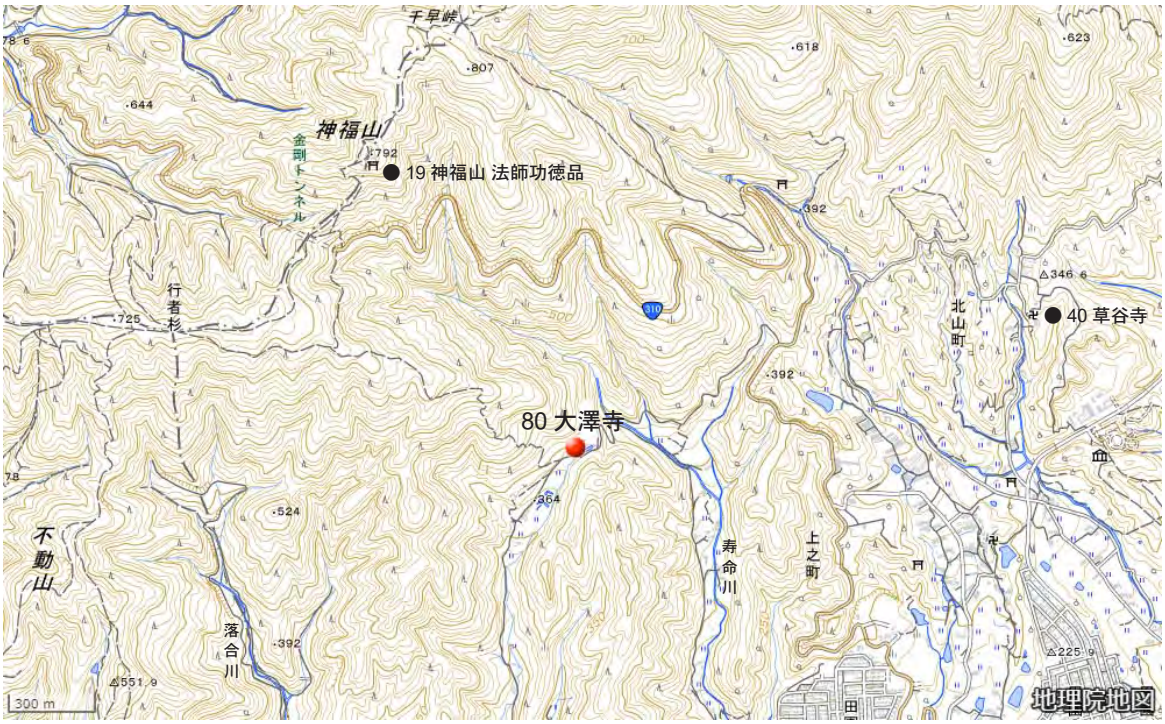
当寺の由緒を記録した、明治 25 年（1892）「古社寺沿革史」（奈良県立図書情報館所蔵史料）によれば、白鳳３年（652、諸説あり）に役行者が修行の道場として草堂を結び、薬師如来を勧請した後、弘法大師空海が数多の堂宇を建立したとする。その境内は、現在の場所から、さらに東に約８町（約 870 m）、南に約 15 町（約 1630m）の範囲におよび、この中に坊舎が 12 院あったとする。しかし、兵乱により、多くの建物が焼失し、江戸時代の中期には現在のように堂一宇となっていた。

また、本堂の前にある池は、小沢池ともいい、古くから青龍が棲み、旱魃の時に祈祷すると必ず雨が降ったという。それにより、青龍院と号するようになった。

南北朝時代には、隆盛を誇った当寺であるが、その勢いも次第に衰え、明治８年～ 12 年（1875 ～ 79）の間、廃寺であった。しかし、同 13 年には再興し、現在に至る。

本尊は奈良県指定有形文化財である薬師如来立像（平安時代）。ほかに増長天立像（平安時代、五條市指定文化財）、持国天立像（同、同）、弘法大師坐像等がある。

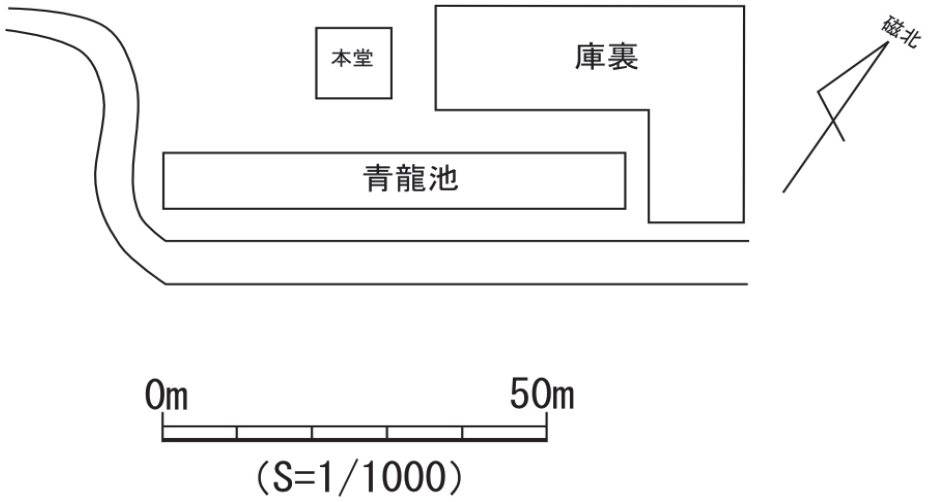
（平凡社 1981、角川 1990、五條市 1987）



80. 大澤寺

所在地	奈良県五條市大澤町581	地　形	山腹
緯度・経度	北緯34° 22′ 50″ ・東経135° 40′ 01″	標　高	380m
設置物	本堂・庫裏・池		
備　考			

略測平面図



構成要素写真（全景）

81. 地福寺（じふくじ）（五條市）

かつて金剛山行者坊と号した、高野山真言宗の寺院。役行者草創の七坊（行者坊、孔雀院、長床坊、実相院、西室院、石寺坊、朝原寺）の一つ。慶応４年（1868）３月の神仏混合禁止の太政官布告（神仏分離令）により廃寺となったが、明治４年（1871）８月、本寺の金剛山転法輪寺から法起菩薩、神変大菩薩像等を勧請し、再興した。それに伴い、転法輪寺で行われていた蓮華祭りも引き継がれた。ただし、勧請された法起菩薩像は、破損していたため、新しく作られたものである。

境内には、役行者像や不動明王像等が祀られ、役行者が寺の東北にある天ヶ滝で祈祷し、感得したと伝わる壺がある。

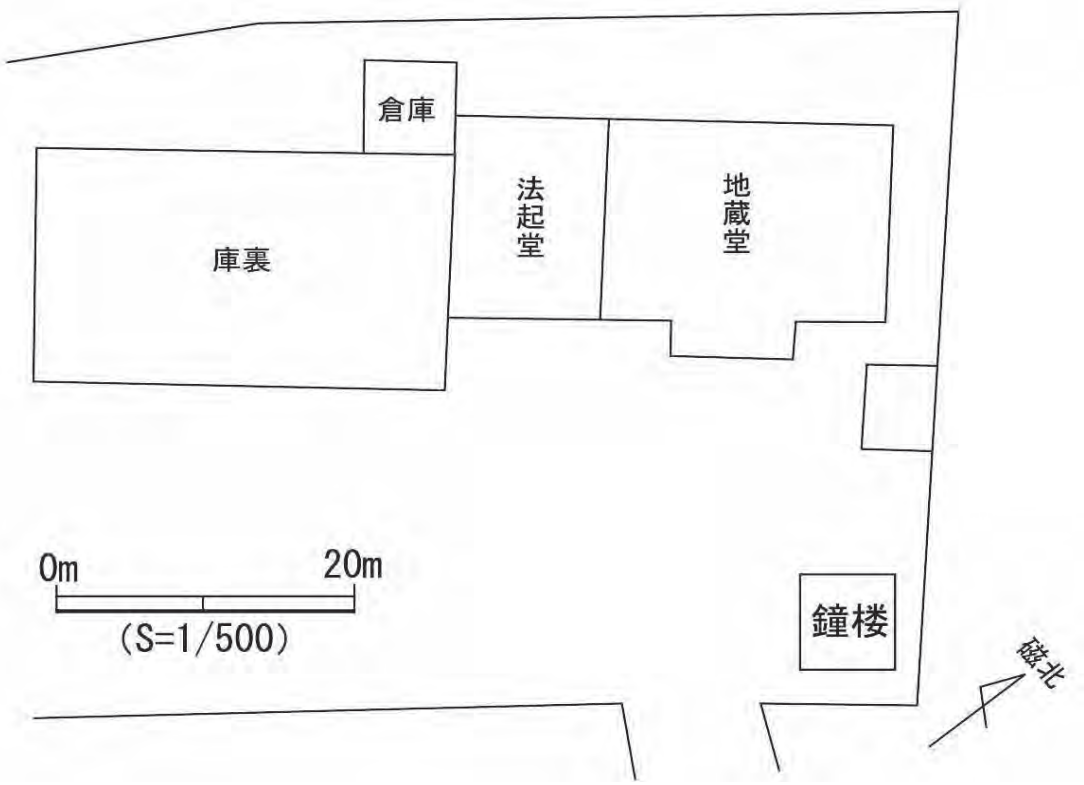
なお、現在の本堂は、残されている棟札によれば、安政６年（1859）に建立された。

（平凡社 1981、角川 1990、五條市 1987）

81. 地福寺

所在地	奈良県五條市久留野町1161	地　形	集落
緯度・経度	北緯34° 22′ 59″ ・東経135° 41′ 41″	標　高	260m
設置物	本堂 鐘楼		
備　考	毎年7月に蓮華祭りを催している。		

略測平面図



構成要素写真（全景）

82. 多聞寺跡 （千早赤阪村）

(1) 位置と周辺の状況

千早道とは、千早赤阪村の奥まった地域である千早地区の辻堂から始まり、多聞尚学館の北側を通り府道７０５号線を進んで転法輪寺へ続く道である。この古道には、道標である「町石」（明暦２年（１６５６年）造立）が転法輪寺本堂まで残っており、現在も金剛山登山道の「千早本道」として多くの人に親しまれている。また、古道のスタート地点である千早村落の辻堂の近くには、金剛七坊の一つであった多聞寺跡（現・お堂）があり、今でも修験者たちが参詣している。

(2) 現地の現況

府道富田林五条線から少し入り、細道を進むと石畳のある多聞寺屋敷跡に、正面に立方体の小さなお堂、右側に多聞寺と刻んだ石柱や宝篋印塔などが建っている。

約 300 ｃｍ四方のお堂の中には金色に輝いておられる阿弥陀如来像、右側に子どもを背負ったお地蔵さまが祀られている。

幅、奥行ともに約 300cm のお堂内は外からの光で明るく照らされ、天井からは地蔵盆の提灯が吊り下げられている。

(3) 歴史的背景

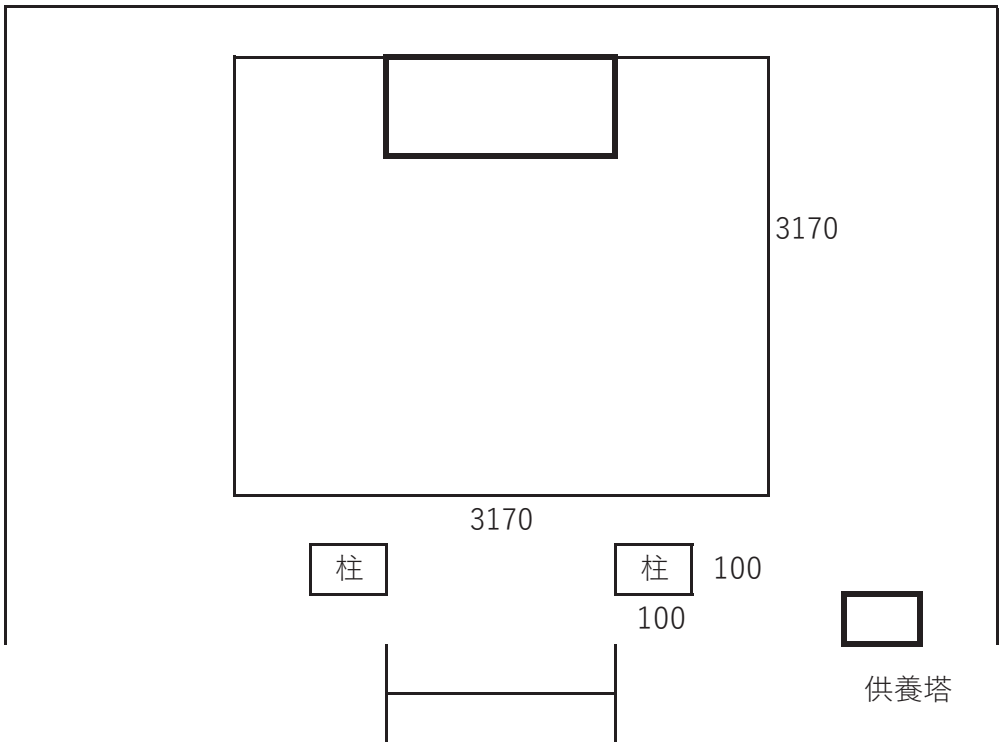
鎌倉時代には、いわゆる葛城修験を形成し、山伏修行の道場として河内側の修道寺、坊領山、多聞寺、大和側の朝原寺、高天寺、石寺、大沢寺と結合して、金剛山七坊と称していたと言われている。後に、小吹の西恩寺の末寺となるが、天保年間に火事で類焼し、再建されたが明治３年に原因不明の出火で全焼してしまった。明治６年に寺院廃止の布令があり、お寺はなくなっている。その後は、青年団の運動場として使われたことがあったが、畑になりその畑の端に石の地蔵さまが立っていた。　ある時、僧侶の勧めでお地蔵さまのお堂を建てることになり、そこで整地をしたら畑の土の中から、小さな石の地蔵さまの頭が出てきた。それを畑の端に立っていたお地蔵さまの肩の欠けたところに合わせるとぴったりと合ったという。子どもを背負ったためずらしいお地蔵さまで、お堂を建てた夫妻が、長年、子宝に恵まれなかったところがお堂を建立してお地蔵さまを祈りはじめてから、子どもをもうけることができた。それ以来、このお地蔵さまは子授けの地蔵さまとして呼ばれている。また、阿弥陀如来の仏像は、多聞寺の仏像かもしれないと考えられてここに安置されている。

（『ふるさと千早』（房　巌））

82. 多聞寺跡

所在地	大阪府南河内郡千早赤阪村大字千早	地　形	傾斜地
緯度・経度	北緯34° 25′ 05.9″ ・東経135° 38′ 41.1″	標　高	473.7m
設置物	お堂		
備　考			

略測平面図



構成要素写真（全景）

1　多聞寺正面

2　多聞寺の石垣と堂

3　堂内

4　宝篋印塔

83. 転法輪寺（てんぽうりんじ）（御所市）

(1) 位置と周辺の状況

転法輪寺は、修験道七高山に含まれる金剛山山頂の御所市高天に所在する。葛城修験の根本霊場として今日まで多くの修験者や登山者が行き交う。

(2) 現地の現況

本堂は、幾多の火災に遭い、文化元年（1804）を最後に再建されることはなかった。その後、明治の廃仏毀釈により廃寺となったが、昭和 25 年（1950）に役行者 1250 周年忌を機に再興事業が始まり、現在の本堂は昭和 36 年（1961）に建てられた。また、広場西側には行者堂が、本殿に至る階段下付近に不動明王像が設置されている。

(3) 歴史的背景

平安時代初期、八町四方（約 774 ㎡）に転法輪寺の境内があったとされるが、火災により焼失した。『葛城家系譜略』（註 1）によると、弘和元年（1381）に長香上人による金剛山の神社・仏堂再興運動が起こり、本地堂なる建物が建てられたという。その本地堂には、不動明王、法起菩薩、蔵王権現が祀られており、この堂が文化元年（1804）までの本堂であったと考えられる。

『葛嶺雑記』の金剛山転法輪寺の条では、「和州葛上郡。真言。一乗院宮御末寺叉名神祇宝山最上乗院。本尊不動尊、左脇に法起、右脇に蔵王、其余倶利伽羅、矜迦羅、制多迦、善財童子等すへて七尊。」と記されており、七尊の配置が鮮明となっている。

行者堂は、境内の中では最も古い建物である。明治 44 年（1911）に大阪府千早赤阪村の建水分神社から譲り受けたとされる。内部には、役行者像が祀られており、流造の建築様式を有する。

（御所市 1965）（金剛山総合文化調査委員会 1988）

註 1：葛城家は、転法輪寺の南東にある葛木神社を祀る社家である。

83. 転法輪寺

所在地	御所市高天	地　形	金剛山山頂平坦面
緯度・経度	北緯34° 25’12”・東経135° 40’17”	標　高	1,083m
設置物	本堂、不動明王像、行者堂		
備　考			

略測平面図

構成要素写真（全景）

84. 吉祥草寺（御所市）

(1) 位置と周辺の状況

吉祥草寺は、奈良盆地の南部、御所市茅原に所在する。境内のすぐ東側には、京奈和自動車道が南北に走っている。

(2) 現地の現況

当寺は、役行者の建立と伝えられており、境内には、本堂、観音堂、寺務所、熊野神社などがある。

(3) 歴史的背景

本堂は、3 間 4 間の構造であるが、貞和 5 年（1349）に兵火に遭い、応永 3 年（1396）に再建されている。平成 17 年（2005）の本堂建替に伴う発掘調査では、このことを裏付けるように焼土や 14 世紀前半までの遺物が確認されている（註 1）。堂内には、室町時代の不動明王を中心として、大威徳明王、降三世明王、軍荼利明王、金剛夜叉明王が五大尊像として祀られている。

観音堂は、方二間半宝形造の建物で、本堂の南西にある。現在の建物は、天智天皇 9 年（670）と貞和 5 年（1349）に焼失したのち再建されたが、享保 2 年（1717）に大破し再び建て直された。堂内には千手観音を安置する。

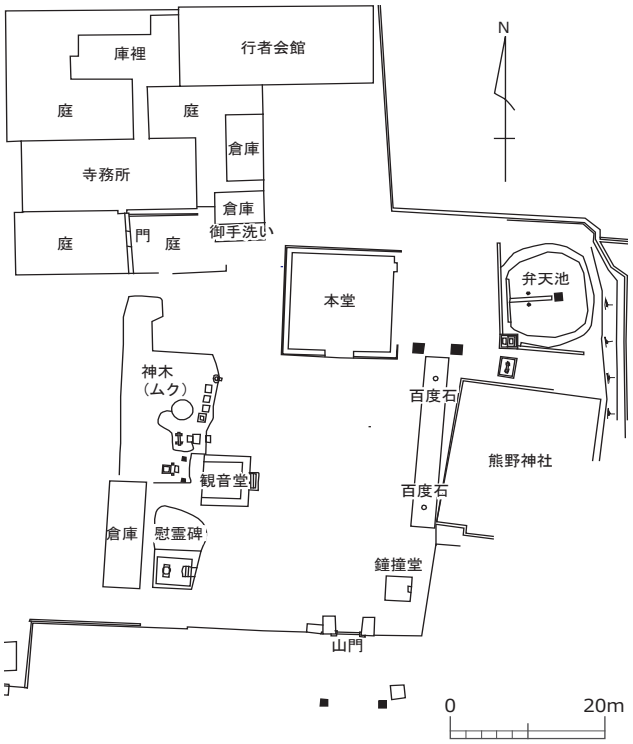
祖師堂は、本堂と同じ 3 間 4 間の建物であり、本堂の東に 10 年ほど前まで構えられていた。この建物は、行者堂とも呼ばれ、堂内には役行者像とその母である白専女（刀良売）の像が祀られていた。祖師堂は、本堂と同じ貞和 5 年（1349）に兵火に遭ったが、両像は付近の池に投げ入れられたことで焼失を免れたとされる。堂内に安置されていた両像は、現在は本堂裏側の行者会館に祀られている。（御所市 1965）

註 1：御所市教育委員会　2011『奈良県御所市　吉祥草寺　－茅原中ノ坊遺跡　第 4 次・第 6 次調査　　報告－』御所市文化財調査報告書　第 38 集

84. 吉祥草寺

所在地	奈良県御所市茅原	地　形	平野
緯度・経度	北緯34° 27’45”・東経135° 44’53”	標　高	86m
設置物	本堂、観音堂、山門、鐘撞堂、熊野神社、百度石、行者会館		
備　考			

略測平面図



構成要素写真（全景）

85. 葛城一言主神社（かつらぎひとことぬしじんじゃ）（御所市）

(1) 位置と周辺の状況

葛城一言主神社は葛城山の東麓、御所市森脇に所在する。周囲には、彼岸花で台地が真っ赤に染まる九品寺が所在する。

(2) 現地の現況

境内には大社造の大きな拝殿が構えており、祭神は一言主大神と幼武尊（雄略天皇）である。地元では「いちごんさん」と呼称され、一言の願いであれば、どのような願いでも叶うとされている。この一言の願いを叶えるために訪れる人が絶えない。

(3) 歴史的背景

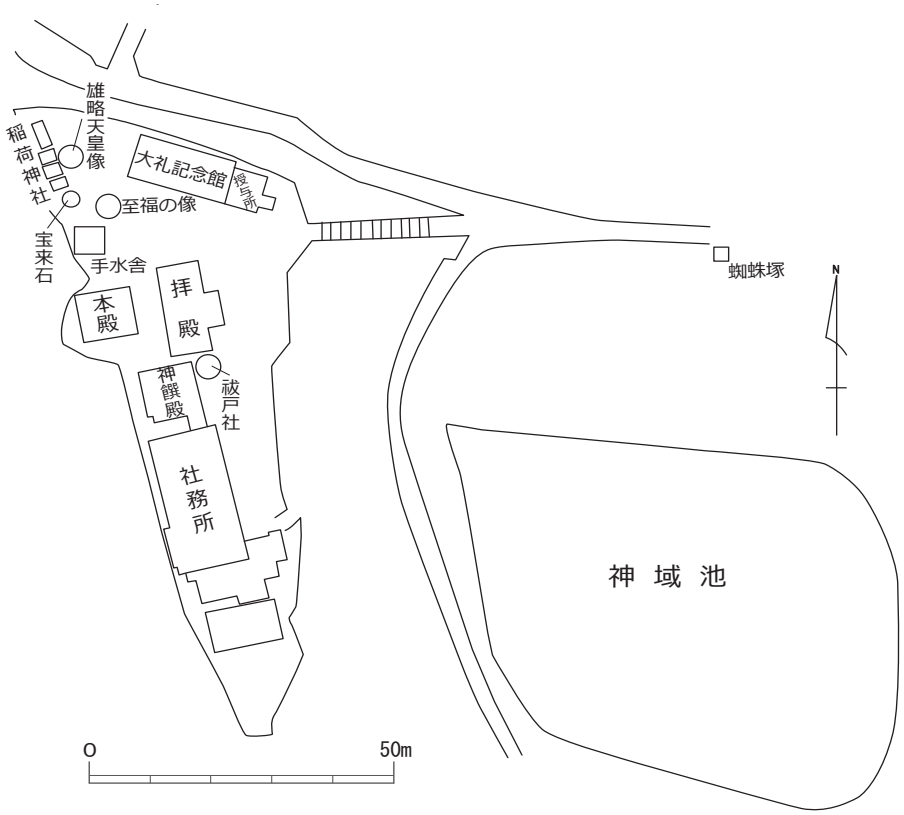
平安時代初期の『日本霊異記』では、役行者が一言主神を呪縛したと記されている。また、一言主神が役行者に命ぜられ、葛城山と吉野にある金峯山に橋を架けようとしたが、一言主の顔が醜かったため、夜にのみ働いたとされている。

嘉永 3 年（1850）に刊行された『葛嶺雑記』葛城山一言主寺の条では、「同国郡森脇村　此辺五條御代官支配所。聖護院宮御末寺真言古義。本社一言主神、右に文殊・十一面、左に弥陀本地不動尊、摂社は聖権現とて越の泰澄師を祀る。本地不動尊、末社八幡・天満宮・住吉・八王子・出雲社・弁才天・神功皇后社等、此寺より茅原へ三十丁道よし。」と詳細に当神社のことが記されている。
（御所市 1965）

85. 葛城一言主神社

所在地	奈良県御所市森脇	地　形	山麓
緯度・経度	北緯34° 26’44”・東経135° 42’43”	標　高	159m
設置物	本殿、拝殿、神饌殿、稲荷神社		
備　考			

略測平面図



構成要素写真（全景）

86. 當麻寺竹之坊（葛城市）

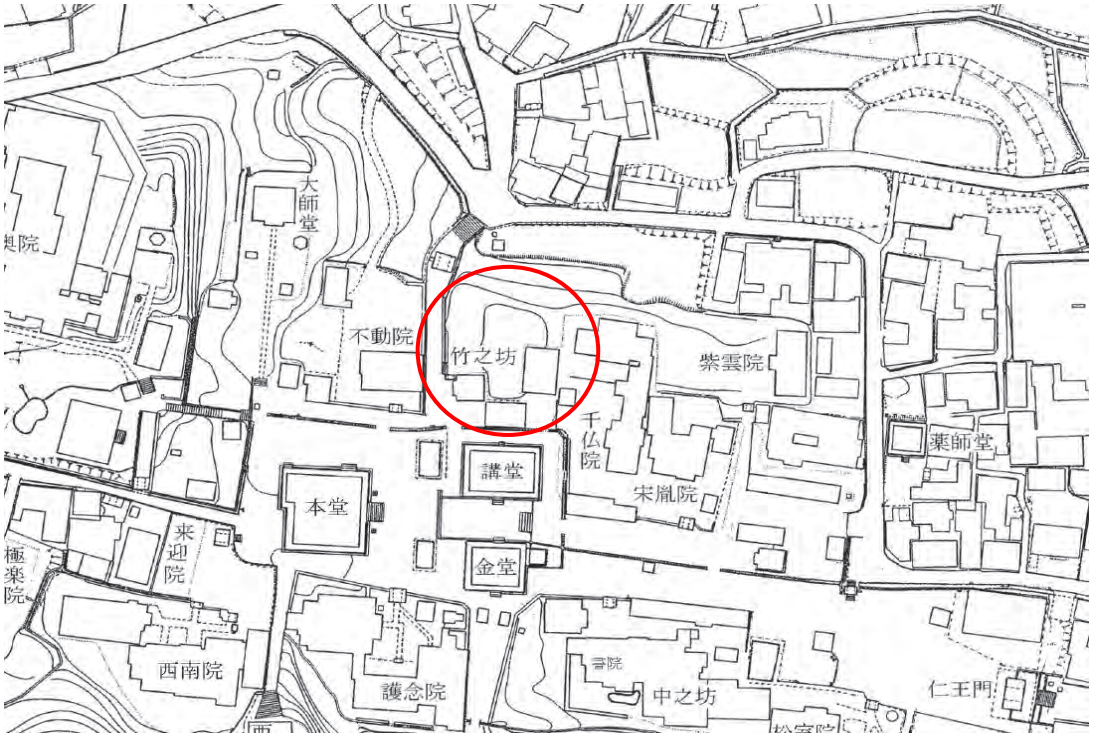
當麻寺の真言宗五ヶ院の一つ。本尊に役行者を祀り、かつては修験者が修行の祈願のため、必ず立ち寄る場所とされていた。

『葛嶺雑記』には、「御宿坊、真言竹之坊」と記され、葛城の峯入りする者にとっては重要な行所であり、宿泊地であったと窺える。修験者は當麻寺竹之坊に宿泊し、二上山頂にある葛城修験第二十六番経塚を目指したと想像される。

86. 當麻寺竹之坊

所在地	奈良県葛城市當麻1263	地　形	平坦地
緯度・経度	北緯34° 30’58″ 、東経135° 41’43″	標　高	109m
設置物			
備　考			

略測平面図



構成要素写真（全景）

87. 高雄寺（たかおでら）（葛城市）

當麻寺の北にあり、7 世紀後半に役行者によって開かれたと伝えられる。

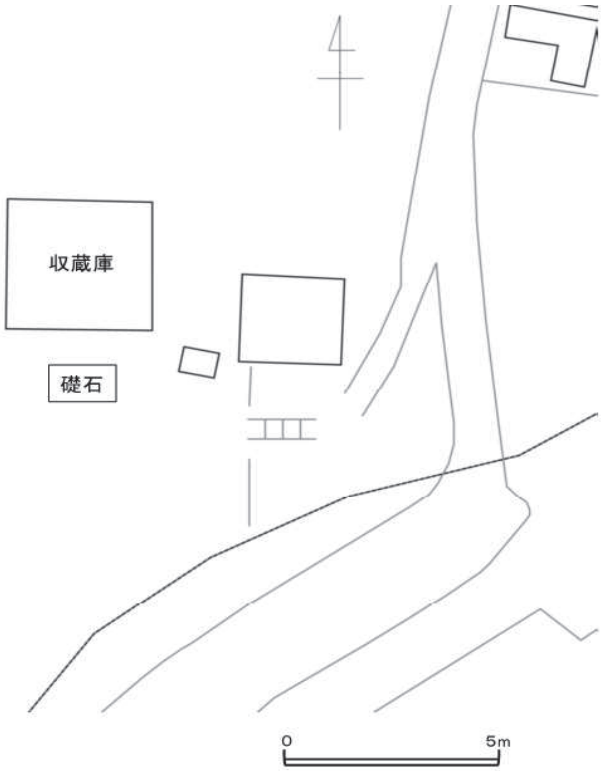
寺伝によると、後鳥羽天皇・白河天皇の勅願寺とされ、最盛期は「高雄千軒」と呼ばれるほどの繁栄を見せたという。

過去の大火により堂宇の大半は失われ、現在は礎石が残るのみだが、収蔵庫には平安時代中期の作といわれる木造聖観音菩薩立像（重要文化財）と、平安時代後期の作とみられる木造薬師如来坐像（重要文化財）が収められている。また、元応元年（1319）の墨書銘をもつ役行者像も収められている。（當麻町 1976、1990）

87. 高雄寺

所在地	奈良県葛城市新在家	地　形	平坦地
緯度・経度	北緯34° 31’18″ 、東経135° 41’33″	標　高	119.7m
設置物	礎石、収蔵庫		
備　考			

略測平面図



構成要素写真（全景）

88. どんづる峯（ぼう） （香芝市）

(1) 位置と周辺の状況

どんづる峯は、香芝市西部の穴虫峠の北側に位置している。金剛葛城山系を縦走する自然遊歩道「ダイヤモンドトレール」の起点でもある。

(2) 現地の現況

奈良県道・大阪府道 703 号香芝太子線からの入口付近には、県指定天然記念物の解説板が設置される。解説板の周辺には遊歩道や広場などが設置･整備されており、行楽シーズンには来場者で賑わう。

(3) 歴史的背景

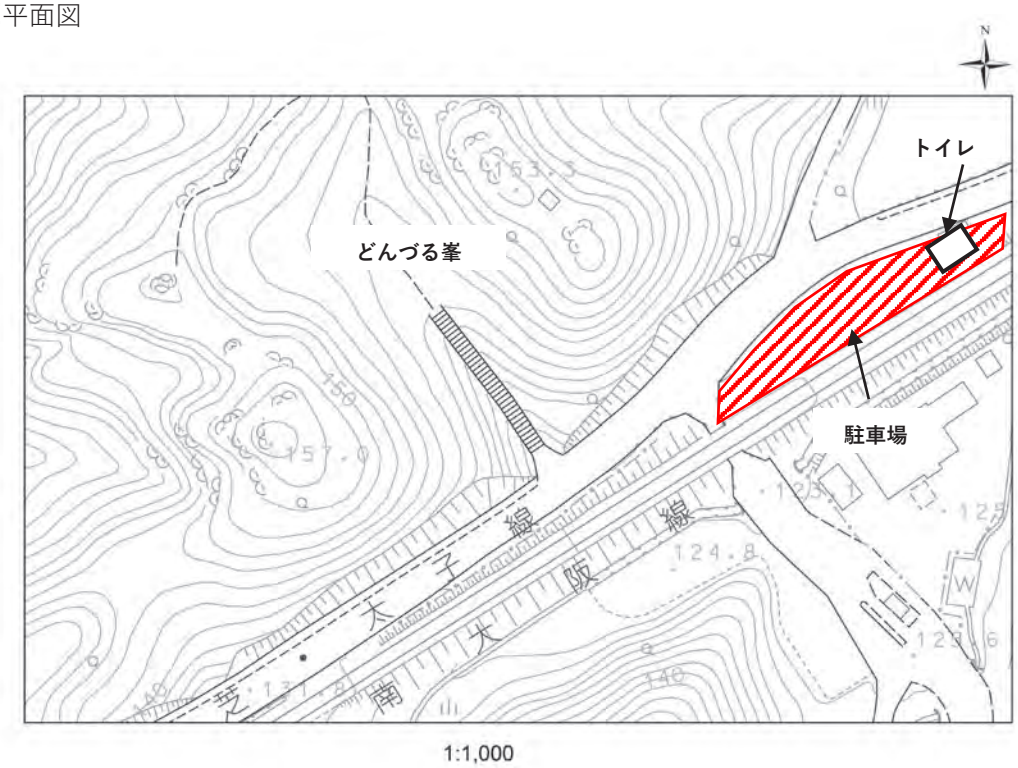
千数百万年前に二上山の火山活動により噴出した火砕流や火山灰が水中で堆積して形成された凝灰岩が、その後の地殻変動で隆起し、風や水などによる侵食作用で現在の姿になった。遠くから見ると「鶴が屯（たむろ）している」ような奇観のため、「どんづる峯（屯鶴峯）」と呼ばれるようになった。

二上山山頂の第二十六経塚から田尻の観音寺・三輪神社へのルート上に位置し、葛城修験の行場となっている。昭和 26 年（1951）に、奈良県天然記念物に指定されている。

88　どんづる峯

所在地	奈良県香芝市穴虫	地　形	山頂及び山腹
緯度・経度	北緯34° 32′ 、東経135° 39′	標　高	約140m
設置物	県指定天然記念物解説板（どんづる峯入口付近）、遊歩道・広場・ベンチ（どんづる峯内）		
備　考	奈良県指定天然記念物		

略測平面図



構成要素写真（全景）

89. 穴虫峠の馬頭観音（香芝市）

(1) 位置と周辺の状況

大阪府と奈良県の県境に位置する。国道 165 号の穴虫、穴虫南の交差点から奈良県道・大阪府道 703 号香芝太子線に入り西方に歩みを進めると、昭和 26 年（1951）奈良県指定天然記念物に指定された「どんづる峯」が位置している。馬頭観音は、「どんづる峯」の付近に祀られている。

(2) 現地の現況

金剛葛城山系を縦走する自然遊歩道「ダイヤモンドトレール」の起点である「どんづる峯」入口の西方に細い山道がある。登っていくと少しひらけた場所があり、馬頭観音石仏が祀られている。整備等はなされていない。馬頭観音石仏に隣接して祠があり地蔵石仏が祀られている。

(3) 歴史的背景

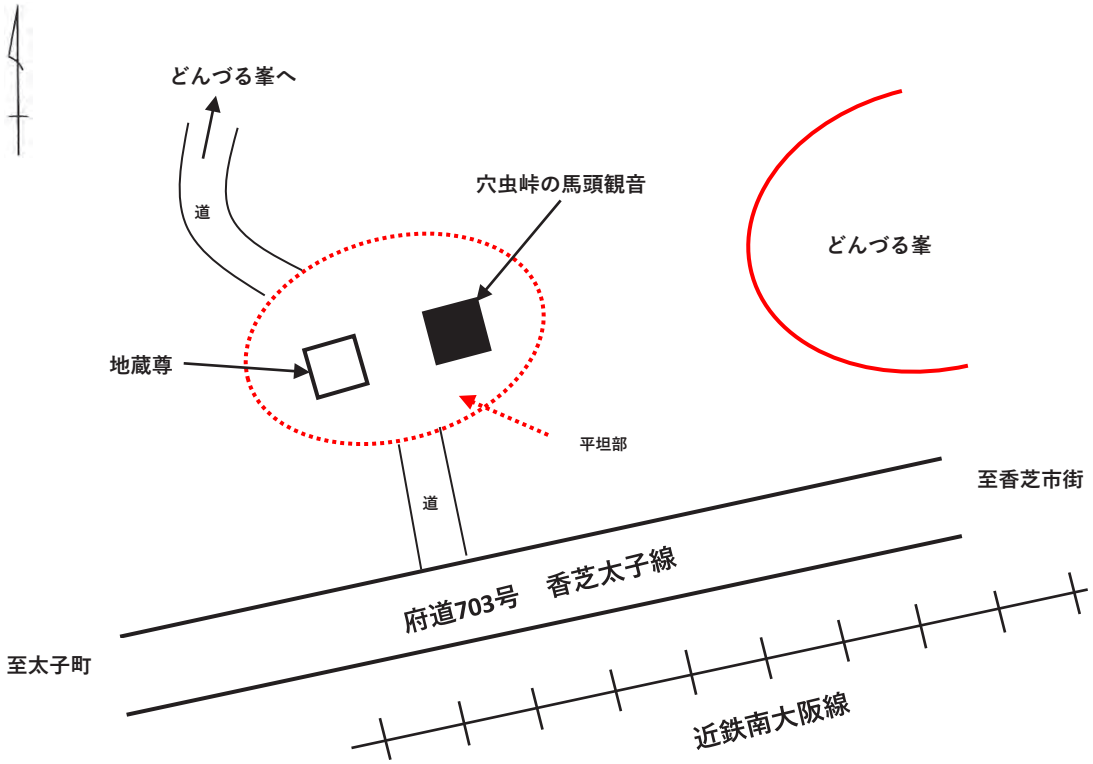
馬頭観音石仏は像高 52.0 ㎝で、像容は三面八臂（３つの顔と８本の腕）である。他の類例に多くみられるような忿怒の表情に造相されている。

一般的に馬頭観音は、頭に戴く馬の姿から、牛馬、とくに馬の供養や無病息災の祈願をこめて建立され、峠や山道の交通の難所、村はずれなどに祀られる。本像は交通の要衝である穴虫峠に位置する。穴虫峠は、なだらかな峠であることから牛馬を使った運搬が盛んで、峠を越えた穴虫の集落には、旅籠や運送業に携わる職業などがあり、木綿業関係者などの運搬で賑わっていた。したがって、この石仏はそのような運搬に関わる人びとによって建立されたと考えられる。

89. 穴虫峠の馬頭観音

所在地	奈良県香芝市穴虫	地　形	山麓平坦部
緯度・経度	北緯34° 32′ 、東経135° 39′	標　高	約140m
設置物	馬頭観音石仏（江戸時代）、碑伝（馬頭観音付近）		
備　考			

略測平面図



構成要素写真（全景）

90. 観音寺（かんのんじ）、三輪神社（みわじんじゃ）　（香芝市）

（1）位置と周辺の状況

観音寺は、国道 165 号田尻交差点から北方約 200m に位置している。その北東には三輪神社が鎮座する。

（2）現地の現況

観音寺は、標高 100 m程の山の山腹に位置し、三輪神社は観音寺の北東約 70 m、山頂付近に位置している。

（3）歴史的背景

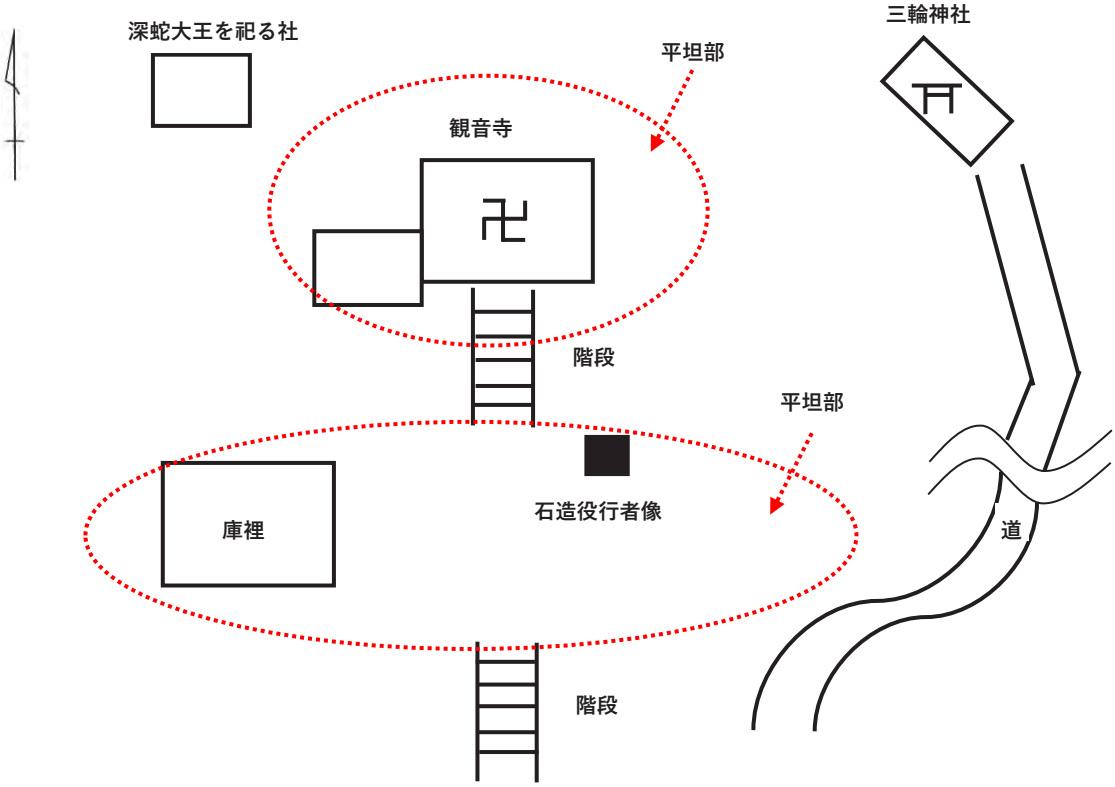
観音寺の本尊は、十一面千手観音菩薩立像（像高 90 ㎝）であり、楠木正成の「身替り矢除観音」の伝承が伝わっている。寺伝では、建武年中（1334 ～ 36 年）に一宇（＝一棟の建物）を建立し、河内国芹生谷（せりうだに）に祀られていた観音像を迎えたとある。本堂内には木造役行者像（像高 80. 1 ㎝）（文政十二年春岩井利平作）がある。また、境内には室町時代の五輪塔や大阪本山講によって造立された石造役行者像があり、役行者像には碑伝が奉納されている。さらに本堂より北側には「深蛇大王」を祀る社がある。この「深蛇大王」は、役行者と深く結びつき、修験者を守護する一尊として信仰される。二上山雌岳にも聖護院文書に記された「二上権現の一尊」（深蛇大王）を祀る祠があった。

三輪神社の祭神は大己貴命である。社殿は明治 20 年頃に新築したと伝えられており、明治 24 年（1891） 7 月の『神社明細帳』には「境内坪数五百二拾坪」とするのみで、由来・沿革については明らかになっていない。境内には「元禄五壬申年十一月吉日　定礎」の銘がある手水鉢がある。拝殿には碑伝が奉納されている。

90　観音寺、三輪神社

所在地	奈良県香芝市田尻351	地　形	山頂及び山麓
緯度・経度	北緯34度33分、東経135度39分（観音寺） 北緯34度33分、東経135度39分（三輪神社）	標　高	75.8m（観音寺） 100m（三輪神社）
設置物	木造役行者像（寺本堂）、室町時代五輪塔・石造役行者像・碑伝（寺境内） 碑伝（神社拝殿）		
備　考			

境内略図（全体図）



構成要素写真（全景）

91. 関屋地蔵尊（せきやじぞうそん）　（香芝市）

(1) 位置と周辺の状況

関屋青葉台住宅の北辺から関屋峠（国分峠、大峠）を越えて、大阪府柏原市国分東条（ひがんじょう）に至る長尾街道が残っている。関屋地蔵尊はこの街道の峠に位置している。

(2) 現地の現況

地蔵尊を祀る祠から向かって左に道をとれば柏原市国分東条で、右に向かうと山の稜線に沿って王寺町の明神山を経て亀の瀬へ向かう、街道の分岐点となっている。峠道のため舗装されていないが、ハイキングコースで人が行き交うため、比較的歩きやすい道となっている。

(3) 歴史的背景

像高 64.0 ㎝の地蔵石仏で祠に祀られている。右手に錫杖、左手に宝珠をもつ地蔵石仏の通例像であるが、砂岩製のため風化による劣化が進んでいる。腹部で割れたため、接合した痕跡がみられる。

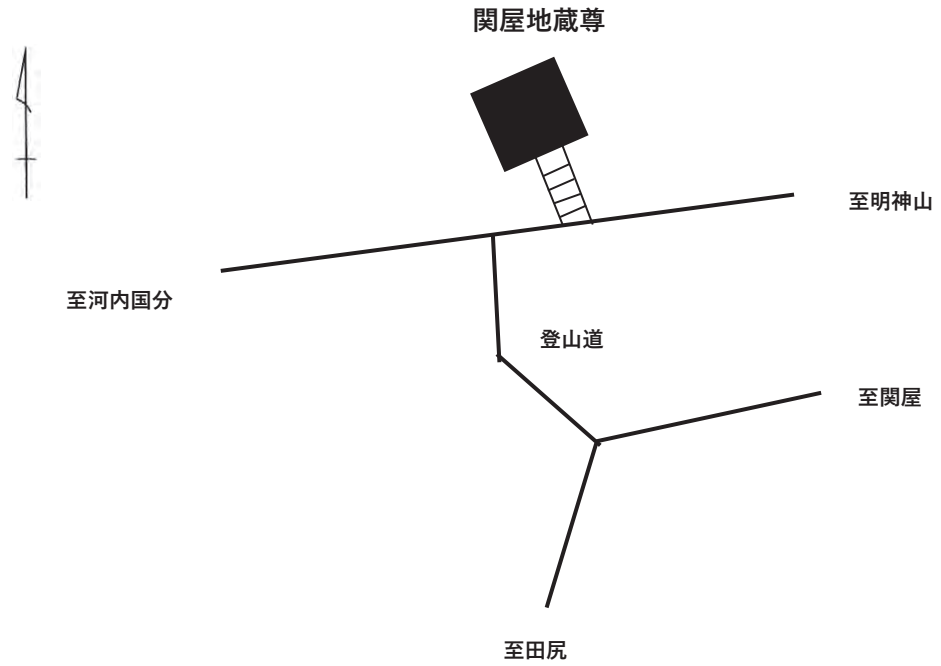
地蔵菩薩は、平安時代以降に広まった浄土信仰の中で、地獄の苦しみから人びとを救う仏とされ、近世以降も病気平癒など人びとのあらゆる願いを叶えてくれる仏として民間信仰の対象となった。

当該の関屋地蔵尊は、初瀬（現在の桜井市）の人が峠の交通安全のため奉納されたと伝えられており、日限を切って祈願する日切り地蔵として信仰されてきた。祠には葛城修験の碑伝が奉納されている。

91. 関屋地蔵尊

所在地	奈良県香芝市関屋北	地　形	山尾根上
緯度・経度	北緯34° 33′ 、東経135° 39′	標　高	約200m
設置物	地蔵石仏（室町時代）、碑伝（祠内）		
備　考			

略測平面図



構成要素写真（全景）

第５節　令和３年に追加した行所等（構成文化財 R3-1、R3-2）

R3-1. 岩屋（いわや）（太子町）

(1) 位置と周辺の状況

岩屋は、二上山山腹に所在する行場である。鹿谷寺跡より東方へ約 400 mの地点にあり、岩屋のすぐ北側には「岩屋峠（岩屋越）」と呼ばれる竹内街道の間道が通っている。

(2) 現地の現況

岩屋には、大小二つの石窟があり、北側に位置するのが大石窟（幅 7.6 m×高 6.1 m×奥行 4.5 m）と呼ばれ、岩盤を大きく刳り抜いた形状をしている。大石窟には、一石で作られた石塔（層塔）があり、北壁には半肉彫の三尊像が刻まれているが、剥落が著しく光背の一部しか確認できない。小石窟（幅 2 m×高さ 1.8 m×奥行 1.4 m）には、内部に仏像などを安置した仏龕のようなものがあったと考えられている。

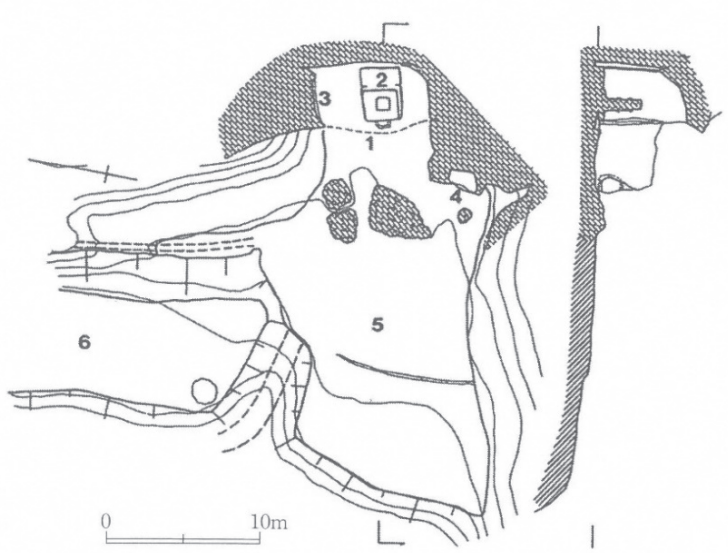
(3) 歴史的背景

岩屋は、周辺より須恵器、土師器が出土しており、それらが平城宮跡出土土器の編年で「平城宮Ⅲ」の前半に属すると考えられることから８世紀前半にはすでに機能していたと考えられている。その後、鎌倉時代の『諸山縁起』「第二十六経塚（陀羅尼経）」の項に「二上山岩屋」と記されており、中世においては葛城修験の第二十六番経塚となっていたようである。岩屋周辺では、中世の土師皿、瓦器なども出土しており、不確かではあるが人の営みは認められる。『河内名所図会』にも岩屋が描かれており、近世においても人の往来する名所であった。

R3-1. 岩屋

所在地	大阪府南河内郡太子町山田2044	地　形	山腹
緯度・経度	北緯34° 52’04”・東経135° 67’63”	標　高	337m
設置物	石造物「石塔」（奈良時代）		
備　考			

略測平面図



（S＝1/500）

1:大石窟　2:石塔　3:半肉彫三尊仏　4:小石窟
5:前庭部　6:房跡

山本義孝「二上山・春日山麓の石窟とその周辺」
（『史学論叢』23,別府大学史学研究会,1993）より転載

岩屋全景

R3-2. 四郷千両踊り（しごうせんりょうおど）　（かつらぎ町）

(1)　位置と周辺の状況

四郷千両踊りは、かつらぎ町大字広口所在の大宮神社で毎年 10 月 16 日に奉納される風流踊りである。

大宮神社は、紀の川流域から和泉、河内へ山越えをするための交通の要衝にあたり、それぞれに分岐した道は鍋谷峠（父鬼街道）、七越峠（西国巡礼道）、蔵王峠（槇尾道）と葛城山脈を越える峠へと通じていた。現在、東に町道四郷 32・33 号線が接し南北に通っている。

(2)　歴史的背景

千両踊りは現在では四郷地区の秋祭りであるが、かつては盆の終わりに行われていた（「中橋家日次記」）：寛延 3 年（1750）。明治 29 年から昭和 24 年までの間、およびその後昭和 56 年ごろまでの 2 度の中断があり、その後、昭和 58 年に「四郷千両踊り保存会」によって復活され現在に至る。

登場役は次の通りである。

棒振り―赤面と青面の二面。頭に頭髪、髭のついたシャグマを着けて、手には六尺の白木の棒を持つ。

真法智―頭巾を被り、白の衣に白帷子を着て、手甲・脚絆をつけ黄土色の袴をはく。

カンコ打ち―造花をつけた菅笠を被った男の子四人が首に掲げた小太鼓を打つ。

両手打ち―造花をあしらった鳥追笠を被った四人の男の子がバチを以て大太鼓を打つ。

太鼓持ち―両手打ちの締大太鼓を持つ大人の役。

片手打ち―造花をあしらった鳥追笠を被った 3 人の男の子が締中太鼓を膝に乗せて一本バチで打つ。

音頭取り―踊り歌を歌う二人の大人。白衣に袴姿

上記の役により、一同練りこみ→棒振り役の口上→真法智（シンポチ）役の口上→家方踊り→真法智役の口上→寅松踊りという流れで進行し 2 つの踊りがみられるが※（注）、この中で、棒振りの口上に「我らはこれ、葛城山に住む、ひげ長十郎鬼（後略）」とあり、葛城山の山伏に仕えて、世話をする役割を持った鬼であると名乗っている。真法智は「このたび幽境に使いする真法智にて候。（中略）四郷地区民の繁栄を祈って踊り仕り候」と山伏姿で現れて四郷地区の豊穣や繁昌を祈願して踊るという。

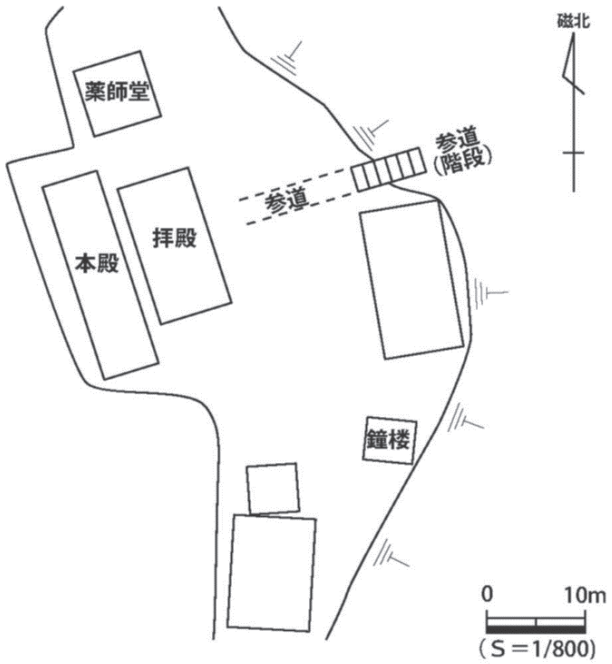
千両踊りは、まさに葛城修験者の伝えた風流芸能であり、貴重である。

(注) なお、江戸時代末期安政5 年の踊り歌資料（山中家文書）、明治29 年の「小踊笹踊御堂」、昭和8 年『四郷村誌』からは廃曲になった「長者踊り」「菅笠踊り」「たんじゃく踊り」「連尺踊り」「御寺踊り」「下草踊り」「鳴子踊り」「忍び踊り」「鎌倉踊り」があった。

R3-2. 四郷千両踊り

所在地	和歌山県伊都郡かつらぎ町広口	地　形	谷状地形の緩斜面
緯度・経度	北緯34° 19′ 31″ ・東経135° 28′ 45″	標　高	201m
設置物	本殿、拝殿		
備　考	かつらぎ町広口所在大宮神社で奉納。地形等は大宮神社の情報。		

略測平面図



構成要素写真（全景）

カンコ打ち（南から）

右から片手打ち、太鼓持ち、両手打ち（南から）

棒振り（東から）

真法智（シンボチ、南から）

第5章 総括

本書では、日本遺産「葛城修験」の各構成文化財について調査報告を掲載した。

葛城修験では、和泉山脈・金剛山地に法華経 28 品の経典を一品ずつ埋納した経塚があり、その周辺にも多数の構成文化財が分布しているが、それらは修験道の行所であることから、これまでその所在地や内容は一般にはあまり知られていなかった。今回の調査報告により、地元自治体で把握している所在地や概要についての情報を紹介することができたものと考えられる。

葛城修験の構成文化財の内容は、経塚のほか仏教寺院や神社、巨岩や滝といった場所であり、古来からの山岳信仰の地を総合する形で成立する修験道のはじまりの地として相応しいものと評価できる。寺院や神社については、より詳しい由来や解説があるところも多い。巨岩や滝等については現地へ赴き、周辺環境とともに感じ取っていただけたらと思う。

一般的な経塚の年代や修験道の体系が整った時期は、古代末から中世にかけての時期であると考えられるが、葛城修験では古い伝承が伝わっている。各構成文化財は現在も信仰の対象であるので発掘調査等で地下の状態を調べられていないが、今後も伝承とともに守り伝えられてきた場所を後世に伝えていくためにも、現況の記録を取りまとめることができたことは一定の価値があることとして、評価してよいだろう。

＜参考文献一覧＞

香芝市二上山博物館　2012『役行者、二神の上の峯に登る～二上山と神仰の系譜～』
葛城市歴史博物館　2016『葛城古寺探訪　－二上・葛城・金剛山麓の古代寺院－』
葛城市歴史博物館　2012『やまとのくすり』
高野口町誌編纂委員会　1968 『高野口町誌』下巻、高野口町教育委員会
五條市史編集委員会編『五條市史　新修』（五條市役所、1987 年）
御所市史編纂委員会　1965『御所市史』
小峰智行　2018『梵字字典』 東京堂出版
金剛山総合文化調査委員会　1988『金剛山記』
桜井徳太郎　1975『寺社縁起』 岩波書店
清水智俊編 1958『東鳥取村誌』東鳥取村役場
當麻町教育委員会　1976『當麻町史』
當麻町教育委員会　1990『當麻町の文化財』
圭室　文雄　編　1992 『日本古刹大事典』、雄山閣
東條仁進監修 1989『葛城回峰録』大本山犬鳴山七寶瀧寺
中野　榮治　2002 『葛城の峰と修験の道』、ナカニシヤ出版
奈良国立博物館　2013『當麻寺　－極楽浄土へのあこがれ－』
仁井田　好古　編　1970 『紀伊続風土記（二）』、歴史図書社
橋本市郷土資料館　編　2019『橋本市郷土資料館年報』第 33 号、 橋本市郷土資料館
橋本市史編さん委員会　編　2005 『橋本市史　民俗・文化財編』、橋本市
宮城泰年 1991「葛城の経塚をめぐって（その四）」『本山修験』103 号　本山修験宗本庁
宮本　佳典　2021 『葛城修験二十八宿の変遷』橋本市資料館報第 36 号、橋本市郷土資料館

日本遺産葛城修験
里人とともに守り伝える修験道はじまりの地
構成文化財調査報告書

編集・発行　葛城修験日本遺産活用推進協議会
（和歌山県商工観光労働部観光局観光振興課内）
発行年月日　2023 年 3 月 31 日
印　刷　所　株式会社 協 和